Paradise Books 5

この詰将棋がすごい！

2010
年度版



特集
巨椋鴻之介インタビュー



この詰将棋がすごい！　2010　目次

まえがき　若島　正……2

第1部　2009年ベスト詰将棋

原亜津夫が選んだ　2009年ベスト短篇12局……13 (4)
安江久男が選んだ　2009年ベスト中篇8局……18 (7)
伊藤　正が選んだ　2009年ベスト長篇4局……27 (9)
山田嘉則が選んだ　2009年ベストフェアリー8局……36 (10)

第2部　ロング・インタビュー

特集1　巨椋鴻之介
巨椋鴻之介インタビュー……51
巨椋鴻之介の《好きな8局》……59 (44)
書評　巨椋鴻之介『禁じられた遊び』（評者：若島正）……63
橋本　哲が選んだ　巨椋鴻之介ベスト8局……64 (46)
特集2　森田拓也
森田拓也インタビュー……72
森田拓也の《好きな4局》……79 (47)
よみがえる「北斗」と「長城」……85 (50)

第3部　オールタイム・ベスト詰将棋

企画1　ライバルを語る
高坂　研が選んだ　市島啓樹ベスト4局……96 (88)
市島啓樹が選んだ　高坂　研ベスト4局……99 (89)
企画2　解答者登場！
秋元節三の《好きな8局》……102 (90)
企画3　作家論
小林敏樹が選んだ　小川　宏ベスト8局……104 (91)
伊藤　正が選んだ　OT松田ベスト4局……107 (93)
若島　正が選んだ　高木秀次ベスト8局……113 (94)

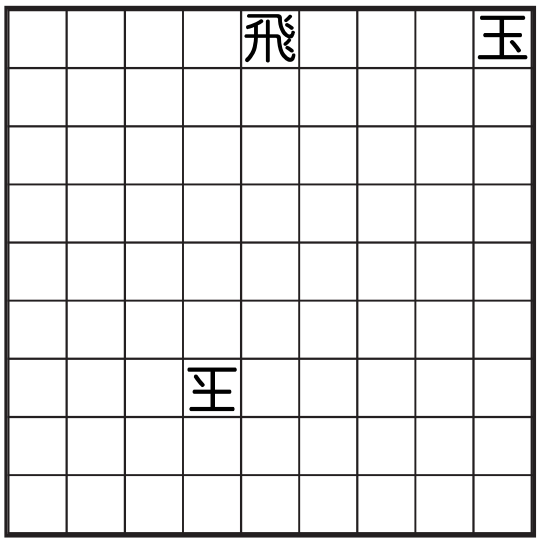
第4部　研究論考・スタッフ座談会

超短編における中合対策の研究　（風みどり）……138
発刊記念スタッフ座談会……145
作家別作品index……156

山田嘉則が選んだ　2009年ベストフェアリー4局

①　　増田智彬

詰将棋パラダイス　2009.6



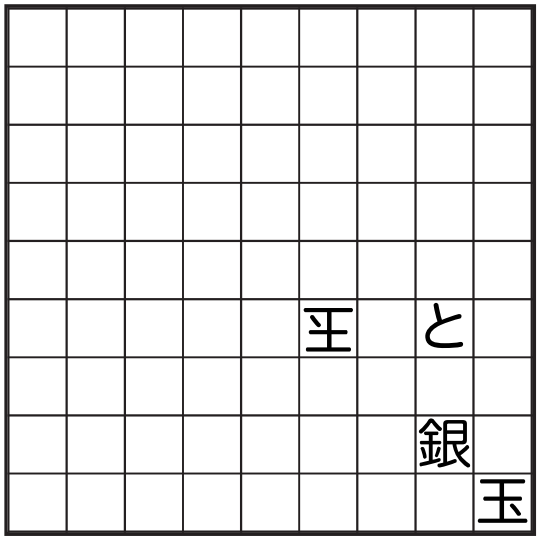
持駒　飛

Isardam (type A)

ばか自殺詰8手

②　　金子清志

詰将棋パラダイス　2009.5

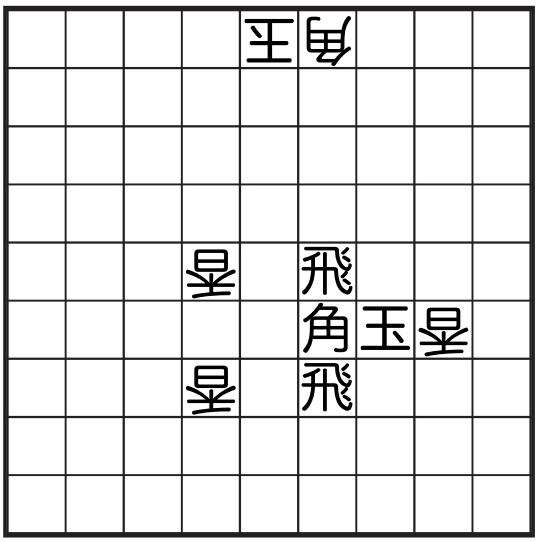


持駒　香

キルケばか自殺詰10手 (2解)

③　　神無太郎

詰将棋パラダイス　2009.12



持駒　香

(後手持駒無制限)

PWC

ばか自殺ステールメイト18手

④　　中村雅哉

詰将棋パラダイス　2009.7

推理将棋

「19手で詰まして勝ったって？」

「うん。これが投了図さ」

「君は1手も指してないじゃないか！駒の損得もないし、何でこうなるの？」

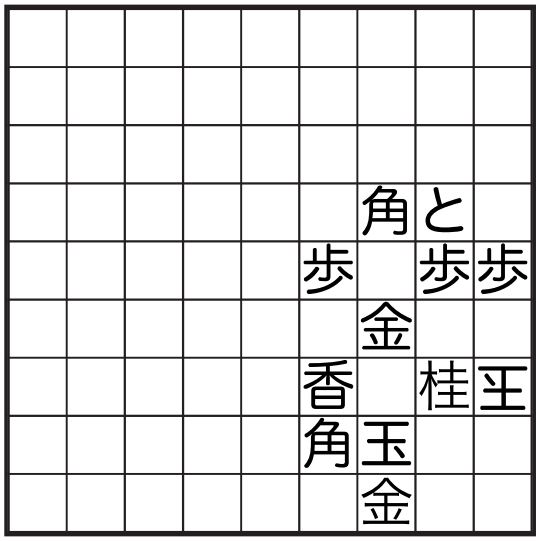
「確かに僕の駒20枚は全て初形配置と同じ場所に居るけど、何も指さなかったわけじゃないよ。

ヒントを出そう。まず、王手は2回だけだった。あと僕も相手もそれぞれ、1つの駒を6手連続で動かしたことがあったよ。」

さて、どんな将棋だったのだろうか？

⑤　　雲海

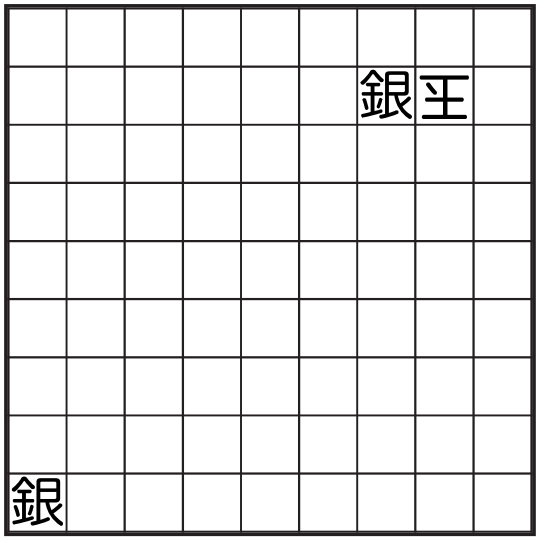
Web Fairy Paradaise 13号
2009(version)



持駒　なし
ばか自殺詰26手

⑦　　神無七郎

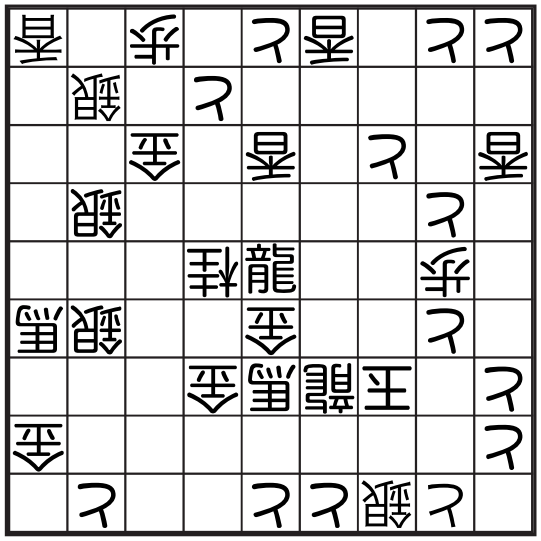
Onsite Fairy Mate 143
2009.1.11



持駒　銀歩18
強欲ばか詰85手

⑥　　たくぼん

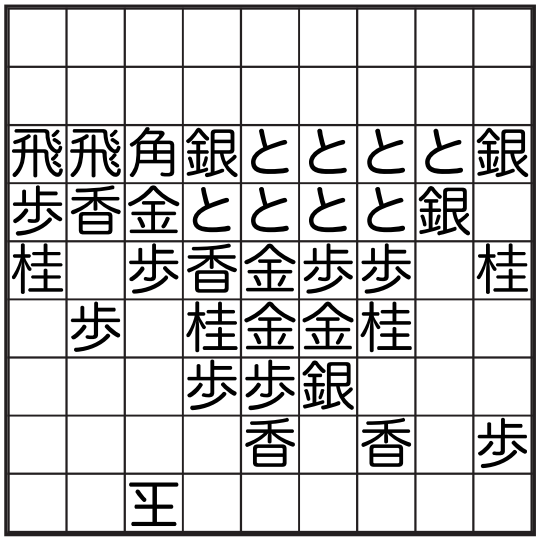
詰将棋パラダイス　2009.6



持駒　なし
取禁ばか詰61手

⑧　　神無七郎

Web Fairy Paradise 13号
2009 (version)



持駒　角
ばか詰219手

フェアリー
ルール集

【キルケ】
　取られた駒は最も近い実戦初形の位置に復活する。
　その位置が塞がっているときは持駒になる。

【強欲(詰)】
　攻方・受方とも、駒取りの手があるときは駒を取る手を優先する。
　駒取りの手がないときに限り駒を取らない手を指せる。

【推理将棋】
　指し始めの局面からある局面に至る与えられた条件をみたす手順を求める。
　会話形式で条件を示す場合を推理将棋、最終局面を示す場合をプルーフゲームと呼ぶ。

【取禁(詰)】
　先手後手とも駒を取る手は禁止。

【ばか詰】
　先手後手協力して最短手順で後手玉が詰む手順を求める。

【ばか自殺詰】
　先手後手協力して最短手順で先手玉が詰む手順を求める。

【ばか自殺ステールメイト】
　先手後手協力して最短手順で先手がステールメイトとなる手順を求める。
　ステールメイトとは、自玉に王手はかかっていないが、指せる手がない(すなわち、すべて禁手)の状態を指す。

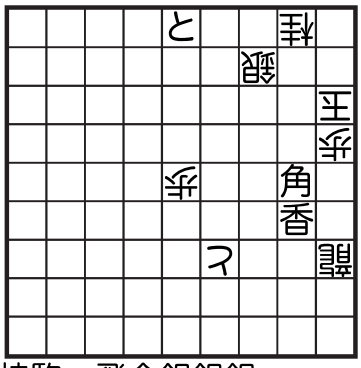
【Isardam】
　同種の敵駒の利きに入る手は禁止。
　成駒と生駒は別種の駒とする。
　以上を玉を取る手にも適用するときtype　A、適用しないときtype Bと呼ぶ。

【PWC (Platzwechsel Circe)】
　取られた駒は取った駒が元あった位置に復活する(場所が入れ替わる＝"Platzwechsel")。
　復活すると二歩や行き所のない駒になる場合は持駒になる。
　生駒は生駒、成駒は成駒のまま復活する。

原亜津夫が選んだ
2009年ベスト短篇12局

①　　山田　淳

詰将棋パラダイス　2009.1



持駒　飛金銀銀銀

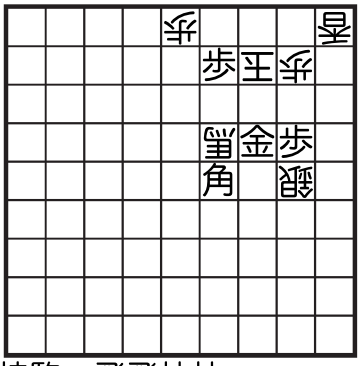
22銀、同玉、33銀、同桂、
34角、25桂、21飛、33玉、
42銀、34玉、25飛成、44玉、
56桂、同歩、55金、43玉、
45龍まで17手

2度の銀捨てから始まる序は丹念な変化読みが必要とされる。5手目からの応酬が本作の見所で、34角の開王手に対し桂の移動中合で返し、そこで21飛が非常に味のいい手になる。さらに中段に追いやるような42銀などテンションの高い手が続き、最後には龍の強力な利きでぴったりの詰み。

作者によると詰上りからの逆算で創られたそうだ。追い出しタイプの収束に逆算で序を付け足す場合、前半と後半で舞台が変わるため、手順にも木に竹を接いだような感じを受けることが多いが、本作はその点で違和感もなく成功していると思う。

②　　安武翔太

将棋世界　2009.2



持駒　飛飛桂桂

23歩成、同歩、24桂、同歩、
22飛、同玉、23金、21玉、
13桂、同香、11飛、同馬、
54角、31玉、32金まで15手

桂捨てから飛車捨てを2回繰り返すところが本作の価値。

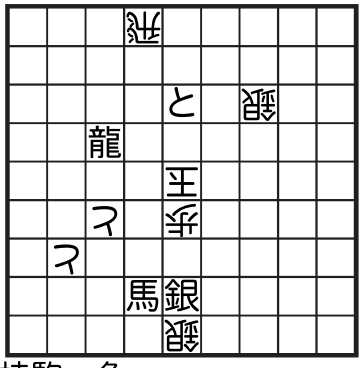
角金のコンビネーションによる飛車捨ては単発では過去に作例が数多くあるが、2度繰り返すのは珍しい。

3手目いきなり22飛とすると、同馬と取られ以下54角、42玉、43角成、31玉で23桂が打てずに慌てることになる。

この23桂を打てるようにするための軽い変化伏線が3手目24桂で、この手が入ったのはポイントが高い。

③　　若島　正

詰将棋解答選手権　2009



持駒　角

28角、37桂合、同角、66玉、
67銀、同と、55角、同玉、

75龍、65飛、47桂、44玉、
64龍、同飛、35馬まで15手

初手28角に対して単に66玉と逃げると39角と引いて合駒を稼ぎに行く（28角はこのための限定打）。その時に57合には同角以下。48歩合にも同角、同銀、67歩で簡単に詰む。48の地点に桂合が出来れば詰まないのだがそれは反則。

なので28角には予め37桂と中合して取らせてから66に逃げて延命を図る。

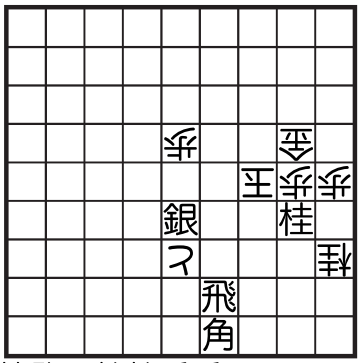
この8段目に桂の合駒が出来ずに早く詰むのを回避するために前もって中合いをするのが本作品の狙いになる。

構想の合駒処理の舞台は比較的あっさりしているが、むしろそこからの華麗な収束への切り替えが見事。

余詰防止で64に利かせている61飛を移動合させ、さらには龍捨てを取らせる駒として働かせている。こういった駒の活用の仕方にも作者の高度なテクニックが感じられる。

④　　廣瀬崇幹

詰将棋パラダイス　2009.5



持駒　桂桂香香

39香、36角合、45飛、26玉、
18桂、同角成、28香、同馬、
46飛、同馬、18桂まで11手

初手39香は一見すると合駒の変化読みが大変そうに見えるが、38合は同飛と取って簡単（一瞬玉を4筋に逃がしてしまうのだが、44玉には33飛成、46玉には36飛でぴったり詰む）。37合も45飛以下早く詰む。玉方は18に利かせるために36角合とするしかない。

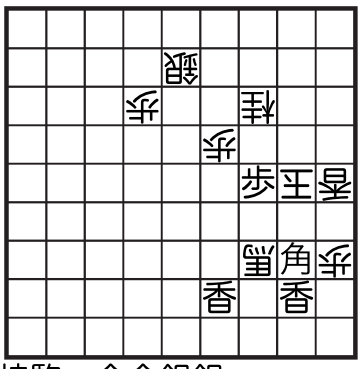
以下は捨駒で角（馬）を翻弄して桂吊るしで詰め上げる。

合駒を動かすというのは最近の短編詰将棋で最も流行しているテーマのひとつだ。

変化は案外少ないのだけれど、それがかえってテーマを明快に際立たせている。本作は、このテーマの表現としては一つの完成形ではないだろうか。

⑤　　市島啓樹

詰将棋パラダイス　2009.6



持駒　金金銀銀

24金、同玉、16角、26飛合、
同香、35玉、46銀、同馬、
55飛、45馬、24銀、26玉、
56飛、同馬、27金まで15手

馬の利きにわざと当てる限定打55飛、取れる飛車を取らずに馬の移動合。恐らくこの辺りの絡みが創作の出発点だと思われる。

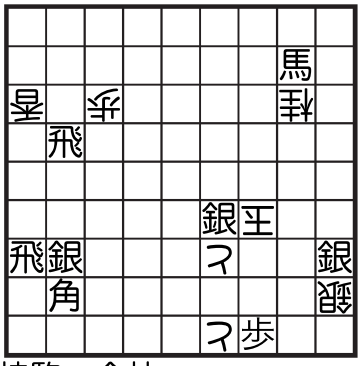
だが見所はここ以外にも豊富にある。

初手の味良い金捨てから、飛車の中合、一瞬4筋に逃げ道を与えるかのような46銀。収束も飛車捨てできっちり決める。

特に4手目の中合は後で活躍させる飛車を印象的に出現させており、これを逆算で入れてしまう所に作者の創作技術の高さを感じてしまう。詰将棋順位戦のA級で優勝した作品だけあって、程よい変化を含み重厚感みなぎる手順で組み立てられた2009年随一の本格作品。

⑥　　楓　香住

詰将棋パラダイス　2009.6



持駒　金桂

48桂、46玉、44飛、57玉、
78銀、58玉、57飛、同玉、
66角、同玉、74飛、57玉、
66馬、同玉、56金まで15手

盤面一杯に駒が配置された構図が解く者を怯えさせる。但し変化の量はあるけれど、煩雑と言うほどではなく、ほとんどの変化は作意よりも早く詰むので、むしろ良心的と言えるかもしれない。

2手目同と引は、45銀、46玉、79角以下。45銀に37玉は55馬以下。

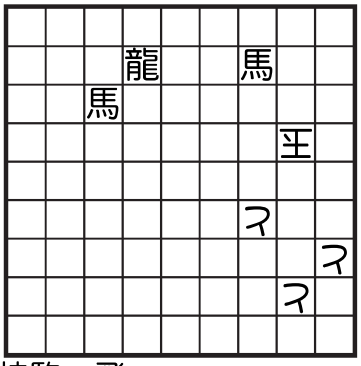
3手目は、37と57に逃げ道があるので、55馬に誘われるが、あえて馬筋を遮断する飛車寄りがやり難い手だ。

78銀と要所に銀を据えてから、本作の見せ場が始まる。完全に逃げ切ってもう捕まらなさそうに見える王様を大駒の威力を存分に発揮して詰形まで引っ張り込む。

恐らく66への角と馬の捨駒が素材として在ったのだろう。この素材を選択した時点で初形が拡がるのは仕方が無いとして、手順は文句ないと思う。

⑦　　角　寿雄

詰将棋パラダイス　2009.8



持駒　飛

64龍、35玉、15飛、25銀合、
同飛、同玉、43馬、15玉、
26銀、同玉、24龍まで11手

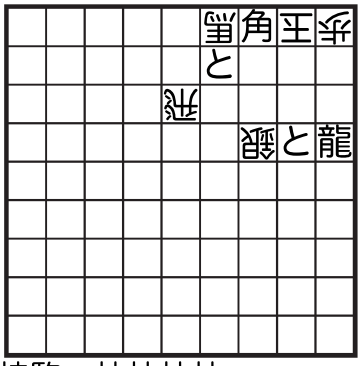
初手64龍から始まる一連の手順は短編詰将棋としてはかなり異質に見える。確かに網を絞って玉の逃げ道を狭めてはいるが、個々の手がこれといった目的に向かっているようには見えない。4手目銀合も異色な感じがする。

しかし9手目26銀と打った瞬間、それまでの不安が一気に解決する。26同玉に24龍までの詰みは、一度龍によって塞がれていた馬の利きが復活して37への玉の逃げ道を防いでいるのが印象的。ただこの24龍の形はそれまでの変化にも出てくるので、意外性という点では今一つかもしれない。

作者は駒を適当に置いて、そこから詰手順を見つけ出したと言う。作為を感じさせない手順はそのためだったようだ。

いわゆる正算式作図法で好手順を得るのは苦労が多く、作者の努力が窺われる。

⑧　　高谷仲達・竹村孔明
詰将棋パラダイス　2009.8



持駒　桂桂桂桂

13桂、12玉、23と、同飛、
21桂成、同玉、33桂、同飛、
13桂、同飛、24龍、23飛、
33桂、12玉、13角成、同飛、
21龍まで17手

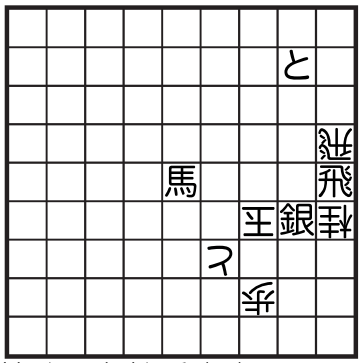
コンパクトな初形で持駒が桂馬4枚、初手も桂を打つ位しかなさそうで、とりあえず解図してみたくなる。

意外にも24とは邪魔駒で、序のやり取りはこのと金を消去するための手順になる。

10手目13同飛に、ぼんやりとした24龍（邪魔駒消去の効果）が局面打開の一手で決め手。以下はそつなく角捨てで収束する。

4枚の持駒の桂馬を13～33～13～33と打っていく。単純なようだが、こういった狙いこそきちんとした論理で構成されていないと成立しない。

⑨　　則内誠一郎
詰将棋パラダイス　2009.8



持駒　角桂香歩歩

45馬、26玉、29香、28桂成、
35馬、15玉、27桂、同成桂、
16歩、同玉、17歩、15玉、
26角、同成桂、16歩、同成桂、
25馬まで17手

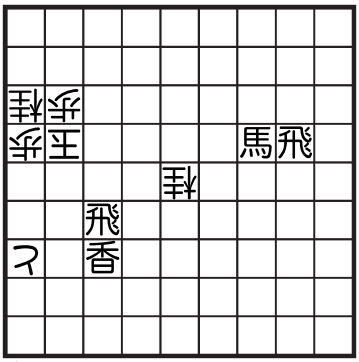
入玉されないように注意すれば45馬から29香はまずやってみる手だが、ここで28桂成の移動中合の妙防が飛び出す。以下成桂をおびき寄せて詰み形へと持っていく。もしこの作が単なる合駒の移動がテーマだと思われた方がおられたら是非駒を並べて鑑賞していただきたい。

55の馬は25まで1筋ずつ5段目を動いていき、16桂は28で成桂に成って元の16の場所へと戻っていく。この視覚的な面白さが本当の狙いになる。

特に桂馬が成桂となって元の位置へ戻る一連の動きを表現した作品は将棋図巧46番を初めとしてごくわずかしかなく、桂に移動中合させるのは相当珍しいのではないだろうか。

駒の動きを描いた短編詰将棋として後々まで記憶に残しておきたい作品。

⑩　　谷口　均
詰将棋パラダイス　2009.11



持駒　なし

67馬、85玉、16飛、67桂成、
25飛、84玉、14飛まで7手

初形で馬を動かせる場所は多いが、自ら桂の利きに入り76の飛車とバッテリーを組む初手67馬はいかにも詰将棋らしい着手だ。

3手目は飛車を横に動かすが、そのときの場所が問題。例えば66飛では67桂、25飛のときに65歩合と焦点に合駒されて、同飛寄、84玉の局面で66の飛車を64の地点に持っていくことが

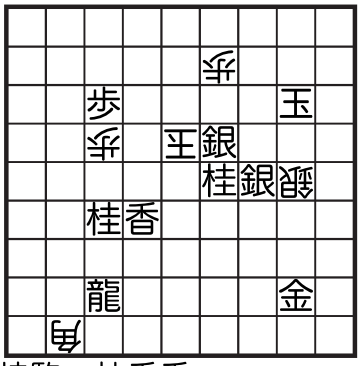
出来ない。この中合を避けるためには3手目に16飛と最も遠くまで動かすしかないのだ。

焦点の中合を避けるための遠打は過去に作例があるが、遠開きでの表現は見た記憶がない。

本作の巧さは初手に開王手を入れることでごく自然に飛車を2筋に配置させている点だ。これが飛車の遠開きの意外性を高めているのは間違いない。

⑪　　金子清志

詰将棋パラダイス　2009.11



持駒　桂香香

59香、45玉、49香、36玉、
48桂、45玉、56桂、54玉、
64桂右、63玉、72桂成まで11手

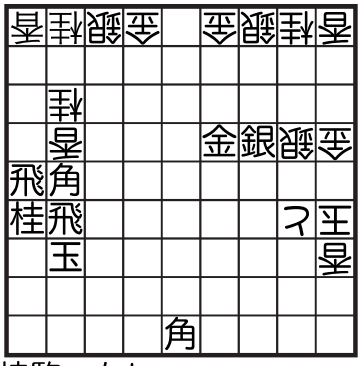
香車を連続で遠打した後、桂馬が香車の筋を遮断しながら開王手を繰り返しつつ3段跳ねを行う。そんな作者の構想を無理やり実現させた作品。

手順成立のポイントは4手目36玉とした局面と6手目の変化で36玉と逃げたときの局面の差にある。つまり持ち駒に桂があるときは桂を打つしかなく、桂が56にあるときには他の手で詰む。そんな条件を満たしていなければならず、23玉と89角の配置は見事な発見だと思う。6手目36玉には56に桂馬が居るため龍の身動きが自由になり38龍の1手で詰む。

おそらく創作で一番大変だったのは初手香打ちに対する変化処理だったと思われる。その膨大な変化手順を確認するだけでも大変であり、その後の手順にはそぐわないのは確かだ。後半の桂跳ねがメインのテーマのはずなので、香の遠打に拘らなければもっと変化を抑えられたのだろうが、詰将棋作家とは拘ってしまうものなのだ。

⑫　　岩田俊二

第4回詰将棋課題コンクール　2009



持駒　なし

26飛、15玉、86飛、26歩合、
16歩、同玉、49角まで7手

「プロブレムパラダイス」のサイト上で、与えられたテーマに沿って創作された詰将棋を募集するコンクールの開催が始まった。

これまでにないような斬新なテーマに刺激されたためか出品される作品も前衛的な内容のものが多い。

本作は「7手詰。4手目以降に、初形と1カ所だけ異なる局面が現れる。」という課題に応じて投稿されたもの。

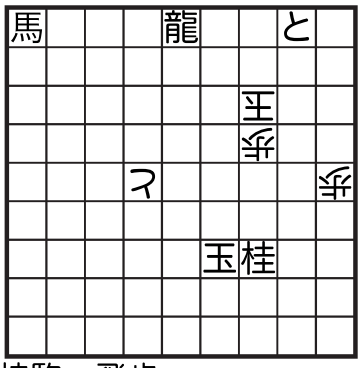
初形局面と6手目同玉を指した局面を見比べると26のと金が歩に変わっただけになっている。その効果により初形では49角には27歩合で詰まなかったのが、26歩がある局面では2歩禁のために合駒利かずで詰んでしまっている（一段目の駒の配置は玉に歩合以外をさせないため）。

玉方のと金を歩に変える手順なのでパラドキシカルな味わいはないが大駒の派手な動きが面白い作品。

安江久男が選んだ
2009年ベスト中篇8局

①　　三角　淳

詰将棋解答選手権　2009



持駒　飛歩

31龍、32角合、23飛、同玉、
22龍、14玉、25龍、13玉、
46馬、35香合、22龍、14玉、
36馬、同香、25龍、13玉、
14歩、同角、22龍まで19手

上部脱出の怖れはない。91馬は46に使うだろうし、65とは55馬封じだろう。安心感のある構図に、一つだけ気になる駒がある。

47玉はいったい何だ？

これが分かれば、実はすべてが解明する。

さて、31龍には金合が筋だ。横に利かない駒は、23飛、同玉、22龍、14玉、25龍、13玉、14歩、12玉、22龍まで。

金合には同龍、同玉、12飛と打つ。43玉の一手に44歩・・・ん？　何かおかしい。

すでに詰み形なのだ。しかも妙手ひとつ、逆王手ひとつ出てきそうにない。解図をしていて楽しい瞬間というのはこんな時だ。

「お前は何を見落としたんだい？」きっとワクワクする“謎”が居るはずだ。

犯人はくだんの双玉に違いない。もう一度読みを遡ってみる。そこに居たのは角合。32角合によって、先の14歩を角で取れる。

単玉であればいずれにせよ22龍で詰むのだが、14角が25龍を挟んだ先に先手玉を睨んでいるとなると話は別だ。

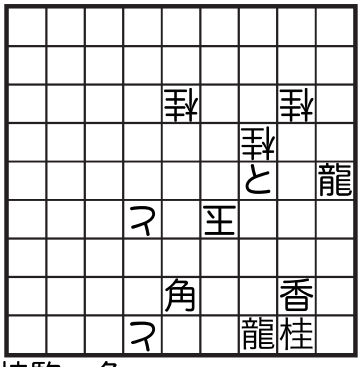
ここで馬の出番。14歩と打つ前に46馬と引く。香合（他合は取って22龍）させて龍を再び突っ込み、14玉に36馬、同香と前もって角のラインを塞いでおくのが上手い凌ぎ。

決して難しくもないし構想の底が深いわけでもないけれど、創り物として作者の意思をきっちり埋め込んだ暖かい作品だ。

最後に補足しておくと、3手目23飛の単打で13飛は24玉、46馬、35合、25歩で詰みそうだが、35桂合が逆王手で逃れる。

②　　中村雅哉

詰将棋パラダイス　2009.8



持駒　角

45と、①56玉、55と、57玉、
17龍、②46玉、37角、③57玉、
59角、46玉、57龍、同と、
37角、35玉、15角、46玉、
35龍、同桂、37角まで19手

（変化）
①同桂は48龍、55玉、45龍左、64玉、55龍、63玉、75桂以下
①57玉は17龍、56玉、36龍、65玉、66龍以下
②58玉は38龍以下
③35玉は48角、46玉、35龍、同桂、57龍以下

2手目同桂の悩ましい変化は、48龍できっちり捕まる。この変化を捻じ伏せて、と金で天王山を占めておくのが肝要だ。17龍に58玉の変化②で、ぼんやり38龍と上がる手も盲点になり易いかもしれない。初手36となど「らしい」手もあって、筋に入るまでの6手を固めるまでが難しい。

7手目から大駒が乱舞する派手な立ち回りが始まる。まず手駒の角を59へ置きに行く。その変

化③で、作意と同じ場所へ、二度の龍捨てが出てくるので、作意でもこれら龍捨てが出てくることは予感できそうだ。

59角を後ろ盾に、どっかんと57龍！

ここでの使命を終えた角が次に15に転身すると、これを後ろ盾に、またしても35龍！

小気味よさを越えた、豪放な二枚龍放り込みが炸裂して、ピタリと着地を決める。

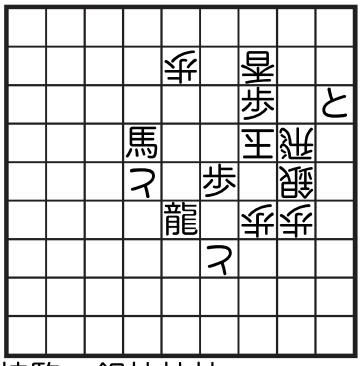
作者－このパターンの龍捨ては作例が多いので縦・横両方を組み合わせ、かつどちらの龍も先手駒の利いていない場所に捨てることを狙って作図した。

ダイナミックな二枚龍捨て、よくよく見れば実は同じ遺伝子のなせる技だ。55と19を結ぶ対称軸で同一手筋を反転し、６手一組を反復させたに過ぎない。

推理将棋やプルーフゲームといった別ジャンルでも中村作品に潜む、ふとしたアイデアがここにもある。いかにも巧者の発想だ。

③　　廣瀬崇幹

詰将棋パラダイス　2009.5



持駒　銀桂桂桂

54龍、35玉、44銀、34玉、
46桂、同と、55銀、33玉、
44銀、34玉、53銀不成、35玉、
47桂、同と、44銀不成、34玉、
43龍、45玉、54龍、34玉、
33銀不成、同玉、45桂まで23手

イタズラ者の小鼠が、55の巣穴からちょろちょろ出てきては、お餅のかけらをかじって、慌ててまた巣穴に戻っていく。そんな情景を連想させてくれる楽しい手順。

須川卓二－こういうからくり物は大好き。と金を元に戻すのがいいですね。

趣向を形作る基本構図を見てみよう。ポイントは24飛配置。54龍に44合なら同龍と取れるけれど、玉が34から外れると、陰にいる24飛の利きが通り、数で劣る詰方は、助っ人の銀を投下する。空き王手と数の攻めの繰り返し。そんなシンプルな構図でできている。

この構造は新しい訳ではない。ある意味定型化されたテンプレートと言ってよい。

このことは即ち、趣向の実現だけでは評価されないことを意味する。だがテンプレートが与えるものは、銀を開いては入る機構だけ。もう一つ二つの仕掛けとストーリーが要る。

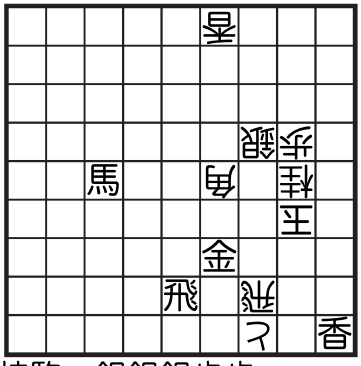
一般論として表現上の価値の一つは記録面からみたもの。44銀を５ヶ所へ開ければ受賞級だろうし、４ヶ所でもかなりのものだ。

この作品では、仕掛けを複雑化して記録を狙う道は採らない。むしろ単純化を選び、名脇役を配した。47とだ。これ一枚で、順序立てて銀を開く趣向を制御してしまった。機構のシンプルな理由づけと、銀不成で使い切る統一感、指し手の奏でる単調な２拍子のリズム、それらの中にそこはかとなく漂う上品な薄味。たった二枚、ひっそりと散った歩。それらの代わりに33には玉がいて、45には桂がいる。

そして動いたことすら欺くかのように47とがいる。作者が狙ったのは、案外この静けさだったのかもしれない。

④　　石本　仰

詰将棋パラダイス　2009.2



持駒　銀銀銀歩歩

37銀、①同桂成、17銀、25玉、
16銀、②35玉、44銀、③26玉、
56飛、36成桂、48馬、同飛成、
36飛、同角、27歩、同角不成、
15銀、25玉、37桂、同龍、
26歩、同龍、14銀まで23手

（変化）
①同飛成は同金、同桂成、16飛以下
①同桂不成は17銀、25玉、16銀、35玉、46銀、26玉、27歩、同角不成、同銀、同玉、16角、28玉、38飛以下
②14玉は15銀、23玉、14銀、32玉、33歩、同玉、53飛成以下
③同玉は53飛成、35玉、57馬、26玉、27歩、同角不成、15銀以下

作者－若島正氏の本で知った、セルフピンの手筋に装飾を加えた作品です。44銀は、46銀の紛れが深いので、発見し難い手だと思います。

44銀。この序盤の難所を踏破しない限り、主眼の一手に出会うことができない。

逆にこの銀が取れないと読み切れば、いわゆる筋に入ったも同然。ここを46銀では、角筋に56飛とぶつけられず、これを省いて27歩では同角不成と取られて打歩詰が外せない。

角と成桂、二枚の取歩駒から27歩を不成で取れる角を外し、銀歩送りの収束に持ち込もうというのが56飛の狙い。

しかし後手に用意の受けがあった。作者のいうセルフピンの一手。ピンとは、その駒が動くと自玉を素抜きされるため、動けない状態をいうチェスプロブレム用語だとか。縛り駒56飛によって動けない36成桂を「56飛によってピンされている駒」と呼ぶ。

セルフピンという言葉の正確な定義は分からない。ただ本局で狙ったのは「移動合により自らの取歩駒としての機能を殺す手筋」。

36成桂と引くことで自らをピンして27への利きを無力化し、27歩を打歩詰に誘う。

この局面からピン駒（飛車）を外すことによって打歩詰を打開すれば、有名な森田手筋の後半と同手段。本局では代わりの取歩駒を作ることで、打歩詰を打開していく。

48馬は成らせ。成／不成の選択権と、37への利きとを持つ38飛に、一方の権利放棄を迫る手だ。そして、ここで不成を放棄した龍が最後に打歩詰を外す駒になる。

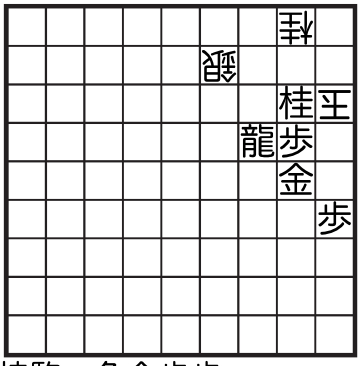
なお、48馬を36飛と手順前後すると、同角、48馬、37歩合、同馬、同飛不成で失敗する。先に48馬なら、37歩合は同馬、同飛不成、27歩以下で詰み。

緻密で深い読みに裏打ちされた手順に、緩みというものが全く見られない。

強いて言えば17に打った銀を16銀と擦り上がる個所だろうが、ここも不安感が同居し、手に宿る力はあくまで強い。

全体を貫く圧倒的な重厚感。その眩しさがもう少し柔らげば、と思うのは天邪鬼だろうか。

⑤　　酒井博久
詰将棋パラダイス　2009.5



持駒　角金歩歩

14金、同玉、15歩、13玉、
14歩、同玉、25金、13玉、
14歩、12玉、11桂成、同玉、
22角、同玉、13歩成、11玉、
22と、同玉、23歩不成、11玉、
12歩、同玉、32龍、13玉、
22龍まで25手

16歩消去後に、一度捨てた金を元々あった25に打ち直すのが不思議な一手。歩消去に支払う対価が持駒の金では割に合わなかろう。

さて、歩を消去することで得たものは、金の代わりに14歩と不利駒を打つことだが、その目的は打歩詰回避ではない。

22角、同玉として持駒は一歩。ここにきて14歩が生きる。13歩成～22とと再び消すことで

12歩が打てる。「歩を消去するための歩の消去」という二歩禁回避の連鎖消去。

早い話が先手は14と12の両方に駒を打ちたい。16歩のままで両方打つことはできないが、持駒の金を費やしてでも、歩を14にずらしておけば、再度消して12歩も打てる。

残念なのが（望蜀でもあるが）、構想に遊ぶ前に、軽く手を探っていくだけで正解に辿りついてしまえる紛れのなさか。

今川健一－収束は例の手筋といえば終わりだが、序の歩の消去は巧み。易しいが好作です。

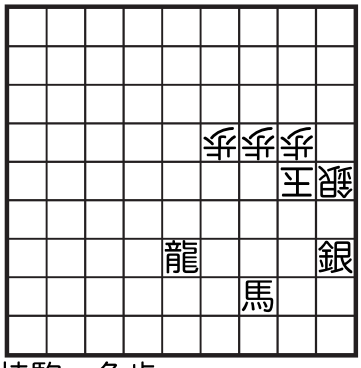
今川さんの評のように、序の歩消去前後の局面変化の姿を主題、連鎖消去は単なる手段とみると、本作はもっと面白く鑑賞できる。

即ち「歩を消去する代償に、持駒の金を失う意味を構想化せよ」そんな命題が先にあり、答の一つとして出した手段に、二歩禁回避の連鎖消去を発想したとしたら？

構想作発想のとっかかりなんて、たいていその程度のことだ。実際にどちらが先だったかは重要なことではない。この命題が充分に構想として面白いということ、それが盤上たった８枚で解決できてしまうことに価値がある。

駒一枚、作意手順一手たりと揺るがせにできない美しい完成品を前に、易しすぎる、構想表現が弱いといったひけ目はぜんぶ、霞んでしまわないだろうか。

⑥　芹田　修
詰将棋パラダイス　2009.4



持駒　角歩

47馬、①36香合、同馬、同玉、
38香、②37香合、同香、27玉、
29香、③28香合、同銀、18玉、
27銀、19玉、28角、29玉、
59龍、28玉、48龍、27玉、
29香、16玉、17歩、同玉、
28龍、16玉、27龍まで27手

（変化）
①36桂合は同馬、同玉、58角、35玉、55龍、45合、27桂まで
②37桂合は58角、35玉、37香、36合、27桂、25玉、36角まで
③28角合は同銀、18玉、27角、29玉、83角、28玉、38角成以下

「龍槍」の命名がある。将棋で槍という言葉が指す駒といえば香車。命名からして龍と香車が活躍しそうなものだが、盤面に龍はあっても香のほうは持駒にすら見あたらない。

それでは龍という駒を大型の槍に見立てたのか、あるいは合駒で香が登場するか？

答らしきものは、すぐに顔を出す。58角は36香合、同角、35玉で切れてしまうから、47馬から合駒をむしり取るのは絶対。

次に58角と打てば35玉の一手。＋αが飛金銀なら36に打って詰み。桂も３手詰。

さっそく筆頭候補の香合だ。この時ばかりは58角が効かない。58角は35玉、38香、36香合、同香、25玉で不詰。隣の筋に何らかの利きを持つ駒が要るのだ。

取ったばかりの香を38香（39香も可）と打つ。25玉とは逃げられない。捨合するよりないが、ここでも香なのか？

飛金銀合は同香でほぼ並べ詰み。角桂合にはやはり58角がある。どうやらビンゴ。

更に37同香のあと、狭苦しく打った29香に、３度目の香合が出てくれば、もうドラマというしかない。端正な顔に狭い局面、３連続香合が出てくる余地などないのだから。

小野寺達也－３度の香合が実に見事。逃しそうで逃れない攻防には息を呑んだ。

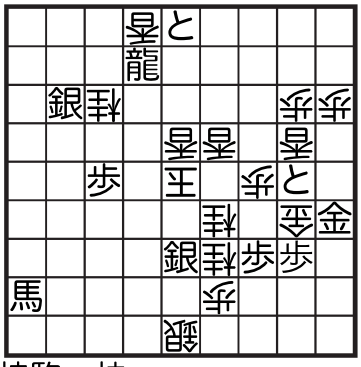
ことによると解答者よりも、何も先入観を持たない鑑賞者のほうに、より強いインパクトを与える作品ではなかろうか。

かく言う私がその被害者だ。作意手順を追っていて、鎧も着けない無防備な心を、グサグサグサっと、三本の槍に刺されてしまった。

★次の一局は厚かましくも自薦につき、高坂研さんに解説をお願いしました。

⑦　　安江久男

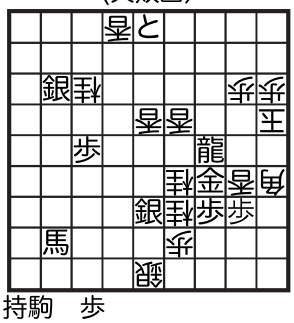
詰将棋パラダイス　2009.12



持駒　桂

まずは88馬以下、普通に追ってみよう。88馬、45玉、35と、同玉、26金、同香、32龍、34角（24玉は25金、同玉、36龍以下）、36金、24玉、16桂、同角、35龍、14玉と進んで、以下の図に至る。

（失敗図）



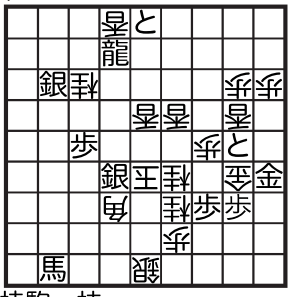
持駒　歩

この後も44龍以下際どく手は続くものの（44龍、34桂、15歩、同玉、35龍、25銀、同金、同角、17香、16金、25龍、同玉、36角、15玉で逃れ）、これはどうも逃れ順のようだ。この打歩詰をいかにして回避するかが、本作のメインテーマである。

ではもう一度最初の局面に戻って、他の手がないか丹念に探してみよう。88馬、45玉、78馬は56歩合でダメ、又56銀、同玉、89馬以下馬鋸が出そうな感じもするが、78馬に56飛合で続かない。散々悩んだ挙句に、一寸指し難い66銀が手になりそうだというのを発見する。45玉は89馬で簡単だから56玉。ここで89馬とすれば合駒の一手。さて、合駒は何だ？

何合に対しても57銀が成立し、55玉に対して56銀を防ぐには角合か銀合ということが分かる。そして銀合だと先ほどの44龍以下の紛れ順で25銀合が出来ずに詰んでしまうので、結局角合に決定する。うん、作意に近づいている気配が感じられるぞ。

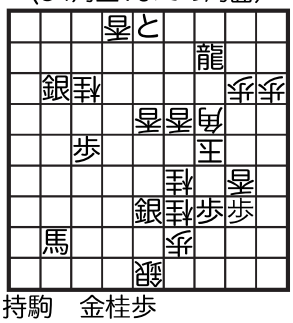
（4手目67角合までの局面）



持駒　桂

次の手は57銀しかない。以下55玉、88馬、45玉、35と…と進めると、32龍に対して34角生の妙防が飛び出す。何のことは無い、さっきの失敗図に帰着してしまった。やれやれ、これでは苦労して合駒を発生させた意味が無い。

（34角生！までの局面）

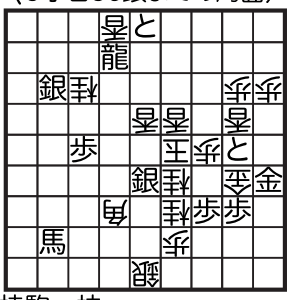


持駒　金桂歩

角合までは作意だと思われるが、これが打歩の回避とどう結びつくのだろうか？　それを見破る手掛かりを得る為に、もう一度４手目の局面から注意深く手を進めてみよう。すると、57銀、55玉、88馬、45玉の次の瞬間に巧い手があることに気付かれる筈だ。（まだお気付きで無い方は、次ページに目をやる前にしばらく考えてみて下さい）

そう、9手目は56銀である！

（9手目56銀までの局面）



持駒　桂

まさに盤上この一手という絶妙手だ。同玉は66馬以下。同香だと先ほどの角の不成移動合が出来ず、又同角生だと勿論57桂の一手詰である。従って、これは同角成とするしかない。

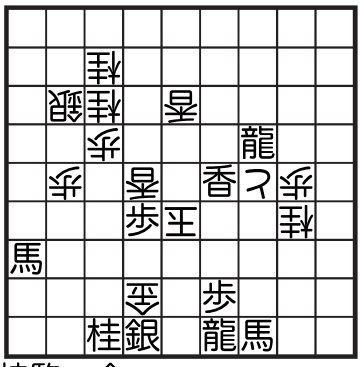
この後で先ほどと同じ手順を辿れば角の移動合が馬の移動合になり、これで失敗図の角が馬に置き換わった局面が得られたことになる。そこからは、15歩以下平易な収束である。何と手の込んだ打歩構想作であろうか！

最後に、作意順を以下に書いておこう。

66銀、56玉、89馬、67角合、
57銀、55玉、88馬、45玉、
56銀、同角成、35と、同玉、
26金、同香、32龍、34馬、
36金、24玉、16桂、同馬、
35龍、14玉、15歩、同馬、
同龍、同玉、26金、14玉、
15香、24玉、35角、33玉、
44角、34玉、35金、43玉、
33角成、53玉、44馬上、63玉、
64香、同玉、74銀成、65玉、
66馬まで45手

角合での打歩詰を回避するために、まず合駒で角を発生させておいて成を強制する。すると玉方は馬の移動合を余儀なくされ、結果として攻方は打歩を逃れるという、非常に斬新な構成の作。恐らく、打歩回避の方法としては新手筋ではなかろうか。この作者が敢えて自薦するだけのことはある、昨年発表された中編では随一の本格構想作であった。

⑧ 若島　正「ルービック・キューブ」
詰将棋解答選手権　2009



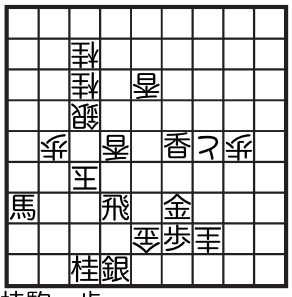
持駒　金

詰将棋解答選手権チャンピオン戦の最終問題として出題された「ルービック・キューブ」。去年発表された作品の中でも、パズル性の豊かさは群を抜いている。作者自身による詳しい解説が、プロブレム・パラダイスのブログに書かれているので、ぜひともそちらもご覧いただきたい。

左下に特異な配置が見られる。その意図に沿って素直に手を進めたのがこんな手順。

58龍、同金、29馬、38飛合、
同馬、同桂成、47金、66玉、
67飛、76玉、74龍、同銀（A図）

（A図）



持駒　歩

まんまと打歩詰に誘導された形。手順中、4手目の38飛合が習いある手筋。弱い駒ですむのに強い駒を渡す不利合駒。その中で、飛と歩の関係を扱うものを、一般に玉方応用飛先飛歩と呼ぶ。もっとも、著名なチェスプロブレミストでもある作者は、アンチ飛先飛歩と呼んでいるが。

飛を67に打たされた先手は、その横利きで打歩詰に誘致される。渡されたのが飛でなく歩であれば、A図の67飛が歩に代わり、77歩、同玉い、取ってすぐ飛を捨てれば、結果として飛を歩

玉、87馬までなのだが・・・。

チャンピオン戦に出場しようという挑戦者なら、この手順と構図から作品の全容を予測してしまう。アンチ飛先飛歩には、強い飛を弱い歩や香に交換し利きを弱める、不利交換が定跡手筋だ。

恐らく「不利合駒ｖｓ不利交換」の徹底した駆け引きが展開されるのだろうと。

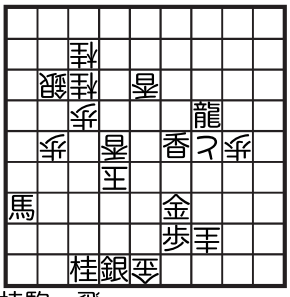
雲を掴む手探りの解図とは違い、双方の繰り出す手段は予測できる。構図を見る限り収束も77玉に87馬までだろう。「そんなに手強くもなさそうだな」挑戦者もはじめは、そう思ったかもしれないが、正解者は僅かに3名。

限られた時間にも阻まれただろうが、彼らは難渋な変化読みに沈んだわけではない。そんなものはそもそも、この作品にはないのだから。

A図に至る手順で、初手58龍に代わる好手がある。龍を59で取らせるのだ。A図で59金なら飛を68へ打ち、同じ手順を経た場合77歩が打てるという発想。59龍に57銀合は47金、66玉、57金、同香成、77銀、56玉、54龍、55歩、57龍、同玉、55龍以下で詰む。

59龍、同金、29馬、38飛合、
同馬、同桂成、47金、66玉（B図）

（B図）



持駒　飛

ここまで後手に変化の余地はない。ここで68飛と打つ。素直に先手の主張を通すことはできないから、後手は76玉とかわす前に67歩と捨合で抵抗するが、先手にも手筋の不利交換があって、こんな仮想手順が見える。

68飛、67歩合、同飛、76玉、
66飛、同玉、67歩、76玉、
74龍、同銀、77歩、同玉、
87馬まで21手

捨合を奪いざま、さっと飛を66に捨て、歩に打換えるのが手の流れというもの。打歩詰を巡る攻防を凝縮した仮想手順は、まさかゴール？

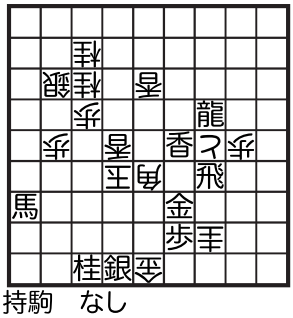
さすがにこうはならない。手順中で66飛に同玉と、あっさり不利打換えに応じたのが誤りで、同香と取れば72桂の守りで逃れている。

ゴールはおろか、仮想手順は打歩を巡る攻防のベース手順。いわばスタートラインに過ぎない。

B図で68飛は筋だが失敗だった。代わりの手を探ってみると、横から36飛と打つ手が見つかる。狙いはやはり不利交換。同と、同龍、56歩合でも、46歩合、同飛、同とでも、67歩と叩いてから龍で歩を取り、77歩が打てる。

そこで36飛には56角合と粘る。

（C図）

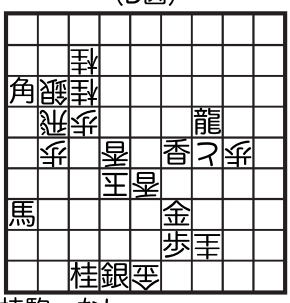


持駒　なし

同飛～33角で角合の意図が分かろう。76玉とかわすと67飛と同じように角の利きが77に及び、飛が角になっても打歩詰を免れないのだ。従って角は左から93へ打つ。どうする？

アンチ飛先飛香（D図）の妙防は学習済。

（D図）



持駒　なし

83銀は74龍に備えて動けず、同角成を同桂と

取る。ここで刮目すべき変化が起きている。

64への利きが消えた！

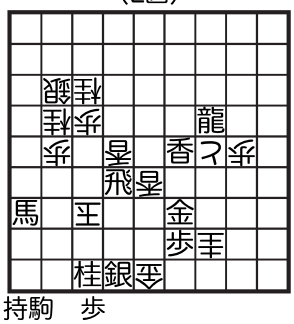
あの手順に繋がる。B図で68飛の失敗は72桂に阻まれたからではなかったか。どうやら解決したのか？　確認しよう。D図から

同角成、同桂、68飛、67歩合、
同飛、76玉、66飛

同香なら77歩、65玉、64龍迄。同玉も仮想手順で詰む。一件落着した……のか？

そうではなかった。66飛に同玉でも、同香でもない、第三の道が残されていた。77玉と剣先を見切ってかわす手がそれだ（E図）。

（E図）



持駒　歩

いよいよ解決かという時に、とんでもない手が飛び出したものだ。先手に何ができる？

69銀が金なら68金でよいのだが、いかんせん銀。さりとて78歩は66玉で、頭に叩く一歩がない。そうなると74龍で一歩補充するしかないが、同銀、78歩、66玉、67歩に、すっと55から抜けてしまう。つまりE図、ひいてはD図もすでに万事休していることになる。では営々と築いてきたものは瓦礫と化したのか？

そうではあるまい。築いてきた手順は紛れもなく本筋だ。従って「55から抜ける難題」にも、どこかに解決の鍵が落ちていなければならない。

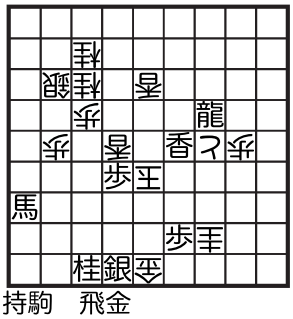
作者ー実を言うと、この問題は解答者にとってパズルであると同時に、作者のわたしにとっても最大のパズルだった。55の穴塞ぎを実現するためにはどうしたらいいか。わたしは夢のようなことを考えた。その夢のようなことを実現させるのが、詰将棋といものの本質なのだ。

こういう時に、この作者が採る道は、いつも決まっている。彼はこう述懐する。

「詰将棋創作から経験的に会得している、一つの真実がある。それは、やさしい道と難しい道があったら、必ず難しい道を選んでみるべし、という真実だ。そして、経験上、いくら難しいテーマであろうが、すべて実現可能であることはわかっている。そこに安易な道と困難な道があるとき、私は必ず困難な道を選ぶ。」

夢を追った作者が解いた謎の答とは？　55を塞げる駒があるなら候補は2枚。47金を46へ打つか、E図で56に走った香を55で止めるか。僅かな可能性は後者。56香と走られる前に策を施すなら7手目（F図）しかない。

（F図）

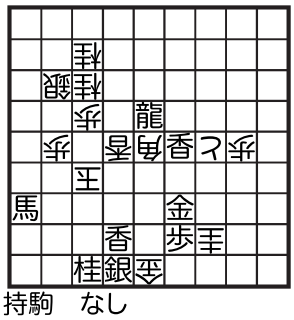


持駒　飛金

47金と押える前に、54飛と打つ手はどうだろう。55歩合は同飛で不利交換成功。また55角合なら、同飛、同香で、懸案の55が埋まるではないか。そのあとで47金と打てばよい。

しかしこれは罠だ。54飛には意外な受けがある。あっさり同香と取るのだ。54飛、同香、同龍、55角合、47金、66玉、68香、76玉で、なんと、55角が77に利いて失敗（G図）。

（G図）



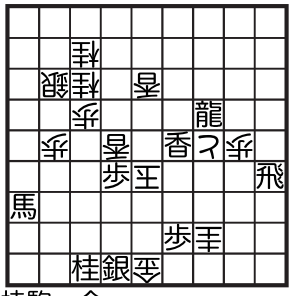
持駒　なし

もう一度F図で盤面を見渡そう。今までに一

顧だにしなかった場所がある。もうお判りだろう。

16飛！（H図）

（H図）

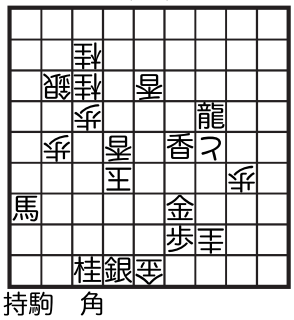


持駒　金

46合には67金があるから、26角合しかない。同飛、同歩で何が起こったろう？

47金に66玉で見慣れた景色（I図）。

（I図）



持駒　角

いや、今まではここで68飛と36飛を検討していた。16飛で飛角交換した今、飛打～角合のパーツが、角打～飛合のパーツとそっくり一式、順番が入れ替わってしまうのだ。

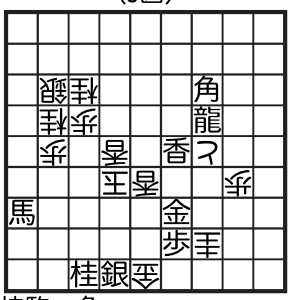
ふつう着手にはそれぞれ流れがある。各所の枝分かれにある支線を次々に吸収し、埋没させながら手順を構築して行く。本作にあるのはさながら順序フリーのパーツの集合。この面がダメなら、先にこちらの面を回してみよう。そんなことのできるのが、いみじくも名付けたこの「ルービックキューブ」の特徴なのだ。

蓄えた知識を吐出して、もう一度パーツをなぞってみよう。ここでも33角は76玉だから

93角、84飛合、同角成、同桂、
36飛、56角合、同飛、同香

捨て続けた手が次の手で甦る。パーツの逆転により桂が84を塞ぎ、64の守備が外れたことで、ついに33角が成立するのだ（J図）。

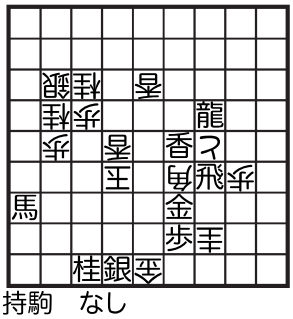
（J図）



持駒　角

55何合でも同角成。76玉も87馬、75玉、67桂以下で詰む。36飛には56角合ではなく46角合（K図）でなければならなかった。

（K図）



持駒　なし

これには同飛、同と、44角と53香に狙いをつける。76玉は効かない。いつか右からの角に玉をかわす術を失っているのだ。55飛合と三たび、不利合で抵抗するが、同角に後手は同香と走らされることになる（同玉は64龍以下詰み）。

とうとう55が塞がった……ゴールだ。

59龍、同金、29馬、38飛合、
同馬、同桂成、16飛、26角合、
同飛、同歩、47金、66玉、
93角、84飛合、同角成、同桂、
36飛、46角合、同飛、同と、
44角、55飛合、同角、同香、
68飛、67歩合、同飛、76玉、
66飛、77玉、74龍、同銀、
78歩、66玉、67歩、76玉、
77歩、同玉、87馬まで39手

伊藤正が選んだ
2009年ベスト長篇４局

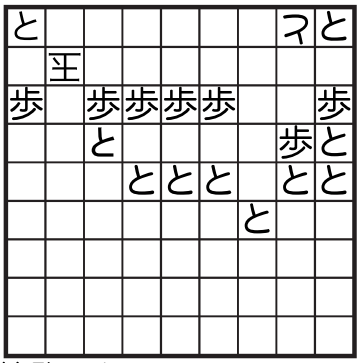
2009年の発表作の長編から4題を選んだ。

今年は正直なところ不作という感じだ。

長編を解く（鑑賞する）、という行為の意義は、作品世界、すなわち長手数を支えるテーマあるいは手順（及びそれに込められた作者の意思）を理解する、ということだろう。この面倒な行為をあえてする理由は、作品世界を理解したときに訪れる「こんなことを考えたやつがいるのか」「こんな手順が存在していたのか」という驚き、「やられた」という爽快感、思わず誘われる微笑。そんな感動を味わいたいからだろう。少なくとも私はそうである。

そんな基準で４作を選んだ。

①　　岡村孝雄　「海雪」
詰将棋パラダイス　2009.3



持駒　なし

92歩成、71玉、81と寄、61玉、
72歩成、同玉、82と寄、61玉、
71と寄、51玉、62歩成、同玉、
63と、同玉、64と直、62玉、
72と寄、51玉、61と寄、41玉、
52歩成、同玉、53と、同玉（途中図1）
54と右、52玉、62と寄、41玉、
51と寄、31玉、42歩成、同玉、
43と、同玉（途中図2）、34と、同玉、
45と右、43玉、44と左、42玉、
52と寄、31玉、41と寄、22玉、
12と、同と、23歩成、同と、
同と、同玉、34と上、13玉、
24と上、12玉、23と左、21玉、
22と、同玉、33と左上、11玉、
12歩、21玉、31と、同玉、
42と寄、21玉、32と寄、12玉、
22とまで69手

手順自体は、豆腐図式でこれまでに多く見られた「朝霧」趣向をベースにしたさばきであり、新鮮味は乏しい、というのが正直なところだ。

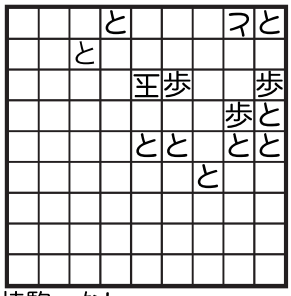
もちろん本作のテーマは新しさの追求ではない。おもちゃ箱でいみじくも記録作として登録されているとおり、豆腐図式のさばきの極限を目指したものである（初形歩使用数18枚→詰め上がり形歩使用数4枚）。ただし私は「煙詰」という表現はとらない。詰め上がり駒数4枚の作品は煙詰ではないからだ。何よりこの作品の質の高さは煙詰というタイトルを必要としない。

朝霧形趣向においては玉の上部脱出を抑える駒が収束において盤面に残る、という特徴があった。この特徴を排除して抑え駒を消して行くのはこの作品が最初ではないが豆腐図式ではおそらく初めてではないか。

本作はそれに加えて収束の巧妙な構成と組み合わせて極限までさばくことに成功した作品である。

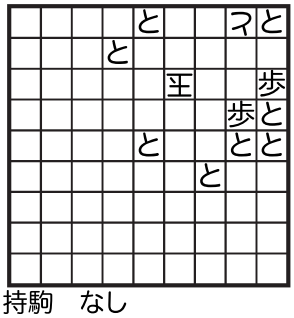
感心したのは下図のところ。

（途中図1　24手目53同玉）



持駒　なし

（途中図2　34手目43同玉）



持駒　なし

途中図１のところ。手順の流れからも収束（34の地点に効きを残したい）の備えからもここは54と直が当然と思われる。しかし作者はここで54と右を設定した。

その理由は？

途中図２。理由はここで明らかになる。ここから手順を進めるには、「55と」配置であっても「45と」配置であっても、「34と」と上がるしかな

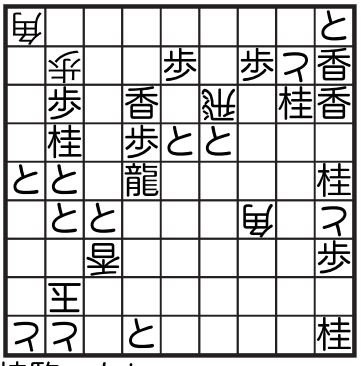
い。34とに53玉とされたときに備えて55と型を選択したのだ。

この手順はもちろん上部配置のさばきにもつながり、12と～23歩成などの細かいテクニックを見せながらの丁寧な収束になだれこむことになる。

豆腐図式だから当然ながら派手さはないが、これ以上のさばきは考えられず、豆腐図式の極限の1局として記憶されるべき作品だろう。

②　　近藤真一

おもちゃ箱　2009.10



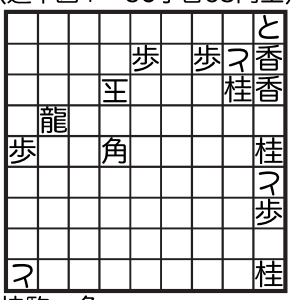
持駒　なし

驚異の作品。詰将棋の歴史において私たちは数々の不思議を見てきた。江戸時代から今日まで詰将棋作家の努力と根性は、盤面に埋まったさまざまの奇跡を発掘した。そのたびに驚きや感銘や楽しさを私たちは感じさせられてきたのだが、本作が持つ驚異度はその中でもトップクラスだろう。

元ネタとしての斎藤作「冬の旅」、その発展形の同じ作者の看寿賞受賞作の存在は本作の中盤手順が与える衝撃に何ら影響しない。先行作を踏まえてさらに深めたこの構造に感銘を得ずに詰将棋ファンといえようか。

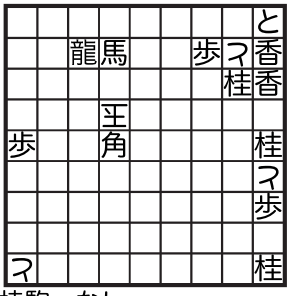
68龍、78金合、同と、同香成、
87金、98玉、78龍、88金合、
同金、同と、97金、同玉、
87と、同と、96と、同玉、
86と引、同と、同と、同玉、
88香、95玉、75龍、94玉、
95歩、93玉、92桂成、同玉、
82歩成、同角、同香成、同玉、
83歩、同玉、65角、82玉、
84龍、71玉、62香成、同玉、
63歩成、同飛、同と、同角、
53と、同玉、43飛、62玉、
63飛成、同玉（途中図１）

（途中図１　50手目63同玉）



持駒　角

（途中図２　58手目64玉）



持駒　なし

ここまでは序奏。煙詰を予感させる初形だけに特にむずかしいところはないが、99と＆95歩が配置されてしまったので果たして消えるのかな、と解答者に思わせるところはある。

（途中図１以下）
74龍、62玉、84角、52玉、
72龍、53玉、62角成、64玉（途中図２）

ここから始まる手順は何と形容したらいいのだろうか。手順そのものは65角を軸としてほぼ無防備に近い玉を飛角３枚で追い回す（玉方はほぼ必然の逃げ方をしているに過ぎない）だけの手順である。

足の長い駒で追っているので当然ながら多数の選択肢がある。ところがこの作品では（完全作なので当たり前だが）その選択肢を唯一解に絞ってしまった。しかも３回転するのだ。

「冬の旅」はこの追い回し手順の中で余詰があった。無防備玉を飛角３枚で追うのだから余詰があってもおかしくない、というのは私たちが持っている常識であり、「冬の旅」の余詰もその常識に合致した結論だった。「そりゃそうだろうねえ」という感想を持ったものだ。

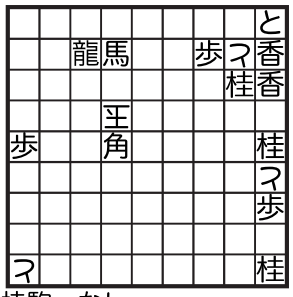
また、大道詰将棋に見るように、飛角３枚で追うと変化がやたらにある中を力技で詰める、という手順になってしまう、ということも私たちは知っている。

ところが、この作品は「それはどちらも違う」と申し立てている。この配置でも唯一解が存在し、

しかもサイクル趣向を入れることができるといっている。
　常識が破壊される爽快感が私たちを包む。

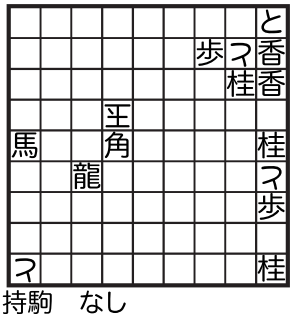
（途中図２以下）
74龍、55玉、44馬、46玉、
76龍、①37玉、67龍、48玉、
66馬、59玉、77馬、49玉、
69龍、48玉、59馬、57玉、
58龍、66玉、56龍、75玉（途中図３）

（途中図３　78手目75玉）



持駒　なし

（途中図4　90手目64玉）



持駒　なし

　この20手が何の配置もない盤面で唯一解として存在していることが信じられない。作品世界はまったく違うが上田作のグラスホッパー３枚で玉を追っかける作品を想起させる。
　また変化①（難解！）でみるような変化手順と作意手順の重なりは「大迷路」を思い出させる。

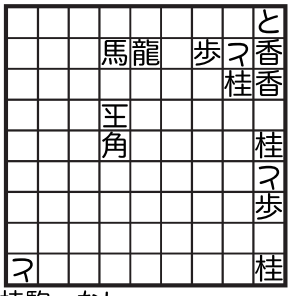
※変化①：57玉、66馬、46玉、56馬、36玉、47馬、35玉、57馬、44玉、74龍、53玉、54龍、62玉、35馬、72玉、52龍、73玉、62馬、64玉、54龍、75玉、84馬、86玉、56龍、77玉、66馬、86玉、99馬、95玉、77馬、94玉、96龍、84玉、95馬、75玉、76龍、64玉、73馬、53玉、56龍、44玉、62馬、33玉、43角成、同玉、45龍以下詰。後述する紛れ②と比較すると微妙さがわかる。

（途中図３以下）
48馬、85玉、76龍、95玉、
59馬、94玉、96龍、84玉、
95馬、75玉、76龍、64玉(途中図４）

　途中図３からは86馬とか76龍とかの見えやすい手ではなく48馬とこちらからのぞく。手が続くのはこれしかないのだ。

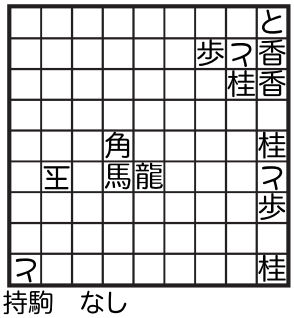
（途中図４以下）
73馬、53玉、56龍、44玉、
②55馬、53玉、54馬、62玉、
44馬、72玉、52龍、73玉、
62馬、64玉（途中図５）

（途中図5　104手目64玉）



持駒　なし

（途中図6　112手目86玉）



持駒　なし

※紛れ②：62馬以下変化①の手順で追うと、43角成に24玉と逃げて不詰（変化①では25歩と打って詰み）。

　95歩は消えたが、すぐに収束に入るわけではない。収束に入るためには「22と」を消す必要がある。そのためには「99と」を消す必要がある。そんなことが可能だろうか？　可能なのだ。

（途中図５以下）
54龍、75玉、84馬、86玉、
56龍、77玉、③66馬、86玉（途中図６）

　③のところで76龍、68玉、95馬という手順が収束の入り道。ただすぐ着手しては22とがあるので不詰。この着手の前に２枚の「と」を消す手順がここからだ。

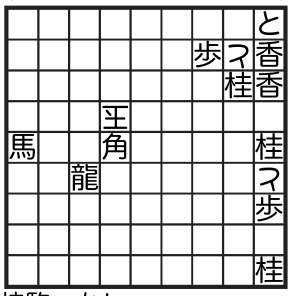
（途中図６以下）
99馬、85玉、76龍、94玉、
95歩、同玉、77馬、94玉、
96龍、84玉、95馬、75玉、
76龍、64玉（次頁途中図７）

　途中図６で22馬とすると66歩合、同龍、95玉、75龍、85香合、77馬、96玉、97歩、同玉、98歩、同とで不詰。もしも99とがないとこの手順で詰む。したがってまず99とを消しに行く、というわけだ。

よくもまあこんな理屈が入ったものだ。おまけに取った歩はきれいに消えてくれるのだから。

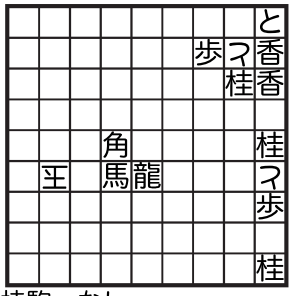
よく見ると、途中図７は途中図４とほぼ同じ。つまり途中図４から無限ループ手順がこの配置には隠れている、ということだ。

（途中図7　126手目64玉）



持駒　なし

（途中図8　148手目64玉）



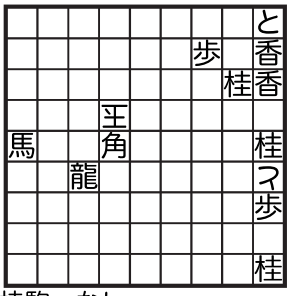
持駒　なし

（途中図７以下）
73馬、53玉、56龍、44玉、
55馬、53玉、54馬、62玉、
44馬、72玉、52龍、73玉、
62馬、64玉、54龍、75玉、
84馬、86玉、56龍、77玉、
66馬、86玉（途中図８）

きれいに１回転。今度こそ22馬が成立する。

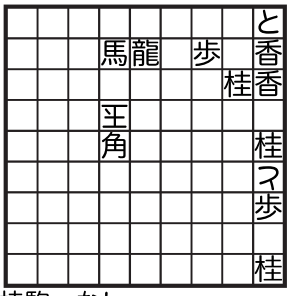
（途中図８以下）
22馬、85玉、76龍、94玉、
95歩、同玉、77馬、94玉、
96龍、84玉、95馬、75玉、
76龍、64玉（途中図９）

（途中図9　162手目64玉）



持駒　なし

（途中図10　176手目64玉）



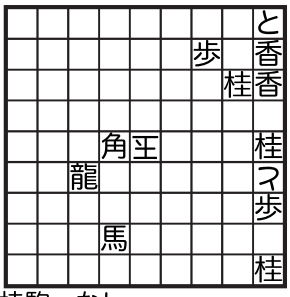
持駒　なし

２枚のと金が消えた途中図４である。

（途中図９以下）
73馬、53玉、56龍、44玉、
55馬、53玉、54馬、62玉、
44馬、72玉、52龍、73玉、
62馬、64玉（途中図10）

（途中図10以下）
54龍、75玉、84馬、86玉、
56龍、77玉、76龍、68玉、
95馬、58玉、78龍、57玉、
68馬、66玉、76龍、55玉（途中図11）

（途中図11　192手目55玉）



持駒　なし

途中図５の相似形。つまりそういうことなのだ。77玉のときにもはや66馬とはしない。76龍で収束に入る。

以下は先行作と同じ手順で特に説明は要しないだろう。

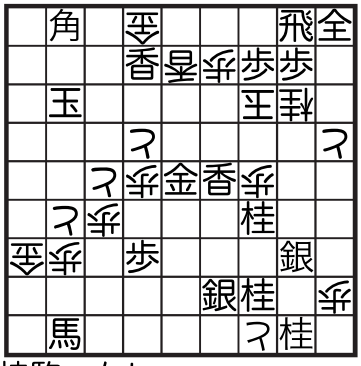
46馬、44玉、74龍、53玉、
35馬、42玉、43角成、同玉、
44龍、32玉、31桂成、同玉、
21と、同玉、11香成、31玉、
21成香、同玉、12香成、同玉、
13馬、同玉、33龍、14玉、
23龍、15玉、16歩、同玉、
17歩、同玉、27龍まで217手

飛角３枚で構成する力技の追っかけだがその手順の組み合わせの中に無限ループ手順が隠れていた、しかもその手順には歩の連取りが設定可能だった、と一言でいえばそうなるのだろう。しかし何度見ても「よくもまあ」と思ってしまう。

９×９の盤面と詰将棋ルールの制約の中で眠っていたこの手順を発掘した作者の根性（幸運？）には心から拍手を送りたい。

③　　近藤真一

詰将棋パラダイス　2009.11



持駒　なし

初形を見ると、マニアなら「ははあ、メガロポリス式の持駒変換では？　それでと金群の消去の代わりに左下の歩とと金の連取りはがしにしたのかな？」という直感が働くだろう。

作意はおおむねその筋であり、その意味では解答者の想像を超える構造ではない。

ただこの作品のポイントはそれとは別にある。一つは持駒変換の複雑化である。

ここで持駒変換作品の歴史を振り返ってみよう。原型となった「積分」は「歩→銀→角→歩…」、「メガロポリス」は「歩→香→角→歩…」という変換だった。

この変換パターンがベースとなり、一サイクルの長手順化（例：「新世界」）、持駒変換の部分の複雑化（例：「メタ新世界」の「歩歩→香歩→香香→角香」）があり、さらに公式に発表されていないが、複数の作家が持駒変換部分の多種化に取り組んでいる（例：「歩→香→銀→角→歩……」）。

この作品の結果稿で近藤氏も書いているが、故山本昭一氏も一時持駒変換部分の多種化に取り組んでいた。私も「ギガロポリス」（変換部分はたぶん「歩→香→銀→金→角→歩…」）を見せられた記憶がある。どんな図面だったかはもはや覚えていない。

本作の持駒変換機構は「歩→香→金→銀→角→歩」となっている。史上初の持駒変換機構への金合入り作品である。

この手順の設定のためには変化と紛れを紙一重で割り切る必要がある。つまり32の合駒の限定である。「ギガロポリス」も複雑な変化手順があったことは覚えている。

山本氏が双玉作品にすることを拒絶していたのは近藤氏も書いているとおりだった。私も氏の考え方に共感したのを覚えている。

余談だが、私は今でも「双玉作品は単玉作品とは別のジャンル」と考えている。だってね、（逆）王手放置禁手というルールを用いれば単玉作品では不可能な手順がいろいろ可能になるじゃありませんか。同じ土俵に乗せられるはずがない。もちろん作品やルールの優劣とかの話ではない。伝統的詰将棋（単玉）とは別のジャンルというだけの話である。

さらに余談だが、持駒変換機構において金合（及び銀合）が実現できると繰り返し手順の中で六種合が成立している。となると何らかの手段で桂合が入ると「７種合入趣向手順」が成立してしまいますねえ、なんて山本氏と冗談で話していたことを思い出した。お暇な方はどうぞチャレンジを。

ポイントの二つ目は「精密な手順限定」である。

従来のサイクル趣向作品は、黒川一郎氏のように変化をやさしく割り切って作意を構成する場合が多かった。しかし最近の作品はそうではない。例えば田島秀雄氏の一連の作品、「木星の旅」などの重量級作品は、変化と紛れにおけるわずかな盤面や持駒の差異を、盤面を広く用いた変化手順で区別する、という技術により、従来の常識ではありえなかった作意手順を表現している。

これははっきり現代長編詰将棋の傾向の一つといえるだろう。

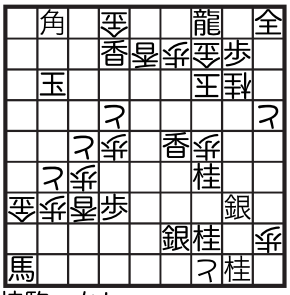
作者はそんなことを意識したわけではないだろうが、本作も同様の構造を持っている。

例えば、①玉の退路を空けるための最初の77合（場所）限定、②さらに玉の退路を空けるための66合（場所）限定、③97金の質駒化を防ぐ88金移動合、と書くのは簡単だが、その変化は、①は、（33玉型から）34香～26桂以下上部に玉を追い出す、②は、（③の88金移動合の前提となる32銀合／43玉型から）35角～34歩～32飛成以下上部に玉を追い出す、③は97金を残した型なら88角と引いて97角をねらう、という複雑な変化を読み切って初めて理解できる構造になっ

ている。
　長い前置きになった。作意を追ってみよう。

44金、32玉、33金、同玉、
31飛成、32金合、99馬、77香合（途中図１）

（途中図１　8手目77香合）



持駒　なし

　この77香合が第一のポイント。合駒の場所はなぜ77なのか。88や66ではいけないのか。
　例えば88香合とするとどうなるのか。同角、同歩成以下作意同様に追って88とを消した後に34香、同玉、26桂、33玉、34飛以下上部に追い出して76歩が退路を塞ぎ詰んでしまう。これは66香合でも同じだ。したがって合駒の場所は77でなければならない、という理由が設定されている。作図側の立場でいうと、合駒場所の限定の理由として玉を追っかける変化手順を設定した、ということだ。猛烈な腕力。

（途中図１以下）
同馬、同歩成、34香、同玉、
32龍、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32銀合、34金、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32角合、34銀、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32香合、44角、43玉、
77角、53玉、44角、43玉、
33角成、同玉、34歩、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32金合、34香、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32銀合、34金、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32角合、34銀、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32香合、99角、66飛合（途中図２）

（途中図２　76手目66飛合）



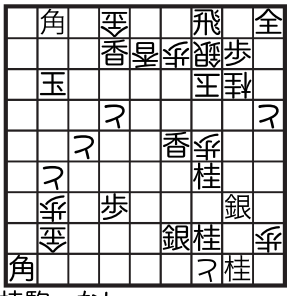
持駒　なし

　最後の66飛合は手数延ばし。この手自体は「見たことがある手」でさほどのインパクトはない。ただなぜ合駒の場所が66なのだろう。
　これを説明するためには途中図３の説明が必要だ。なぜ88金移動合なのか。88香合だとどうなるのか。
　88香合だと作意同様に進んで、途中図４以降で「31飛／32香合　持駒角」の形（盤面に97金がある）になったときに、44角、43玉、55角、53玉、44角、43玉、88角、53玉、54香、同と、97角と金を取って詰んでしまうのだ。
　これを防ぐ手段、つまり97金を盤面から消滅させてしまうのが88金移動合である。
　ところが単に（例えば「31飛／32香合」型で）88金とすると、同角、同歩、44金で詰んでしまうため、88金を決行するためには「31飛／32銀合持駒角」型でなければならない。
　さらにところが。単に「31飛／32銀合　持駒角」型に構えて、99角打を待つと、攻方は、44角～35角～34歩という手順で32銀を取りながら玉を上部に追い、65歩が退路を塞ぐために詰んでしまうという構造が隠されている。
　従って玉方は、「31飛／32銀合　持駒角」型に構える前に、「31飛／32香合　持駒角」型で99角と打ってもらい、66合で65歩を動かして32銀合のときに上部に追われたときの玉の退路を空けておく必要があるのだ。
　うーん。何という構造。

（途中図２以下）
同角、同歩、34飛、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32金合、34香、同玉、

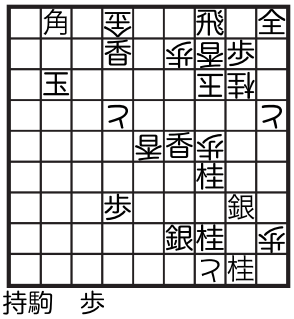
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32銀合、34金、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32角合、34銀、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32香合、44角、43玉、
66角、53玉、44角、43玉、
33角成、同玉、34歩、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32金合、34香、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32銀合、34金、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32角合、34銀、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32銀合、99角、88金行（途中図３）

（途中図３　152手目88金）



持駒　なし

（途中図４　366手目55同香）



持駒　歩

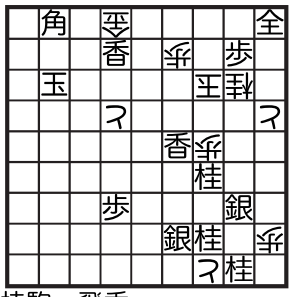
同角、同歩成、34金、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32角合、34銀、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32香合、44角、43玉、
88角、53玉、44角、43玉、
33角成、同玉、34歩、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32金合、34香、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32銀合、34金、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32角合、34銀、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32香合、88角、77歩、
同角、同と、34歩、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32金合、34香、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32銀合、34金、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32角合、34銀、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32香合、44角、43玉、
77角、53玉、44角、43玉、
33角成、同玉、34歩、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32金合、34香、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32銀合、34金、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32角合、34銀、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32香合、77角、66歩、
同角、同と、34歩、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32金合、34香、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32銀合、34金、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32角合、34銀、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32香合、44角、43玉、
66角、53玉、44角、43玉、
33角成、同玉、34歩、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32金合、34香、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32銀合、34金、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32角合、34銀、同玉、
32飛成、33飛合、同龍、同玉、
31飛、32香合、66角、55歩、
同角、同香（途中図４）

　一気に飛ばしたが、これでやっと52香が動いた。この作品の歩の連取りの真の目的（52香を取ってしまい59への効きを消滅させる）の達成まであともう少しである。

（途中図４以下）
34歩、同玉、32飛成、33飛合、
同龍、同玉、31飛、32金合、

34香、同玉、32飛成、33飛合、
同龍、同玉、31飛、32銀合、
34金、同玉、32飛成、33飛合、
同龍、同玉、31飛、32角合、
34銀、同玉、32飛成、33飛合、
同龍、同玉、31飛、32香合、
44角、43玉、55角、53玉、
44角、43玉、33角成、同玉、
34香、同玉、32飛成、33飛合、
同龍、同玉（途中図５）

（途中図５　412手目33同玉）



持駒　飛香

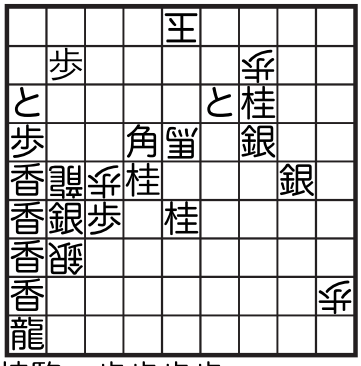
（途中図５以下）
34香、同玉、26桂、33玉、
34飛、22玉、14桂、13玉、
12成銀、同玉、32飛成、13玉、
22龍、14玉、15歩、同玉、
13龍、14金合、16銀、同玉、
14龍、27玉、17龍、38玉、
37龍、49玉、59金まで439手

途中図５からは収束。この手順はいつでも攻方は選択することができる。52香が消えたために最終手59金が可能になった、ということだ。

もう一度全体を眺めてみよう。金合を入れた複雑な持駒変換機構をベースに歩の連取り趣向を実現する、という骨太の柱。その中で歩の消去の順番の限定（上部追い出しの手順のバックボーンとして、当然ながら紛れは不詰で変化は詰むという配置の設定）、さらに合駒場所の限定に絡ませた97金の移動合の実現。

これらを総合すると、作者の腕力（豪腕というべきか）を感じずにはいられない。2009年を代表する作品になることは間違いないだろう。

④　　吉田京平
詰将棋パラダイス　2009.7

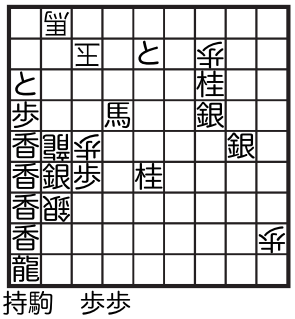


持駒　歩歩歩歩

シンプルな趣向作品。この作品の良さは完成度の高さである。馬ノコと香消去の連携を実に簡単に表現している。解答者側から見るとおそらくあっという間に解けてしまう作品で感銘は薄いかも知れない。ただこの作が持つセンスのよさは感じてほしいと思う。

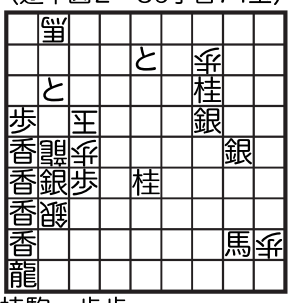
52歩、61玉、62歩、71玉、
81歩成、同馬、61歩成、同玉、
51歩成、同玉、42角成、61玉、
52と、72玉、73桂成、同玉、
64馬、72玉（途中図１）

（途中図１　18手目72玉）



持駒　歩歩

（途中図２　36手目74玉）



持駒　歩歩

ここまでは序奏。ここからシンプルな馬ノコが始まる。54馬に対して63歩合だと？　同馬、59龍以下収束に直結する。つまりこの作意の目的は一歩稼ぎなのである。

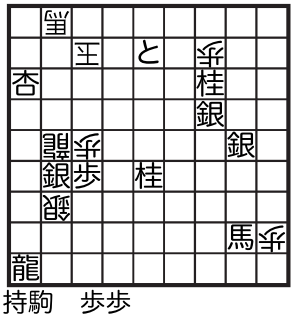
（途中図１以下）
54馬、73玉、55馬、72玉、
45馬、73玉、46馬、72玉、
36馬、73玉、37馬、72玉、

27馬、73玉、28馬、84玉、
83と、74玉（途中図２）

　28馬に対してもはや72玉とできない（18馬と歩を取られる）玉方は84玉と逃げる。この玉方に選択権がある手順により９筋の香（歩）捨てとつながる、というしくみになっている。
　個人的な嗜好だが、この作品のように玉方に着手選択権がある趣向作品（攻方は王手をしているだけだが玉方の応手変化により繰り返し趣向手順が成立する）にはおもしろさを感じる。
　28馬に単に74玉と逃げると64馬、84玉、85銀で簡単に詰む。先に84玉とするとこの手順は成立しない。
　シンプルな馬ノコにシンプルな理屈。かくて９筋の壁駒が一枚消える。
　途中図２以下はこの要領で９筋の駒をさばく。

（途中図２以下）
64馬、83玉、93歩成、72玉、
54馬、73玉、55馬、72玉、
45馬、73玉、46馬、72玉、
36馬、73玉、37馬、72玉、
27馬、73玉、28馬、84玉、
83と、74玉、64馬、83玉、
93香成、72玉、54馬、73玉、
55馬、72玉、45馬、73玉、
46馬、72玉、36馬、73玉、
37馬、72玉、27馬、73玉、
28馬、84玉、83成香、74玉、
64馬、83玉、93香成、72玉、
54馬、73玉、55馬、72玉、
45馬、73玉、46馬、72玉、
36馬、73玉、37馬、72玉、
27馬、73玉、28馬、84玉、
83成香、74玉、64馬、83玉、
93香成、72玉、54馬、73玉、
55馬、72玉、45馬、73玉、
46馬、72玉、36馬、73玉、
37馬、72玉、27馬、73玉、
28馬、84玉、83成香、74玉、
64馬、83玉、93香成、72玉、
54馬、73玉、55馬、72玉、
45馬、73玉、46馬、72玉、
36馬、73玉、37馬、72玉、
27馬、73玉、28馬、72玉（途中図３）

（途中図３　144手目72玉）



持駒　歩歩

　いよいよ目的達成である。143手目28馬に対してもはや84玉と逃げることはできない（75銀、同龍。94龍で詰み。９筋の香を消去した目的はここにあった）。

（途中図３以下）
18馬、73玉、28馬、72玉、
27馬、73玉、37馬、72玉、
36馬、73玉、46馬、72玉、
45馬、73玉、55馬、72玉、
54馬、73玉、64馬、72玉、
63馬、同玉、69龍、52玉、
53歩、51玉、41桂成、同玉、
61龍、51歩、52歩成、31玉、
51龍、22玉、23歩、12玉、
13歩、同玉、11龍、12金、
22龍、同金、14歩、12玉、
22歩成、同玉、13歩成、同玉、
23金まで193手

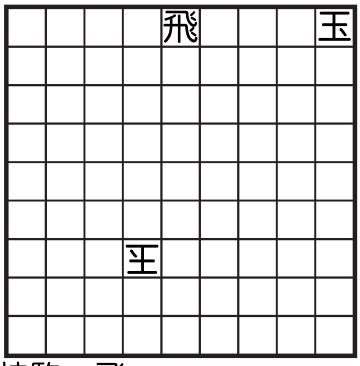
　以下は収束。18歩を取ってすぐに収束に突入するのではなく、81馬の配置により最後の接近する馬ノコを成立させているのは当然とはいえ基本を押さえた構成だ。
　最後は馬を押し売りして69龍と回れば、解答者が最初に読まされる63歩合の変化と同じ手順で１筋まで追って詰みにいたる。
　ここで感心したのは22龍とお約束の大駒捨てを入れた切れ味のいい収束の締め方。余分な駒配置もない。
　「この素材ならこう作りたいなあ」というところをきちんと押さえた作り方で作品としての完成度の高さと作者のセンスの良さがうかがえる。

山田嘉則が選んだ 2009年ベストフェアリー8局

（フェアリー・ルールの定義は12ページにあります。）

①　　増田智彬

詰将棋パラダイス　2009.6



持駒　飛

Isardam (type A)

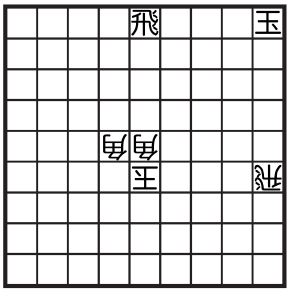
ばか自殺詰8手

64飛、65角、56飛成、同玉、
54飛、16飛、51飛生、55角まで8手

紛れ①:63飛？、65角、56飛成、同玉、53飛生、16飛、（56飛成！）

紛れ②:（3手目から）57飛成？、同玉、54飛、17飛、51飛生、（11飛成！）

（詰上がり図）



Isardamを逆から読むとMadrasi。すなわちマドラシから派生したルールである。

王手の判定が変わるtype Aは、慣れるまでは感覚がつかみにくいかもしれない。

本作はこのルールを生かした高密度の短編。

6手目16飛がIsardam独特。逆王手であり同時に王手駒と同種の駒で玉に紐をつける受けだ。

対して51飛生は11玉に紐をつけつつ王手。56飛成と玉を取る手を用意している。

この生駒と成駒の違いで初手・3手目が限定になるのは紛れを参照してほしい。

【詰上がり図】では16飛は利いていない。しかし、12玉や55飛と指せば51飛の紐が切れて利いてくる。

キルケやAndernachなど、フェアリー・チェスを翻案するとき、果たして詰将棋でおもしろい作品ができるのか、という疑問が生じがちだ。

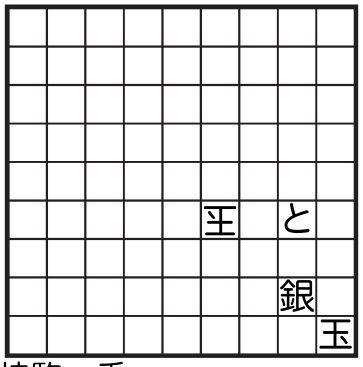
しかしキルケについてはご存じの通り。

Isardamもこの作品を見れば有望であることが分かる。

あらゆるルールに発展性がある。歩いた跡に道ができる。

②　　金子清志

詰将棋パラダイス　2009.5



持駒　香

キルケばか自殺詰10手（2解）

①49香、47香、37銀、同玉(+39銀)、
48銀、同香成(+39銀)、38銀、同杏(+39銀)、
28銀、同杏まで10手

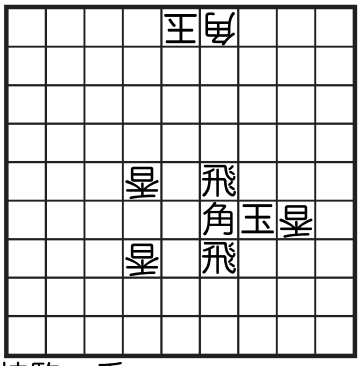
②37銀、57玉、59香、58飛、
46銀、48玉、37銀、39玉、
28銀、同飛成まで10手

詰将棋では複数解やtwinは依然未開拓である。

この分野で2009年No1の作品。

28銀、同Xまでの詰み形を想定する。
が、キルケである。工夫なしに進めると銀が39に復活して同銀と取られてしまう。
ルール上２通りの工夫が考えられるが、この作品は2解でそれぞれを実現している。
①39が埋まっているため銀が復活しない。
②同銀が禁手(11香で自玉に王手がかかる)で取れない。
複数解の模範的作品と言ってよいだろう。

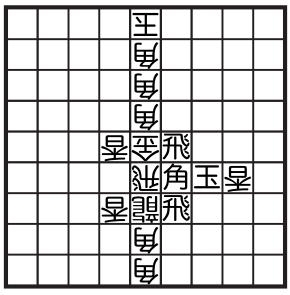
③　　神無太郎
詰将棋パラダイス　2009.12



持駒　香
(後手持駒無制限)
PWC
ばか自殺ステールメイト18手

59香、58角、同香(+59角)、57角、
同香(+58角)、56飛、同香(+57飛)、同飛成(+57香)、
同香(+57龍)、55飛、同香(+56飛)、54金、
同香(+55金)、53角、同香生(+54角)、52角打、
同香生(+53角)、同角まで18手

(詰上がり図)



神無太郎氏もベテランの域に入った。
フェアリーの効果を最大限に引き出すその演出力はファンを魅了して止まない。

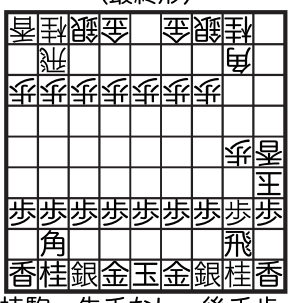
この作品も一目瞭然。後手持駒無制限の条件を生かして５筋で繰り返される攻防、そして詰上がりの駒柱。
文字通り一直線の手順に、８手目同飛成と取って飛を龍に変える手をアクセントにする熟練の技。
斬新さはないが、完成品である。

④　中村雅哉
詰将棋パラダイス　2009.7
推理将棋

「19手で詰まして勝ったって？」
「うん。これが投了図さ」
「君は１手も指してないじゃないか！　駒の損得もないし、何でこうなるの？」
「確かに僕の駒20枚は全て初形配置と同じ場所に居るけど、何も指さなかったわけじゃないよ。
ヒントを出そう。まず、王手は２回だけだった。あと僕も相手もそれぞれ、１つの駒を６手連続で動かしたことがあったよ。」
さて、どんな将棋だったのだろうか？

16歩、24歩、15歩、42玉、
14歩、32玉、13歩生、23玉、
12歩成、34玉、13と、25玉、
18歩、16玉、14と、25歩、
15と、同香、17歩まで19手

(最終形)



持駒　先手なし　後手歩

mixiの推理将棋コミュニティに力作が発表されているが、SNSを正式発表の場とは見なしにくい。
今回は詰パラ、詰将棋おもちゃ箱、Web Fariy Paradiseの作品を選考対象とした。

2008年には看寿賞・妖精賞ダブル受賞の中村氏。

妖精賞もプルーフ・ゲームでの受賞であり、この分野でも今注目の作家である。

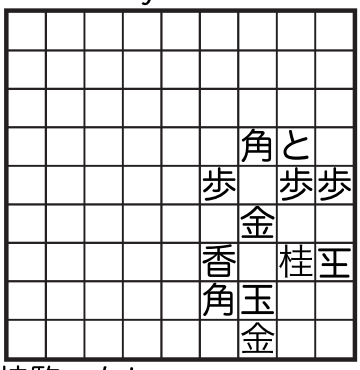
この作品は、先手実戦初形での詰上がりという奇想を明快な出題文(推理将棋ではこれも作品の構成要素!)で実現している。

手順はシンプルだがその中に13歩生が光る。

今後、推理将棋やプルーフ・ゲームが伝統詰将棋、(狭義の)フェアリーに続く第３のジャンルとしてどのように発展していくのか、注目したい。

⑤　　雲海　(version)

Web Fairy Paradaise 13号　2009



持駒　なし

ばか自殺詰26手

28金、16玉、17金、同玉、
39角、28飛、同角、16玉、
26金、同玉、96飛、86桂、
同飛、76飛、17角、同玉、
29桂、26玉、76飛、66角、
同飛、56桂、46飛、36桂、
48角、同桂右成まで26手

全体として古典的と言える手順構成だが、11手目飛車の最遠打が目を引く。

９筋という位置(質)ではなく、合駒を稼ぐためにその遠さ(量)が必要。

この、いわば量的意味づけの遠打は比較的作例が少ない。

ちなみに本作は握り詰という条件下での創作である。

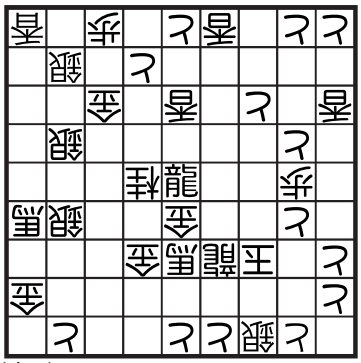
金の消去は条件を満たすという側面はあるが、序奏として手順に溶け込んでおり違和感はない。

先鋭な作品ばかりでは疲れる。

こういうオーソドックスなフェアリーがもっとあっていい。

⑥　　たくぼん

詰将棋パラダイス　2009.6

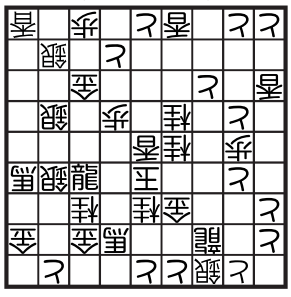


持駒　なし

取禁ばか詰61手

46龍、38玉、36龍、37龍、
27龍、48玉、28龍、38龍、
37龍、58玉、47龍、68玉、
48龍、58馬、57龍、77玉、
66龍、78玉、76龍、77桂生、
87龍、68玉、88龍、78金、
79龍、67玉、69龍、68馬、
58龍、66玉、67龍、55玉、
65龍、46玉、35龍、57玉、
37龍、47金、48龍、56玉、
58龍、57桂、67龍、45玉、
65龍、55香、56龍、44玉、
46龍、45桂、35龍、54玉、
34龍、44桂、43龍、65玉、
63龍、64歩、74龍、56玉、
76龍まで61手

（詰上がり図）



2009年も創作、解答、Web Fairy Paradise

の編集と八面六臂の活躍であったたくぼん氏の作品。

攻方は龍１枚。しかもルール上駒が取れないとなれば龍で王手しながら守備駒を移動させて、最後は単騎詰。

詰上がり形も限られているし、あとはどこで詰むか、である。

しかし…。ここからが難しい。

他に有力な詰上がり位置がある中、56での詰みは見えない。

出題時正解者はフェアリー解答王の市村氏ただ １人。

「正解者なし」は作品の勲章である。しかし、作者にとっては「正解者１名」の方がうれしいのではないか。

「第一感は81玉。これから、79玉、49玉、…と模索の長い旅が始まる。

81玉から始まって、全部で12箇所を検討し、ようやく、61手解に辿り着きました。

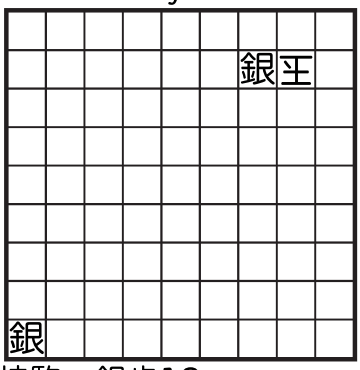
途中で何度か息切れしましたが、担当の励ましのコメントのお陰で最後まで完走できました。感謝。」(市村道生)

作品をはさんでの作者と解答者の幸福な出会い。

繰り返し解答者の役割の重要性を説いて来られたたくぼん氏にとって、本作は記憶に残る作品となっただろう。

⑦　　神無七郎

Onsite Fairy Mate 143　2009.1.11



持駒　銀歩18

強欲ばか詰85手

強欲ルールは淡泊な手順になり易い、と従来は見られていた。すぐ「同X」と応じるし、合駒はすぐに取るし、手順が単純になるのはやむを得ない、と。

しかし、小駒を主体に、駒取りの手を２つ以上用意して選択の余地を作る、という手法が発見され、複雑で粘りある手順が実現した。

たくぼん氏と神無七郎氏の功績である。

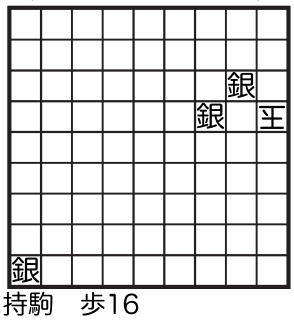
作者は2009年にこのルールで多くの好作を発表している。その代表としてこの作品を選んだ。

(他の作品もOnsite　Fairy　MateやWeb Fairy　Paradiseのサイトで公開されている。是非ご覧いただきたい。)

手順解説は途中図を交えながら行う。

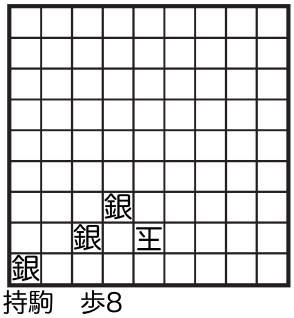
23銀打、13玉、14歩、24玉、
25歩、同 玉、34銀生、14玉、
23銀引生、

(9手目 23銀引生まで)



持駒　歩16

(41手目 67銀引まで)



持駒　歩8

24玉、25歩、35玉、36歩、
同 玉、45銀、25玉、34銀引生、
35玉、36歩、46玉、47歩、
同 玉、56銀、36玉、45銀引、
46玉、47歩、57玉、58歩、
同 玉、67銀、47玉、56銀引、
57玉、58歩、68玉、69歩、
同 玉、78銀、58玉、67銀引、

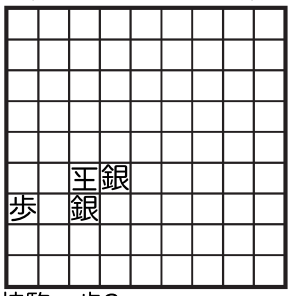
(10手目～)　歩を使いながら２枚銀で玉を斜めに追う規則正しい趣向手順。

57玉、66銀、同 玉、67歩、
76玉、77歩、86玉、87歩、
75玉、76歩、同 玉、77銀、

87玉、88銀上、96玉、97歩、
85玉、86歩、75玉、66銀、
86玉、77銀引、75玉、76歩、
65玉、66歩、64玉、65歩、
同 玉、66銀、76玉、77銀上、

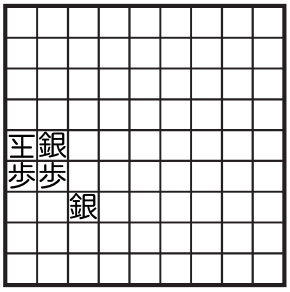
(42手目～)　趣向終了後の収束が難解、そして本作の見所である。
　まず57玉、66銀、同玉！と主役の銀を１枚捨ててしまう。
　これで玉を背後からでなく前から銀で追うことができるようになる。
　以下、玉をコントロールするために歩を置いたり(他の駒を取らせないように)消去したり(取らせないように)する手順が続く。
　特に45手目からの手順に注目したい。67、77、87と歩を連打する。これは53手目77銀に87玉と歩の方を取らせるためだ。
　同時に発生した67歩、77歩は消去する。
　73手目の局面、67歩を消去した効果で87玉が可能になっている。

（73手目 77銀上まで）



持駒　歩2

（詰上がり図）

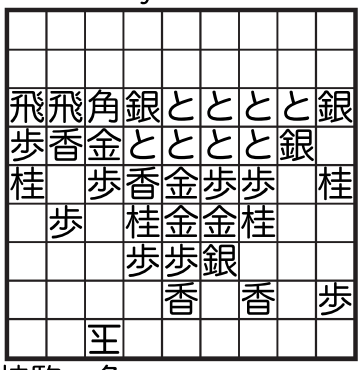


85玉、86歩、74玉、75歩、
64玉、65銀、75玉、76銀引、
84玉、85銀、95玉、96歩
まで85手

　ようやく詰み形が見えてくる。
　長い収束であったが、独立した作品と見ることができるほど、味わい深い手順である。

　最後に作者の言葉を。
　フェアリーに関心の薄い方も「ミクロコスモス」の作者の言葉として読んでいただきたい。
　「ちなみに作る方は、”創作は執念”としておきましょう。現在では機械検討が利用できるので、棋力が（あった方が良いですが）全てではありません。”きっとこれより良い図があるはず”という信念を持ち続けられるかどうかが重要だと思います。」

⑧　神無七郎　(version)
Web Fairy Paradise 13号　2009



持駒　角
ばか詰219手

　単玉ばか詰の無防備図式。従来の最長手数を大幅に更新している。
　だが単なる記録作ではない。ほぼ囲いだけの配置で手順は巧妙を極める。

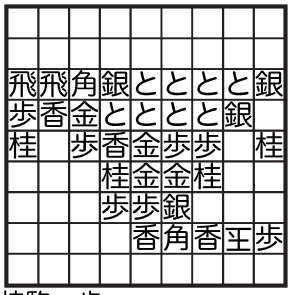
　長手数のメカニズムは持駒増幅である。
　手順中29歩～39角(カギ括弧で示す)がそれで、歩２枚を使って３枚を獲得、差し引き歩を１枚増やす。
　この手順は先手・後手ともに持駒に歩が２枚以上あるときに可能。

　前題と同様の解説方式を取る。

97角、88歩、同 角、68玉、
79角、77玉、88角、86玉、
97角、77玉、88角、68玉、
79角、59玉、68角、48玉、
59角、39玉、48角、28玉、

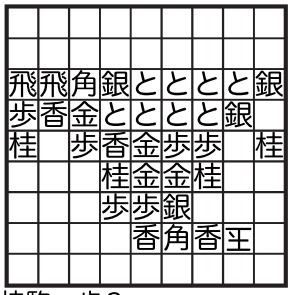
　歩合を稼ぎ、さらに86歩を消去して玉方持駒を歩２枚にしてから右辺に。

（20手目28玉まで）



持駒　歩

（44手目28玉まで）



持駒　歩2

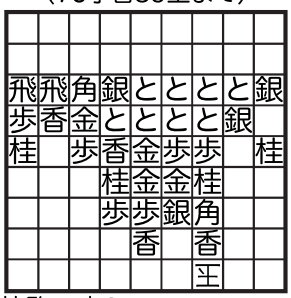
39角、27玉、28歩、26玉、
48角、37歩、27歩、25玉、
26歩、16玉、17歩、同 玉、
39角、28歩、同 角、26玉、
37角、17玉、26角、28玉、
37角、39玉、48角、28玉、

(21手目～)　まず増幅手順の一部を行う(18歩があるため)。持駒歩２枚に。

「29歩、17玉、39角、28歩、
18歩、27玉、28歩、26玉、
48角、37歩、27歩、25玉、
26歩、16玉、17歩、同 玉、
39角、28歩、同 角、26玉、
37角、17玉、26角、28玉、
37角、39玉」

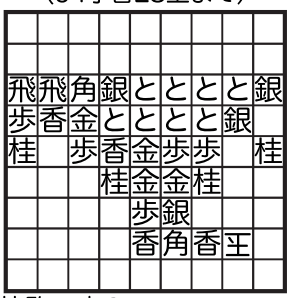
(45手目～)　持駒増幅１回目。持駒歩３枚に。

（70手目39玉まで）



持駒　歩3

（94手目28玉まで）



持駒　歩2

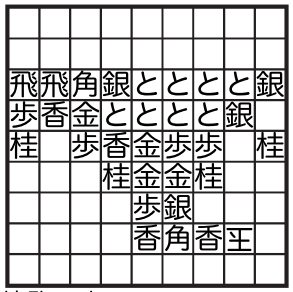
28角、48玉、39角、59玉、
48角、68玉、59角、79玉、
68角、88玉、79角、77玉、
88角、67玉、68歩、同 玉、
79角、59玉、68角、48玉、
59角、39玉、48角、28玉、

(71手目～)　左辺に戻って１歩消費して67歩を消去(84～86手目)し、後手持駒を増やす。

「29歩、17玉、39角、28歩、
18歩、27玉、28歩、26玉、
48角、37歩、27歩、25玉、
26歩、16玉、17歩、同 玉、
39角、28歩、同 角、26玉、
37角、17玉、26角、28玉、
37角、39玉」48角、28玉、

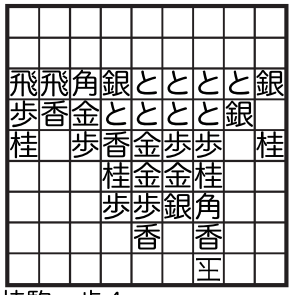
(95手目～)　右辺に戻って持駒増幅。持駒歩３枚に。

（122手目28玉まで）



持駒　歩3

（148手目39玉まで）



持駒　歩4

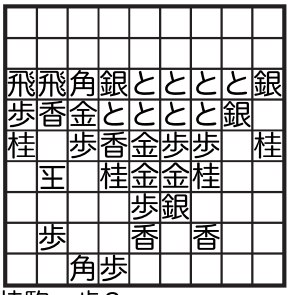
「29歩、17玉、39角、28歩、
18歩、27玉、28歩、26玉、
48角、37歩、27歩、25玉、
26歩、16玉、17歩、同 玉、
39角、28歩、同 角、26玉、
37角、17玉、26角、28玉、
37角、39玉」

(123手目～)　67歩消去の効果で可能となった２サイクル目の持駒増幅。持駒歩４枚に。

28角、48玉、39角、59玉、
48角、68玉、69歩、77玉、
59角、68歩、同 角、88玉、
79角、87玉、88歩、86玉、

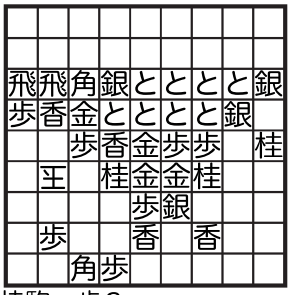
(149手目～)　左辺に戻って収束手順に入る。以降右辺に戻らないことを見越して、詰上がりに必要な69歩を打っておく。

（164手目86玉まで）



持駒　歩3

（182手目86玉まで）



持駒　歩2

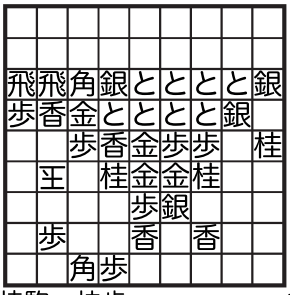
87歩、95玉、68角、77桂、
同 角、96玉、88桂、97玉、
86角、88玉、77角、79玉、
68角、88玉、79角、87玉、
88歩、86玉、

(165手目～)　桂を取らせて、桂をやりとりできるようにする。
　9筋に歩が打てないため桂を使用。

68角、77桂、同 角、97玉、
86角、88玉、77角、79玉、
68角、88玉、79角、87玉、
88歩、86玉、

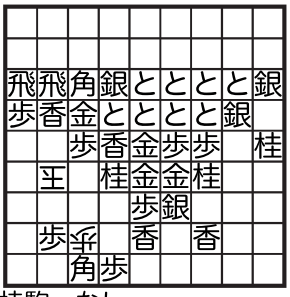
(183手目～)　歩を桂に換える。

（182手目86玉まで）



持駒　桂歩

（206手目78同歩生まで）



持駒　なし

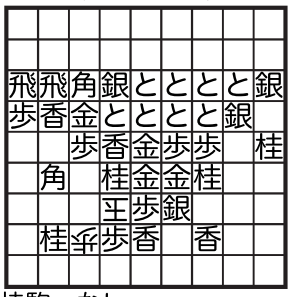
68角、77歩、87歩、97玉、
79角、87玉、88歩、86玉、
78桂、同歩生、

(197手目～)　77歩合をさせて78桂、同歩生と78を塞いでおく。

68角、77桂、同 角、97玉、
86角、88玉、97角、77玉、
86角、76玉、88桂、67玉、
68歩まで219手

(207手目～)　以下88桂～68歩突で詰み。

（詰上がり図）



持駒　なし

　持駒増幅は古くからあるばか詰長編のメカニズムであるが、その可能性を再認識させる作品。
　そして、この厳しい条件で手順の完全限定には驚かざるを得ない。

　以上、2009年のフェアリーから選んでみた。
　8作品は作品のタイプも作家も新旧混在したラインナップになった。
　未来の展望と歴史の厚みの両方に開かれたフェアリーの現在、その素描を提示できたとすれば幸いである。

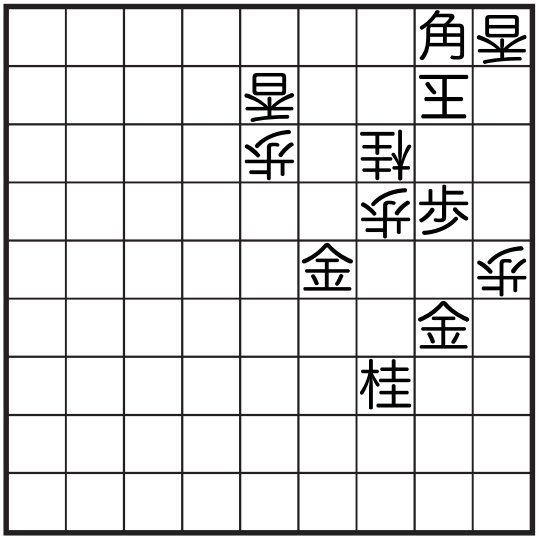
第2部

ロング・インタビュー

巨椋鴻之介
森田拓也

巨椋鴻之介の《好きな8局》

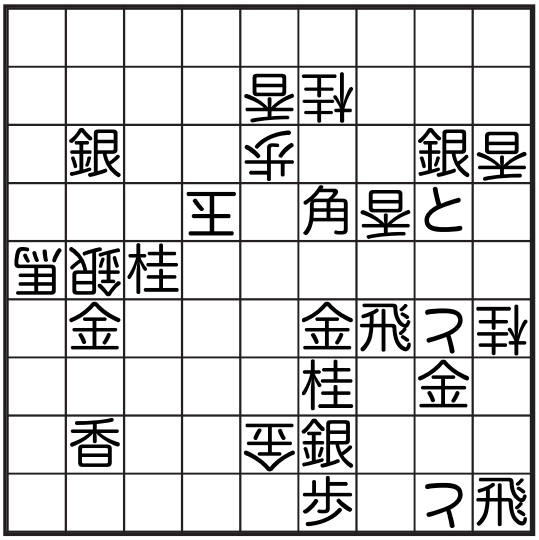
①　古作物　「死刑の宣告」



持駒　金桂桂歩

②　　小川悦勇　「風車」

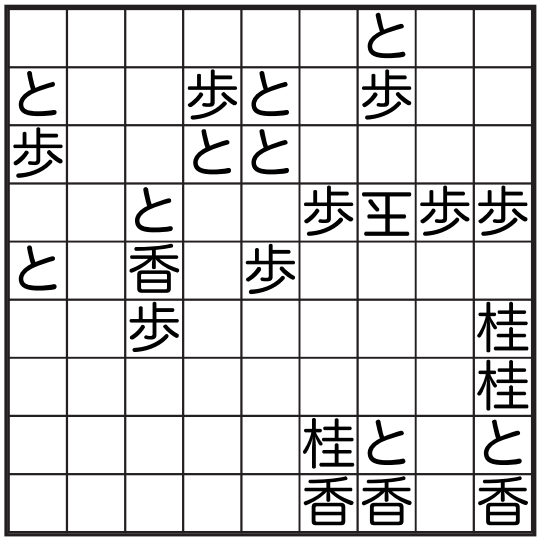
風ぐるま　1954.1



持駒　なし

③　　服部秋生　「砂丘」

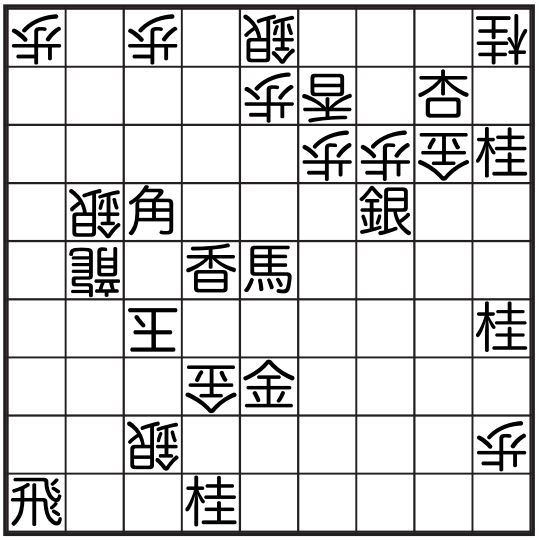
詰将棋パラダイス　1957.10



持駒　歩

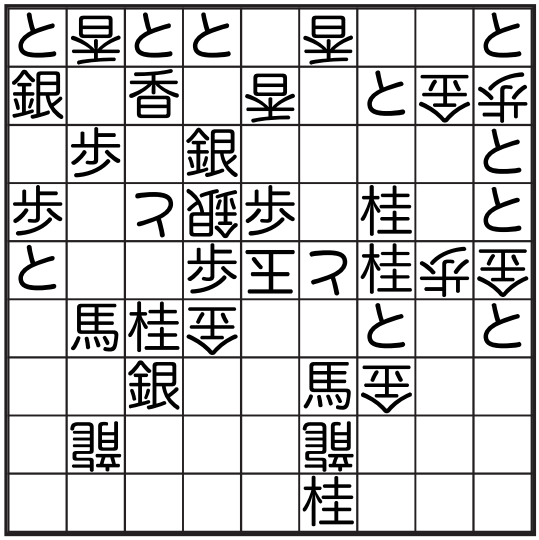
④　　駒場和男　「地雷原」

近代将棋　1979.1



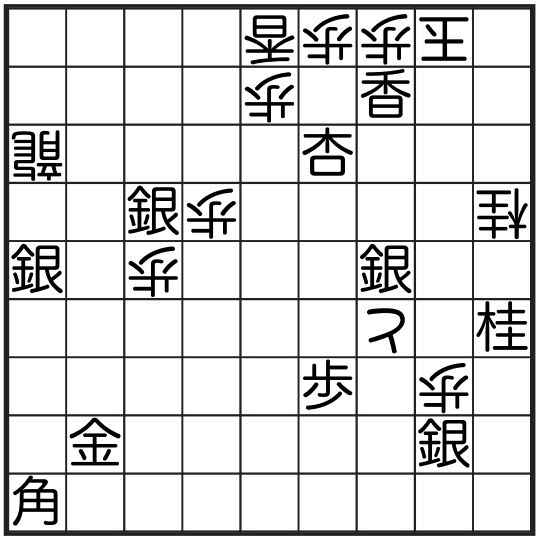
持駒　なし

⑤　添川公司　「約束の地」
詰将棋パラダイス　1995.5



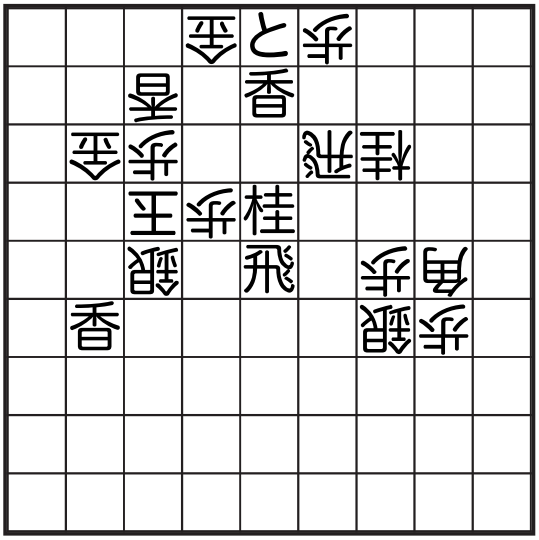
持駒　なし

⑥　　橋本　哲
詰将棋パラダイス　1980.2



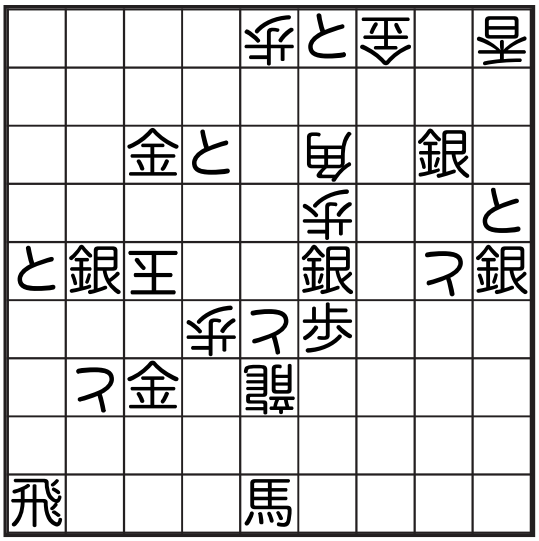
持駒　角歩10

⑦上田吉一「モザイク」(version)
詰将棋パラダイス　1975.3



持駒　銀銀桂香歩8

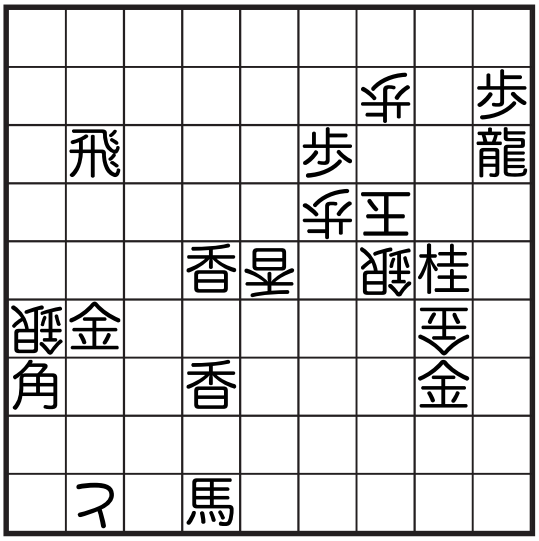
⑧山田修司「禁じられた遊び」
近代将棋　1972.3



持駒　桂桂桂桂

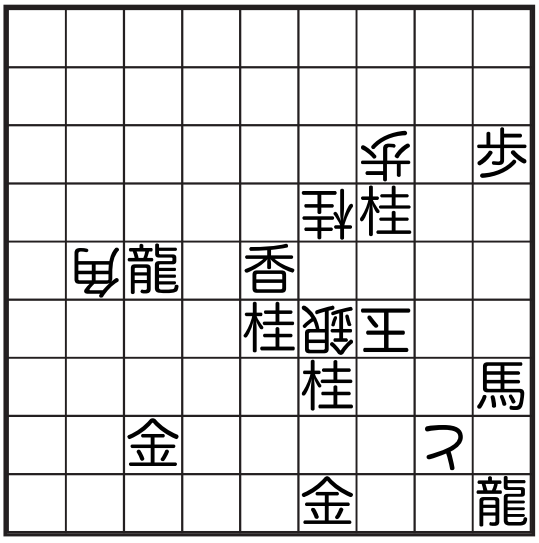
橋本哲が選んだ　巨椋鴻之介ベスト8局

①　　巨椋鴻之介　「雁」
近代将棋　1972.12



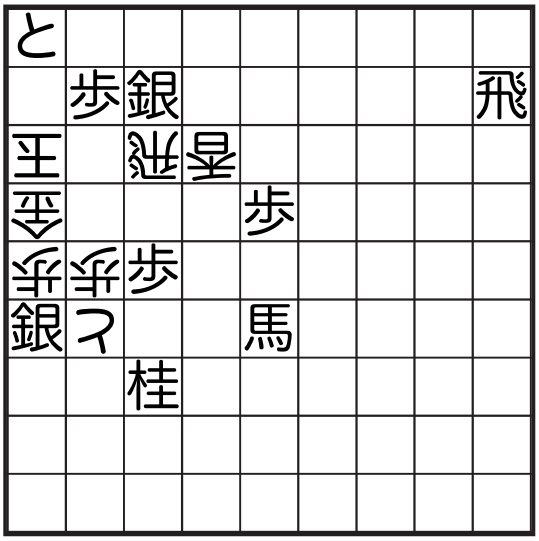
持駒　金香歩

②　　巨椋鴻之介
近代将棋　1994.12



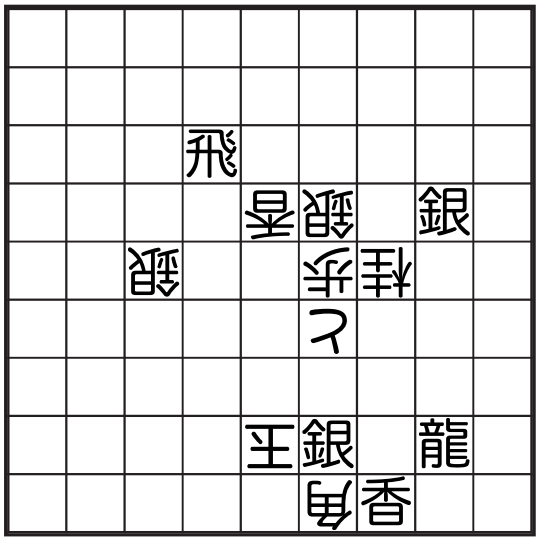
持駒　銀歩

③　巨椋鴻之介「ゆうだち」
詰将棋パラダイス　1957.7



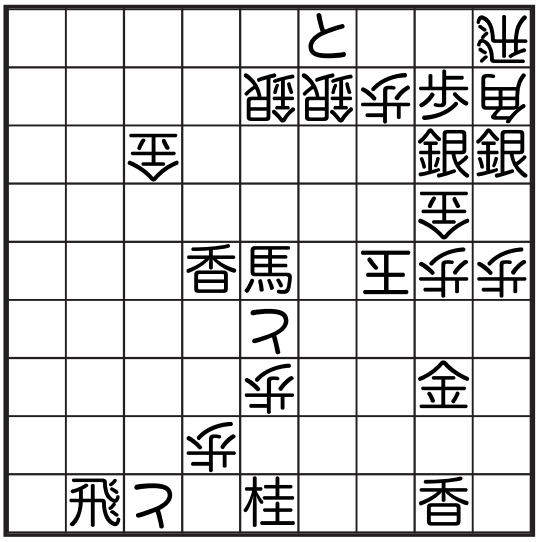
持駒　桂桂

④　　巨椋鴻之介
近代将棋　1960.12



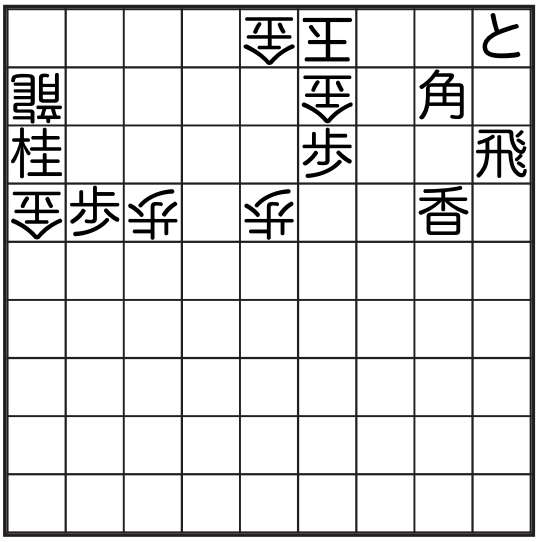
持駒　桂３歩４

⑤　巨椋鴻之介　「流星群」
近代将棋　1975.6



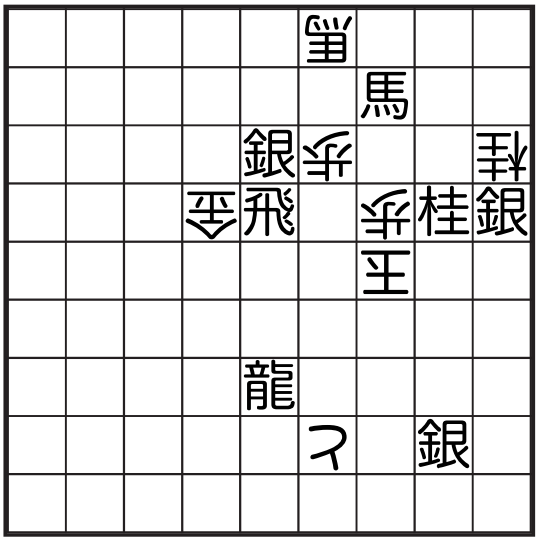
持駒　歩３

⑦　巨椋鴻之介　「兎狩り」
詰将棋パラダイス　1962.11



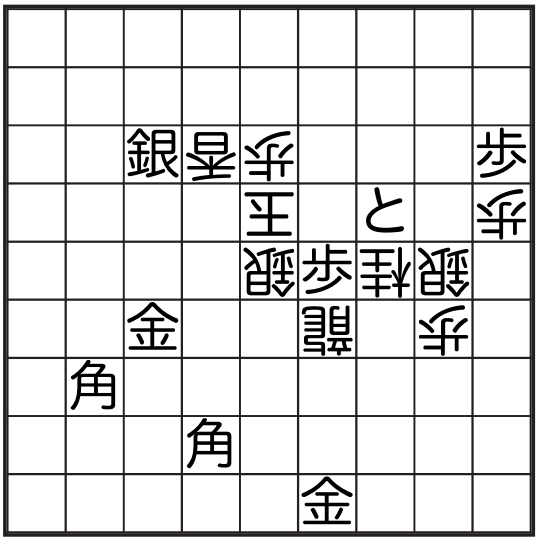
持駒　銀４

⑥　巨椋鴻之介
近代将棋　1959.2



持駒　香

⑧　巨椋鴻之介
近代将棋　1995.5

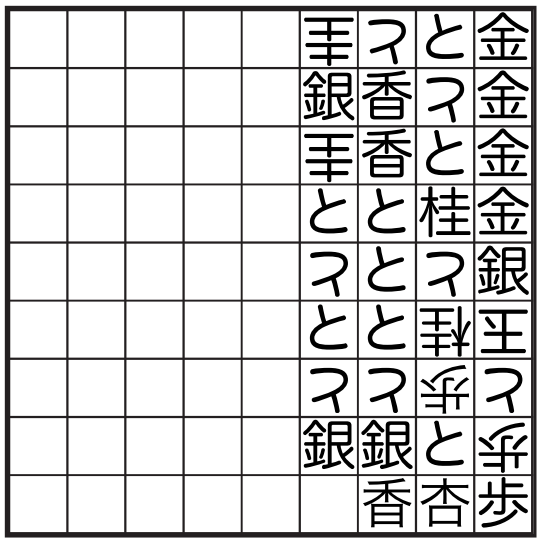


持駒　飛銀

森田拓也の《好きな4局》

①　伊藤　正「月蝕」

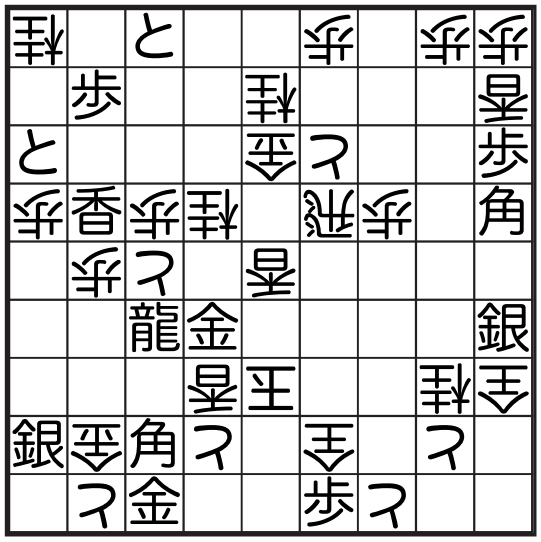
近代将棋　1981.9



持駒　なし

②　奥薗幸雄「新扇詰」

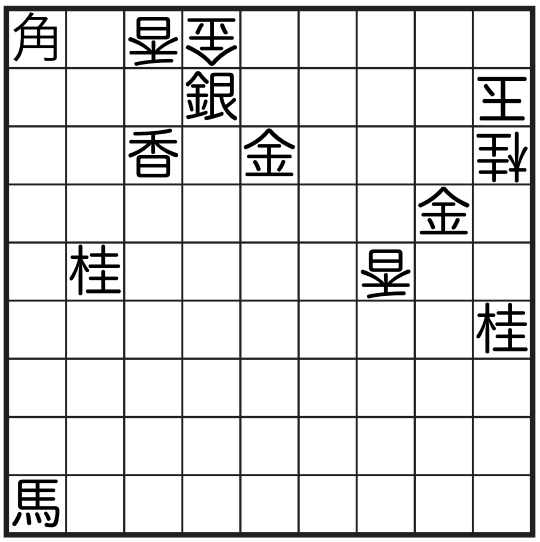
近代将棋　1955.9



持駒　なし

③　黒川一郎「天馬」

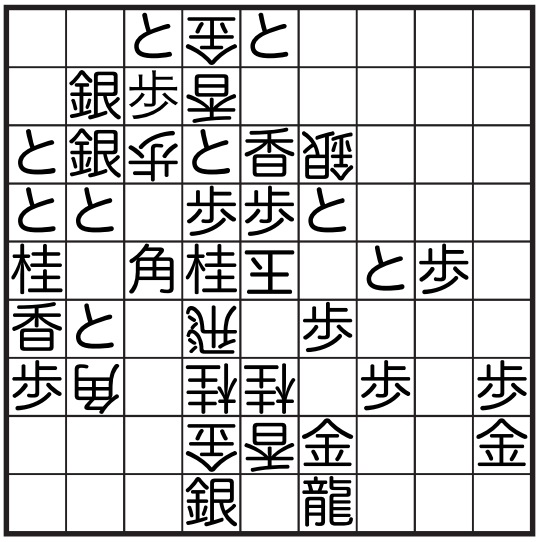
詰将棋パラダイス　1968.4



持駒　歩18

④　駒場和男「父帰る」

詰将棋パラダイス　1970.2



持駒　なし

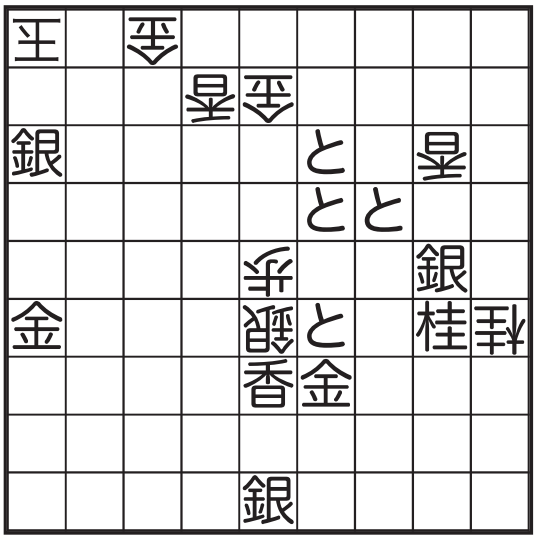


昭和の詰将棋史に大きな足跡を残した巨椋鴻之介さん



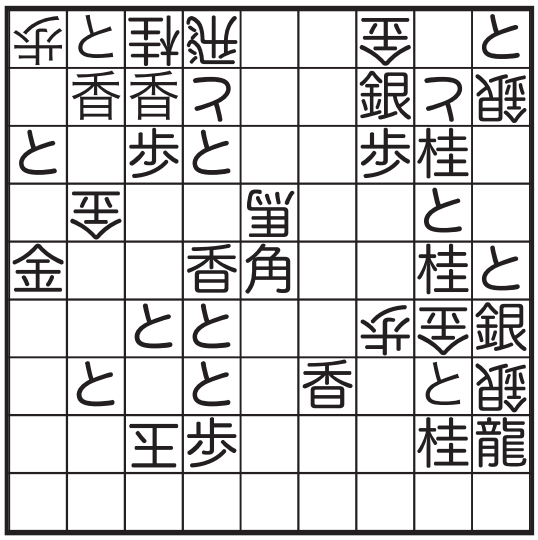
詰パラを手に取りながら伊藤正さんと談笑する森田拓也さん（左）

森田拓也「北斗」（修正図）



持駒　桂香

森田拓也「長城」（修正図）



持駒　桂香

あの「北斗」と「長城」がよみがえった！　詳しくは85ページに。

巨椋鴻之介インタビュー

聞き手：小林敏樹、角建逸、橋本哲、若島正

若島：まず、どういう具合にこの『禁じられた遊び』という作品集ができたか、その経緯からお話しいただければありがたいのですが。

巨椋：普通の作品集は詰将棋をバラバラに集めたものだけれども、そうじゃなくて、通読できるもの、あるいは通読する気を起こさせるものを作ろうという気持ちが最初にありましたね。趣向は趣向、構想は構想と、同じ種類の作品を並べるというのもバラバラにならない一つの方法だけれども、そればかりでなく、自分の個性と時代の背景から一種の歴史を説き起こして、それらすべてを個々の作品の中で合体できないかと思いました。個性から出発して作品がどっちの方に行ったかを書くことにより、個性と作品が光を投げ合って、一方が他方の例証になるようにできないか、ということをぼんやり考えたのです。バラバラでない「ひと続きの本」を、という訳ですね。

作品の数についてですが、100局ということにはあまりこだわらなかった。というのは、全体で160局くらいのもので、それも前期のものが多い。そこから100採るとだいぶ質が落ちるだろうと。一時は自分の作品を70〜80にして、残り20局位をヒト様の作品を採ることも考えたんです。人の作品を解説しても、僕の解説ならば僕の味が出るはずなんで……。しかし、それはすごいスペースと労力が要ることで、結局立ち消えになってしまって、結局いくつでもいいやと、成り行きまかせで78局になったのです。

それから、作品集を出すとなると、王様の位置が全て違うとか、そういう面を考える方があるようですが、それも考えなかったですね。最終的に出発点となったのは、「通読できるような本を」ということだったんです。

それからもう一つ、こういうことは初めからありました。一作一作の解説、それも具体的な手順を追った部分の解説をできるだけ詳しくしようと思ったのです。これは僕の持論なんだが、どうも中・長編の解説は少しはしょりすぎという感じがあって、十分に書いていない。僕の考えでは、詰将棋の解説は解く人の頭の中に展開するものを忠実になぞっていかなければいけないだろうと思う。どうも、それをやっているのはあまりなくて、手順の部分は適当にぼかして、評論風の解説や印象批評へすぐ飛び移ったり、変化を省いてしまったりしていて、それはいけないと。ともかく本書を書くにあたってはかなりのスペースを充てて入念な解説を書こうというつもりがありました。

若島：私が今回の作品集を拝見して思ったこともそれでした。巨椋さんは第１期の頃から作品集をまとめたいと考えておられましたよね？　あの頃は楽観的だったと本の中にも書いてありました。

巨椋：それはぼんやり、いつか本ができるかなあとは考えてました。まあたしかに100局集めるつもりではいたんです。

若島：実際、第１期は作品の数がかなりあって、この調子で行けば作品集が早くできるのではないかと思っておられたと思います。

一手一手の解説を入念に書くというのは、たぶん巨椋さんが第２期以降に作品全体の厚みとかを考えるようになってきているからなんです。巨椋さんの場合は、鍵となる伏線の前に隠蔽があったり、収束もちゃんとやって……とすごい欲張りでしょう。

巨椋：全部が支え合っているのがいいと思っていますからね、僕は。

若島：ですから、一手一手の解説が必要になる作風にだんだん変わってきているのだと思うのですね。

巨椋：たしかにそうかもしれない。第１期の時は、そのうち本を作りたいとは思っていたけれど、どういう本ということまでは考えていなかったからな。

若島：巨椋さんの作品集を丹念に並べて味わうには、どうしても一手一手という話になるんですね。それが今回作品集を拝見して、読者として一番ありがたい部分でした。そういうことをした作品集は今までに例が少なくて、高木秀次さんの

作品集『千早城』なんかだと、解説は2、3行で終わっていて、ただ「これが妙手です」と書いてあるだけで、何がどうなっているのか普通の人は分からない。とても読者泣かせの本で、相当自分で調べなければついていけないんです。

巨椋さんの場合は全部丹念に解説してあってありがたい。それも一局だけの話ではなくて、作品集全体のつながりで、こういうことを考えて次にこういうことをやろうと思ったという流れがありますから。そういう意味では、初めての「読める」作品集だと思います。

ところで、巨椋さんは解答者をどう意識されていましたか？　つまり、中期・後期の作品は、巨椋さんと同じように一手一手読むことが要求されるので、解ければ作者の考えていたことがほぼわかる、という構成になっているように思うのですが。

巨椋：自分が作るにあたって経験したことを、解答者も追体験してほしい、とは考えていましたね。

若島：趣向にしろ、構想にしろ、発見する喜びを味わってもらうために、最初の所で隠蔽するという形を取ろうと考えたのですか？

巨椋：そうです。ただし、隠蔽という考えが出てきたのは第２期ですね。最初はそれどころではなかった。そう、隠蔽によって発見の効果が出てある種の感動を呼ぶ、と考えたのはかなり後の話だな。

若島：解答者というのは手を読まされて苦労して解いた方が嬉しいということがあるので、難しいものが評価が高くなる傾向がありますからね。

ところで、先ほどお話しされた、解説をどう書くかについて、もう少しくわしくうかがいたいのですが。

巨椋：ですから、入念な解説をしたいと思ったわけですよ。中・長編の解説が印象批評ばかりで、みんなごまかしているという感じがするものだから。

若島：それは普通の場合だとほとんど印象批評になっていて、丁寧な分析ができていないということですね。

巨椋：そうなんですよ。主な部分だけを書けばいいという考えがあるかもしれないけれど、僕はそうは思わない。詰将棋は全部が支えあっているからこそある種の効果が出てくるのであって、ここがこういう印象を与えるのは直前にこういうことが起こっているからだということはしょっちゅうあるわけね。だから、主眼部だけを取り出してしまって何か言うのはよくないと思いますね。

若島：詰将棋とチェス・プロブレムを比較してみたいんですが、チェス・プロブレムは完全なテーマ主義で、テーマだけ描ければいいという作り方なんです。逆に言うと、テーマがないチェス・プロブレムは最初から相手にされない。

これに対して、詰将棋はテーマ主義ではまったくなくて、テーマがない詰将棋がほとんどです。たとえば「捌き」なんてテーマでも何でもない。むこうで言えばテーマ主義というのは、「打歩詰のこのテーマでこういう手筋が……」みたいなものなんですが。おそらく、詰将棋のおもしろさのかなり大きな部分は、チェス・プロブレムにはない部分、つまりテーマ主義でない部分にあって、たとえば全体とかなんですね。

チェス・プロブレムでは、テーマを表現するには短いほうがいいという考え方なんです。たとえば詰将棋で7手でやれるものだったら、7手でやるべきで、それを延ばして11手にしたり23手にするのは意味がない。これがチェス・プロブレムの思想なんです。

詰将棋では逆にテーマ主義以外のいろんな要素を含んでいて、それがイモーションに関係しているのではないかと思っています。詰将棋を解いて、あるいは鑑賞して、感動するのはそういう部分ではないか。

チェス・プロブレムのいろいろある分野の中で、まだ詰将棋に近いのは、橋本哲さんがやっているプルーフ・ゲームではないかなと思っています。

橋本：たしかに、ものすごく近いかなと思いますね、感覚としては。言われたテーマをただやる、というのとは違う作りができる領域です。

若島：巨椋さんが先ほど言われたように、テーマがどうという話とは別に、作品全体をどう作るかというのは詰将棋的だなと。詰将棋の特性はそういうものではないかなと思ったりするんですね。

角：解説についてですが、昔はかなりの分量を使って解説していましたが、今は短評で埋めるのが多いようです。近将がなくなって、森田正司さんみたいに丁寧に書く人がいなくなったということもあるでしょうが。ツボを全部押さえなければいけないんだけれど、全部押さえきらずに、一番の急所だけ言って後は短評に代理で言わせて終了というのが多い気はしますね。

若島：巨椋さんの本に引き戻して話をすると、巨椋さんが第１期に担当の渡辺憲司さんからいろいろ教えてもらったという話が書いてありましたね。

角：昔はかなり解説が長くて、褒めたたえたり頑張れとはげましたり、渡辺さんや土屋健さんのように、後で抜粋を読んでも引き込まれるようなものが多かったですね。

巨椋：パラの初期には、渡辺憲司さんや土屋健さんみたいに、情熱がこもった解説がたしかにありました。それからだいぶ後になるが、山田修司さんの「大学」も別の意味でよかった。ずるく飛ばしていないんですよ。大事なところはみんな追っかけて書いている。作品を全体的に記述しようという気持ちがあった。そういうものが今はないんじゃないかなあ。はしょり過ぎで、バラバラの短評を入れてお茶を濁すという感じですね。今はどのくらいの年齢の人が書いていますかねえ。土屋さんだって渡辺さんだってそんなに年ではなかったと思いますよ。

若島：僕は詰パラを読み出したのは中学生の頃ですが、すぐにバックナンバーを読んで北原・巨椋時代に接したのです。あの頃の両横綱はものすごく年の人だと思い込んでいたんですよ。ところが、実は巨椋さんは大学院生だったわけですね。大家なのでおじいさんだとばかり思っていましたが、実は皆さん若かった。昔の人だから文章がうまいというのもあるんでしょうが、すごい年上の人だとずっと思っていました。

　第１期は作品の量も多くて、初入選が昭和29年。そのあとすぐに30年代前半にはもう一流作家になっているわけで、すごい勢いでやっておられたんでしょうが、その頃は大学生あるいは大学院生だったのですね？

巨椋：初入選は大学に入ったときです。

若島：その前は旧パラとかの読者だったのですね。それは高校生くらいからですか？

巨椋：そう、高校のときからですね。

　作品集の話に戻るとして、もう一つやりたいと思ったのは、「分析的」にすることでした。解説の一手一手の部分も評論風の部分も含めて、できるだけ分析的な言葉でやりたかった。

　Ａの部分でものを言う時に、そこがきちんと定義された術語で書いてあると、Ｂを論じた時に応用が利くことになる。そういう風にきちんと定義された言葉でやりたかった。できるかぎりそうしたいと思いました。

　でも、やってみると詰将棋の言葉は曖昧なところが多くてね。結局、定義しようとしてもできないのね。たとえば「構想作」とは何かを考えると、もうわからないよ。僕の中では、作るときに構想に従って作った作という意味に取ってますからそう使いましたが、それは普通の構想作の中の一部しか構想作と言っていないことになります。そこはいくらでも定義の仕方がある。角さんの『詰将棋探検隊』で構想作のところを読んだけれど、大したことは書いてなかったですね。

角：どのカテゴリーを構想作というかは難しいですから。

巨椋：実例を見て何となく納得するということにしかなっていないですからね。ですから、術語を整備していくという仕事は大変な労力がいることで、一人ではとてもできないな。

若島：野崎昭弘さんという数学者が『ロジカルな将棋入門』という本を出していて、これは数学者らしく、将棋の用語をすべて定義したうえで使う

という原則に従って書いた初心者向きの入門書なんです。同じことを詰将棋でやろうとしたら、大変ですよね。

巨椋：大変で、十分になどとてもできなかった。しかし必要な場合もあったので、術語を自分で作りました。「フィギュール」とか「フォルム」とか「遅らせ」とか「転調」とか。同じ話を二ヶ所でするんだったら同じ言い方をして、両方で補い合うようにしたいということですね。

　若島さんは毎日新聞に書いて下さった書評の中で、この本が「批評的」だと言っておられましたが、みなさんはそれが特徴になってると思われますか？

橋本：そうですね。そこが一番おもしろいところだと思いましたけど。

巨椋：自分でうまくいったとは思っていないけれど、かなり努力したことの一つではあるんだ。

若島：将棋を語る言葉も少ないけれど、詰将棋について語る言葉も少ないのですね。図面や手順だけ見れば一応わかった気になるので、詰将棋について語る言葉は圧倒的に不足していると思うんです。

　『禁じられた遊び』の最後のほうで、「フォルムがないのがフォルムだ」みたいに書いてあるのは、矛盾しているようでも、曰く言いがたいものをどうやって言おうかとしているのかがおもしろいところでした。

角：あのように本書では言葉を使って説明されていて、そこが一番巨椋さんにとって詰将棋の核になっているという気がします。

若島：駒場和男さんの『夢まぼろし百番』の場合には、駒場さんの解説を読むとかえってわからなくなるときもあって、そこがおもしろいところですね。同じ語るにしても、巨椋さんが自作について語るのとはちょうど反対で。

巨椋：それはだいぶ性質が違うからなあ。

角：客観性と主観性の違いですね。

若島：それはそれで、いかにも駒場さんらしくていいなあと。

角：巨椋さんの場合、巨椋さんが文学者として、辞典の編纂とか、たえず言葉に携わるお仕事をされてきた、その意識が本に現われたのではないでしょうか。

巨椋：それはまあ教師業だからねえ。

若島：わたしは批評的と書いたのですが、巨椋さんは自分がやっていることに「意識的」ということでもあるのですね。

巨椋：その面で残念だったのは、索引を付けられなかったことです。

若島：項目のインデックスですか。

巨椋：そう。入っていれば分析的な使い方ができたので、できれば入れたかったですね。

　あと時間がかかったのは、歴史と時代背景と作風の形成という面です。材料はパラと自分のノートから取りました。真っ黒に見えるほど活字の詰った古いパラを何とかスキャンするのに骨が折れました。これは性格的なことだと思いますが、投稿作には「作者のことば」を洩れなく付けているんですね。これでずいぶん助かりました。ですから、古い話をしてますが、記憶だけではなく事実を言っているんです、この本は。

　最後にだいぶ出来てから、第１部の「原点と習作」を置くという案を思いついたときに、この本は書けるなという自信ができた。第１部を置くと、自分の個性とか歴史などという、作品以外の書きたいと思っていることを書く手がかりができるんです。これが第一の意味。

　二番目は、第１部を置くことによって分析的な書き方のベースができた点。第１部では、初めＡについて話し、次いでＡに似ているＡ’の話をする時に共通する概念が出てくるでしょう。たとえば、クレシェンドについて話をすると、短篇では「パンパンパーン」という形ですが、これが後の長篇では「バン」があって後で大きな「バーン」が出てくるのがよろしいという「上り調子の美学」という概念と結びつきます。このように、第１部を

置くことにより、本全体の中での「連絡」の具合がよくなりました。

若島：今回の作品集でかなりたくさんの作品に命名されましたね。

巨椋：名前があった方が言う時に便利なので、出来るかぎり付けようと。50手以上には全部名前がついたのではなかったかな。

若島：巨椋さんは主知的、つまり理知的な作家と評されることが多いと思うのですが、命名の付け方には日本的情緒があるようで、意外な感じがありました。

巨椋：題名についてはあまり考えていなくて、黒川さんの真似をしています。題名というのはこんなものと思っていましたから。

若島：巨椋鴻之介というペンネームの由来をお聞きしたいのですが。

巨椋：巨椋池というのが京都にあって、そこにコウノトリがいたということにしたんです。それだけの話。僕がペンネームを付けたのは昭和29年前後ですが、池そのものは昭和15年くらいになくなっていたのね。

若島：小川三四郎というペンネームはわかりやすいですね。

巨椋：漱石ですから。

小林：逆に本名を使わないという理由は何かあったのでしょうか？

巨椋：別になかったんですけれど、どうせならうんと気取ってやれと思いましてね。

若島：確かに佐々木明という名前ですと同一人物がいそうですから。

角：巨椋鴻之介なら日本に一人ですね。

橋本：私は近代将棋で初めて巨椋鴻之介という名前を見つけたという記憶があるんですが、その頃の自分にとって詰将棋は難しくて神秘的な世界だったんですね。しかも、それで作家の名前がミステリアスだったのですごいドキドキした感じがありましたね。いにしえの魔物ではないですが……。

若島：話は変わりますが、昭和30年代前半に、北原さんたちとずっと付き合いがあったのですか？
　北原さんが煙詰のネタを持ってきて「88飛不成」とか。

巨椋：一月に一回か二月に一回だったかなあ。

若島：それは結構濃厚ですね。

巨椋：そういう時期があったということです。他には門脇、小川、黒川、駒場、湯村さんとかですね。

若島：そんなに年齢的には離れていない？

巨椋：黒川さんは別格で、他はほとんど同年齢です。

若島：巨椋さんが初めてフランスに留学された当時は、今と違って大変だったでしょう。大学院生のときにあれほど熱を入れてやった詰将棋を、よくぞ留学で完全に捨てられたなあというのに感心すると同時に、帰ってしばらくしたらウズウズしたというのがおもしろくて、泣ける話だなあと。やはりウズウズしたんですか？

巨椋：しましたね。煙詰のせいで詰将棋が変な方にばかり走っているのが気になってね。他のことをやってみたいと。

若島：アンチテーゼをカマしてやろうとされたのですね。
　このあたりで、好きな作家、好きな作品についてうかがいましょうか。

巨椋：いくつかの場合は本の中で書いてしまっています。

若島：北原義治さんや大井美好さんの話が書いてありますね。北原さんだと合駒で手をつないでいく、あれは自分にはできなくて一種稀有な才能だと書いておられました。

巨椋：そうです。

若島：巨椋さんから見て、北原さんの合駒問題はテーマがなくても手が続くというもので、これはなかなかできないと。

巨椋：あれは特殊な才能だと思うなあ。好きなものの一つですね。

ところでここに、一時期自分で解説して入れようと思った作品のリストがあるんです。それを見ながらいくつか拾ってみましょう。

一つは古典から「死刑の宣告」（①）を採ろうかと思っていました。最初に見たときは感動しましたよ。あとで考えてみると、構成が良いんですね。とくに馬捨てがよくて、ここから本番の始まりという合図をしているのが印象的ですね。

それから小川悦勇さんの「風ぐるま」（②）という生飛追い回し作品。2局あるうちの最初のほう、55角の周りを回るやつです。詰将棋を始めてすぐだったけれど感動しましたね。同じ時期で服部秋生（彰夫）さんの「砂丘」（③）も良かった。盤面「桂香歩と」のみの無防備図式で、やさしいようだが案外難しい。

駒場和男さんからは「地雷原」（④）。作者はご不満かも知れないけれど、氏のもので複雑なのはあまり好きでない。これは素直で、盤をいっぱいに使う技術がすばらしく、見事な出来映えです。

新世代にはいって添川公司さんから一局。僕の好みから言うとたまたま審査をやらされた「約束の地」（⑤）。馬をポンと捨てて終局にはいるのがすばらしく、それまでの手順も品位と香気があって煙詰だということを忘れるほどです。

それから橋本哲さんの「遠角打替え入りの金鋸」（⑥）。あれは名作ですよ。どうしてあんな手順が成立するのか不思議なくらいだ。

そして、上田吉一さんから一局となるとやはり「モザイク」（⑦）かな。これは文句なしの傑作です。

こうして考えてくると、解説が面倒になってきて結局やめちゃったんです。あとは、図巧から一局採るかとか、森田正司さん、酒井克彦さん、若島正さんの中篇を採るかとか、メモに書いてあります。

若島：山田修司さんからは何でしょう。

巨椋：山田さんからは「禁じられた遊び」（⑧）ですね。「幻影」もあるが、私の好みとしては「禁じられた遊び」の方にしたいところです。

角：いま「図巧から一局採るか」と言われましたが、図巧から好きなのを選ぶとするとどれでしょうか？

巨椋：看寿は図巧から一局と書いただけで決めてなかったんだ。あとで考えようと思って。小品のようなものを採ったと思うんだけれど…。

若島：看寿の駒捌きというのは北原さんにかなり影響を与えていると思いました。小品ですか？

迷いますね。

文学で、たとえばトルストイかドストエフスキーのどちらが好きかと言う問いの答え方で、文学の趣味がわかってしまうようなことがあるのですが、それと同じように、看寿か宗看かどちらが好きかというのは、詰将棋作家を分ける物差しになっています。駒場さんなら宗看だって当然ながら言う訳でしょう。実は私も看寿が好きで、並べているだけで気持ちがいいんですね。

角：駒の流れですかね。

若島：それは独特なものがあって、多くの人に影響を与えているんじゃないかと思いますね。

角：なるたけみんな連れて行こうとするじゃないですか、看寿は。宗看は舞台装置はしようがないという感じで置きっ放し。そのかわり、どうだという感じでドーンと見せるわけで。

若島：たまたまですが、巨椋さんが山田さんの「捨て小舟」を引用したページの下に「数学者を目指していた」と書いてあって、私も昔数学者になりたかったので、その気持ちはよくわかるとい

うか共通しているところだなあと思いました。論理が美しく結晶しているみたいな作品が好きなんです。それだけ見ていても幸せになれるというか。フランス文学をやる前に数学が好きだったんですか？

巨椋：夢中だったですね。高等学校入ってから3年位は夢中になってやっていましたね。そう、数学はたしかに詰将棋と関係があるな。

若島：こうして好きな作家を考えるときに、その人と自分を比べて、自分はその作家にないものを作ろうという意識はずっとあったんでしょうか？

巨椋：それは複雑ですね。それもあるし、似たものを作りたいという素直な気持ちもあるし、とてもダメだから別のものという気持ちになることもあるし。

若島：巨椋さんから見て、ご自分と山田修司さんとはどう違いますか？

巨椋：どのジャンルと言わないと比較できないな。趣向作については、僕が第2期になって意識的に趣向作を作るようになった頃には、山田さんは趣向作をやめられていたので、あまり比べられないんだよね。

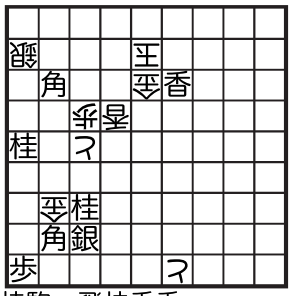
若島：どちらかというと、山田さんは趣向がむき出しのタイプですね。趣向が最初から見えていてそれでもいいと。だいたい簡単な序奏、簡単な収束という作り方なんですね。趣向作に関しては。

巨椋：山田さんは合駒趣向とか、あまり複雑な趣向は作っていないんだよね。

それから構想作の話になりますが、僕にはとうてい及ばなかったと言う他はないですね。いつでもあの人の後を歩いていたと。ときおりあの人の考えないことを考えたかもしれないけれど、それはあまりうまくいかなかったんで。全体を通じて及ばなかったと言う他ないな。共通点はたくさんあります。例外はあるけれど、構想作はあまり長くない方がいいということは一致しているでしょう。それから、理想的には伏線が最初のほうにあって、途中でいろんなことがあって、最後に近いところで大団円が来るという構成も共通していますね。途中の持っていき方の考え方が違うかもしれないけどね。山田さんみたいに途中を簡単に絞っちゃうというのも一つのやり方で、あれは一種の美的センスだと思うんですね。

若島：山田さんの59香、巨椋さんは一つの理想だが自分では作れなかったと書いておられますが、あれもブリッジの部分は軽く流してという作り方ですね。

#1　　山田修司
近代将棋　1969.11



持駒　飛桂香香

巨椋：僕はごたごたしない程度にもう少し詰将棋的な要素を入れたものを作ってみたいと思いました。大したものは作れなかったけれど。

若島：中期・後期の巨椋さんの作品は、解き終わって手数を数えると意外と短い。20手台でも、解いている時は30手から40手くらいのものを解いている感じがする。密度の関係なんですけど。山田さんのは逆で、思ったより手数が長いという感じがする。解いているときの感じはそうですね。

巨椋作品で私の個人的好みを言うと、中篇だとやはり44銀不成の図（→69ページ参照）が好きな作品ですね。奇跡的な作品だと思います。巨椋さんは初手にいきなり伏線が入っているのが不満と言っていますが。

巨椋：あの作品はよくできていると思います。伏線は一般的にそうだという意味で言っているのであって、あれ自体は仕方ない。

若島：あの作品は間延びが一切ない。伏線をせ

ずに普通に行くと25桂合の変化で34飛とする手があるので、44銀は抵抗感があります。34飛がなくなりますから、44銀では詰まないのではないかと思えるんです。でも実は25桂合をされても13銀不成から53飛成があって詰む、というのは奇跡的ですね。

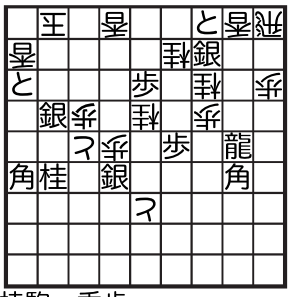
巨椋：うん、恵まれていたという感じはありますね。

若島：構想局では主眼の部分は単線になるというか、本線の他の詰筋はなかなか入らないので、あのような変化がついてくるのは奇跡だと思えて、これが僕の好きな理由ですね。

それから、一手という点で好きなのは58番の67金（→65ページ参照）。巨椋さんも本書の中ではこれだと書いていましたが、あれは一手という点で好きですね。

あと、作品全体として好きなのは香先香歩の第21番「天邪鬼」です。

#2　巨椋鴻之介　「天邪鬼」
詰将棋パラダイス　1957.3



持駒　香歩

今回の作品集では、かなりの量の作品を手直し、推敲されていますね。それはどういうことだったんでしょうか。9手詰だったのを23手詰にしたり。これは今の自分だったらこう作るんだけど、ということだったのでしょうか？

巨椋：それもあるけど、たいていはやっていたら思いついただけのことです。

若島：初期の習作だったら、当時の自分としてそのままにしておくほうが、全体としてはロジカルだという気もしたんですが、やはり巨椋さんは見ているうちに作りたくなるんでしょうね。

巨椋：変化と紛れを、後で原稿を書くときにいると思ったから綿密に書き出す作業をしたんですよ。そのときに、やってると具体的なところに入っていくので思いついちゃうんですね。それで、こうやったほうがいいやって直したものが随分ありますよ。

若島：直すのにかなりの時間がかかっていませんか？

巨椋：かかっていますねえ。この本は時間といったらすごくかかっていますよ。結局78局中30局に手を入れたことになりますから、相当な割合ですね。ちょっと成駒を裏返したようなのも入れての話ですが。

若島：それにしても、すごい集中度だなあという感じがしますね。

巨椋：ええ、これやっている間は夢中だったですね。もう、こればかりでした。原稿を書き始めてからは、一日に2ページ半くらい書いていたかなあ。

若島：こうやって一冊完成して、自己批評してみるといかがですか？　索引という話はありましたが、他にもう少しここはこうしておきたかった、というところはありますか？

巨椋：作品集の準備ができて、書き始めようと思ったところで病気が見つかった。だから急いています。まあ仕方がないので、後悔しないことにしていますが、もっと丁寧に書ければと思うところはありますね。

若島：これを出してしまって、詰将棋はもう十分という感じですか？

巨椋：十分だと言うに近いですね。こうしておしゃべりしているのは楽しいですよ。でも書くために根をつめて毎日やるのはもうちょっと嫌だな。

若島：創作ノートを若い頃からずっと残されてい

ると思いますが、思いついていて実現しなかったアイデアとかはかなりあるのでしょうか？

巨椋：それはいっぱいありますよ。

若島：そうですか。いっぱいあるんですか。

巨椋：ちょっと思いついてメモしただけのものなどを含めればいっぱいあります。あることはあるけれど、あれはもうしようがないなあ。

小林：作品として完成しているけれど発表していない作品はあるのでしょうか？

巨椋：それはない。作品集の最後のほうに直して出しちゃいましたから。一応できていて、あと1ヶ月かそこら手を入れれば作品になりそうなやつはいくつかあります。

若島：それはどんな作品なのでしょうか？

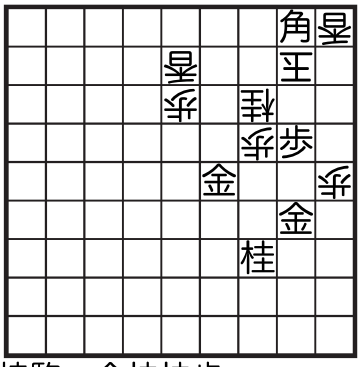
巨椋：趣向作です。割と小さいやつが残ってしまっていますね。いやとにかく、この本には精魂打ち込んだので、もうこれ以上は……。

【参考図の解】
#1
42飛、51玉、63桂、同金、59香、同と、
53香、同金、41飛成、62玉、61龍、73玉、
72龍、84玉、94角成、同玉、92龍、93金合、
83銀、95玉、93龍、86玉、87銀、同玉、
96龍、88玉、89金、同玉、98龍、79玉、
89金、69玉、78龍まで33手

#2
82香、72玉、83と、63玉、64歩、同玉、
73銀生、63玉、74角、同と、64歩、同と、
72銀生、62玉、74桂、同と、52歩成、同玉、
41銀生、43玉、44歩、53玉、43歩成、同玉、
32銀生、52玉、61銀生、63玉、72銀生、52玉、
41銀生、43玉、49香、44歩合、同香、53玉、
43香成、同玉、32銀生、52玉、53歩、51玉、
41と、62玉、52歩成、同玉、51と、同玉、
21龍、同飛、61銀成、同玉、63香、52玉、
62角成まで55手

巨椋鴻之介の《好きな8局》

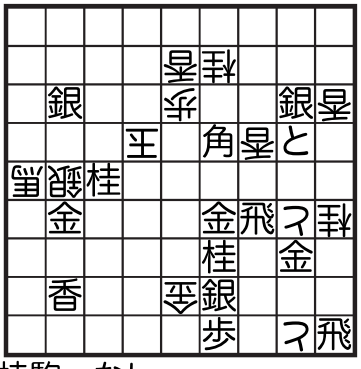
①　古作物　「死刑の宣告」



持駒　金桂桂歩

23歩成、同玉、35桂、22玉、
23歩、13玉、24金、同玉、
34金、同玉、43角成、24玉、
36桂、13玉、14歩、同玉、
25金、同桂、同馬、13玉、
14馬、同玉、26桂、13玉、
25桂、12玉、24桂、21玉、
22歩成、同玉、34桂、31玉、
43桂不成、41玉、33桂不成まで35手

②　　小川悦勇　「風車」
風ぐるま　1954.1

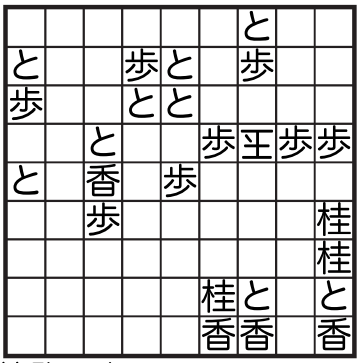


持駒　なし

55角、65玉、56金、54玉、
45金、同玉、46飛、54玉、
44飛、65玉、64飛、56玉、
66飛、45玉、34銀不成、同桂、
46香、同桂、同飛、54玉、
44飛、65玉、64飛、56玉、

66飛、45玉、37桂、同と、
46飛、54玉、44飛、65玉、
64飛、56玉、16飛、同香、
66飛、45玉、57桂、同金、
46飛、54玉、44飛、65玉、
64飛、56玉、57銀、同玉、
68金、56玉、66飛、45玉、
46飛、54玉、44飛、65玉、
74銀不成、同銀、64飛、56玉、
66飛、45玉、46飛、54玉、
43飛成、65玉、76金、同玉、
46龍、65玉、66龍、54玉、
64龍、45玉、36金、同玉、
34龍、47玉、37龍、56玉、
46龍、65玉、66龍、54玉、
64龍、45玉、44龍、36玉、
46龍、27玉、37龍、18玉、
19歩、同玉、17龍まで95手

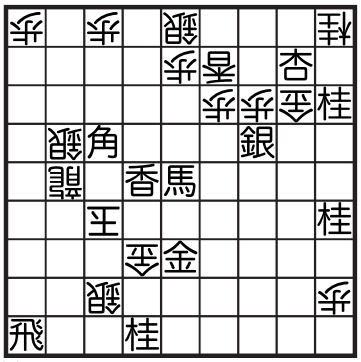
③　　服部秋生　「砂丘」
詰将棋パラダイス　1957.10



持駒　歩

47と、35桂、同香、45玉、
37桂、44玉、54と、35玉、
36と、34玉、45と、33玉、
25桂右、22玉、23歩成、11玉、
21と、同玉、31歩成、11玉、
12と、同玉、24桂、11玉、
12桂成、同玉、13歩成、11玉、
12と、同玉、27と、14歩合、
同香、22玉、32と、23玉、
13桂成、32玉、43と、同玉、
53と左、33玉、34歩、24玉、
35と、同玉、36と、34玉、
25と、44玉、54と、33玉、
45桂、32玉、33歩、21玉、
12成桂、31玉、42と、同玉、
53桂成、51玉、52成桂、同玉、
63と左、41玉、56桂、42歩合、
同香成、同玉、53と左、51玉、
61歩成、同玉、72香成、同玉、
63と上、83玉、84歩、74玉、
64とまで81手

④　　駒場和男　「地雷原」
近代将棋　1979.1

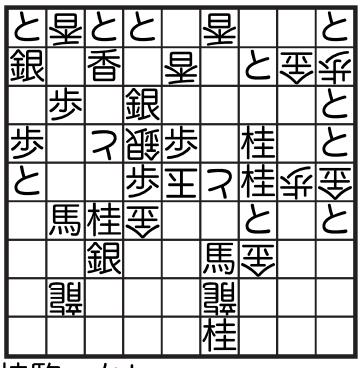


持駒　なし

67金、同銀成、77金、同成銀、
85角、同玉、77桂、75玉、
74飛、同玉、64馬、83玉、
74銀、72玉、54馬、82玉、
55馬、72玉、45馬、82玉、
46馬、72玉、36馬、82玉、
37馬、72玉、27馬、82玉、
28馬、72玉、18馬、82玉、
28馬、72玉、27馬、82玉、
37馬、72玉、36馬、82玉、
46馬、72玉、45馬、82玉、
55馬、72玉、54馬、82玉、
64馬、72玉、63銀不成、83玉、
74銀成、72玉、54馬、82玉、
55馬、72玉、45馬、82玉、
46馬、72玉、36馬、82玉、
37馬、72玉、27馬、82玉、
28馬、72玉、18馬、82玉、
19馬、72玉、63香成、61玉、
62歩、同銀、同成香、同玉、
69飛、51玉、62銀、41玉、
32成香、同玉、23銀成、同玉、
29飛、13玉、46馬、24歩合、

同馬、22玉、13馬、同玉、
14歩、同玉、24金、15玉、
25金、16玉、26金、17玉、
27金、18玉、28金まで107手

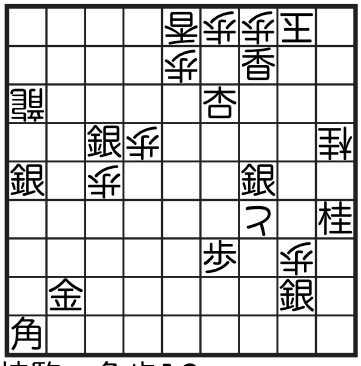
⑤　添川公司　「約束の地」
詰将棋パラダイス　1995.5



持駒　なし

66銀、44玉、43桂成、同香、
45と、同玉、46金、44玉、
55銀、同銀、45歩、34玉、
25と、同金、35歩、同金、
24と、同玉、42馬、13玉、
12と、同玉、22と、同玉、
32金、12玉、13歩、同玉、
31馬、24玉、35金、同玉、
25金、45玉、37桂、同龍、
35金打、同龍、同金、同玉、
25飛、34玉、33金、同玉、
22馬、42玉、52銀成、同玉、
53歩成、同玉、55飛、54歩合、
同飛、同玉、55香、63玉、
64銀、同と、同歩、73玉、
63歩成、同玉、62と、同玉、
44馬、同香、61と、同玉、
71香成、62玉、63歩、同玉、
64歩、62玉、72成香、同玉、
81銀不成、62玉、63歩成、同玉、
64香、73玉、84と、同龍、
72銀成、同玉、84桂、73玉、
74飛、83玉、93歩成、同玉、
92桂成、83玉、82成桂、同玉、
84飛、91玉、94飛、82玉、
92飛成、73玉、83龍、64玉、
74龍、55玉、65龍まで107手

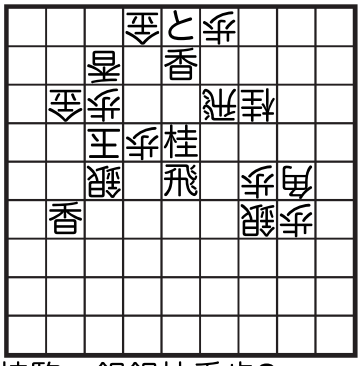
⑥　橋本　哲
詰将棋パラダイス　1980.2



持駒　角歩10

22歩、11玉、12歩、同玉、
89角、23飛合、同角成、同玉、
25飛、24香合、同飛、13玉、
23飛成、同玉、25香、24角合、
同香、13玉、23香成、同玉、
89角、22玉、78金、21玉、
22歩、11玉、12歩、同玉、
77金、23飛合、同角成、同玉、
25飛、24香合、同飛、13玉、
23飛成、同玉、25香、24角合、
同香、13玉、23香成、同玉、
89角、22玉、67金、21玉、
22歩、11玉、12歩、同玉、
66金、23飛合、同角成、同玉、
25飛、24香合、同飛、13玉、
23飛成、同玉、25香、24角合、
同香、13玉、23香成、同玉、
89角、22玉、56金、21玉、
22歩、11玉、12歩、同玉、
55金、23飛合、同角成、同玉、
25飛、24香合、同飛、13玉、
23飛成、同玉、25香、24角合、
同香、13玉、23香成、同玉、
89角、22玉、45金、21玉、
22歩、11玉、12歩、同玉、
44金、11玉、21歩成、同玉、
31香成、同玉、32成香、同玉、
33金、同龍、同角成、同玉、
34銀、44玉、43飛、54玉、
55歩、同玉、45飛成、66玉、
56龍、77玉、67龍、88玉、
78龍、99玉、98龍まで127手

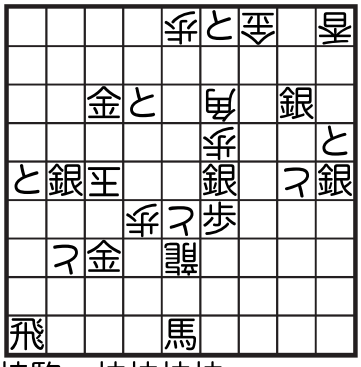
⑦　上田吉一　「モザイク」
詰将棋パラダイス　1975.3（version）



持駒　銀銀桂香歩8

66桂、同銀、63銀、同玉、
62桂成、同金、54銀、74玉、
76香、75角合、同香、同銀、
56角、65香合、同角、同歩、
同銀、63玉、64歩、同銀、
54銀、74玉、76香、75角合、
同香、同銀、65銀、63玉、
64歩、同銀、54銀、74玉、
96角、85歩合、同角、84玉、
58角、74玉、75歩、同銀、
65銀、63玉、64歩、同銀、
36角、同角、54銀打、同角、
同銀、74玉、75歩、同銀、
65銀、63玉、64歩、同銀、
18角、27香合、同角、同歩成、
54銀、74玉、76香、75角合、
同香、同銀、65銀、63玉、
64歩、同銀、54銀、74玉、
96角、85歩合、同角、84玉、
49角、74玉、75歩、同銀、
65銀、63玉、64歩、同銀、
27角、36香合、同角、同歩、
54銀、74玉、76香、75角合、
同香、同銀、65銀、63玉、
64歩、同銀、54銀、74玉、
96角、85歩合、同角、84玉、
58角、74玉、75歩、同銀、
65銀、63玉、64歩、同銀、
36角、45香合、同角、同桂、
54銀、74玉、76香、75角合、
同香、同銀、65銀、63玉、
64歩、同銀、54銀、74玉、
96角、85歩合、同角、84玉、
67角、74玉、75歩、同銀、
65銀、63玉、64歩、同銀、
45角、同飛、54銀、74玉、
66桂まで145手
（注：発表時には持駒の桂が78桂と盤面に配置されていたが、後になって余詰が発見された。指摘したのは渡辺明竜王。本図は作者による修正図である。）

⑧山田修司「禁じられた遊び」
近代将棋　1972.3



持駒　桂桂桂桂

76金、同角、74金、65玉、
76銀、同玉、88桂、同と、
75金、同玉、53角、65玉、
64角成、76玉、86馬引、65玉、
77桂、同龍、64馬、76玉、
68桂、同龍、86馬、65玉、
54銀、同玉、64馬、43玉、
53馬、33玉、24銀、同と、
25桂、同と、15馬、同と、
39飛、38歩合、同飛、同龍、
34歩、同龍、22銀不成、同玉、
31馬、同龍、23金、21玉、
31と、同玉、33飛、41玉、
32飛成まで53手

書評
巨椋鴻之介『禁じられた遊び』
評者：若島　正

詰め将棋は、将棋を知っている人間なら誰にでも楽しめる遊びである。しかし、それにのめり込むと、底知れぬ世界が見えてくる。遊びであったはずのものが、ただの遊びではなくなる。そうして詰め将棋の魅力に取り憑かれたマニアたちは、詰め将棋のことを必ず「詰将棋」と表記する。本書『禁じられた遊び』は、昭和三〇年代を中心にして活躍し、一時代を築いた詰将棋作家である巨椋鴻之介が、自らの言葉で詰将棋観を余すところなく語った詰将棋作品集である。

詰将棋を解いたことしかない人間には、詰将棋をどうやって作ればいいのか、想像がつかない。詰将棋創作はとんでもなくむつかしいことのように見える。しかし実際には、詰将棋作家の立場から言えば、詰将棋はどのようにも作れる。そしてどのようにも作れるからこそ、詰将棋創作はむつかしいのだ。つまり、作者があるはっきりとした意図で制御しないと、作品はかたちのないものになってしまう。このことに最も自覚的であった作家が巨椋鴻之介であり、『禁じられた遊び』は、詰将棋の理想的なかたち（それを巨椋鴻之介は「フォルム」と呼ぶ）を求めてたえず模索し、作り上げた作品のどこが欠点なのかを見極めながら、次に作る作品の取るべき姿を考えていった、自意識的な軌跡が描かれている。もちろん、創作にここまで自覚的な詰将棋作家が絶無だったわけではない。しかし、そうした作家たちは、格闘の最終的な産物である詰将棋作品だけを残した。言葉では語りえなかった。『禁じられた遊び』は、そこに収められた圧倒的な作品群もさることながら、それを緻密で分析的な言葉で語ったという点で、おそらく初めての「批評的」な詰将棋作品集となっている。

優れた芸術作品は、鑑賞する者に至福を与える。たとえば詰将棋なら、それを自分の頭で解き、作者が仕組んだ絶妙な構想を発見し、配置されている駒が何重にも働く機能的な美や、全体的なまとまりの美しさに触れた者は、この芸術パズルを知ってよかったとつくづく思う。ただその一方で、芸術家が自作について明晰な言葉で語ってくれたら、どんなにすばらしいだろうかと夢想することもしばしばある。本書では、その夢想が現実になっているのだ。

本書の読みどころのもう一つは、著者の言葉を借りれば、「作品をその時代に置きなおす」配慮がされている点だ。必然的に、それは昭和の詰将棋がたどった歴史と、著者が実人生でたどった歴史を語ることになる。そういう意味で、本書は詰将棋の歩みと、巨椋鴻之介の本名である佐々木明という一個人の歩みを綴ったものにもなっている。その本名は、最後のページでようやく登場する。フランス文学者で、『新スタンダード仏和辞典』の編者であり、ミシェル・フーコーの『言葉と物』の翻訳者。そのような業績ですら影が薄くなるほど、巨椋鴻之介が残した詰将棋の作品群と、本書に刻み込まれた言葉たちは輝いて見える。

「詰将棋創作はすばらしい遊びだが、遊びとしてはいささかキツすぎる。それは時間と精魂を吸いとり、学業、仕事、家庭――一言で言って実人生――を破滅させる危険をはらんでいる」と巨椋鴻之介は述懐する。その実人生からの要請で、一時期は捨てた詰将棋ではあっても、昔遊んだ玩具をふたたび手に取るように、こうして作品集をまとめた著者に、すべての詰将棋愛好家は感謝せずにはいられないだろう。そして作品を盤上に並べ直しながら、そこに注がれた作者の情熱を贈物のように受け取るだろう。

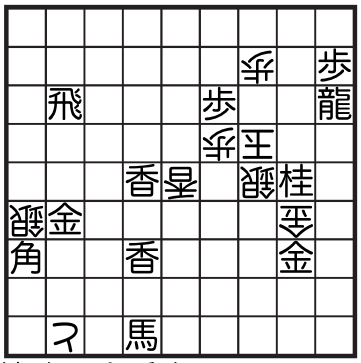
（毎日新聞2008年5月4日号より転載）

橋本哲が選んだ
巨椋鴻之介ベスト8局

巨椋作品については作品集『禁じられた遊び』に作者の側から詳細に語られている。そこで、ここでは解き手の立場から書くことを試みた。

皆さんもぜひ解図に挑戦してみてほしい。解いたからこそ気付くことがきっとある。

①　作品集第50番　「雁」
近代将棋　1972.12



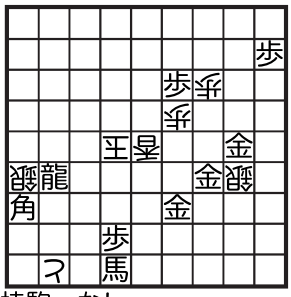
持駒　金香歩

23龍、45玉、48香、46桂合、
同香、同玉、38桂、45玉、
34龍、同玉、26桂、同銀、
33桂成、同歩、25金、45玉、
36金、56玉、47金、67玉、
68歩、66玉、76金、同玉、
86飛成、65玉、56金、同香、
75龍、54玉、45金、同歩、
64龍、43玉、34金、同歩、
53龍、32玉、14馬、21玉、
23龍、22金、同龍、同玉、
23金、21玉、31角成、同玉、
32金まで49手

目につくのは33桂成。だが45玉とされ、48香、46桂以下手が続かない。これを見限れば初手は23龍と決まるのだが、変化を伴う上に作意の方向が見えにくいために踏み込みにくく、33桂成の方に無駄に未練を残してしまう。思い切って23龍を試してみると、23同玉には42歩成以下の詰筋があって45玉。続けて48香、46桂、同香、同玉、38桂、45玉と追ったときに34龍と捨てる手がある。これが初手33桂成との決定的な差だ。同玉の一手に26の金を取り、33桂成と捨てれば趣向の形が見えてくる。簡単に書いてしまったが細かい変化はいろいろあって解図に時間がかかるのはここまでのはずだ。

序盤を抜けるとあとは一気に駆け抜ける感じになる。金を25、36、47と斜線に据え、玉を76まで連れてくれば、86飛成、65玉以下自然な流れに入る（次図）。

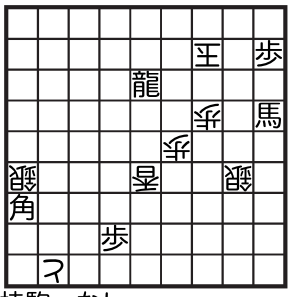
(26手目65玉までの局面)



持駒　なし

ここから斜めに追い戻す。同時に先刻打った金を捨てていくのも自然な流れだ。途中の変化も大したことはない。そして32まで追ったところで金捨ての効果が表れて14馬（次図）。この後は龍と角を捨てる無駄のない収束だ。

(39手目14馬までの局面)



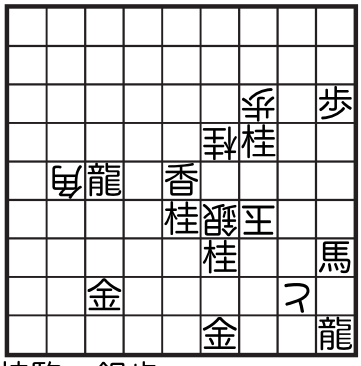
持駒　なし

前半で金を据え、後半はそれを捨てながらの一往復の斜め追い。渋滞なく軽快な手順が楽しい。

趣向部の明快さに比べ、序盤に多くの読みを要求する構成になっている。そのバランスを問う声もあろう。だが、この完成された主眼部に対し、序盤もごく平易だったとしたら、解き手に与える印象は全く変わるに違いない。

これも作者の作図感覚であろう。うまいビールを飲むための軽いひと汗、これが効くのだ。

②　　作品集第58番
近代将棋　1994.12



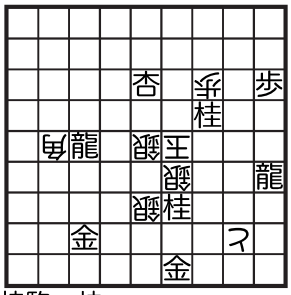
持駒　銀歩

45銀、同玉、44馬、56玉、
57歩、同銀生、67金、同角成、
16龍、46銀打、45馬、同玉、
53香成、55銀打、同龍、同銀、
54銀、34玉、14龍、24歩合、
26桂、44玉、24龍、34馬、
35龍、同馬、45歩、同馬、
43銀成まで29手

初手から迷う。銀をどう捨てるのか、37歩はどうか。作意順に入っても45銀、同玉、44馬、56玉の後の展開が読み取りにくく更に迷いを呼ぶ。直後の57歩、同銀生、16龍（ここで伏線手67金が入るのだが気付くはずもない）の順が変化を伴い、かつ相手の抵抗を呼び込んで面倒に見えるのだ。そして生来の怠け心がそんな変化に分け入るのを躊躇させる。

だがやはり他に手はない。踏み込んで変化を詰ましてみると57歩に同銀生、16龍に銀打合となって本筋の予感。さらに45馬と捨て同玉、53香成に再度の銀打合が読めたところで突然視界が開ける（次図）。

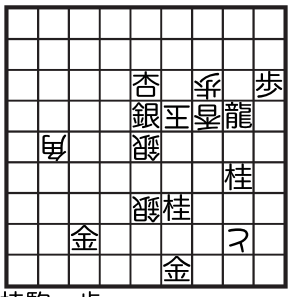
（67金捨てをせずに55銀打まで行った局面）



持駒　桂

ここから55同龍、同銀、54銀とすればほとんど捕まっているように見える。だが安心するのはちょっと早かった。以下34玉、14龍、24歩、26桂、44玉、24龍、34香とした局面が打歩詰で詰まないのだ（次図）。

（67金捨てをせずに34香合までの失敗図）



持駒　歩

これをどう打開するか。盤面をにらむと答はそこにあった。途中で67金(そう言えば遊んでいる)、同角成としておけば上図で45歩を打てる。しかも24龍、34馬の好防に35龍の返し技が見える。作意だ。あとは金捨てのタイミングを確認して変化を詰めればよい。馬を呼び込んで面倒そうだがもう迷いはない。

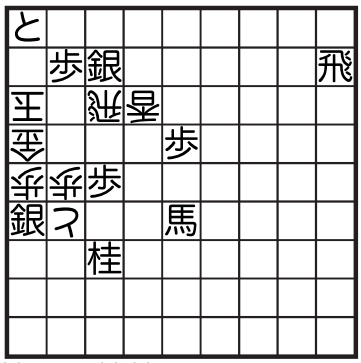
迷いを呼ぶ序盤、そこを抜けると突如開ける収束への展望、その全てを読み解いた者だけが発見を許される絶妙手67金。この構成こそが作者の狙いであろう。呼び込んだ馬をめぐる収束の攻防は余韻にひたる幸せな時間である。

1994年の6月末、1通の封書が届いた。開くとそこには巨椋鴻之介の名と本作の図面、そして、復帰に際しての検討をとの文面があった。そのときの興奮を忘れることはない。解いてその内容にまた興奮し、急いで返事を出すと今度は詳細な読み筋が送られてきた。

私ごときが口を挟む余地のない完成度だったのだが、ごく僅かな改良を提案して採用された。こうして私は本作誕生の瞬間に居合わせることができた。私の自慢話のひとつである。

私を紹介してくれたのは故森田正司さんだったらしい。氏の主宰しておられた詰将棋研究会は本当に素晴らしく楽しかった。改めて感謝するばかりである。

③作品集第22番　「ゆうだち」
詰将棋パラダイス　1957.7

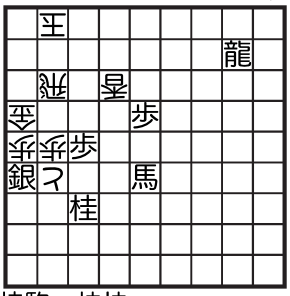


持駒　桂桂

83銀成、同飛、92と、同玉、
81歩成、同玉、73桂、91玉、
11飛成、81桂合、同桂成、92玉、
22龍、81玉、73桂、91玉、
31龍、81桂合、同桂成、92玉、
42龍、81玉、73桂、91玉、
51龍、81桂合、同桂成、92玉、
62龍、81玉、73桂、91玉、
71龍、81桂合、同桂成、同飛、
83桂、92玉、81龍、同玉、
71飛、82玉、91飛成、73玉、
71龍、84玉、85銀、同と、
74龍、93玉、85桂、同金、
94歩、92玉、84桂、同金、
93歩成、同玉、84龍、同玉、
74馬、93玉、94歩、82玉、
73金、92玉、71桂成、91玉、
81成桂、同玉、63馬、91玉、
93香、92桂、同香成、同玉、
84桂、91玉、81馬、同玉、
72桂成、92玉、82成桂まで83手

83銀成～92と～81歩成とする序は一本道。続けて73桂、91玉、11飛成に手が止まる。逃げれば81龍。81への変則合が正解だが、桂か香かにわかに特定できない。そんなときは深く考えずに手を動かしてみる。同龍から清算するのは芋筋と決めて同桂成。これに同飛は83桂でなんとかなりそうだから飛ばして92玉。ここで気付く。22龍、81玉と進めた局面が6手目の局面とほぼ同じなのだ。81で桂合を取れていれば龍の位置しか違いはない（次図）。

（14手目81玉までの局面）



持駒　桂桂

龍を鋸引きで近づけ、玉方に手を変えさせる仕掛けが見える。ではどこでどう手を変えるのか。合駒を香にするか81桂成を同飛と取り返すかだが、香合だと龍鋸が71龍までは近づけず中途半端だ（92香がある）。では本筋は目一杯の龍鋸のあと81同飛かなどと想像しつつ飛ばしてきた変化に戻る。変化が想定どおり詰めば、あとは収束のみごとな捌きが待っている。

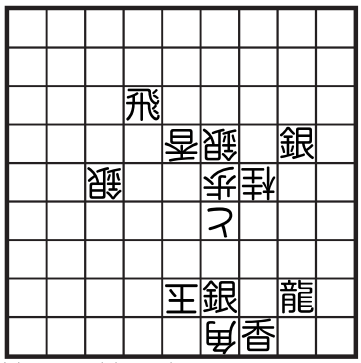
12飛配置にかすかな龍鋸の予感。そして、端正な初形が逆に予想外の大技を期待させる。そして期待どおり、変則合絡みの龍鋸が今なお新鮮な驚きを与えてくれる。

収束を見てみよう。全体の半分以上という長さを違和感なく受け入れられるのはなぜか。駒を使い切る巧みな捌きはもちろんだが、それがメインテーマの舞台と役者を多段活用して実現されているからであろう。合駒と捌きを基調としたある種の作品群にみるように、簡潔さと効率がすぐれた職人芸的精度で表現されたとき、それを美しいと感じることがある。本作も作品全体が一体化することでそれに類した効果を生んでいるとは言えないか。

これを支えるのは確かな技術だ。そしてもう一つ、それが意識的に行われていることを忘れてはならない。作者は「収束を付けた」のではない。「収束までを含めた全体としてひとつのもの」を作ろうとしたのだ。

同時期の別の巨匠による龍鋸として記憶に値する作品を一つ。図面引用のスペースが足りないが、駒場和男作品集『ゆめまぼろし百番』の23番である。参照されたい。

④　　作品集第39番
近代将棋　1960.12



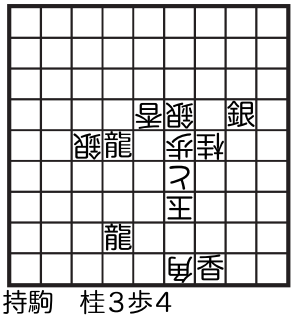
持駒　桂3歩4

57銀、同玉、58歩、同角生、
69桂、同角成、58歩、同馬、
49桂、同馬、68龍、56玉、
65飛成、47玉、48歩、同馬、
67龍引、57と、59桂、46玉、
48龍、同と、55角、同玉、
56歩、46玉、35銀、同銀、
58桂、同と、47龍まで31手

59銀が目につく。だが47玉で届かない。47銀も取られてまるで駄目だが、何故か本筋の57銀より先に手が行く。合駒などの変化が出にくい筋を選ぶのは解き手の本能なのか。

ともあれ初手は57銀と捨てるしかなさそうだ。だが同玉に68龍、56玉、65飛成、47玉となって立ち往生してしまう（次図）。

（3手目68龍以下47玉で打歩詰の図）



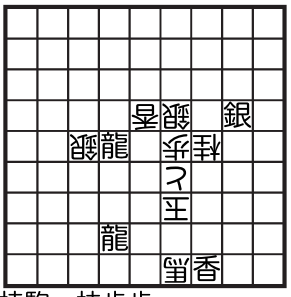
持駒　桂3歩4

とにかく角と香の守備が強くて手がかりがつかめない。戻って3手目に58歩と角で取らせてから69桂とするのも取られて68に馬が利いてしまうだけに見える。他の紛れも大して深くはない。一体何を見落としたのか。

58歩、同角に49桂は角を戻すだけと見えて、しばし視界から外れていたようだ。気づいて考えてみると、戻った角が裏返っていれば前の図で48歩から手になりそうだ。ならば58歩には同角生としておこう。必要になったら裏返せばよい。この成生の選択に作意の匂いがする。そこで流れのまま69桂と打ってみる。角生で取ると68龍がある。ここは成る一手だ。

筋書きが見えてきた。69で馬にした後、逆に58歩～49桂と馬を誘導して初形の角を裏返してしまうのだ。そうして68龍以下追うと前図とほとんど同じ局面が得られる。

（49馬になって48歩を打てる図）



持駒　桂歩歩

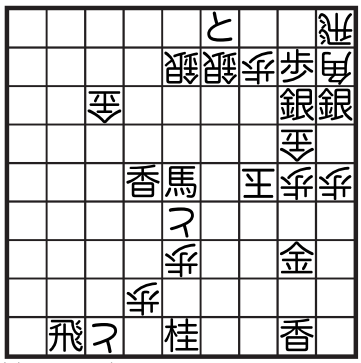
これで48歩と打てば後は難しくない。48同馬、67龍引、57と、59桂、46玉と手順に進め、48龍と切ってとどめに55角と手筋の捨駒を打てば、納得の詰め上がりである。

初形の角を捨駒で誘導し、位置を変えずに裏返して打歩詰を打開しようという構想。最初は無意味と感じた手に意味を見付けたときの驚きに趣向的反復の楽しみが複合する。そして詰上げたあと、そこを何度も反芻したくなる。

本稿でも引用している他の伏線構想ものと違うのは、主眼手が自然な選択肢の中にあることだろうか。ここでは妙手発見の驚きは薄い。大観衆の目を奪う大技でもない。むしろ、さりげなく静かに演出される不思議。これも一種の魔法だと思うのだ。

打歩詰の局面ですぐに「成らせ」に気付いて解ける人もいるのだろう。一拍遅れてしまうのは、やっぱり勘が悪いのか。

⑤作品集第56番　「流星群」
近代将棋　1975.6

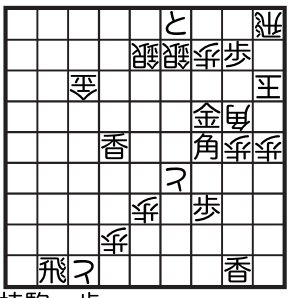


持駒　歩3

36金、同玉、37歩、35玉、
47桂、同と、24銀生、同玉、
34金、13玉、12銀成、同玉、
13歩、同玉、46馬、同と、
35角、24角合、同角、22玉、
55角、21玉、22歩、12玉、
13角成、同玉、46角、24角合、
同角、22玉、66角、21玉、
22歩、12玉、13角成、同玉、
57角、24角合、同角、22玉、
77角、21玉、22歩、12玉、
13角成、同玉、68角、24角合、
同角、22玉、88角、21玉、
22歩、12玉、13角成、同玉、
79角、24角合、同角、22玉、
44角、21玉、11角成、同玉、
12歩、21玉、31と、同銀、
11飛、22玉、33角成、同歩、
25香、32玉、23香成、42玉、
31飛成、同玉、32銀、42玉、
49飛、51玉、41銀成、同銀、
同飛成、同玉、32銀、51玉、
52歩、同玉、43金、51玉、
41銀成、同玉、32成香、51玉、
42成香まで97手

金を捨てて香の利きを通しておくのは一目。続く47桂も攻方の一方的な権利で損はない。24銀から形を決めて馬を捨て、35角と打ったところでちょっと考える。29香を働かせては大変だから24合。これを角に特定するのは難しくない（次図）。

(最初の24角合までの局面)



持駒　歩

素直に取って22玉に55角と打ち、21玉、22歩、12玉、13角成、同玉に46角と取ればやはり角合しかなく、さっきの局面が再現される。もう分かった。考えずに並び歩を取り去ってしまおう。序の47桂も飛の横利きを通したものだったと納得しておく。

79とを外せば後始末を残すのみ。角を44あたりに打ったあと、飛が横に回る展開を探しに行く。だが、なかなか決め手がない。11飛を取ってから12歩、21玉に31とが見えないのだ。単独手として難しいというだけではない。89飛を横に使うことばかり考えていて縦に使う変化（31同玉に81飛成以下）が盲点になったのに違いない。ここに解図の大半の時間を使ってしまう。

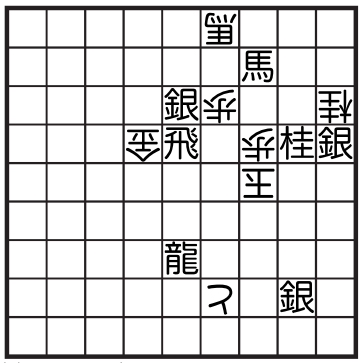
一旦気付けばあとは約束通り。飛を使い切る収束は心地よい易しさである。

間接的な香利きによる角の変則合が珍しく、かつ面白い。そして、シンプルな構造から繰り出される精緻な手順に驚く。31とのアクセントのあとの詰上がりは100手近い長編とはとても思えぬ身軽さだ。

細かいことだが、序の37歩には伏線以前に収束の余詰を二歩禁で消す意図がある。こうして全体がつながっているのだ。

私がこれを解いたのは詰パラ入会の数カ月前だったはずだ。初めて本格作品に挑戦したのだと思う。角合に驚き、並び歩に目を奪われた。そして31と、と寄ったときの感触は今でも鮮明だ。「巨椋鴻之介」という名前が印象に残ったのもこの時だったに違いない。初心当時の大切な記憶である。

⑥　　作品集第40番
近代将棋　1959.2

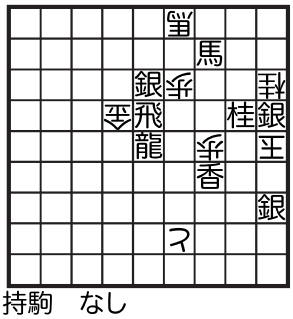


持駒　香

44銀生、同歩、36香、26玉、
17銀、15玉、55龍、45歩、
同龍、35歩、同龍、25歩、
26龍、同歩、55飛、同金、
16歩、24玉、25歩、同桂、
23銀成、14玉、15歩、同玉、
33馬、14玉、24馬まで27手

まずは筋よく36香。37龍、55飛などの面倒臭そうな手は後回しだ。だいいち、26玉、17銀、15玉と自然に進め、55龍とぶつければ早くもほとんど受けがないように見える。どう合駒してもそのまま切って簡単だ。だが即断は禁物。小考ののち妙防に気付く。55龍に35歩と突き捨てるのだ（次図）。

(初手を省いて35歩突までの局面)

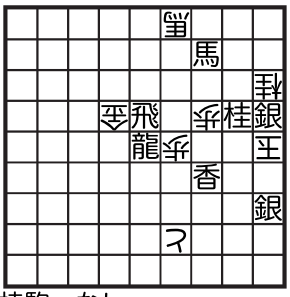


持駒　なし

35同龍の一手に25歩とすれば打歩詰の形。26龍、同歩、55飛としてみても同金、16歩、24玉で続かない。道を見失い、後回しにしていた序盤の紛れを読み始める。

考えもしなかった初手44銀捨てを試すのは何度目かの堂々巡りの後だ。34飛がなくなるなど、不利にしか見えない手だが、先刻の読み筋につなげてみれば効果が明らかになる。44歩で飛車の横利きを消しておけば16歩が打歩詰にならない。そこで玉方もさらに妙手で応じる。55龍には45歩（次図）～35歩と二つとも突き捨てて再度打歩詰に誘導するのだ。

(8手目45歩突までの局面)



持駒　なし

だが今度は逃げ切れない。二歩とも龍で取って25歩に26龍、同歩、55飛、同金、16歩、24玉のときに25歩と打つ一歩があって解決する。

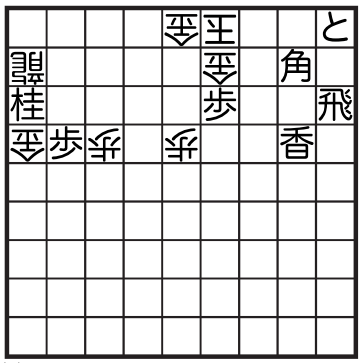
打歩詰誘致のための連歩突き捨ての妙防。それを誘発し、一歩を稼ぐための伏線手44銀捨てが実に気付きにくい絶妙の一手である。

オリジナリティあふれる構想が知的興奮を誘う。そして、ひとつの論理が一局の最初から最後までを貫き通していることが解き手に与える印象をより鮮やかなものにし、記憶に焼き付いて離れない。「初手44銀生」と聞けば多くのマニアが本作を思い浮かべるのではないか。

初手にすぐ伏線が発生する。変化紛れも決して難しくはない。そこに手厚さが加われば、との思いはある。だが、ここで解き手の挑戦を阻むものは主眼手を包む論理そのものと視覚的な不利感であり、それだけで十分な満腹感を与えてくれるのだ。

インタビュー記事にもあるが、初手の影響で55龍に25桂打、同龍、同桂、27桂、24玉、13銀生、同玉、53飛成以下という変化が生じている。細部まで、なんと都合よくできていることか。

⑦作品集第31番　「兎狩り」
詰将棋パラダイス　1962.11



持駒　銀４

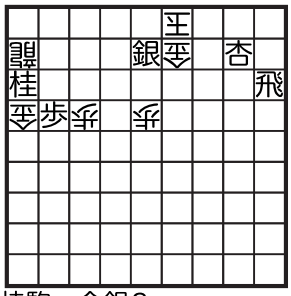
31角成、同玉、21と、41玉、
31と、同玉、42歩成、同金、
22香成、41玉、52銀、同金、
32成香、51玉、62銀、同金、
42成香、61玉、72銀、同金、
52成香、71玉、82銀、同玉、
81金、同龍、83歩成、同金、
81桂成、93玉、83飛成、同玉、
82飛、73玉、63金、同玉、
62飛成まで37手

いきなり42歩成と金を取るのは同金とされ、51から逃げられてうまくない。そこでとにかく31角成。同玉に42歩成、同金、22香成が筋だ。同玉なら３３銀が効く。だが手堅く41玉と逃げられてしまう。そこで一工夫。３手目から21と～31と、と捨てておき、11飛成を含みに残すのが攻め方の権利であることはすぐに分かる。そうしておいてから金を取り、同金に22香成とすれば今度も同玉と取ることができない。23金から11飛成があるからだ。

22香成に41玉とした局面が問題。ここでもやはり51玉と逃げられては大変だ。ならば、と理屈で考えても出てくるのだろうが、それより先に習い覚えた手筋が見える。52銀と退路に捨てるのだ（右上図）。

狙いは明白。同龍は11飛成までだし、同玉なら銀を引っ掛けて清算してしまえばよい。同金の一手に成香がすり寄ればこれも取れないので51玉。これで一歩左へ移動したことになる。ここからは趣向手順。銀捨てから成香寄を反復すればよい。そして最後も81金を急がずにリズムを

（11手目52銀までの図）



持駒　金銀３

保って銀捨てから入れば、後はきれいに詰上がる。

玉、金、龍３枚の利きへの手筋の打ち込みがそれだけで心地よい。そして、その反復が持駒銀４枚という形式美とぴったり呼応し、楽しみを盛り上げてくれる。

作者には上辺での追い趣向がいくつかある。私はそのどれもが好きだ。違うものなのになぜか共通の印象さえある。それが何なのか、言葉にできずにいるのがなんともどかしい。

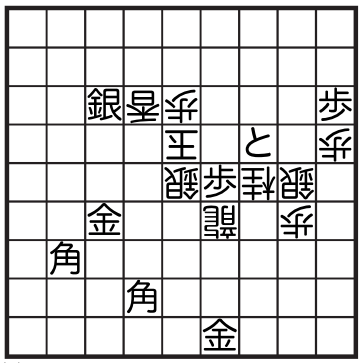
そんな中から本作を選んだのに大した理由はない。一番わかりやすそうだったから、という私の怠け癖のせいにしておこう。

『禁じられた遊び』出版の一年半ほど前だったと思う。準備段階の作品集についてお話を聞く機会に恵まれた。万一の場合の助っ人ということだったが、それは☒憂に終わった。

そんな経緯はともかく、その日は強烈な１日になった。『禁じられた遊び』に書かれている作者の詰将棋に対する考えを肉声で聞き、資料の一部を垣間見たのだ。それには作品集の全体構成から収録予定作、「フィギュール」「フォルム」などの言葉、他作家に対する見方など、書かれた全てのエッセンスが含まれていたと思う。☒☒できたか怪しいままその内容に圧倒され、それら一連のことをデータと共にきっちり準備する周到さに驚いた。

こうして作品集の予告編をたった一人で聞いてしまった私は、誰よりも本編の公開を待ちわびることになった。そのことを人に言いたくてたまらなかったこの気持、分かってもらえるだろうか。

⑧　　作品集第59番
近代将棋　1995.5



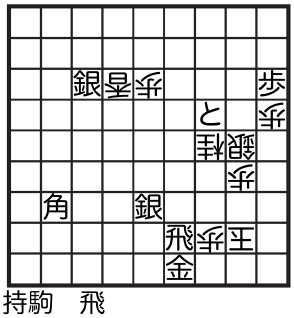
持駒　飛銀

66金、45玉、55金、同玉、
64銀生、同香、46角、同玉、
57銀、36玉、69角、同香成、
37銀、27玉、28銀、同玉、
48飛、17玉、19飛、18香、
同飛上、27玉、28飛右、16玉、
18香、17銀、同香、同玉、
18飛、27玉、36銀、同玉、
38飛右、27玉、37飛、同玉、
38金、36玉、46飛まで39手

66金～55金はまあそんなところ。どう受けるのかよく分らないが。きっと右辺に追い込むに違いない。変化に煩わされつつ、いろいろ読んでいると66金には45玉、55金には取るしかなさそうなことが分かってくる。

こうして読みを入れる一方で、反対側の頭はおかしなことに気付いている。うかうかしていると73銀、63香が取り残されるのだ。そんなはずはない。そして雑に読み飛ばしながら筋らしきものを追ううちに怪しい変化に辿り着く。66金、45玉、55金、同玉、46角、同玉、57銀、36玉、37銀、27玉、28銀、同玉、48飛のとき、38歩合（右上図）とする順だ。73に角を打てる形なら、以下同金、19玉、49飛、29角、同飛、同玉、39飛、18玉、19飛、同玉、73角で詰んでいる。これだ。55玉の形で73銀を64に、36玉のときに角を69に捨てて香を動かしておく。そうすれば今の変化を使えそうだ。

(伏線を忘れて48飛に38歩合の局面)



持駒　飛

ここではもう決め打ちしている。69角に47合とか、いろいろ面倒そうだが、きっと取るのが作意に違いない。深く考えずに48飛まで進め、歩合をせず17玉が87角がなくても詰むことを確かめる。それが19飛からのきれいな手順と知って推定が確信に変わる。あとは力づくで変化を詰めてしまえば良い。たとえ面倒でも、頑張れば詰むに決まっているのだ。

変化の奥底に隠された73角。それを作るための二重化された伏線の捨駒。序盤の主駒を捨て去り、変化を複雑にするだけに正攻法での発見は困難だろう。だが、その複雑さに不快感はない。解決の方向が約束され、しかも美しい締め括りが待つことを知っているからだ。

前半は分厚い変化と紛れが進行を妨げ、先を見通せないと主眼手を試すことすらできない。そこを突破したとき、巧みな収束のやりとりがさらなる発見の喜びを与えてくれる。このときの満足感は解いた者にしか分かるまい、というのは言い過ぎだろうか。

②の次に届いたのが本作である。1995年のまさに元旦、夕刻ほろ酔い気分で帰宅して手紙を見つけ、酒を片手に解いたのを思い出す。

前回と同様、解答のやりとりのあと送られてきた変化紛れの読み筋は詳細を極めていた。私ごとき雑読み検討者など全く要らないと思うくらいのもので、驚かされたのを覚えている。後日、伊藤正さん（だったと思う）にその話をしたことがある。彼によれば、一流の人はみんなそのくらいの努力をしているのだそうだ。私のような怠け者とは心掛けから違うもののようである。

森田拓也インタビュー

聞き手：伊藤正、若島正

【詰将棋を始めた頃】

伊藤：まず、森田さんのライフヒストリーからお聞きしたいのですが、詰将棋を知ったのはいつごろですか？

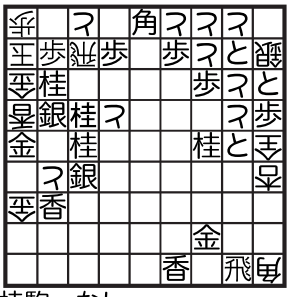
森田：中学校２年のとき（1968年）が初めてかなあ。当時は将棋も知らんかったんです。柔道部にいたのですが、同じ柔道部の岡本君というのが詰将棋を知ってて見せてくれた。それが最初かなあ。

伊藤：どんな詰将棋だったか覚えてますか？

森田：うーん（考える）。もう覚えてないなあ。でもそこから詰将棋に興味を持ったと思う。詰パラも岡本君から教えてもらった。定期購読し始めたのは中３からだと思う。

若島：発表作のデータを見ると、1969年8月の詰パラ大学院がデビュー作やね。中学３年？

#1　　森田拓也
詰将棋パラダイス　1969.8



持駒　なし

伊藤：詰将棋を覚えて１年くらいでこんなの作ってたんですね。

森田：中３のとき、神戸市灘区大石というところに住んでたんやけど、忠勇（灘の酒造メーカー）勤務の藤倉満さんの家の近くで。どうやって知り合いになったか覚えてないけど、藤倉さんと将棋を指して勝った記憶はある。詰将棋に興味を持つ中学生ということでお近づきになったのかな。大石で開催された詰将棋の集まり、夏だったかな、それに出席したことがあった。

伊藤：何人くらい集まったんですか？　出席者で覚えている人は？

森田：30人くらいいたと思う。灘区の大石会館というところの和室でね。みんなで飯食いながら。指将棋ではなく詰将棋のお題を持ち寄った。出席者で覚えているのは、内藤国雄さんとか。それと山田さんがいたなあ。

伊藤：山田さん、と言うとどの山田さん？

森田：北海道の山田さん。

若島：山田修司さんのこと？

伊藤：北海道から来てたんだ。すごい集まりですね。何かしゃべりましたか？

森田：なんかしゃべったと思うけど覚えてないなあ。その頃から、そんな集まりに出させてもらって。のめり込み始めた。

若島：その、のめり込み始めたきっかけというか、何かこれはおもろいと思った作品があったん？

森田：うーん…。そや！　思い出した。その頃近代将棋に「新扇詰」の解説が載ったんや。名局紹介みたいな企画があって。細かい解説でそれを読んで「すごいなあ」と。「俺もやってみよう」と思った。

伊藤：それはまたすごい。当時あれを理解したのですか？

森田：うん。理解した。並べてみて「これはすごい」と思った。いきなり「新扇詰」を見て腰が抜けたというか、それでやってみようと。

若島：５手詰とか７手詰を見てたのじゃなくて、「新扇詰」やったんか。なるほど。

【煙詰】

伊藤：煙詰に興味をもったきっかけは？

森田：よく覚えてない。

若島：当時は田中至さんがたくさん発表してたしねえ。あれを見たのかな？　田中さんが「全駒市松の研究」とか「煙詰の研究」とかの論文を発表してて。その中で煙詰は、たとえば銀歩送りのようなユニットを組み合わせれば、誰でも作れる、みたいなことが書いてあった。それの影響をわれわれはもろにかぶったわけですよ。

伊藤：このデビュー作が田中至さんの一作目とよく似ているような感じですね。

森田：そうかも知れない。田中さんの煙詰は覚えてないけど。論文があったのは覚えている。その影響で、ぼくらくらいから煙詰がわんさか増えた。昔は煙詰を作ることはすごいと思ってた。「ぼくにも煙詰が作れた！」っていう感じ。

伊藤：煙詰創作、というハードルがけっこう手頃なんですよね。ちょっと努力すればできる、という高さ。100メートル走で言えば15秒の壁、というくらいかな。10秒で走るのはむずかしいけど、15秒なら、という。

森田：この２作目の煙詰「醸泉」はねらって作ったのを覚えている。周辺巡りの煙詰をねらった。ただ31を通らない。通そうと思ったけど当時はできなかった。時期的には１作目と同じ頃に作ったと思う。

#2　　森田拓也　「醸泉」
詰将棋パラダイス　1969.9



持駒　なし

伊藤：ちょっと序盤を修正して31を通してみるというのはどうですか？　一号局の栄誉が手に入りますよ。

若島：今回森田さんの作品を全部並べてみたんですが、久しぶりに懐かしい雰囲気だったんですよ。何というのか、変化が簡単に割り切れる。もちろん、これは褒め言葉です。たぶん指将棋が弱いんやろな、と思ったんですが。

森田：はい。弱いですよ。

若島：それと、森田さんの煙詰を見ると、盤面全部を使ってない。使ってない空間がある。余力がある感じ。いい意味で120%の力を出してない、というのかな。たとえば駒50枚使って煙詰を作れそうな、そんな余裕があるという印象を受けました。

　この感じをもっと極端にすると、かなり違った展開があったかも知れないと思いましたね。ただ「北斗」だけは違う。これだけは、変化もぜんぶ考えてますよ、という感じやね。

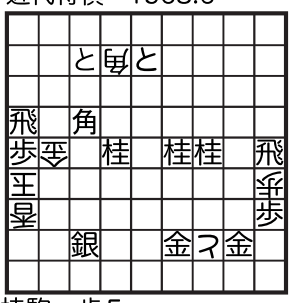
【「北斗」の頃】

森田：「北斗」はね、プロットを発見したときうれしかったとき、ごっつう嬉しかったですね。合駒を一つでもさぼると逃げられなくなる、という仕掛け。

若島：「北斗」は、山中龍雄さんの横飛型７連歩合の後やったん？

森田：山中さんの後ですね。

#3　　山中龍雄
近代将棋　1968.6

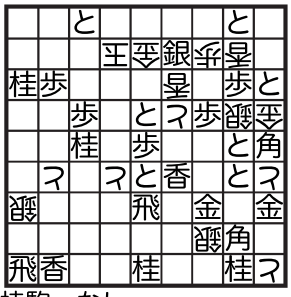


持駒　歩５

若島：山中さんの作品はね、実は好きなんだよね。7連続合駒は、山中さんの作品の後はもうできないな、という感じ。一つの原理で全部の合駒を作っているのがちょっとありえない。角打で7連歩合を作ると最後のところが合駒の意味がちがってくるでしょ。いろいろ考えると山中さんの形、横飛がいちばん作りやすい。他のパターンは相当力を入れないとむずかしい。

森田：僕も相当作ったけど、はっきり覚えているのは「北斗」と「兜率天」だけですね。後は「こんなのもあったなあ」という感じ。

#4　森田拓也　「兜率天」
詰将棋パラダイス　1971.10



持駒　なし

伊藤：「兜率天」の初手が最終手と呼応しているのは、意図的に作ったんですか？

森田：いえ、まったく考えてない。初形はやっぱりきれいでしょ。

若島：「長城」もいいでしょ？　馬ノコ入りの。

森田：ああ、近将に出したやつ。最後の方です。

若島：どこで潰れたん？

森田：どこだったかな？　覚えてないなあ。ただどっかで指摘を見たときに「簡単に修正できるなあ」と思った記憶がある。これは煙詰の最長手数をねらって作った。今は最長手数は何手？

伊藤：230手位だったと思います。

森田：へえ。今はそんなですか…。

若島：これは長手数とか関係なしで、いいと思うよ。何というのかな、森田さんのいいところが出ている。変化がなくてすいすいといく。気持ちよく解ける。

　詰将棋というのは、力を入れても、必ずしもいいように出ない可能性もあるんで。森田さんのは余裕がある感じ。

森田：昔は初形にこだわってた。変な成駒ないでしょ。だいたい私の作品はそう。

　それじゃあ「北斗」と「長城」直しましょうか。

若島：ぜひ。「柿木」検討は引き受けます。じゃあ、今回の「この詰」発行までに修正するというのはどう？　宿題ということで。

【音楽と詰将棋】

伊藤：音楽の道に入ったのはいつからですか？

森田：小学校３年から音楽は始めた。だから詰将棋より早い。最初はギター。昔は手が大きくて、３年生でも弾けた。高学年になってピアノ。だから詰将棋考えるときも、ギター抱えながら手を考えてた（笑）。

伊藤：風☒入りながら、とか、通勤電車で、というのはよく聞きますが、ギター弾きながら、という人はなかなかいないのでは。

若島：音楽と詰将棋というのは関係ありますか？大橋健司さんが東京でギター屋さんをしていますね。ギターを販売する他にも、ギターを弾いて、他にもいろんなことをしている。

　森田さんは、大学に入って詰将棋から足を洗ったんですか？

森田：完全に。ただ、やめてしまったのではなくて、本屋で近代将棋は立ち読みしてた。大学一年までは詰パラを取ってたような気がする。

若島：先日、巨椋さんのインタビューをしたんやけど。そのときに、巨椋さんが詰将棋をフランス留学時にやめた、という話があって、「そうはいってもうずうずしませんでしたか？」と聞いたら、

「うずうずした」とおっしゃってたんですが、森田さんは音楽の道に入ってからも、詰将棋を考えてうずうずせんかったん？

森田：大学から社会人になった頃はうずうずした（笑）。ただどんどん薄まっていって自然消滅した、という感じ。

若島：森田さんは作曲もしてるけど、作曲と詰将棋は似てる？

森田：まるきり同じだと思います。序盤があって中盤があってとか。
　僕はアレンジを考えるのが好きなんやけど、各楽器の役割分担、ギターに何さして、ドラムに何さして、とか。ここでこういう音を出して、とか考えて、全体の調和に持っていく。音の流れの緩急とかアピールポイントの表現技法とかも同じ。あるいは時間のパラメータで制約されるというのも詰将棋と同じ。割り振りによる芸術性の表現というのかな。

若島：上田吉一さんが橋本孝司さんとやりとりしていて、「チェスプロブレムには感動したことがない」と言われたことがあったらしい。どうしてか、ということを考えると、チェスプロブレムは作意の中に時間経過という観念があまりない。短い手数の中でどのようにテーマを表現するかというのが問題でしょ。時間ではなく集中あるいは強度（intensity）の世界。それに対して詰将棋は、たらーとした時間が流れてる。そこがなんか人間的な時間というか。

森田：東京に出て始めたのはプログレ。今でもやってるけど、これが長尺物。やってることは詰将棋と同じなんや。肉をそぎ落として聞かせたい部分だけをやる、というのが、たとえばポリス。もうちょっと昔のイエスになると壮大になる。ＬＰのＡ面全部使って１曲という長い曲を発表してる。壮大なものが好きですねえ。さすがに今は曲作りはコンパクトにしてるけど。作曲も詰将棋も脳の使っている部分は同じやし、本人は違うことをやってるとは思ってない。能力も創作に対する自己表現欲求の満たされ方も同じだから。詰将棋とほとんどいっしょ。

伊藤：楽器が駒ということですか？　詰将棋でいう駒の役割分担と同じ？

森田：楽器と駒は似てますね。飛車やら角やら。それでハーモニーを作っていく。

【超長手数のアイデア】

若島：当時考えていて、今まだ実現できていないアイデアはありませんか？

森田：それはありますよ。超長手数ものとか。最初に見たのが「新扇詰」だったから。これを超えたいと思った。プロットとか考えてた。

若島：森田さんはタイプというか作風的には、長手数というのが合ってるような気がする。

森田：そやから、「ミクロコスモス」が出たときはショックを受けた。「やられてしもた」と思ってあきらめがついた。出る幕はなくなったからもういいや、やろうと思ってたことをやられたからもういいや、と。それは明確に覚えてる。することはないな、と思った。80年代の終わり頃やったね。

若島：考えてたのは、龍追い？

森田：いろいろ考えた。「龍追い＋馬ノコ」とか。

伊藤：それはまだないですよ。

森田：１サイクルの中で馬ノコを１回動かす、ということならだいぶ稼げると思った。

【コンピューターと詰将棋】

森田：今仕事で次世代スーパーコンピューター（＝スパコン）と関わっているんです。関係者で詰将棋とかやっている人がいて、おもしろいなあと思う。
　今、神戸市内で世界一の演算速度のスパコンを建設中で、来年には稼働するんですが、このスパコンを管理する理化学研究所（＝理研）という国の機関がちょっと前に東京芸大と提携した。

理研はスパコンの使い方でいろいろ考えてて、人間の脳の機能の研究もその一つ。東京芸大との提携もそういう意味です。人間の創作活動における脳の動きをスパコンで解析する、というようなこと。こういうのはロマンを感じますね。

スパコン使って、手当り次第に作らせて、プロットを生み出せ、ということなら何か出てくるかもしれませんね。長手数のパターンを生み出せとか。

【印象に残る詰将棋】

伊藤：森田さんの５年間の活動時代で印象に残っている作品は何ですか？

森田：うーん…。あまり覚えてないんだけど。若島さんの煙詰、１局目は覚えている。ものすごく変化が多い。もちろん「地獄変」も。

若島：実は「地獄変」は余詰があって、大手術をして収束を全部作り直したんです。１局目の方はつまらないし、作品集からも外してるんですが…。

伊藤：煙詰が好きなんですね。昔から。

森田：うん。煙詰は何というか、きれいだと思った。若島さんが「地獄変」を作ったのはいつごろですか？

若島：高校一年のときやった。発表したのは大学生のとき。

森田：奥薗さんが「新扇詰」を作ったのは20歳のときでしょ。

若島：自分としてはこんな年齢になっても作っているのは不思議な感じ。いちおうアイデアが今でも途切れない。それと、テーマさえあればどんなものでも詰将棋として実現できる、ということもわかったし。問題はテーマですよね。

森田：それはもう名人の域に達してますね。

若島：たとえば実戦型とか、曲詰とか、同じことを徹底的にやる人って多いでしょ。ああいうのが、ぼくにはちょっと真似できない。ぼくは、同じことばっかりしても仕方ないので、これって今までにあったかな、と思ったらやる、という感じ。

森田：超長手数のネタはありますか？　2000手超えとか。

若島：あまり関心ないんで。

森田：引退したら詰将棋をもう一度考えてもいいけどねえ。65歳になって家におるようになったら、とりあえず2000手超えを目指すと。

でも詰将棋再開するならまず追いつかんといかんねえ。まずデータベースを眺めるかなあ。

伊藤：作品集を買ったらいいですよ。柏川さんとか、山田さんとか。若島さんも出してますし。

若島：人にはタイプがあるでしょ。森田さんは長篇作家ですよね。きっと森田さんは、少しやればすぐに元に戻ると思いますよ。

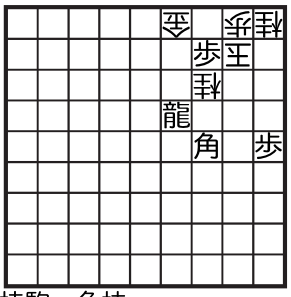
森田：詰将棋作るときの感じは、「きれい」か「きれいでない」ですわ。解答者が、解いてすかっとするものが作りたい。なるほど、と言わせるような。

伊藤：「きれいに作ろう」というのは中学生のときからの発想ですか？

森田：そう思ってた。短篇なんかだいたい「解いてすかっとする」のでしょ。「あー、やっと解けた」というのがない。短篇はポップスですね。

伊藤：これなんか、きれいだなと思いましたね。趣向の香りというやつで。

#5　　森田拓也
詰将棋パラダイス　1972.3



持駒　角桂

森田：「北斗」の収束作るときも、考えてたのは「きれいな図を作る」ということ。小駒図で不自然成駒なしで作るということだけに集中した。
　実は修正図も案があって、成桂を置くんだったかな、それが気に入らない。

伊藤：他に、印象に残る詰将棋というと…。

森田：「父帰る」も好きで、あれはリアルタイムで知ってる。煙詰ばかりやな。

若島：煙詰は今でもまだ作られている。たしか今年（＝2008年度）の看寿賞も煙詰。30年前と同じことをしているわけですね。

森田：昔の制約というのは惹かれるものがある。還元玉とかね。
　当時は、成桂、成香などの不自然成駒は見た目がきたない、という論調があった。

伊藤：巨椋鴻之介さんは同時代的に知ってるんですか？　北原さんとか？

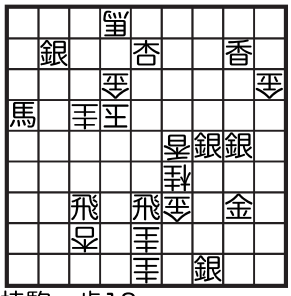
森田：名前は知ってるけど、作品は覚えてないなあ。
　他には黒川一郎さんの「天馬」「荒駒」も覚えてる。ああいうタイプが好き。きれいという印象。山田修司さんの完全周辺巡りもよかった。

若島：黒川さんは、詰将棋にいちばん向いている人でしょう。なにしろ棋力が低いので、余詰がたくさん出たわけやけど。でも黒川さんの詰将棋を解いて、楽しくならない解答者はいないでしょ。それって、作家としては幸せなことじゃないかなと思いますね。珍しいタイプ。
　北原さんは、森田さんには合わない感じ。さばきの才能ですからね。

伊藤：黒川さんの作品の影響は感じますね。この持駒歩18枚の作品とか。「将棋浪漫集」は買ったんですか？

森田：いえ。持ってないです。あと、名局リバイバルは読んだ。

#6　　森田拓也　「蛍火」
詰将棋パラダイス　1970.11



持駒　歩18

伊藤：当時の詰将棋作家で交流のあった人はいますか？

森田：大村一良さんと手紙をやりとりしたことがある。あと鶴田さんと会いたかったなあ。会ってない。七条さんともいちど会っときたかった。
　若島さんは伊藤看寿とかどう評価してるん？

若島：ぼくは、「無双」や「図巧」を見る前に見たのが北原・巨椋。こちらから詰将棋に入った。
　森田さんは「図巧」とかはどう？　好きな作品は？

森田：やっぱり煙詰（笑）。あれはいい。創始者だし。

若島：「図巧」の煙詰は、１号局というタイトル抜きで見ても内容がいい。作者の名前をはずしても、看寿が作ったという感じで、いいよね。

森田：煙詰の最短手数は今何手かな？

伊藤：論理的最短手数の73手より２手長い75手だったのでは？　これはたぶんできると思うので、ぜひ森田さんどうですか？

森田：普段の仕事や生活が、とても忙しいので、時間がつくれるかどうかですね。

【参考図の解】

#1
93銀成、同玉、94金、同玉、85金、同と、

同銀、95玉、96歩、同金、84銀、94玉、
95香、同金、同銀、同玉、86金、94玉、
85金、93玉、84金、92玉、91桂成、同玉、
92歩、同玉、83金、91玉、81歩成、同玉、
82桂成、同と、同金、同飛、同香成、同玉、
84飛、71玉、72歩、同玉、83飛成、71玉、
63桂不成、同と、61歩成、同玉、63龍、51玉、
41歩成、同と、同香成、同玉、32歩成、同と、
同と、同玉、43龍、21玉、12と、同玉、
23桂成、同と、13歩成、同と、同龍、同玉、
14と、同成銀、22銀、12玉、13歩、同成銀、
同銀成、同玉、14歩、同玉、15歩、同成香、
23銀、13玉、14歩、同成香、同銀成、同玉、
15歩、同玉、16歩、同玉、17歩、同玉、
18香、同玉、19飛、同玉、73角、18玉、
28角成まで97手

#2
13と、同玉、24銀、12玉、22歩成、同龍、
同と、同金、13飛、同金、同銀成、同玉、
25桂、12玉、13金、11玉、21と、同玉、
31歩成、11玉、21と、同玉、32と、同銀、
同香成、同玉、33銀、41玉、51と、同玉、
42金、同と、同歩成、同龍、同銀成、同玉、
44飛、51玉、52歩、同玉、43飛成、51玉、
63桂不成、同金、61歩成、同玉、63龍、71玉、
82金、同成香、同歩成、同角、同と、同玉、
93角、91玉、92香、81玉、61龍、92玉、
72龍、93玉、94香、同と、同歩、同玉、
95歩、同成香、同と、同玉、75龍、96玉、
85龍、97玉、98香、同馬、同銀、同玉、
43角、99玉、96龍、89玉、98龍、79玉、
69金、同玉、87角成、59玉、77馬、49玉、
67馬、39玉、57馬、29玉、47馬、18玉、
19歩、同玉、89龍、28玉、29龍、17玉、
16と、同玉、38馬、15玉、14金、同玉、
13桂成、同玉、14歩、同玉、47馬、13玉、
46馬、12玉、45馬、11玉、44馬、12玉、
22龍まで121手

#3
16飛、26歩合、同飛、36歩合、同飛、46歩合、
同飛、56歩合、同飛、66歩合、同飛、76歩合、
同飛、86歩合、85角、同玉、86飛、同玉、
87歩、75玉、76歩、同玉、77歩、65玉、
66歩、同玉、67歩、55玉、56歩、同玉、
57歩、45玉、46歩、同玉、47歩、35玉、
36歩、同玉、37歩、25玉、26歩、同玉、
27歩、25玉、16金、35玉、26金、45玉、
36金、55玉、46金、65玉、56金、75玉、
66金、85玉、76金、96玉、86金まで59手

#4
53銀不成、71玉、82歩成、同玉、86香、同銀生、
81桂成、同玉、82歩、同玉、73歩成、同玉、
93飛成、74玉、83龍、75玉、66と、同玉、
86龍、57玉、77龍、58玉、67龍、59玉、
48銀、同玉、38金、同玉、47銀、29玉、
69龍、28玉、58龍、17玉、18歩、同と、
16と、同玉、18龍、25玉、27龍、15玉、
14と、同玉、15歩、同玉、16歩、14玉、
15金、同銀、同歩、同玉、26銀、14玉、
25銀、23玉、33歩成、同歩、22と、同玉、
34銀、31玉、32香、同玉、33銀成、同玉、
34歩、32玉、43と、同と、同香成、同金、
33香、同金、同歩成、同玉、34歩、同玉、
44金、35玉、45金、同玉、36龍、55玉、
56龍まで85手

#5
14桂、12玉、13角成、同玉、24角、12玉、
22桂成、同歩、13角成、同玉、14龍まで11手

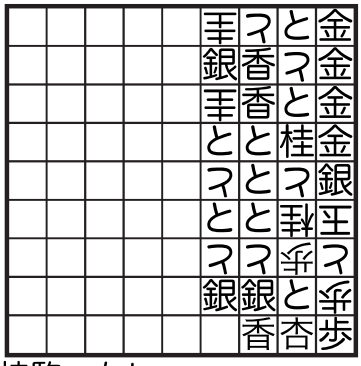
#6
65歩、同玉、76馬、64玉、65歩、同成桂、
同馬、同玉、66歩、同玉、67飛右、55玉、
56歩、同玉、48桂、同金、57歩、同成桂、
同飛、65玉、66歩、同玉、58桂、同桂成、
67飛右、55玉、56歩、同玉、57歩、同成桂、
同飛、65玉、66歩、同玉、58桂、同成桂、
67飛右、55玉、56歩、同玉、57歩、同成桂、
同飛、65玉、66歩、同玉、58桂、同金、
67飛右、55玉、56歩、同玉、57歩、55玉、
75飛、54玉、63飛成、同玉、73飛成、52玉、
43金、41玉、42歩、31玉、32歩、22玉、
33金、11玉、22金、同玉、13龍、同玉、
24銀左、12玉、13歩、21玉、22歩、32玉、
33金、31玉、21歩成、同玉、12歩成、同玉、
23銀成、11玉、22金まで87手

森田拓也の《好きな４局》

昨年来の若島、伊藤両氏との奇跡のような□□。そして本誌へ寄稿させていただくという栄誉ある機会も頂いた次第だが、最初にお断りをしておく。

将棋から離れて30年以上が過ぎ、とっくに私の将棋脳は溶けてしまっている。詰将棋についての技術面・芸術面について、まともな論評が展開できるわけがないのであるが、詰将棋に集中したあの頃を振り返りながら、「私にとって強烈なインパクトがあった作品」という観点から、少々思い出話を書かせて頂いた。駄文、ご容赦ください。

①　　伊藤　正　「月蝕」
近代将棋　1981.9



持駒　なし

17と、同玉、26銀、同と、
18歩、16玉、26と、同玉、
37銀左、同と、同銀、16玉、
28桂、同歩成、17歩、同玉、
28成香、16玉、15金、同玉、
25と、同玉、36と、同と、
同銀、15玉、16歩、同玉、
27成香、15玉、14金、同玉、
15歩、同玉、16歩、14玉、
13金、同と、同と、同玉、
12桂成、14玉、24と、同玉、
35銀、23玉、24歩、14玉、
15歩、同玉、26成香、14玉、
13成桂、同玉、23歩成、同玉、
34と、同と、同銀、13玉、
14歩、同玉、25成香、13玉、
12金、同玉、13歩、同玉、
14歩、12玉、24桂、21玉、
31香成、12玉、21成香、同玉、
32香成、同成桂、同桂成、同玉、
33銀成、21玉、22成銀、同玉、
33銀不成、21玉、22歩、11玉、
23桂、12玉、13歩成、同玉、
24成香、12玉、11桂成、同玉、
21歩成、同玉、32銀不成、11玉、
12歩、同玉、23成香、11玉、
21銀成、同玉、32香成、11玉、
22成香まで109手

信じられないような□□だった。中２で将棋を知り、中３で詰将棋に本格的に取り組み、20歳ころから将棋の世界から緩やかにフェードアウトしていった私。今でも、詰パラのバックナンバーや、将棋盤・駒のゴム印セットなどは捨てずにしまってあるが、何十年も将棋を指すこともなく、もうたぶん詰将棋とはかかわることはないだろうな…と思っていた。

昨年、神戸のとある書店で、伊藤正氏とばったり出会った。伊藤氏は、私と同じ某市役所に勤務し、また、手話の分野でも活躍されており、2006年当時、私が担当していた全国障害者スポーツ大会で、手話通訳者としてボランティアもしていただいた。そんなわけで、彼は、私にとっては旧知の仕事仲間でもあった。その伊藤氏から、唐突に尋ねられた。

「森田さんって、昔、詰将棋をやっていたことはなかったですか？」

「えっ、なんで、そんなことを知ってるん？」

引退して数十年経っており、詰将棋のことは、ほとんど誰にも話したことはなかっただけに、正直、驚いた。

しばらく話すうちに、目の前にいる伊藤氏が、「月蝕」「天女」の作者であるあの「伊藤氏」であるということを知り、改めて仰天する羽目になった。

「伊藤さんって、あの伊藤さん？」と聞き返したほどである。

「月蝕」は、1981年近代将棋で発表され、当時は、私はもう将棋はやめていたものの、本屋の立ち読みで手順を追った記憶がある。まさに「月蝕」の、小駒煙・全駒密集初形は、奇跡の配置としかいいようがない。

当時、自他ともに認める「ケムリスト」であった私も、一時、全駒密集初形は夢想したことはあっても、実現構想までには至らなかった。

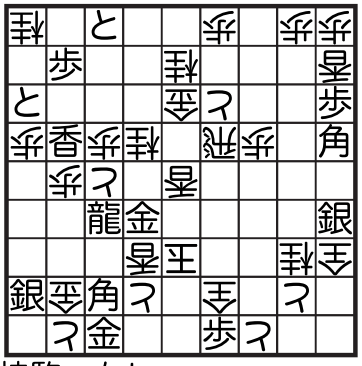
伊藤氏に「月蝕はどうやって作図したのか」と尋ねたら、「あの形は、必然なんですよ」という答。うーむ、意味不明。判らない。

おそらく、センス・努力といった要素で解決できる問題ではない。創作の神が微笑んでくれたからとしかいいようが無いのだろう。

記録として、あの初形以上に密集しようがないわけだから、超えることができない記録を作ってしまったということだ。しかし、全駒39枚の密集形はまだ可能性が残されている。

②　　奥薗幸雄　「新扇詰」

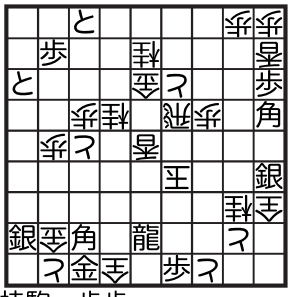
近代将棋　1955.9



持駒　なし

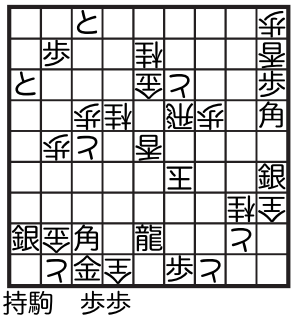
67金、同と、59香、58と、同香、同成銀、
67龍、46玉、47龍、35玉、36龍、24玉、
25龍、33玉、23龍、42玉、32龍、51玉、
41龍、62玉、61龍、73玉、83香成、同桂、
72龍、84玉、83龍、95玉、94龍、86玉、
97龍、76玉、67龍、86玉、87龍、95玉、
96龍、84玉、94龍、73玉、83龍、62玉、
72龍、51玉、61龍、42玉、41龍、33玉、
32龍、24玉、23龍、35玉、25龍、46玉、
36龍、57玉、69桂、同成銀、58歩、同玉、
38龍、57玉、58龍、46玉（途中図1）

（途中図1　64手目46玉）



持駒　歩歩

（途中図2　116手目46玉）

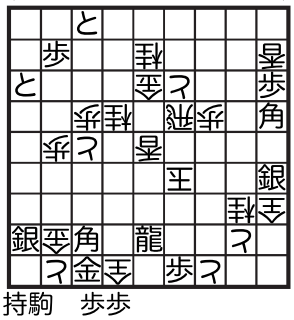


持駒　歩歩

（途中図1から）
47龍、35玉、36龍、24玉、25龍、33玉、
23龍、42玉、32龍、51玉、21龍、62玉、
61龍、73玉、72龍、84玉、83龍、95玉、
94龍、86玉、97龍、76玉、67龍、86玉、
87龍、95玉、96龍、84玉、94龍、73玉、
83龍、62玉、72龍、51玉、61龍、42玉、
41龍、33玉、32龍、24玉、23龍、35玉、
25龍、46玉、36龍、57玉、58歩、同玉、
38龍、57玉、58龍、46玉（途中図2）

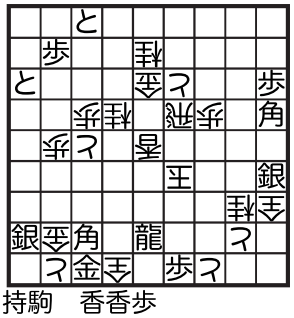
（途中図2から）
47龍、35玉、36龍、24玉、25龍、33玉、
23龍、42玉、22龍、51玉、11龍、62玉、
61龍、73玉、72龍、84玉、83龍、95玉、
94龍、86玉、97龍、76玉、67龍、86玉、
87龍、95玉、96龍、84玉、94龍、73玉、
83龍、62玉、72龍、51玉、61龍、42玉、
41龍、33玉、32龍、24玉、23龍、35玉、
25龍、46玉、36龍、57玉、58歩、同玉、
38龍、57玉、58龍、46玉（途中図3）

（途中図3　168手目46玉）



持駒　歩歩

（途中図4　222手目46玉）



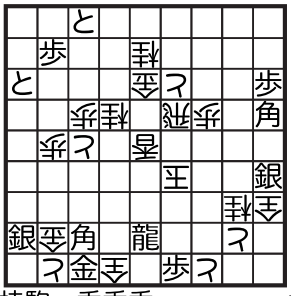
持駒　香香歩

（途中図3より）
47龍、35玉、36龍、24玉、25龍、33玉、
23龍、42玉、12龍、51玉、21龍、62玉、

61龍、73玉、72龍、84玉、83龍、95玉、
94龍、86玉、97龍、76玉、67龍、86玉、
87龍、95玉、96龍、84玉、94龍、73玉、
83龍、62玉、72龍、51玉、61龍、42玉、
41龍、33玉、32龍、24玉、23龍、35玉、
25龍、46玉、26龍、36香合、同龍、57玉、
58歩、同玉、38龍、57玉、58龍、46玉
（前頁途中図4）

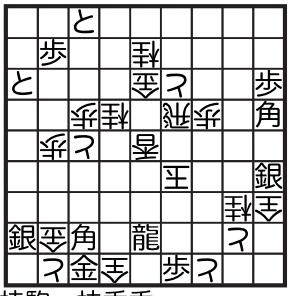
（途中図4より）
47龍、35玉、36龍、24玉、25龍、33玉、
23龍、42玉、32龍、51玉、21龍、62玉、
61龍、73玉、72龍、84玉、83龍、95玉、
94龍、86玉、97龍、76玉、67龍、86玉、
87龍、95玉、96龍、84玉、94龍、73玉、
83龍、62玉、72龍、51玉、61龍、42玉、
41龍、33玉、32龍、24玉、23龍、35玉、
25龍、46玉、26龍、36香合、同龍、57玉、
58歩、同玉、38龍、57玉、58龍、46玉（途中図5）

（途中図5　276手目46玉）



持駒　香香香

（途中図6　330手目46玉）

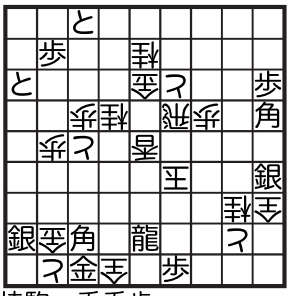


持駒　桂香香

（途中図5より）
47龍、35玉、36龍、24玉、25龍、33玉、
23龍、42玉、32龍、51玉、21龍、62玉、
61龍、73玉、72龍、84玉、83龍、95玉、
94龍、86玉、97龍、76玉、67龍、86玉、
87龍、95玉、96龍、84玉、94龍、73玉、
83龍、62玉、72龍、51玉、61龍、42玉、
41龍、33玉、32龍、24玉、23龍、35玉、
25龍、46玉、26龍、36桂合、同龍、57玉、
58香、同玉、38龍、57玉、58龍、46玉（途中図6）

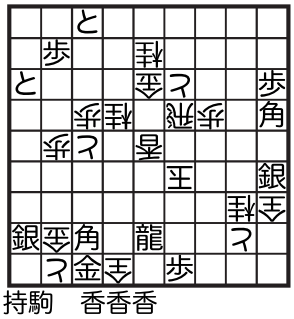
（途中図6より）
47龍、35玉、36龍、24玉、25龍、33玉、
23龍、42玉、32龍、51玉、21龍、62玉、
61龍、73玉、72龍、84玉、83龍、95玉、
94龍、86玉、97龍、76玉、67龍、86玉、
87龍、95玉、96龍、84玉、94龍、73玉、
83龍、62玉、72龍、51玉、61龍、42玉、
41龍、33玉、32龍、24玉、23龍、35玉、
25龍、46玉、38桂、同と引、26龍、36香合、
同龍、57玉、58香、同玉、38龍、57玉、
58龍、46玉（途中図7）

（途中図7　386手目46玉）



持駒　香香歩

（途中図8　440手目46玉）



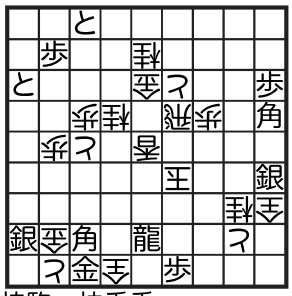
持駒　香香香

（途中図7より）
47龍、35玉、36龍、24玉、25龍、33玉、
23龍、42玉、32龍、51玉、21龍、62玉、
61龍、73玉、72龍、84玉、83龍、95玉、
94龍、86玉、97龍、76玉、67龍、86玉、
87龍、95玉、96龍、84玉、94龍、73玉、
83龍、62玉、72龍、51玉、61龍、42玉、
41龍、33玉、32龍、24玉、23龍、35玉、
25龍、46玉、26龍、36香合、同龍、57玉、
58歩、同玉、38龍、57玉、58龍、46玉（途中図8）

（途中図8より）
47龍、35玉、36龍、24玉、25龍、33玉、
23龍、42玉、32龍、51玉、21龍、62玉、
61龍、73玉、72龍、84玉、83龍、95玉、
94龍、86玉、97龍、76玉、67龍、86玉、
87龍、95玉、96龍、84玉、94龍、73玉、
83龍、62玉、72龍、51玉、61龍、42玉、
41龍、33玉、32龍、24玉、23龍、35玉、
25龍、46玉、26龍、36桂合、同龍、57玉、
58香、同玉、38龍、57玉、58龍、46玉
（次頁途中図9）

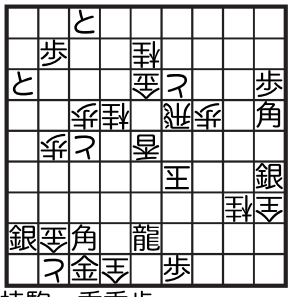
23龍、42玉、32龍、51玉、21龍、62玉、
61龍、73玉、72龍、84玉、83龍、95玉、
94龍、86玉、97龍、76玉、67龍、86玉、
87龍、95玉、96龍、84玉、94龍、73玉、
83龍、62玉、72龍、51玉、61龍、42玉、
41龍、33玉、32龍、24玉、23龍、35玉、
25龍、46玉、26龍、36桂合、同龍、57玉、
58香、同玉、38龍、57玉、58龍、46玉（途中図9）

（途中図9　494手目46玉）



持駒　桂香香

（途中図10　550手目46玉）

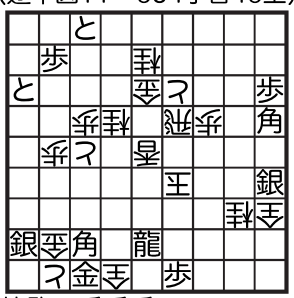


持駒　香香歩

（途中図9より）
47龍、35玉、36龍、24玉、25龍、33玉、
23龍、42玉、32龍、51玉、21龍、62玉、
61龍、73玉、72龍、84玉、83龍、95玉、
94龍、86玉、97龍、76玉、67龍、86玉、
87龍、95玉、96龍、84玉、94龍、73玉、
83龍、62玉、72龍、51玉、61龍、42玉、
41龍、33玉、32龍、24玉、23龍、35玉、
25龍、46玉、38桂、同と引、26龍、36香合、
同龍、57玉、58香、同玉、38龍、57玉、
58龍、46玉（途中図10）

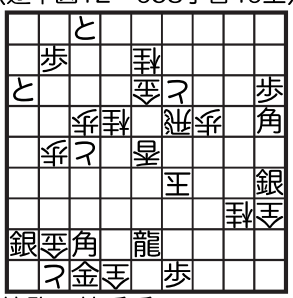
（途中図10より）
47龍、35玉、36龍、24玉、25龍、33玉、
23龍、42玉、32龍、51玉、21龍、62玉、
61龍、73玉、72龍、84玉、83龍、95玉、
94龍、86玉、97龍、76玉、67龍、86玉、
87龍、95玉、96龍、84玉、94龍、73玉、
83龍、62玉、72龍、51玉、61龍、42玉、
41龍、33玉、32龍、24玉、23龍、35玉、
25龍、46玉、26龍、36香合、同龍、57玉、
58歩、同玉、38龍、57玉、58龍、46玉（途中図11）

（途中図11　604手目46玉）



持駒　香香香

（途中図12　658手目46玉）

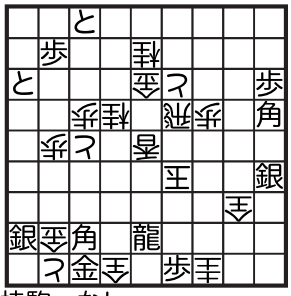


持駒　桂香香

（途中図11より）
47龍、35玉、36龍、24玉、25龍、33玉、
23龍、42玉、32龍、51玉、21龍、62玉、
61龍、73玉、72龍、84玉、83龍、95玉、
94龍、86玉、97龍、76玉、67龍、86玉、
87龍、95玉、96龍、84玉、94龍、73玉、
83龍、62玉、72龍、51玉、61龍、42玉、
41龍、33玉、32龍、24玉、23龍、35玉、
25龍、46玉、26龍、36桂合、同龍、57玉、
58香、同玉、38龍、57玉、58龍、46玉（途中図12）

（途中図12より）
47龍、35玉、36龍、24玉、25龍、33玉、
23龍、42玉、32龍、51玉、21龍、62玉、
61龍、73玉、72龍、84玉、83龍、95玉、
94龍、86玉、97龍、76玉、67龍、86玉、
87龍、95玉、96龍、84玉、94龍、73玉、
83龍、62玉、72龍、51玉、61龍、42玉、
41龍、33玉、32龍、24玉、23龍、35玉、
39香、同桂成、27桂、同成銀、25龍、46玉、
36龍、57玉、58香、同玉、38龍、57玉、
58龍、46玉（途中図13）

（途中図13　714手目46玉）



持駒　なし

（途中図13より）
47龍、35玉、36龍、24玉、27龍、33玉、

（途中図14より）
48龍、47歩合、同龍、35玉、36龍、24玉、
25龍、33玉、23龍、42玉、32龍、51玉、
21龍、62玉、61龍、73玉、72龍、84玉、
83龍、95玉、94龍、86玉、97龍、76玉、
67龍、86玉、87龍、95玉、96龍、84玉、
94龍、73玉、83龍、62玉、72龍、51玉、
61龍、42玉、41龍、33玉、32龍、24玉、
23龍、35玉、25龍、46玉、38桂、同成桂、
36龍、57玉、58歩、同玉、38龍、57玉、
58龍、46玉、47龍、35玉、36龍、24玉、
25龍、33玉、23龍、42玉、32龍、51玉、
21龍、62玉、61龍、73玉、72龍、84玉、
83龍、95玉、94龍、86玉、97龍、76玉、
67龍、86玉、87龍、95玉、96龍、84玉、
94龍、73玉、83龍、62玉、72龍、51玉、
61龍、42玉、41龍、33玉、32龍、24玉、
23龍、35玉、25龍、46玉、38桂、57玉、
55龍、56歩合、58香まで873手

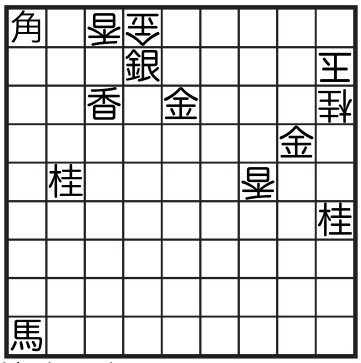
詰将棋を始めて間もない頃、友人が新扇詰の全手順解説が掲載された近代将棋を見せてくれた。あのときの衝撃は忘れられない。

それまでは、指し将棋の寄せの練習問題としての詰将棋本を買って解くくらいのことでしかなかったが、龍追いサイクルの進展とともに少しづつ、しかし着実に変わっていく状況は宇宙の脈動にも似て、その873手詰という圧倒的なスケールの前に、詰将棋の世界には、なにかしら悪魔的・呪術的な巨大な闇がある、と感じとった。還元玉なる業界用語？も初めて知ったが、これもまた、宇宙性を内包した闇の世界の様式美。作者の奥薗幸雄氏が、この作品にすべてを注ぎ込んで夭逝したということも、この作品の神話性をいや増している。

詰将棋では、これまで煙と長手数が2大テーマであったし、これからもそうだろう。新扇詰を知ってから、私もこの2大テーマについて無いアタマで考え始め、長手数よりはだいぶハードルの低い煙詰に落ち着いたのだが、煙詰は、最大駒数の初形・詰み上がり最小枚数という比較的易しい条件のテストであるのに対し、長手数ものは、記録更新そのものがテストである。これは、非常に難しい。

とまれ、新扇詰以降の長手数作品群は、恐ろしいほどの精緻な仕組みとは裏腹に、なにかしら作品自体の雰囲気はギネスブック的明朗快活なものを感じるのだが、その中にあって新扇詰のみ、輝ける闇ともいうべき異彩を放ち続けている。

③　　黒川一郎　「天馬」
詰将棋パラダイス　1968.4



持駒　歩18

89馬、11玉、12歩、21玉、
22歩、31玉、32歩、同玉、
98馬、22玉、88馬、12玉、
78馬、11玉、12歩、21玉、
22歩、31玉、32歩、同玉、
87馬、22玉、77馬、12玉、
67馬、11玉、12歩、21玉、
22歩、31玉、32歩、同玉、
76馬、22玉、66馬、12玉、
56馬、11玉、12歩、21玉、
22歩、31玉、32歩、同玉、
65馬、22玉、55馬、12玉、
45馬、11玉、12歩、21玉、
22歩、31玉、32歩、同玉、
54馬、22玉、44馬、12玉、
34馬、11玉、12歩、21玉、
22歩、31玉、42金、同玉、
33金、31玉、21歩成、41玉、
51銀成、同玉、61馬、同玉、
71香成、同玉、72金、同玉、
73角成、71玉、72歩、61玉、
63香、52玉、62馬、41玉、
31と、同玉、53馬、21玉、
43馬、12玉、24桂、11玉、
21馬、同玉、32桂成、12玉、
22成桂まで101手

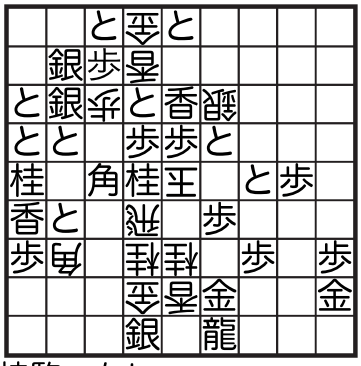
知る人ぞ知る、詰将棋浪漫派・黒川一郎氏の代表作。本作を、好きな一局として挙げるツメキストは多い。詰将棋に入ってまもなく出会ったこの作品からは、詰将棋には間違いなく「浪漫」があるのだ、ということを教えられた。

同氏の作品には、「落花」「嫦娥」など、いずれも「凄み」というよりは、なにか儚げな浪漫を感じさせる作品が多く、また、いずれの作品も、内容と命名がマッチしているのも同氏の特徴だろう。

持駒が、歩18枚というシチュエーションも好きで、私も「蛍火」という持駒歩18枚の成桂はがしの趣向作を作ったこともあり、私が主として長編を手がけるようになったのは、間違いなく黒川氏の影響である。

最近は、ネットで簡単にいろんな作品を鑑賞（解くのはもう無理…）することができるようになり、馬ノコ・長手数関連の作品についても目は通しており、現代の詰将棋の水準の高さには圧倒されるのだが、一瞬の香りを感じたり、浪漫を感じたりできる作品は、やはり紙媒体時代の作品である。毎月、ポストに詰パラが届くのを心待ちにしていた日々のことが懐かしく思い出される。

④　　駒場和男　「父帰る」
詰将棋パラダイス　1970.2



持駒　なし

45と寄、65玉、55と、同玉、
66角、同玉、57金、同玉、
58銀、66玉、78桂、同金、
67銀、同玉、79桂、同金、
68香、78玉、77飛、同玉、
79龍、87玉、85と、同玉、
84と、86玉、85と、同玉、
94銀不成、86玉、77金、97玉、
87金、同玉、65角、96玉、
85銀、同玉、76龍、95玉、
94と、同玉、83角成、同玉、
85龍、92玉、94龍、82玉、
73と、同玉、63歩成、同香、
同香成、同玉、64歩、73玉、
75香、82玉、81と、同玉、
71歩成、同金、同香成、同玉、
74龍、72角合、62金、同玉、
63歩成、同角、52香成、同角、
同と、同銀、53歩成、同銀、
同と、同玉、75角、43玉、
63龍、34玉、45銀、25玉、
23龍、24飛合、36銀、15玉、
16歩、同玉、27金、15玉、
26金、同飛、同龍、同玉
23飛、37玉、27飛成、46玉、
47龍、55玉、45龍まで103手

60年代後半から70年代初めというのは、今から振り返れば、世界的な文化・アート・音楽のルネッサンスの時代であったと思う。詰将棋においても、この頃、イノベーションがやたら連発されていて、詰パラを毎号読むたびに瞠目していたものだった。駒場氏は非常にアーティスティックな感性の持ち主で、長編専門。創作能力は私の及ぶところではないが、感性的にはおおいに共感できる作家であり、目標であった。

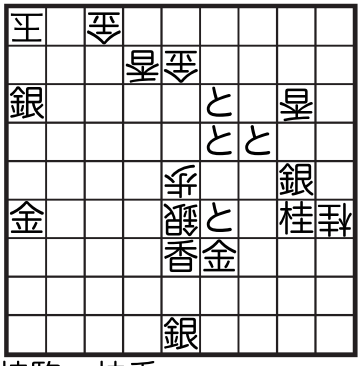
「父帰る」は、題名からして都煙であることは推察されたが、本当に還元玉で煙ってしまうとわかったときには、腰が抜けた。

煙詰に関して言えば、私も6局創作したが、現在の水準から言えば、ほとんど習作・駄作レベルである。しかし、その中でも1作だけ、「父帰る」の影響を受けて「と率天」という小奇麗な都煙を作った。レベルは「父帰る」に及ぶところではないが、都煙は数が少ないこともあり、ちょっとは駒場氏に近づけたような気がして、自分自身では愛着のある作品となった思い出がある。

よみがえる「北斗」と「長城」

森田拓也

森田拓也　「北斗」(version)
詰将棋パラダイス　1969.8



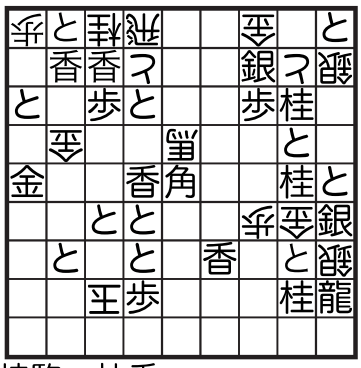
持駒　桂香

83桂、81玉、71桂成、同玉、
79香、①78歩合、同香、②77歩合、
同香、③76歩合、同香、④75歩合、
同香、⑤74歩合、同香、⑥73歩合、
同香不成、72歩合、82金、61玉、
72香成、51玉、52と、同と、
53金、41玉、42歩、31玉、
32歩、21玉、22歩、11玉、
12歩、同玉、23と、同玉、
34と、12玉、13歩、11玉、
12香、22玉、14桂、21玉、
22歩、32玉、43金、31玉、
21歩成、同玉、11香成、同玉、
22桂成、同玉、33金、31玉、
32歩、21玉、12歩成、同玉、
23と、11玉、22金まで63手

(変化)
①77歩合は82金、61玉、62と、同玉、43と右、
63玉、53と入、64玉(73玉または74玉は77香
以下)、55と、75玉、86金打、66玉、56と、同歩、
同金、67玉、58銀打まで
②76歩合は82金、61玉、62と、同玉、43と右、
63玉、53と入、64玉、55と、75玉、86金、66玉、
76金、67玉、77金まで
③75歩合は82金、61玉、62と、同玉、43と右、
63玉、53と入、74玉、85金打、65玉、56と以下
④74歩合は82金、61玉、62と、同玉、43と右、
63玉、53と入、73玉、84金打、64玉、55と以下
⑤73歩合は82金、61玉、62と、同玉、43と右、
63玉、54金まで
⑥72歩合は82金、61玉、72金、51玉、52と、同
玉、62金、同玉、53金以下

当時、短中長編20局ほどを創作したが、その
中で、真にイノベーティブな作品と呼べるものは
本作だけである。
残念ながら、発表後しばらくして、不詰手順が
発見されたのだが、今回、若島氏の好意により修
正・発表の機会を頂いたことは感謝に堪えない。
歩７連合については、山中龍雄の飛車による
横の歩７連合が初出であり、私も初めから、当時
誰も達成できていなかった縦の歩7連合を狙っ
た。「玉方が香車の頭に歩を叩いて中合していく
のだが、1回でも中合いをサボると、後の変化で、
玉方が香車を取りつつ斜めに逃げることができ
なくなる。」というプロットを発見したときの
「やった！」という感覚は今でもはっきりと覚えて
いる。また、7連合の仕組みは小駒だけで作れる
とわかったことも収穫であった。
大作とはとても呼べない小品ではあるが、詰
将棋史の中になんとか生き残っていってほしい
ものである。

森田拓也　「長城」(version)
近代将棋　1975.9



持駒　桂香

77と引、69玉、29龍、58玉、
38龍、59玉、39龍、58玉、
57と、同玉、67と引、58玉、
57と、同玉、66角、58玉、
48龍、69玉、49龍、68玉、
78と、同玉、58龍、87玉、

67龍、86玉、77龍、95玉、
84角、同玉、94と、同玉、
74龍、93玉、94金、92玉、
91と、同玉、81香成、同玉、
71香成、同飛、93桂、91玉、
92歩、同玉、83金、91玉、
81桂成、同玉、72歩成、同と、
同と、同馬、82歩、同馬、
同金、同玉、71龍、同玉、
93角、82歩合、61飛、72玉、
62飛成、83玉、82龍、74玉、
84龍、65玉、75龍、56玉、
66龍、47玉、57龍、38玉、
48龍、29玉、39龍、18玉、
17と、同玉、18歩、同玉、
27銀打、同金、同銀、同玉、
36龍、18玉、29金、同玉、
39龍、18玉、19歩、36玉、
36龍、28玉、82角成、29玉、
83馬、28玉、73馬、29玉、
74馬、28玉、64馬、29玉、
65馬、28玉、55馬、29玉、
56馬、28玉、46馬、29玉、
47馬、19玉、39龍、18玉、
29龍、17玉、16と、同玉、
38馬、15玉、14と、同玉、
13桂成、同玉、12と、同玉、
11桂成、同玉、12銀、同玉、
56馬、11玉、22龍、同金、
12歩、同金、同馬、同玉、
23金、11玉、21銀成、同玉、
32歩成、11玉、22とまで151手

高校３年の頃に作りかけていた最後の煙詰の題材があった。馬ノコが入るプロットを見つけたのである。通常の煙詰は、詰みあがりからの逆算で作図していくが、本局は、最初に中盤を作り、次に終盤、最後に序盤を作っていった。

この頃、詰パラに投稿すべく、当時「大学院」の編集を担当しておられた若島氏に検討をお願いし、同氏から丁寧な検討結果の手紙をいただいたことがある。

しかし、受験等で作図は中断し、不完全なまま2年ほど忘れていた。

73年に上京、大学入学とともに詰将棋からは遠のいてしまっていたのだが、ある日急に本局のことを思い出し、仕上げる気になった。詰パラの購読も止めていたので、近代将棋に投稿することにした。当時150手超の煙は無かったので、長手数記録達成、と悦に入っていたのだが、序盤でごく簡単な早詰めがあり、あえなく討ち死に。更に何十年か過ぎて、今回、修正の機会を頂いたわけであるが、修正作業開始時は、作図能力がほとんどゼロにまで落ちている中で、またもや若島氏に助けていただき、何回かのメールのやりとりでやっと修正完了、冷や汗ものであった。　出来上がってみると、馬ノコ部分より、序盤のフワフワした龍追い部分のほうが気に入っている。

当時の作風としては、あまりに変化・紛れ・伏線の多い難解作は好みではなく、「スカッと解けて、解後感がいい」「初形が綺麗」ということにこだわっていた。でも長編が好きで大作志向というのは形を変えながらずっと続いている。

詰将棋引退以降は、何をやっていたかというと、実は、ずっとロックにかかわってきた。プロとしてやっていた時期もあるが、現在は、Quaserというプログレバンドで、インディーズとして活動している。楽曲の志向も、詰将棋の作風とよく似ており、長大作志向である。もうすぐ新作アルバムも発表されるので、機会があればぜひ聴いて頂きたい。

最後になったが、今は亡き鶴田主幹や天外先生にも一度お会いして、当時のご指導についてのお礼を言いたかったが、果たせなかった。紙面を借りて、ご冥福をお祈りするとともに、詰将棋界の先人としての偉業をたたえたい。

第３部

オールタイム・ベスト詰将棋

企画１　ライバルを語る

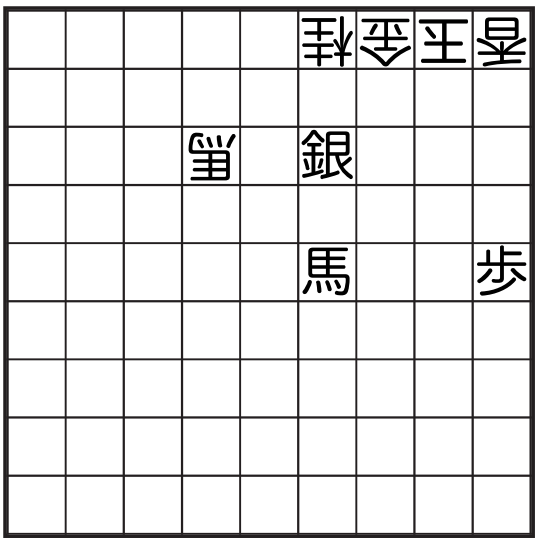
企画２　解答者登場！

企画３　作家論

高坂研が選んだ　市島啓樹ベスト4局

①　市島啓樹

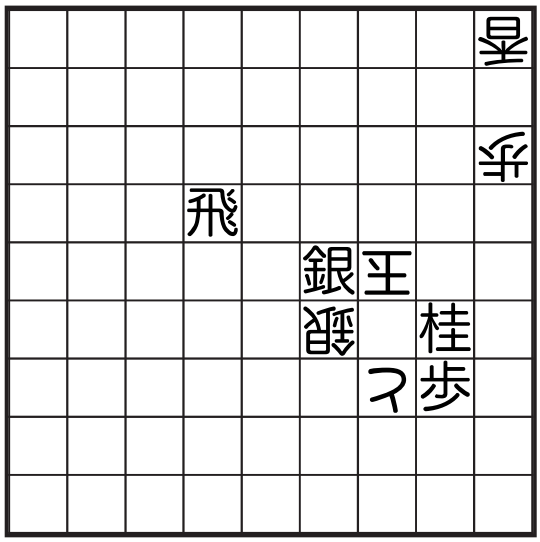
詰将棋パラダイス　1996.7



持駒　飛金香

②　市島啓樹

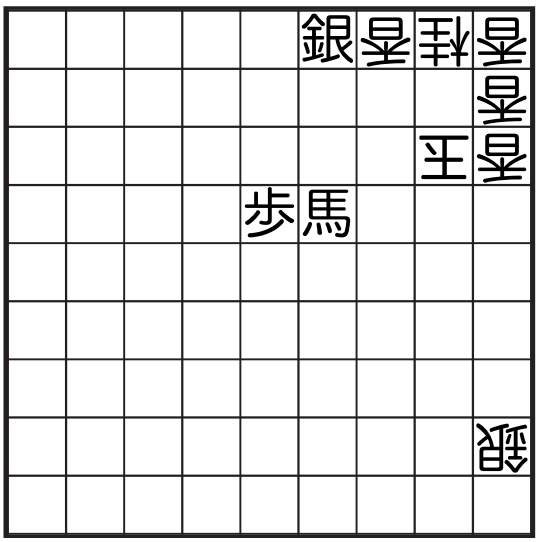
近代将棋　1996.3



持駒　飛角

③　市島啓樹

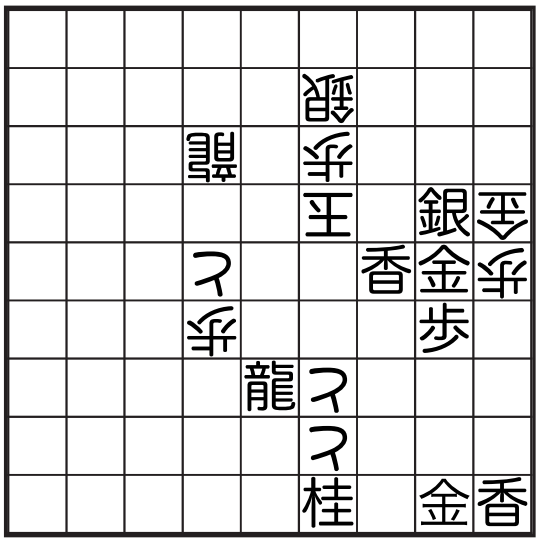
詰将棋パラダイス　1998.12



持駒　飛角

④　市島啓樹

詰将棋パラダイス　1997.11

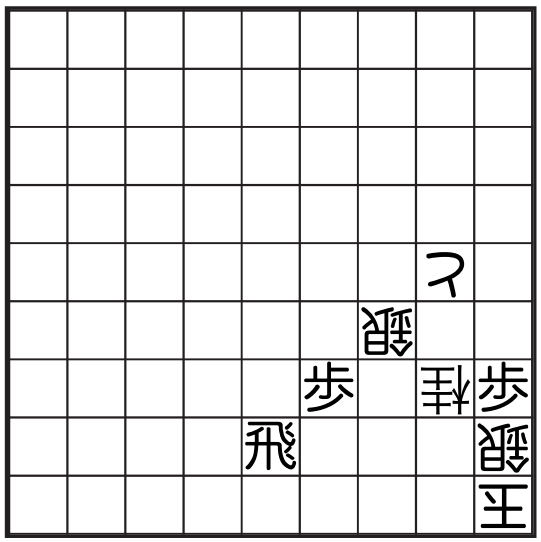


持駒　角角

市島啓樹が選んだ　高坂研ベスト４局

①　　高坂　研

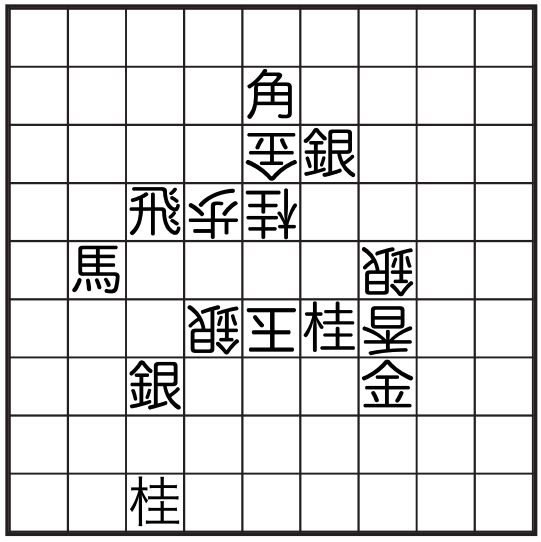
詰将棋パラダイス　1994.9



持駒　角金金金

②　　高坂　研

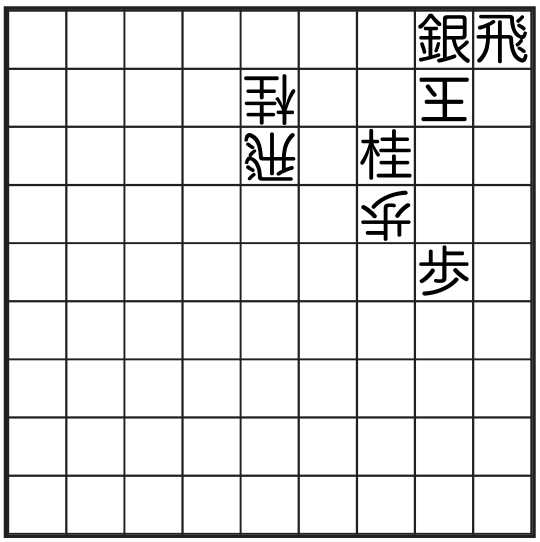
詰将棋パラダイス　2002.9



持駒　飛

③　　高坂　研

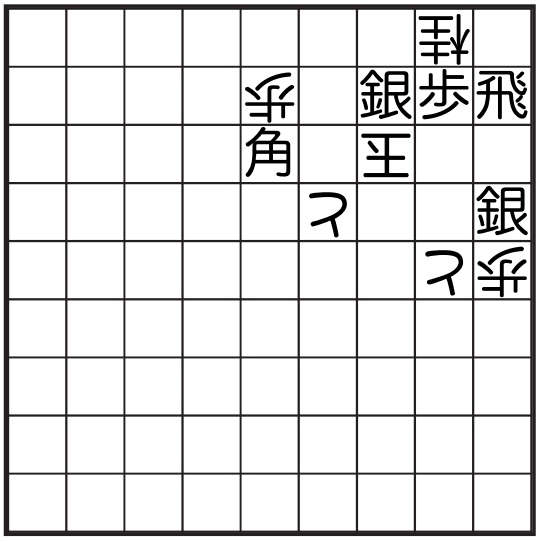
詰将棋パラダイス　2005.9



持駒　角角

④　　高坂　研

詰将棋パラダイス　2005.6

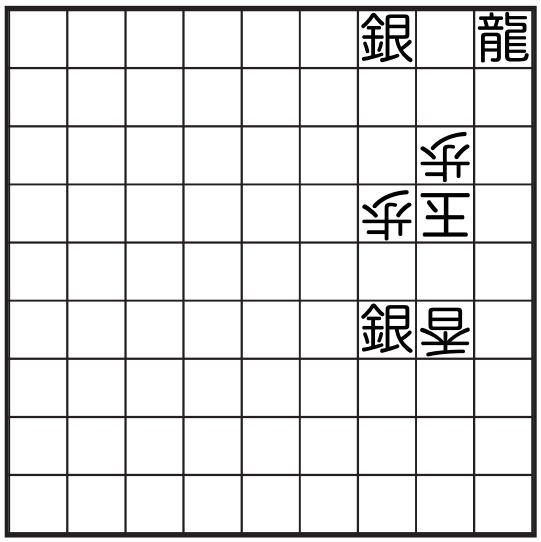


持駒　角金香

秋元節三の《好きな4局》

①　　改発　徹

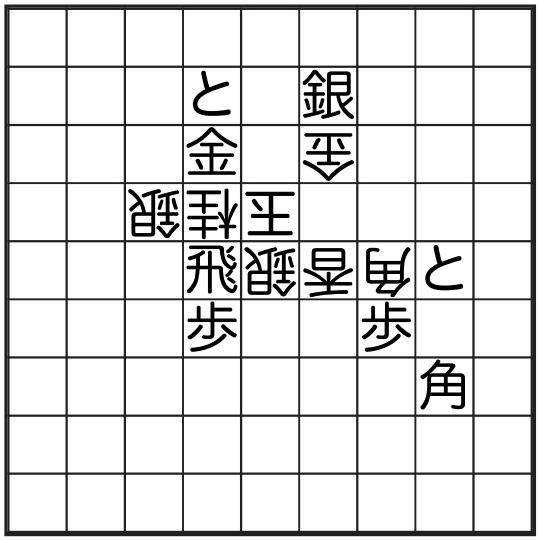
詰将棋パラダイス　1957.6



持駒　金銀香

②　　深和敬斗

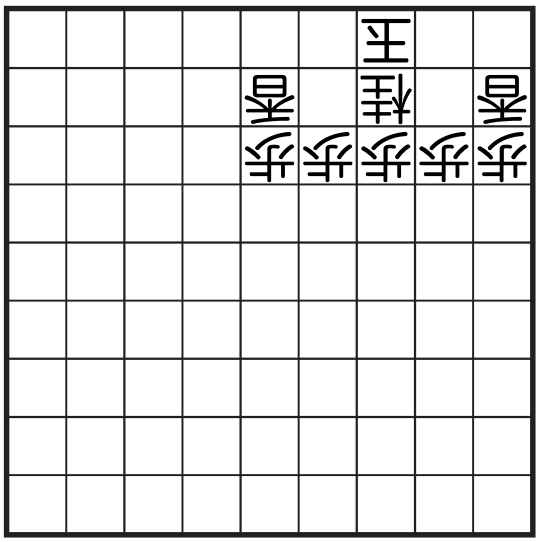
詰将棋パラダイス　2009.7



持駒　飛

③　　山田嘉則

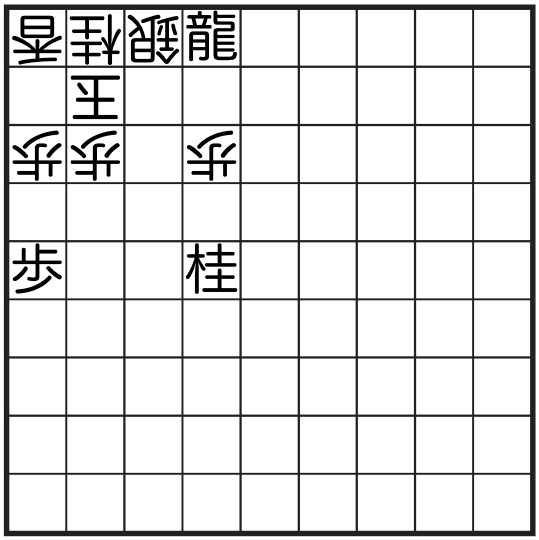
詰将棋パラダイス　1983.10



持駒　角角金金銀銀桂桂

④　　塚田正夫

将棋世界　1939.5

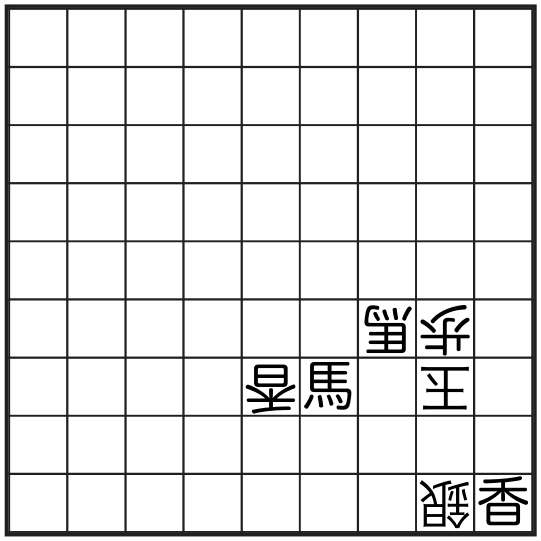


持駒　金金金

小林敏樹が選んだ　小川宏ベスト８局

①　小川　宏

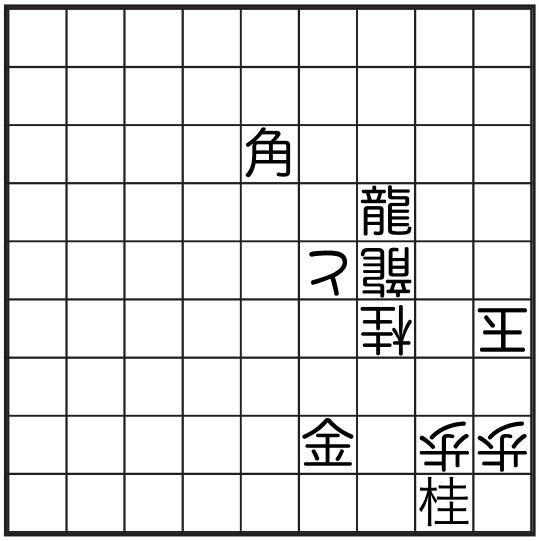
詰将棋パラダイス　1961.1



持駒　飛金銀

③　小川　宏

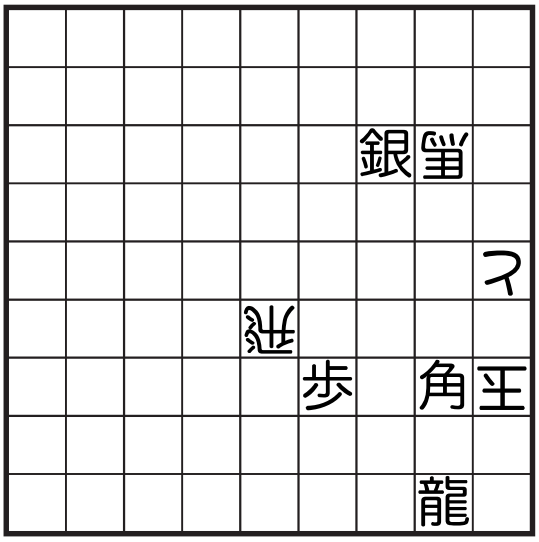
詰将棋パラダイス　1962.3



持駒　銀

②　小川　宏

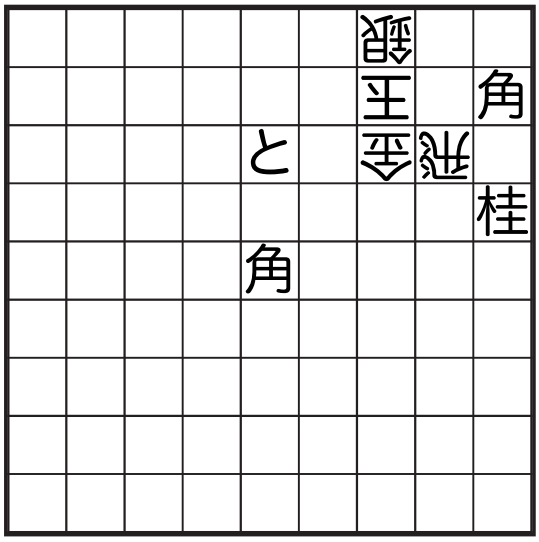
詰将棋パラダイス　1961.3



持駒　金銀

④　小川　宏

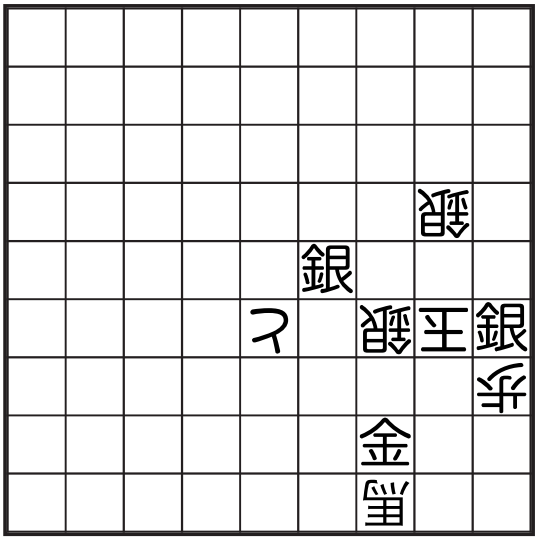
詰将棋パラダイス　1966.1



持駒　金桂

⑤　　小川　宏

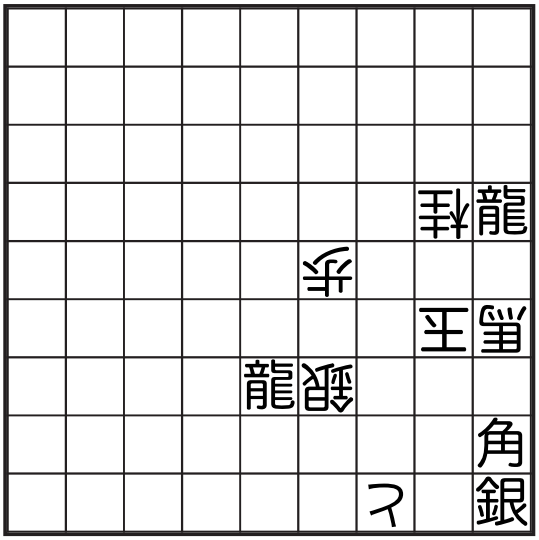
詰将棋パラダイス　1967.2



持駒　飛飛角

⑦　　小川　宏

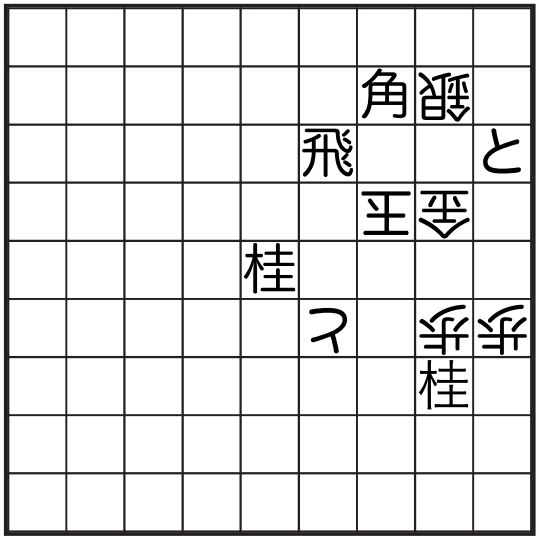
詰将棋パラダイス　1967.9



持駒　金金

⑥　　小川　宏

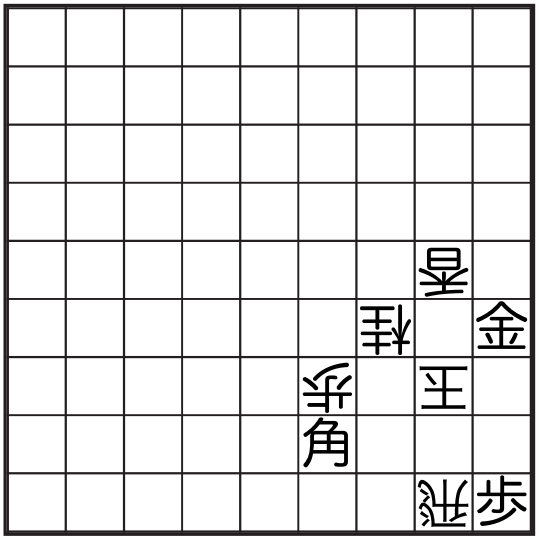
詰将棋パラダイス　1967.3



持駒　金

⑧　　小川　宏

詰将棋パラダイス　1960.11

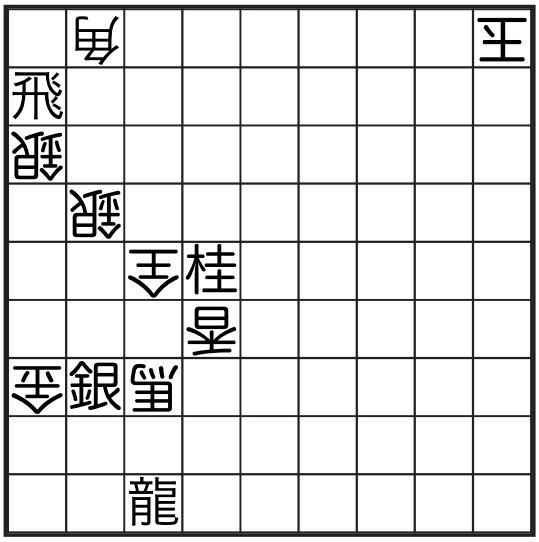


持駒　飛角金

伊藤正が選んだ　OT松田ベスト４局

①　OT松田

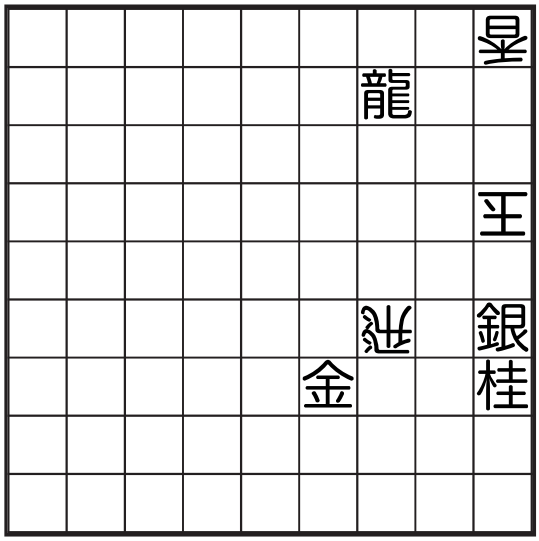
近代将棋　1971.8



持駒　歩歩歩

②　OT松田

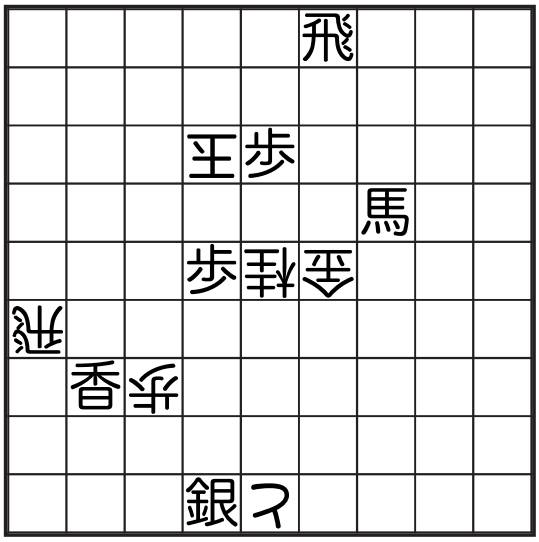
近代将棋　1972.7



持駒　香歩歩

③　OT松田

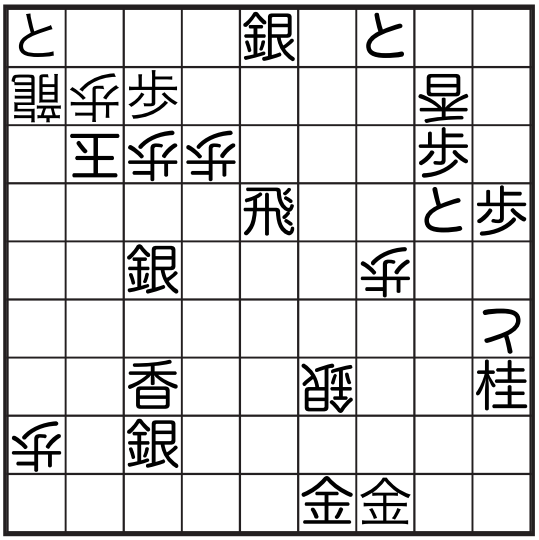
近代将棋　1975.6



持駒　歩歩

④　OT松田

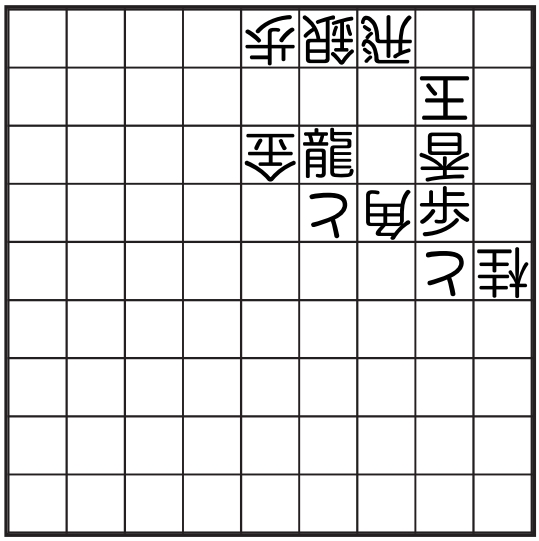
近代将棋　1970.3



持駒　香歩

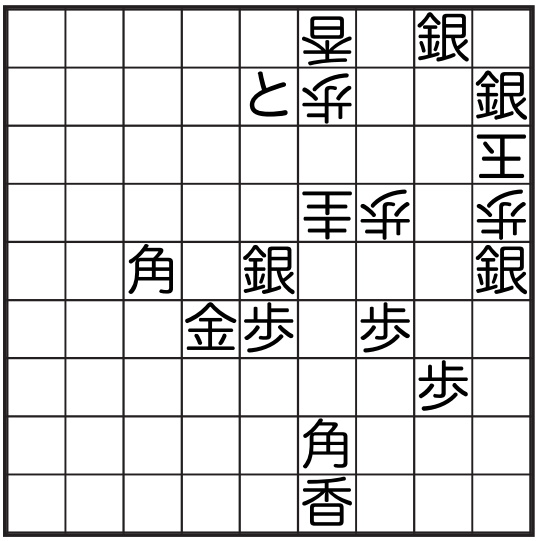
若島正が選んだ　高木秀次ベスト8局

①　高木秀次
詰将棋パラダイス　1966.10



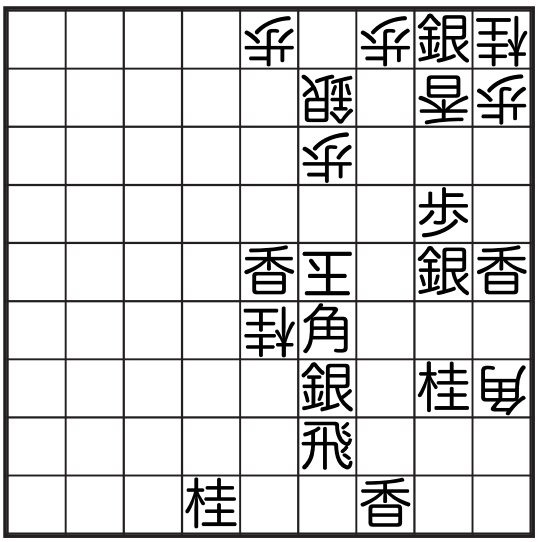
持駒　金3銀2桂2

③　高木秀次
詰将棋パラダイス　1965.3



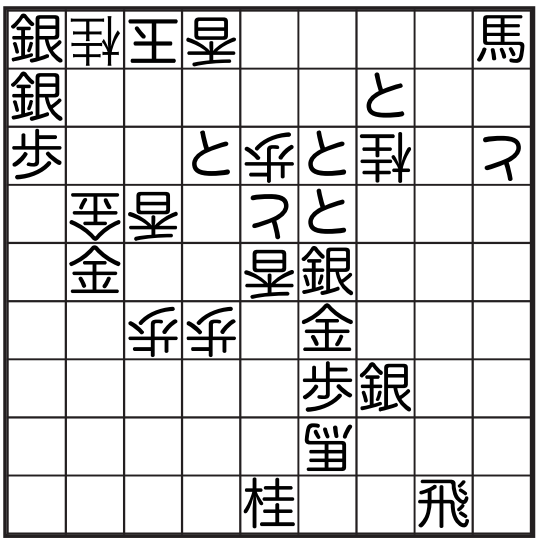
持駒　桂桂桂

②　高木秀次
詰将棋パラダイス　1964.11



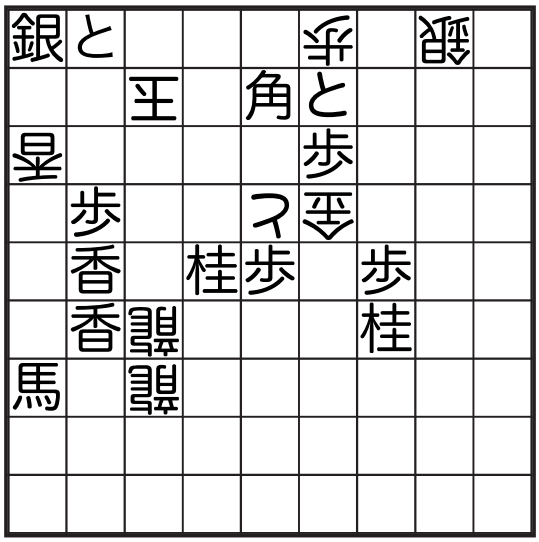
持駒　歩5

④　高木秀次
詰将棋パラダイス　1955.9



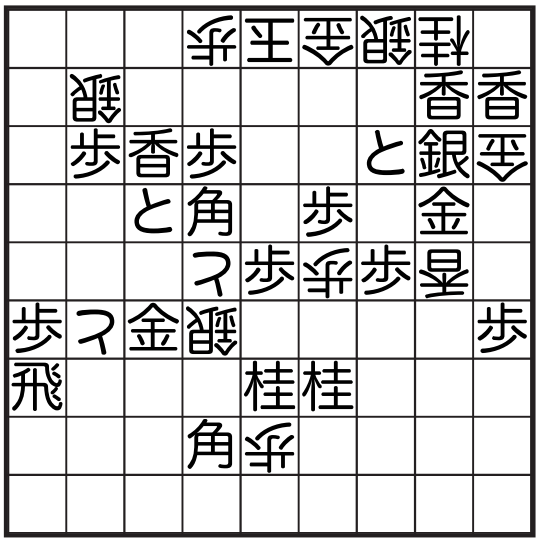
持駒　桂歩6

⑤　　高木秀次
詩将棋パラダイス　1957.5



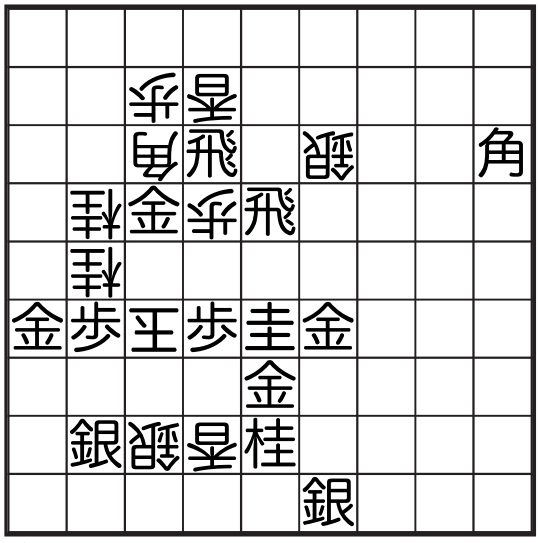
持駒　桂歩歩

⑦　　高木秀次
詩将棋パラダイス　1966.4



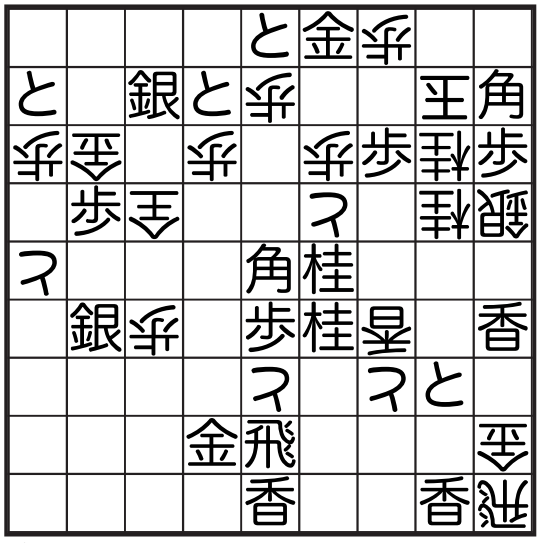
持駒　桂歩４

⑥　　高木秀次
詩将棋パラダイス　1966.8



持駒　なし

⑧　　高木秀次　「千早城」
詩将棋パラダイス　1963.2



持駒　なし

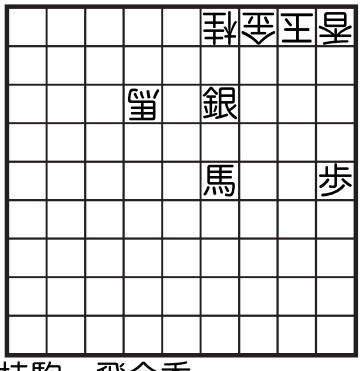
ライバルを語る

高坂研が選んだ
市島啓樹ベスト4局

今回「ライバルを語る」という企画を提出する際「では自分のライバルは…？」と考えたときに、最初に思い浮かんだのは市島氏だった。しかし本当のところ、氏はライバルという以前に詰将棋という共通の趣味を持つ畏友であり、同時に私の大好きな詰将棋作家の一人である。それに、作家として氏の方が遥かに上であることは、みなさんも先刻ご承知のことだろう。

ということで、以下ではライバルというよりも純粋なーファンとして氏の作品を解説してみたいと思う。読者の方々は、できればこの拙文を読む前に是非自力で解図してみて欲しい。どの作からも、良質のパズルを解いたときに感じるあの心地良い疲労感と満足感が得られることを私が保証しよう。

①
詰将棋パラダイス　1996.7



持駒　飛金香

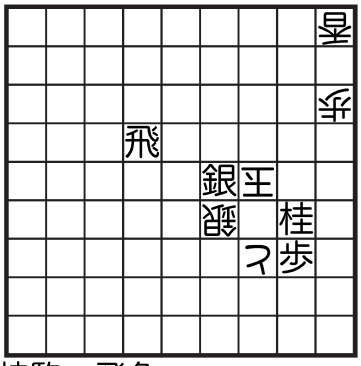
24香、22桂合、同香成、同金、
12馬！同香、31飛、同玉、
23桂、同金、32金まで11手

他に手もないところとはいえ、初手24香は指し難い。中合も出そうだし、合駒されても詰みそうにないし、解答者心理として一番やりたくない手ではないだろうか。ここで22歩合なら12金、同香、同馬以下、又23歩中合なら32金、同金、同銀成、同玉、22飛以下という変化を読まされた上で、やっと合駒が桂に確定する。(22歩合の変化中14飛を防いでいる)

その桂を奪ってからが見せ場だ。その後の展開が全く見えずに、取ったばかりの桂を打ってみたり飛を打ってみたりと散々紛れの森を彷徨ったあげくに12馬を発見した解答者は、思わず快哉を叫ぶことだろう。それにしても、何という重量感のある馬捨てであろうか！

大袈裟に言えば詰将棋の永遠のテーマともいえる「捨駒」。本作は、その表現に真正面から取り組んで成功した稀有の例と言えよう。

②
近代将棋　1996.3



持駒　飛角

33飛、25玉、34角、35玉、
12角生、25玉、36銀、同と、
34角生、15玉、13飛生、同香、
16歩、24玉、43角成、23玉、
24飛、同玉、34馬まで19手

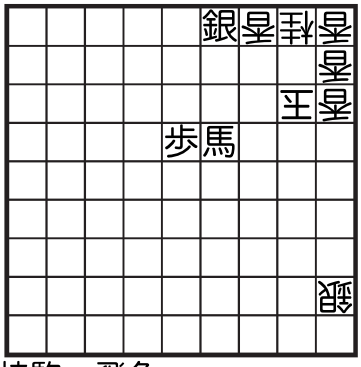
初手33飛は13歩に当ててまずは妥当な着手だし、続いて34角の短打も15玉の変化を見越した味の良い手。しかし35玉とされると、手は限られているのにその後の展開がなかなか見えてこない。角を成ると34馬に15玉で打歩が打開できず、かといって不成で開いても34角にまた35玉と潜られる。

しばし堂々巡りをした後に、局面打開のキーとなる手が36銀であることに気付いた瞬間が解図の醍醐味というものだろう。この手の意味付けがすぐには分からないところに、本作の値打ちがある。もしこれが56角と引く為だったりしたら、こんなにも感動しなかっただろう。

12角生として香筋を消しておいて36銀から34角生と戻れば、今度は15玉の一手。(35玉なら43角成、45玉に34馬が成立するのだ！)後は、飛を2枚とも消す理想的な纏め。これだけのことをたった盤面9枚で実現させた手腕は見事という他ない。完成度という点では氏の中編の中でも屈指の作。

③

詰将棋パラダイス　1998.12



持駒　飛角

32角、同香、同銀生、14玉、
16香、15角合、同香、同玉、
24角、14玉、13角成、同香、
16香、15角合、同香、同玉、
24角、14玉、13角成、同香、
16香、15角合、同香、同玉、
24角、14玉、13角成、同桂、
16香、15歩合、23銀、同玉、
22飛、14玉、15香、同玉、
33馬、16玉、17歩、同玉、
44馬、16玉、26馬まで43手

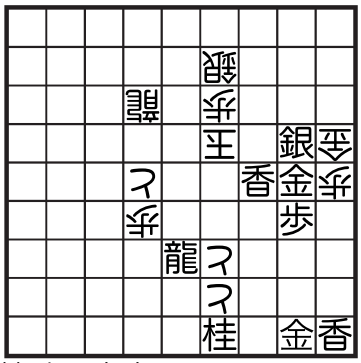
市島氏は一般に「構想派の短・中編作家」として認識されているが、その他にも趣向作、曲詰、そして煙詰まで、実に様々な分野で作品を残されている。要するになんでもござれのオールラウンドプレイヤーなのであり、その守備範囲の広さには驚く他ない。しかも、どの分野においても作品の質は非常に高い。まあ、作者が市島啓樹なのだから、当然といえば当然なのだが。

例えば本作のような軽趣向においても、作者はその技巧の冴えを随所に見せてくれる。殆ど仕掛けらしい仕掛けも見当たらない中空で、突如として始まる香剥がしは意外性十分。しかも24角が捨駒になっているのはポイントが高い。21桂が跳ねると玉方は合駒を角から歩に変えざるを得なくなり(角合は同香、同玉、33角以下)、以下自然な収束を迎える。

こういう作品を見ていると、必要以上に複雑化せずとも面白い趣向はまだまだあるのだなと再認識させられる。パラ発表時の担当者山下氏が仰るように「緊張感のある面白い手順を繰り返す」ことで、8手1サイクルの本作が手数が長いだけの凡百の趣向作よりもずっと魅力的なものになっているのだから。私は氏が、今後こういった趣向作に本腰を入れてくれることを密かに期待している。

④

詰将棋パラダイス　1997.11



持駒　角角

34金、45玉、44金、同玉、
71角、53龍！同角成、同銀、
45飛、同玉、23角、34飛合、
同角成、36玉、37飛、26玉、
15銀、同金、36飛、同玉、
37歩、26玉、66龍、同と、
27歩、同玉、45馬、26玉、
36馬まで29手

これまでの3作をご覧になった方は、もしかすると市島氏が盤面枚数を気にするタイプなのだと思われたかもしれない。しかし、本作を見て頂けばそれは誤解だということが納得できるに違いない(笑)。

勿論「全く気にしない」ということはないだろうが、氏は何よりもまず狙いや構想を実現する為に創作する作家である。その作風は収縮型というよりも拡張型であり、そのことは本作をご覧

になれば、容易に納得して頂ける筈。

まず25金を消去するのは、後で23角と打つ際に14金を質にみる為の軽い伏線。問題は71角に対する合駒だ。ここで普通に歩合などとすると、同角成、同龍、45歩、同玉、23角と進み、34歩合としても同角成、36玉、37歩、26玉、66龍、同と、27歩で簡単に詰んでしまう。

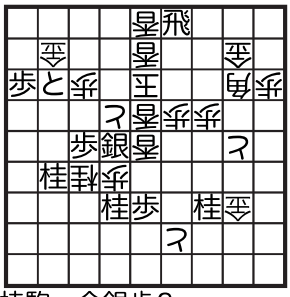
これは明らかに作意ではないが、では一体どこがおかしかったのだろうか？

丹念に調べてみると、53合が何であっても先手は取った駒を直後に45に捨てざるを得ないのに気付く。この事実と打歩誘致の不利合駒がリンクしたとき、正解がひらめく筈だ。そう、7手目は53龍なのだ！わざと攻方に飛を渡し、その飛を45に捨てさせ、更に23角に対して34飛合と捨合をする。作者が言うところの「不利合駒の為の不利合駒」だ。この一連の玉方の深謀遠慮によって37飛、26玉の形は見事に打歩詰に導かれている。

その後は飛を歩に打ち換えて手際よく収束し、全体を通して間然するところが全く無い。本作は、構想作の一つの理想形と言っても過言ではないだろう。

ちなみに、この種の玉方の不利移動合は上田吉一氏の名作「積分」での紛れ順中38金という手がオリジナルではないかと思われる。その後同様の筋を表現した作品の中では原亜津夫氏の作品が出色であり、本作はこれらに更に捻りを加えた構成になっている。好事家は是非ご研究を。

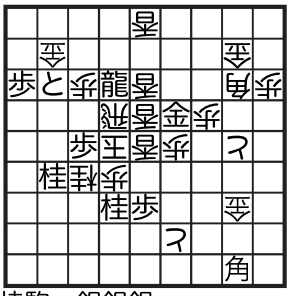
#1　　上田吉一　「積分」
詰将棋パラダイス　1974.1



持駒　金銀歩3

作意は45桂、同歩、44金、62玉、74桂、同歩、53銀…と進む。

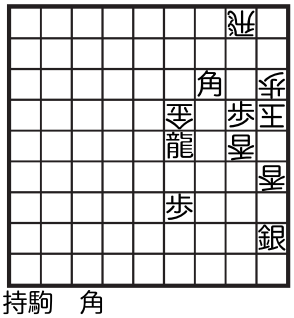
（5手目74桂を省略して進めた局面）



持駒　銀銀銀

5手目74桂を省略して作意どおり進めると、上の局面で29角と打ったとき、作意順のように38とではなく38金とされ、以下同角、同と、64龍、同玉、62飛、63銀、65金、同玉、63飛成、64金で逃れる。

#2　　原亜津夫
詰将棋パラダイス　1998.5



持駒　角

32角、23飛、同角成、15玉、
14馬、同玉、15飛、同玉、
23歩成、26玉、46龍、36飛合、
44角成、15玉、33馬、同飛、
16龍、同玉、17金、15玉、
16香まで19手

【補足】

或いは、これを読んで初めて、市島啓樹という作家を知ったという方がいらっしゃるかもしれない。そういう方は、是非氏のＨＰを覗いてみて欲しい。詰将棋を中心としたブログは読み応え十分だし、氏の作品集も入手できる。URLは以下の通り。

「冬眠蛙の冬眠日記」
http://sleepingfrog.air-nifty.com/diary/

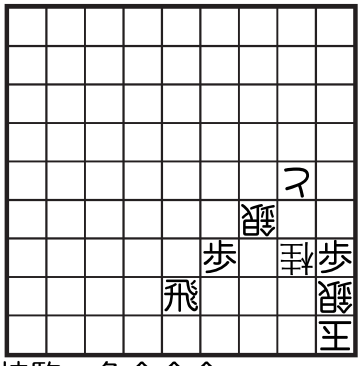
ライバルを語る

市島啓樹が選んだ
高坂研ベスト４局

　ひょんなことから親友である高坂研氏の作品４作を選び、解説することとなった。あらかじめ断わっておきたいが、彼のこととなるとどうしても、作品以外の交流等も含めて書いてしまうだろう。作品の詳細な解説を期待している読者には、何とぞひとりよがりをお許し願いたい。

①

詰将棋パラダイス　1994.9



持駒　角金金金

29金、同銀生、28角、18玉、
19金、同桂成、39角、38銀成、
同飛、27玉、28飛、17玉、
26銀、同と、18飛、同玉、
28金まで17手

　自分のブログをはじめ、あちこちに書いていることだが、私が詰将棋に熱中しだしたのは社会人になる直前であり、初めて購入した詰パラは平成４年12月号だった。したがって、私的には「作家　高坂研」よりも先に、「大学解説者　高坂研」。その熱い解説は詰将棋を始めたばかりの私を虜にした。良い作品を選び、その良いところを的確な表現で褒めること。簡単なようでとても難しい作業であるのは、解説を経験した方なら誰も感じていることだろう。彼はそれを当然のことのようにこなしていた。

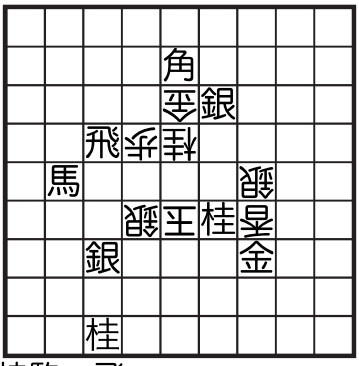
　その後、折に触れて彼の作品（主に短編）に触れるようになる。当然ながら作家としても私より先輩だった彼は、既に自分の作風を確立していた。解いて感じたのは「私のとはだいぶ違うなあ」ということ。舞台が大掛かりになっても、狙いと手順にこだわる私には、彼のシンプルさを基調とした作品は新鮮で美しく感じた。

　たとえば本作。それらしい紛れも変化もあるにはあるが決して多すぎるというほどでなく、無理な序を入れて主題の移動中合を霞ませたりすることもない。そして、その主題を使った舞台装置をもとにベストと考えられる収束をもってくる。こういった全体的な配慮が最上の解後感をもたらしている。

　作家の方なら誰でもご存知だろうが、作品が難しくないからといって、創作も簡単なのかというとそうではない。本図についても、作者はいくつもの配置案を試した上でこれを選んだはずだ。ちなみによく「ついていた」「運が良かった」等と創作の感想を書く作家が多いが、大抵の場合、それは人一倍の努力があってこそ、であることを忘れてはならない。

②

詰将棋パラダイス　2002.9



持駒　飛

55飛、同玉、66銀、同桂、
75飛、65銀合、同飛、同歩、
54銀成、同金、64銀、同金、
56銀、同玉、67馬、55玉、
45馬、同玉、34角成、55玉、
67桂まで21手

　あぶり出しの「N」。

　彼は手製作品集（詰将棋おもちゃ箱の懸賞問題の賞品となっている）に収録の「ヒ」の字のあぶ

り出し作品の解説で、『注文制作で無い限り、収束形を先に設定して後から字を当てはめるという作り方は案外巧い方法なのかもしれない』とちょっとズルいことを書いている。ただし、本作は間違いなく注文制作である。注文した張本人が書いているのだから間違いない。注文の経緯については話すと長くなってしまうので、発表誌の詰パラH14年9月号およびその結果稿掲載のH15年1月号をご覧いただければ、と思う。

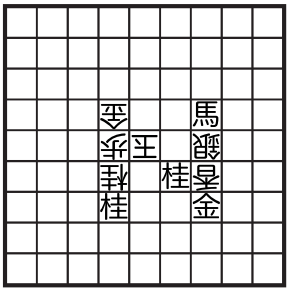
本作の手順構成は完璧な起承転結型。解いたときは「転」の部分のあまりの鮮やかさに、しばし言葉が出なかった。「承」の部分で合駒読みに始まって、64地点を埋めるまでのやり取りの繊細さが、「転」の部分をよりダイナミックに見せている。ぜひ初見の方はぜひ盤に並べて感じ取っていただきたい。

「起」の飛捨ても申し分のない手触りだが、投稿時の原図には入っていなかったものを、本人が根性で実現させたもの。原図でも素晴らしいレベルだっただけに、推敲に対する姿勢に「このレベルでもまだ物足りなかったのか」と、とても感心した記憶がある。

ちなみに高坂氏は当時創作活動を休んでいたのだが、この催しで復帰。完全に離れていた、というわけでもないだろうが、高坂氏復帰のきっかけを作ったことは、私の数少ない自慢のひとつとなっている。

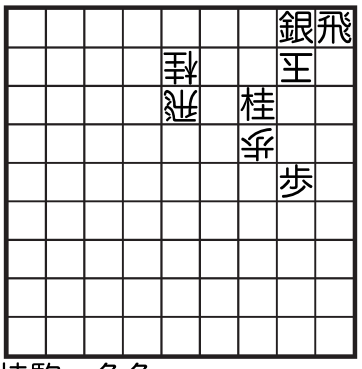
なお、36香配置は作意順には関係ないが、余詰防止のために必要。ちょっと驚く順であるので、必要性を各自確認されたし。ちなみに歩では駄目である。

(詰めあがり)



③

詰将棋パラダイス　2005.9



持駒　角角

13角、33玉、22角成、同玉、
44角、33飛、12飛成、31玉、
53角成、同飛、32銀成まで11手

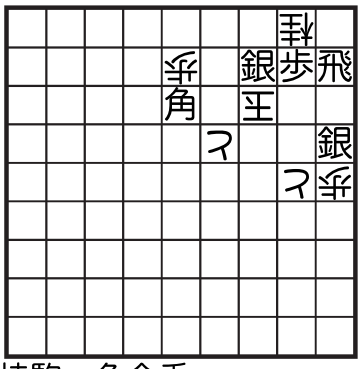
・12飛成と追ってしまうと33玉で44へのルートが広く捕まらない。
→・44を塞げば詰む。
→・角捨てで塞ぎたいが王手にならない
→・33桂が邪魔駒だ！

明快な論理だ。フツーに邪魔、というだけでなくて、消すことで決め手となる捨駒が出る、という構成が美しい。消し方がまた緊張感があっていいではないか。22角成に43玉の変化を調べて「こういうオイシイ手順がよく簡単に入るもんだ」と感じたのは私だけではないだろう。

更に44角で終了、というわけではなくて、それに対して取らずに33飛と移動合するのがまたなんとも言えない味の良さ。見事なものだ。

『素材自体はありふれていても良い。ただし、仕立てはすっきりと。これがスローガンだ。オリジナリティよりも教育的な価値を優先させるが、「一般向けだから合駒は入れない」などとは考えない。その代わり、できるだけ夾雑物を取り除いて純度を高めることを試みた』という作者の言葉には、本作に対する愛着と自信が窺われる。”誰にでも好かれる作品”という意味で、まさしく「好作」。

④
詰将棋パラダイス　2005.6



持駒　角金香

35香、同と寄、13飛成、同桂、
34金、32玉、23銀成、41玉、
32成銀、同玉、14角、22玉、
23金、21玉、31角成、同玉、
32金まで17手

高坂氏は現在、「詰将棋パラダイス」の推理将棋コーナーの選者をつとめている。おそらく読者の9割以上はルールも全く知らなかった（私もそうだった）推理将棋が、現在は解答者50名を超える人気コーナーとなっているが、これは高坂氏の熱意によるところが非常に大きい。

氏はその推理将棋の解説で、あるべき姿として「条件が有機的に絡み合うことで論理的に作意が導き出せる」ということを挙げており、「解いて貰えないのでは仕方がない。推理将棋ではより解き易いように条件設定するのも一つの技術」と説いている。無論そのまま、というわけには行かないが、詰将棋にも当てはまる部分が多いのではないか、と思う。

上部を塞ぐ焦点への香捨てから始まり、色々と紛れを読まされてから、飛を捨てれば34金が成立することに気付いて作意に入った感触を掴める。だが、この作者は期待どおり、というだけでは満足しない。34金を取らせてオシマイにはせず、32銀を取る手を作意に設定することで、34金を成立させた舞台装置を綺麗に捌ききる。焦点捨てで打った金が更に2回動いて詰上がる、この感触の素晴らしさは、まさしく氏ならではの世界だろう。

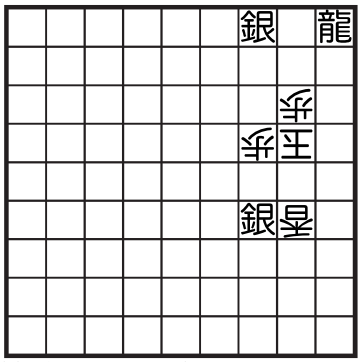
詰将棋の価値観は人それぞれであり、近年は更にその多様化に拍車がかかっているように感じる。しかし、解答者の存在を意識し、初形や手順、収束にいたるまで細やかな配慮を行なうことを是とする氏の創作姿勢こそ、詰将棋の本道であってほしい。また、その本道をこれから詰将棋に興味を持つ人達に伝えるためにも、高坂氏にはこれからの更なる活躍を願う次第。

本当はもっと色々なことを書きたかったし、また今回選ばせてもらった4作以外にも高坂氏の傑作は数知れず存在するのも事実。だが、それはやはり、高坂氏本人の手により、詳細な解説をしてもらうのが本筋だろう。いずれは世に出るであろう”決定版”へのイントロダクションとして、まずはこの4作を鑑賞いただければ、と思う。

解答者登場！

秋元節三の《好きな４局》

①　　改発　徹
詰将棋パラダイス　1957.6



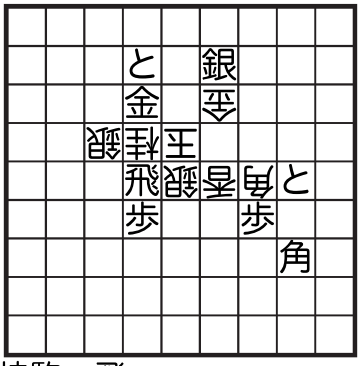
持駒　金銀香

15龍、同玉、14金、同玉、
25銀打、13玉、14香まで7手

パラに入会した中学生時代（ずいぶん大昔の話）に手に入れた「七手詰傑作集」は今思うと素晴らしい本で、ぜひ再刊して欲しい。無くしたことが残念でならない。その傑作集の中で、唯一解けなかったのが本局です。まだ純真だった私には、手筋とは異質の初手は、まさに驚天動地。さらに３手目はこの世のものとは思えない意外手と、本当に思ったものです。何より良かったのは解後感で、上等な推理小説の読後感と似ています。なるほどそうか、と納得し、そういう手があったのかと改めて感心する。

初心者向け七手詰の好作とは、少ない駒数、狭い行動範囲は勿論ですが、絶妙手ならぬ絶妙手順が必要と思う。本局で言えば、序の３手が手順の妙で、うまいものを食った後の満腹感ならぬ満足感です。こういう七手詰を近頃とんと見なくなった。初心者を詰棋中毒者にする為にも、作家に頑張って欲しい。それにしても、純真な中学生の頃、すでに私は尻金の魅力にとりつかれていたらしい。

②　　深和敬斗
詰将棋パラダイス　2009.7



持駒　飛

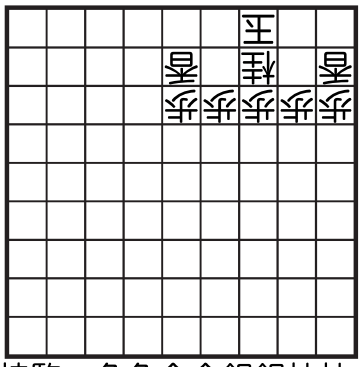
44飛、同角、64金、同銀、
46桂、同香、35歩まで7手

〈結果稿〉
須川卓二―順列詰かな。手順も及第点です。
利波偉一―手順趣向の意欲は買う。
馬屋原剛一―狙いが分かったので、手順は自動的に決まった。
☆気付いてくれた方が数名あり。作者も満足でしょう。（担当者）

エッこれだけ？それはないでしょう。“順列七種駒着手”の七手詰は非常に珍しく、大いに騒がれると思っていただけに全く残念。評価が低かったから、気付いた人は本当に少なかったんでしょう。こういう趣向に気付かず、結果稿で知らされた時、なぜかとても損をした気分になる。気付けば、とっても幸せな解後感を味わえたのにと思うせいでしょうか。

珍しい趣向で気付きにくいと思われた場合は、選題の言葉でも言及しておいて欲しいとつくづく思う。新味の薄くなった超短編の世界だけに、珍しいことは大いに騒いで楽しく盛り上げて欲しいもの。何たってパラダイスなんだから。

③　　山田嘉則
詰将棋パラダイス　1983.10



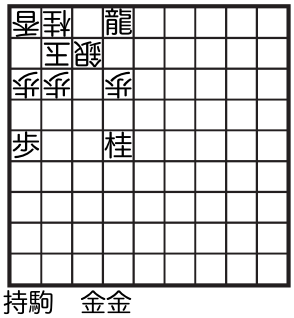
持駒　角角金金銀銀桂桂

22銀、同玉、34桂、同歩、
11角、同玉、21金、同玉、
33桂、31玉、22銀、同玉
11角、同玉、21金まで15手

一見ドキッとする。ナナナント持駒８枚！しかも無仕掛図式だ。とても初心者の出る幕じゃないと敬遠するところだが、これが不思議に食欲をそそる。初形「山」の字もその一つだが、持駒４種各２枚が異様に追って来て、目が離せなくなるから面白いものだ。よく見れば22銀から34桂ですぐ詰みそうで、やってみると本当にすぐ詰んでしまった。2手目41玉の変化がちとやっかいだったが、作意がすっきりしているので、こんな変化は読まずともいい。

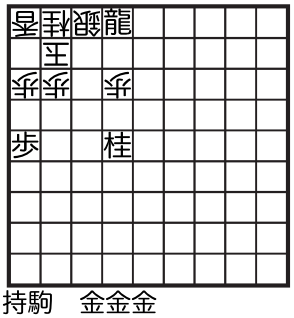
パラの表紙は楽園の入り口だから、パッと目を惹くのが大事だと思う。そして初手が明らかで簡単に解けそうで、本当に簡単に解けるのがいい。その点で、本局は長年のパラの表紙作の中でも上位に入ると思う。勿論評価となれば高くは無いだろうが、表紙は特別だ。表紙の理想は持駒角香4枚の例の古図式だが、近頃のパラの表紙はあまり目を惹く作がない。本局も、すでに25年以上前の作になるが、持駒８枚をよくぞ表紙に採用してくれたと大いに感謝しています。

④-A



持駒　金金

④-B　　塚田正夫
将棋世界　1939.5



持駒　金金金

A図は実戦で72銀と受けられたところ。62龍として必勝だが、そこで詰パラ党の悪い癖が出て、何とか詰まないかと読みに読んで、よせばいいのに何とかなりそうだと73金、同桂、81金、同銀、62龍と進んで72金と打たせて勝ってさすがと言われるつもりだったが、相手はやおら握った手を開いて銀を取り出したではないか。未だに持駒を握りしめて見せない人がいるのは困ったものだ。例によって、上級者から「あなたは攻め急ぐからいけない」と、きついお言葉。

ところで、後日Ｂ図を発見。詰棋として出されれば、不思議にすぐ詰む。ああ残念無念。実戦で81龍が発見できないとは詰パラ党にあるまじき失態。詰棋力は実戦で働かず、詰まそうとする意欲がかえって邪魔になると思った次第です。

それにしても、「詰棋は一手妙手があればいい」と言った塚田さんらしい実戦形好局で、９手目からは長い収束になるが、ダラダラした感じはなくさわやかで、後味がすこぶるいい。詰棋はかくありたいもの。

（塚田正夫作の解）
72金、同銀、81龍、同玉、
82金、同玉、74桂、71玉、
62金、81玉、72金、同玉、
73銀、71玉、62桂成、81玉、
72成桂、92玉、82成桂まで19手

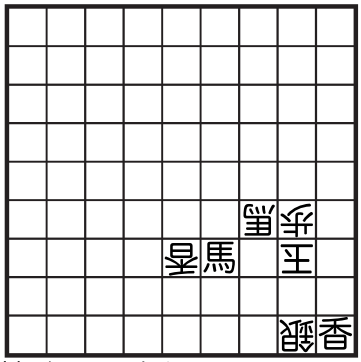
小林敏樹が選んだ
小川宏ベスト8局

小川宏氏の短編を紹介してみたい。小川宏という名前を聞いても、ある程度の年代以上の方を除いては、おそらくなじみがないのではないかと思う。それもそのはずで、1981年に発行された『三百人一局集』に作者の自作解説が収録されたのを最後に、誌面で作品が引用・紹介されたのを見た記憶がない。紹介される機会がなかったというだけでなかば埋もれかけていたとしたら、大変に残念なことだ。

小川氏の活動時期は昭和30年代から40年代初めにかけてで、詰将棋データベースによると発表作は僅か20局と寡作だった。しかし、7手詰で好局を連発し、短い期間に詰パラの半期賞を4回も受賞しており、超短編の名手として知る人ぞ知る存在である。かつて発行された7手詰のアンソロジー『七手詰傑作集』(1961年)、『続・七手詰傑作集』(1966年)、『続続・七手詰傑作集』(1969年)に氏の作品が収録されている。当時の7手詰を概観することができるので、関心のある方はこちらもご覧いただきたい。

ここでは、氏の7手詰全作品(7局)と9手詰1局を取り上げる。40年以上も昔の超短編の水準を実感するためにも、ぜひ解いてみることをお薦めしたい。解くのはごく容易なはずだから。

①
詰将棋パラダイス　1961.1



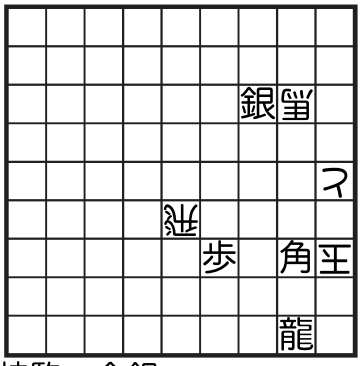
持駒　飛金銀

38銀、同銀不成、37飛、同馬、
18金、16玉、28金まで7手

初手38銀を同銀不成と取るのが奥の深い一手。同銀成と取ると29飛(!)、同成銀、38金があるので、この紛れで再度同銀不成と取れるように不成で応じておくのだ。その直後に、成らなかった銀の死角を衝いて37飛と捨てるのも絶妙だ。金ずらしで詰上がる収束まで、全着手に作者の感覚がこもっている。

盤面7枚の簡潔な配置からは信じられない豊富な内容で、派手さはないものの、磨きこまれた美しさをたたえた作品だ。『三百人一局集』で作者が自選したのが本局で、氏の代表作と言ってよいだろう。半期賞。

②
詰将棋パラダイス　1961.3



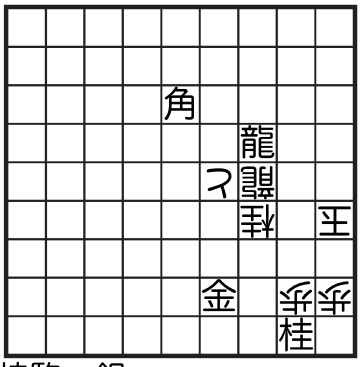
持駒　金銀

26銀、同玉、18角、35玉、
45金、同馬、24龍まで7手

普通に18銀、26玉と追うと以下54角(63角成)、35玉という展開となって、作意どおり45金、同馬、24龍とした時に36に退路が生じる。角はこの36地点よりも手前にいなくては詰上りが成立しない。したがって、角は18に引くことになるので、遡って初手が26銀捨てに決定する。

攻方の邪魔にならないように捨駒にして盤面に残さない、というテーマ。詰将棋慣れしているとまず最初に26銀捨に目が行ってしまう、という弱点はあるものの、手の組み合わせの形で表現できた点を評価したい。

③
詰将棋パラダイス　1962.3

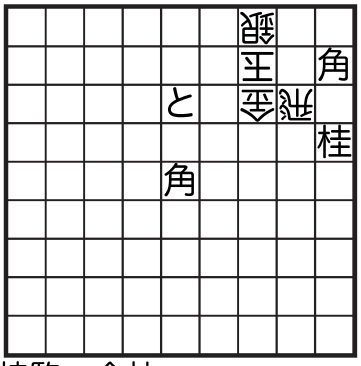


持駒　銀

14龍、15角、27銀、同玉、
25龍、同龍、17角成まで7手

14龍と合駒を尋ねると、作意は37に利かす意味で角合。他合だと25銀または17銀と打って簡単だから当然だ。そして作意の角合に対しては、今度は27銀と捨駒しなくてはいけない。25銀と打っては決め手の25龍ができないし、17銀と打ってしまうと最終手の17角成ができなくなる。大げさかもしれないが、図式化してみると様式の統一性がよく分かる。
a)変化（角合以外）：①25銀または17銀で詰み、②27銀は（15金合の時に）詰まない
b)作意（角合）：①25銀、17銀とも後に邪魔駒となって詰まない、②27銀で詰み
玉に取られるところに捨駒しないと邪魔になって困る、というテーマは前作と共通のもの。半期賞。

④
詰将棋パラダイス　1966.1

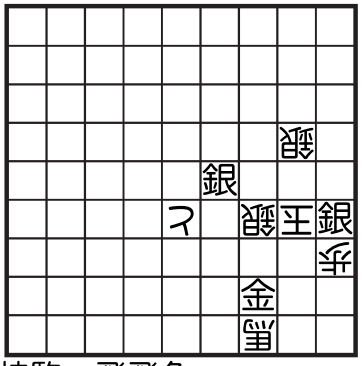


持駒　金桂

24桂、同金、22桂成、同飛、
33角成、同玉、43金、まで7手

本作も半期賞受賞作だが、正直言ってごく普通の作品という印象。捨駒で守りを乱してからとどめの33角成捨が狙いだが、やや通俗的な感じか。唯一、2手目同飛の変化ではすぐに33角成に短絡するところが面白い。
駒配置には全く無駄がなく、仕上がりは完璧である。

⑤
詰将棋パラダイス　1967.2



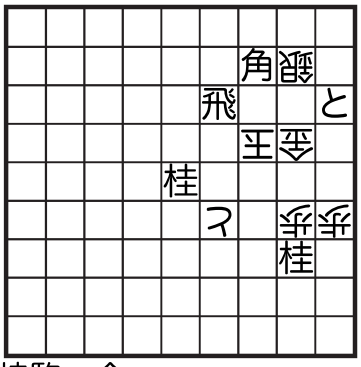
持駒　飛飛角

37角、同銀成、36飛、同成銀、
27金、同成銀、36飛まで7手

①と同じく、玉方銀の成、不成をテーマとした作品。
いきなり27金とすると同銀不成(!)で詰まないので、37角、同銀成（同銀不成は36飛まで）といったん成銀にしておいてから36飛、同成銀と元に戻す。これで初形の銀が成銀に変わったので、以下は27金、同成銀、36飛まで。成銀を36に戻すのは27金に35玉と逃げられた時に36金と取るためで、実にスマートな構成だ。
角・飛を打捨てて銀を成銀に変換するというマジックで、①と対を成す傑作。この2作で小川宏の名前が7手詰の歴史に残ることは間違いない。半期賞。
蛇足：39馬は必要だろうか？　もし必要なければ初手は短打限定になるのだが……。どなたかご教示いただければありがたい。

⑥

詰将棋パラダイス　1967.3



持駒　金

45金、同と、33飛成、25玉、
34龍、同玉、43角成まで7手

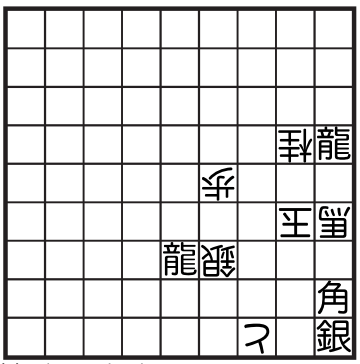
龍を捨てて角成まで、というこの収束は手筋の代表選手のような手順で作例も多い。本作で注目すべきなのは、33飛成～34龍と龍を2度連続で捨てる構成にしてあること。もうひとつは2手目25玉の変化で、ここに味の良い14角成の捨駒が現れることだ。

34龍に対して、作意は同玉、43角成までである。43飛原形消去の味わいと、55桂を遊び駒にしない点からも当然だろう。しかし、同金、14角成の方を作意に設定すると、作意の最終手が2手目の変化では捨駒として再現する、という構造を主張することもできそうだ。

そのあたりを作者が意識していたのかどうか、一度聞いてみたいところだ。

⑦

詰将棋パラダイス　1967.9



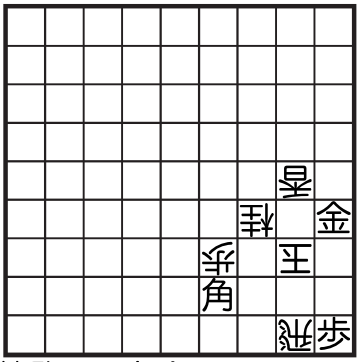
持駒　金金

25金、同馬、46龍、同歩、
17龍、同玉、27金まで7手詰

連続捨駒の基本パターンといった趣の手筋物。変化に備えて45地点を空けておくため、という意味付けの46龍がちょっと変わっている。この一手に魅力を感じて作ったのだろうか。

⑧

詰将棋パラダイス　1960.11



持駒　飛角金

37金、16玉、27金、同玉、
16角、同玉、13飛、27玉、
18飛成まで9手

7手詰ばかりを8局揃えたかったのだが、数が足りないので最後は9手詰から。簡単な初形ながら、意外と解きづらい小品かもしれない。

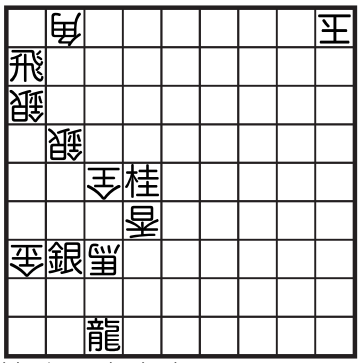
テーマは邪魔駒消去。実は16金は不要駒で、これがなければ16角からの5手詰である。初手37金、16玉となった局面では今打ったばかりの37金が邪魔駒に変じている。そこですぐに27金と捨てると、16金が原形のまま消去されているという仕組みだ。

3手目から14飛（13飛）、15歩、38角という紛れがあるが、これは27香成で逃れている。

伊藤正が選んだ
OT松田ベスト4

　ＯＴ松田氏の作品を紹介する。
　私が思うに、氏の作品の特徴をひとことでいうと「奇想の簡潔な実現」である。氏の創作方法は、おそらく（間違いなく）構想ありきで作っているのだろうが、その構想が「知識の単純な組み合わせ」や「既存の構想の縦横変換」などではなく、たぶん脳内でとんでもない組み合わせを実行している。そしてその組み合わせを実に簡単なしくみで現実化している。
　そんな氏らしい作品を４作取り上げたい。

①
近代将棋　1971.8

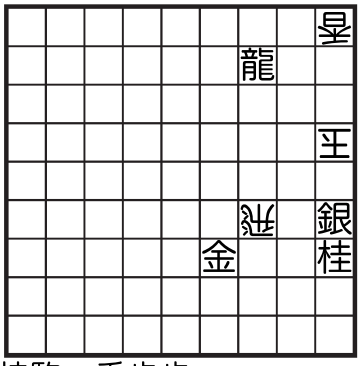


持駒　歩歩歩

19龍、18歩合、12歩、21玉、
28龍、27歩合、11歩成、31玉、
37龍、36歩合、21と、41玉、
46龍、45歩合、31と、51玉、
55龍、54歩合、41と、61玉、
64龍、63歩合、51と、71玉、
75龍、72歩合、同飛成、同角、
同龍、同玉、61角、81玉、
72銀、91玉、92歩、同玉、
83銀生、81玉、72角成、91玉、
73馬、81玉、63馬、91玉、
64馬、81玉、54馬、91玉、
55馬、81玉、45馬、91玉、
46馬、81玉、36馬、91玉、
37馬、81玉、27馬、91玉、
28馬、81玉、18馬、91玉、
28馬、81玉、27馬、91玉、
37馬、81玉、36馬、91玉、
46馬、81玉、45馬、91玉、
55馬、81玉、54馬、91玉、
64馬、81玉、63馬、91玉、
73馬、81玉、72銀生、92玉、
74馬、82玉、83銀成、81玉、
82歩、同銀、92成銀、71玉、
72歩、62玉、52と、72玉、
73歩、71玉、82成銀、同玉、
72歩成、93玉、94歩、同玉、
95歩、同玉、96歩、同金、
同馬、94玉、95歩、同馬、
同馬、同銀、83銀、同玉、
73桂成、84玉、74金、93玉、
94歩、同玉、83角、93玉、
92角成、94玉、83馬、85玉、
75金、同玉、74馬 まで135手

　この作者のデビュー作（厳密にはこの初形は修正図。初出は1969年７月）。いきなりの大作での登場。当時の人はびっくりしただろうなあ。
　初手19龍から始まる「と」と龍と歩合の構成による追い趣向は見やすい。何よりこの手順はわかりやすくて楽しい。合駒入りの追い趣向は変化がむずかしくなりがちだが（黒川氏の「矢来」とか）この作品はちがう。
　あっという間にできた歩の階段。どうやって処理するのかな？　と思ったら、75龍から清算して61角と打つと、何と、馬ノコの形になっている！65桂１枚でこの切り替えを成立させているのはすばらしい。
　馬ノコで18歩まで全部の歩を取って戻ってくると、72銀生以下きれいな収束。完成品といっていいのでは。
　当たり前だが歩を使い切る収束ができた、ということは、馬が18まで行く必然性があるということなので、初手を伏線にできるのだが（たとえば攻方39龍、玉方37歩を置いて持駒歩二にする）そんな装飾よりシンプルな初形を選んだ作者の感覚は正解だ。
　簡潔な初形から突然現れる美しい追い趣向と歩の階段、その歩を簡単に馬ノコで消去してみせるという大技をあっさりと表現してみせたこの作品は、その後の活躍を予感させる一級品だ。

②
近代将棋　1972.7



持駒　香歩歩

15歩、13玉、14香、24玉、
25銀、15玉、16歩、同飛、
同銀、同玉、36龍、26金、
同龍、同玉、25飛、17玉、
27金、18玉、28金、19玉、
29金 まで21手

簡潔な初形。この作者は余分な装飾をしないからどうしても初形は簡潔になる。

初手は25銀しかなさそうに見える。15歩とか15香もあるがいずれにしろ25銀と出ることになるのは明白だから。

以下15玉、16歩で飛を入手して36龍と引くが26歩合でどうしようもない。

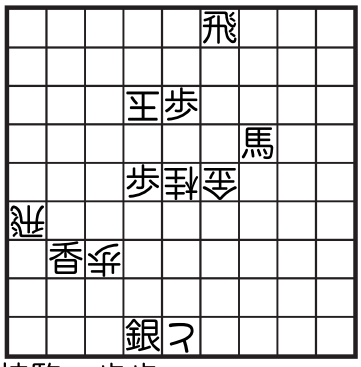
他にまぎれる筋もなくこれは不詰では？？と思うのが普通の道筋か。

作者が用意した解は「15歩～14香」という組み合わせ。こうすると36龍と引いたときに14香が残っているため15飛と打つことが可能になっている！　これで26金合が強制できて後は容易な追い詰。

いわゆる「歩香重ね打ち」だがこの作品が（たぶん）第一号局。この作品がすぐれているのは初形の設定だ。25銀も15香も可能な状況であえて15歩～14香と打つどうしようもない無意味感はこれ以降の同一構想作を圧している。

作図過程の中でいろいろな取捨選択があったと思うが、何の装飾もない、しかし妙に安定感のあるこの初形と構成を選んだのは作者のセンスの良さを示しているといえるだろう。

③
近代将棋　1975.6



持駒　歩歩

61飛成、62歩合、45馬、74玉、
72龍、65玉、66歩、同玉、
56金、67玉、63龍、同歩、
68歩、76玉、54馬、75玉、
65馬 まで17手

この作品はリアルタイムで解いた記憶がある。確かまず初手45馬と金を取った。74玉と逃げて71飛成、65玉、66歩、同玉、56金、67玉で打歩詰の形。当然の62龍。ここで65歩合とされて詰まない。飛不成だと？　同じ手順で意味なし。

初形に戻って考える。他の手段は？　61飛成？　62合駒で？　以下同じ手順？　意味ないか？　では？？　しばらく黙考。62合駒は歩に限定されているなあ……。ということは？　61飛成～72龍～63龍とすれば同歩の一手！！　衝撃の63龍。理由は明らかで、わざわざ歩合をさせてその歩の頭に歩を発生させた龍を捨てに行く、という巨大な無意味さが脳に刺さるのだ。

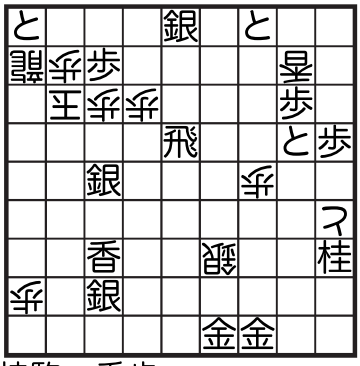
このマジックの種は二歩禁と打歩詰である。62歩合を取らないことにより65歩合とできなくなっている。打歩詰打開のために7筋の龍の効きを減ずる必要がある。たったこれだけのシンプルな理由付けでこの新鮮な手順が成立している。

「①歩合をさせる、②その歩を取れる状況で、③歩の頭に歩合をさせた龍を捨てる」という奇想（そんなアイデアがそもそも浮かばない人の方が多いかも？）とその現実化というプロセスは他の作品と同じであり、その理由付けの簡潔さ、さらには装飾を排した構成もまた同じである。

詰将棋の本質はこんなところにあるような気がする。

④

近代将棋　1970.3



持駒　香歩

89香、①87桂合、同香、②86桂合、
同香、③85桂合、同香、84桂合、
同飛、72玉、82飛成、同龍、
同香成、61玉、72成香、51玉、
61飛、42玉、41飛成、53玉、
65桂、54玉、66桂、55玉、
67桂、56玉、68桂、57玉、
47龍、同玉、48金直、36玉、
37銀、45玉、46歩、44玉、
56桂、43玉、55桂、42玉、
54桂、31玉、22歩成、同玉、
13歩成、11玉、12歩、21玉、
23香、31玉、22と、41玉、
32と、同玉、44桂、31玉、
43桂、41玉、53桂まで53手

※ 変化
①86桂合は84銀、94玉、93銀成、85玉（同玉、92と、同玉、93歩、91玉、92飛、81玉、71歩成、同玉、62銀成、同玉、82飛成以下）、55飛、96玉、87銀以下
②85桂合は84銀、94玉、86桂。
③84桂合は同銀、94玉、93銀成、95玉、94飛。

連続合駒の構想は、山田修司の「横飛４桂」を嚆矢とするが、「クリアすべき条件」が明確でわかりやすく、「クリアするために必要な腕力」がかなり高かったことから（？）多くの腕自慢の詰将棋作家の心をとらえ、さまざまな組み合わせが生まれた。

思い出すだけでも、山中龍雄の「横飛７歩」、上田吉一の「角４香」、森田拓也の「香７歩」、駒場和男の「角７歩」等強烈な印象が残る作品が多い。

本作は「香４桂」の一号局（たぶん）。見てわかるとおりきわめてシンプルな変化でこの作意を成立させている。

この作者は、後には「角７歩」にもチャレンジしている（不完全）ことから「連続合駒」という構想に魅せられた一人だったことがわかる。

テーマの４桂連合が終わった後の手順もうまいまとまりを見せている。まったく無理のないつなぎで「４桂連打」～「４桂詰」（山田修司作と同じ構成だが）を実現していて、作者の技術を感じる作品といえるだろう。

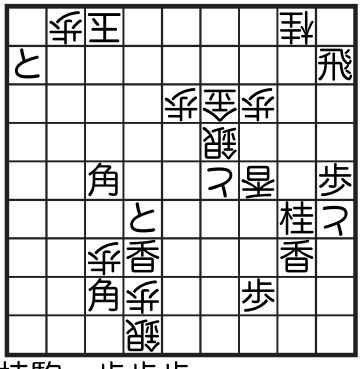
ただ、全体を眺めると、一号局という意義があったとしても、この作者にしては珍しく「だれでも思いつく条件を作図力でクリアした作品」という感じで、鑑賞時の衝撃度は少ない。

やはりこの作者には「とんでもないアイデアの実現」で私たちの頭の中のつまらない常識の枠をぶち破ってほしい。それができる数少ない能力の持ち主なのだから。

【参考作品（不完全作）紹介】

⑤

近代将棋　1971.4（余詰）



持駒　歩歩歩

93角成、82歩、81と、61玉、
94馬、83歩、55と、51玉、
95馬、84歩、62香成、41玉、
96角、31玉、41角成、同玉、
96馬、85歩、52成香、31玉、
22飛成、同玉、34桂、13玉、
14歩、同玉、69馬、同歩成、
15歩、同玉、24銀、14玉、

15歩、同と、23銀生、13玉、
14歩、同と、12銀成、同玉、
22桂成、13玉、23成桂　まで43手

どう見ても初手は93角成しかない。82合は無意味だから61玉。以下馬で追い込んで31まで玉が移動。まぎれはない。

31玉の形はやはり手がなく、22飛成～34桂以外にない。13玉～14歩～同玉も必然。ここで69角と銀を取って、同歩成としてくれれば15歩以下きれいに詰む。しかし25歩合で不詰。

「おかしいなあ。必然手の連続なのに」と少し悩もう。ここで「そうか！」と閃いた人はセンスがいい。馬を縦に引いて41玉まで行ったときに96角～41角成として馬で69銀を取れば25歩合とはできない！　これで詰みだ、と思った解答者は多かったのでは。「大仰な駒配置だけどこの作者にはよくある話」「しかしこの作者にしては簡単だ」と軽い疑問を持つ位か。

そんな解答者は翌月号の解説を見てびっくり仰天することになる。

初手93角成に82歩！　対して81と！　61玉、94馬に83歩！　以下84歩！　85歩！　と何の効きもない空間に歩が突かれる。取れない歩の妙技。新鮮極まりない衝撃。

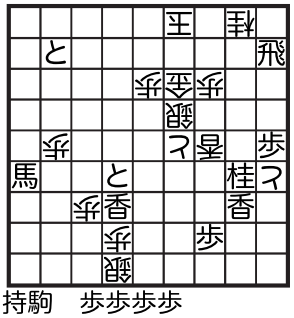
頭の４手だけでもマニアの心をくすぐるのは十分だ。この歩の動きはこの作以外に見たことはない。空前絶後。

この歩突きを成立させるしくみは３つある。96馬、85歩合の局面で同馬では詰まない、という状況設定が一つ。

二つ目は二歩禁。初手93角成に単に玉が逃げると96馬のときに二歩だから85歩とできない。逆に攻方は突かれた歩を取ると96馬としたときに85歩とされて詰まなくなってしまう。

つまり玉方は攻方が取れないことを見越して２手目に歩を突く。以下の歩突きも同様。

（３手目同と以下、96馬に85歩合の局面）



持駒　歩歩歩歩

三つ目は玉方最長手順則。突いても攻方が取れないのだからこの歩突きは手数伸ばしという意味付けになる。歩突きなしで逃げても作意以外の詰み筋は存在しないのだ。

以上、実に簡単なしくみでこの奇妙な手順を実現させている。

また「馬の縦移動」というシンプルだが魅力ある手順が効果的なＢＧＭになっていることも見逃せない。おそらくは作者が脳内で描いたこの手順（たぶん最初の３手？）をどうやって実現するか、という楽しい試行錯誤～詰将棋作家がいちばん充実する時間～の中で、二歩禁と玉方最長手順の活用に思いいたったのだろう。

配置や収束手順に推敲の余地はある気はするが、この手順に出会えたことでよしとしよう。

《余詰》

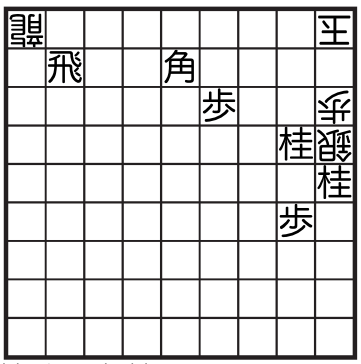
3手目から同飛成、61玉、71龍、52玉、96角、63合、同角成、同玉、61龍以下早詰。

また29手目25銀以下でも詰む。

いずれも原亜津夫氏の指摘による。

⑥

近代将棋　1973.7（余詰）



持駒　角桂

99角、同龍、12桂成、同玉、
41角成、22歩合、24桂、11玉、
22飛成、同玉、32馬、11玉、
23桂不成、同銀、12歩、同銀、
同桂成、同玉、23銀、11玉、
22馬 まで21手

取られるための最遠打99角の魅力。個人的には古今の遠打作品の最良のものの一つ。

遠打の変化処理はややこしくなりがちだがこ

の作品のさばき方（２手目22歩合は23桂打以下41に角を配置してその効きで龍追いを成立させて88龍までで詰）は鮮やかすぎる包丁さばき。

３手目以下の手順は簡単だが詰め上げてから手順を振り返ると初手が伏線になっていることに気付く。

時間のある方は「この初手の意味は何なのか」ということを考えてみられたい。

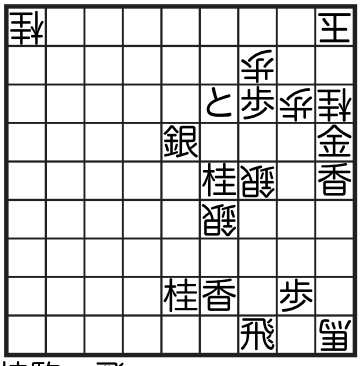
まったく余分な駒配置のない盤面での取らせる遠打を成立させたのは作者の創作力に他ならない。

《余詰》

初手88角、22歩合、23桂打、21玉、32桂成、同玉、41角成以下玉を98まで追い込んで32馬で詰む。玉方73桂配置で完全か？

⑦

近代将棋　1975.12（余詰・不詰）



持駒　飛

31飛、12玉、32飛成、11玉、
41龍、12玉、52龍、11玉、
61龍、12玉、72龍、11玉、
81龍、12玉、92龍、11玉、
91龍、12玉、82龍、11玉、
71龍、12玉、62龍、11玉、
51龍、12玉、42龍、11玉、
31龍、12玉、24桂、同歩、
42龍、11玉、51龍、12玉、
62龍、11玉、71龍、12玉、
82龍、11玉、91龍、12玉、
13金、同玉、14歩、23玉、
13歩成、34玉、46桂、25玉、
17桂、16玉、27銀、17玉、
19飛、28玉、29飛、同玉、
83角、28玉、38角成、17玉、
18銀、同玉、19歩、17玉、
97龍、26玉、27龍、15玉、
16龍 まで73手

一見無意味な龍ノコ。91まで遠ざけておかないと83角のときに龍との交点に中合をされて不詰。

価値を高めているのは１回目の龍ノコの存在（設定）。24桂を打つためだが、そのために２度目の（メインの）龍ノコがさらに見えにくくなっている。

またこの作り方では当然だが作意を見ると91龍の意味はまったくわからない。つまり変化伏線になっているのがマニアの心を揺さぶる。

盤面の物理的条件を龍ノコの理由付けに使ったおそらく最初の作品。同じ方向性の上田17角打の３年後の発表だが影響があったかどうか。

《余詰》

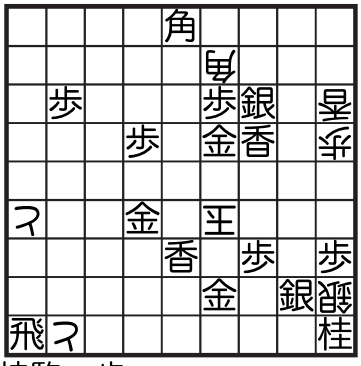
47手目14歩のところ、11龍、12銀（歩合は22龍、同玉、32歩成以下）、14歩、23玉、12龍、34玉、46桂、25玉、34銀、26玉、37銀以下詰み。つまり、竜鋸で91まで戻す必要がない。

《作意不詰》

収束部分18銀、同玉のところで、26玉と逃げられると詰まない。

⑧　「蛇（二匹目）」

近代将棋　1981.5（余詰）



持駒　歩

56金、35玉、46金、26玉、
36金、15玉、26金、同玉、
96飛、86歩、同飛、15玉、
16歩、25玉、26歩、16玉、

17歩、15玉、85飛、75歩、
同飛、26玉、76飛、66歩、
同飛、15玉、16歩、25玉、
26歩、16玉、17歩、15玉、
65飛、55歩、同飛、26玉、
56飛、46歩、同飛、15玉、
16歩、25玉、26歩、16玉、
17歩、15玉、45飛、35歩、
同飛、26玉、36飛、15玉、
16歩、25玉、26歩、16玉、
17歩、15玉、24銀生、同角、
同角成、同玉、42角、23玉、
33香成、12玉、23成香、同玉、
32飛成、同玉、33金、21玉、
31角成、同玉、42歩成、21玉、
32と、12玉、22とまで79手

おもしろい。ひたすらおもしろい。

96飛に単に逃げると24銀以下92飛成ができて簡単。したがって8筋に飛を呼ぶ。85飛に単に逃げると27歩以下89飛ができて簡単。したがって7筋に飛を呼ぶ。以下同じ理屈で3筋まで繰り返す。

何ともおもしろいのは、攻方は王手をしているだけということ。玉方の応手で自動的に趣向手順が生じていく。

このような手順（飛を上下に動かしているだけで玉方が中合をしてくれて趣向手順が成立している）を夢見た詰将棋作家は多いのではないか。その夢はこうして実現された。

しかもこの簡単な理由付け。作者の奇想とその実現力にはただ驚くばかりである。

《余詰》

13手目16歩のところ、24銀生、同角、同角成、同玉、33角！で、23玉と下がれない（26飛がある）ため簡単に詰む。構想の根本的欠陥。

若島正が選んだ
高木秀次ベスト8局

ここでは、高木秀次の作品群から、これはと思うものを選んでみる。作品集『千早城』(1993)には71局が収録されているが、データベースを調べると、作品集未収録の作品も少しある。ただし、ここで紹介するものは、すべて『千早城』に収められているものばかりである。

最初に、作品集『千早城』について言っておきたい。高木秀次がなんと80歳の高齢で出したこの作品集は、書物としても、詰将棋作品集としても、大変不満である。いわば「ほとんど不完全」と言いたくなるような状態の本なのだ。そこから、高木秀次の真価を読み取ることは、きわめてむつかしい。

まず、編集作業というものがほとんど施されていない。少なくない文章の誤りや手順記述の誤りがそのままで放置されていて、誰か高木秀次の原稿をちゃんと読んだ人間はいないのか、と思わず怒りを覚えてしまう。90ページと91ページは全面改稿が別紙で差しはさまれている。初出誌などの作品データも、付いていたり付いていなかったり。それくらい、誰か時間かけて調査しろよ。おまけに、著者自身の言葉がごくわずかで、たとえば第20番(33手詰)は「本作は、36金と捨ててから、56龍が主眼となっております」と、これだけである。作者の言葉は多くて5行ほど。これでは、複雑な高木秀次の構想についていける読者がどれくらいいるのか、きわめて疑わしい。

わたしが言いたいのは、次のことに尽きる。高木秀次の詰将棋がどれほどすばらしいか、よくわかっているのなら、それに見合うだけの時間を投資して、すばらしい作品集を作ってほしい、ということだ。高木秀次が寡黙なら、その寡黙な作家が何を考えていたのか、その脳味噌の襞まで読み取ってくれるような鑑賞者を探し出して、その人に解説を書かせてほしい、ということだ。こう批判する手前、本稿はとんでもなく長いものになることを、今から予告しておく。それは、ただひたすら、高木秀次に正当な評価というトリビュートを捧げたいという、その気持ちから出たことなのだ。わたしたちの想像力を刺激してくれる作家に対しては、それくらいの敬意を払っても当然ではないか。

さらに残念なのは、不完全作が多いということ。あれだけややこしいものを考えていた人なので、不完全が出やすいのは仕方ないのかもしれないが、さすがにこう多いと評価の妨げになることは間違いない。

次に、高木秀次という作家の評価について書いておく。高木秀次と言えば「古典派」というラベルが貼られていたが、その「古典派」とは何を意味するのか、あまりよくわからない。よく言えば重厚、悪く言えば大仕掛け、ということになるのかもしれないが、後で見るように、高木秀次の作品には意外にポップな側面もある。

わたしの評価からすると、高木秀次はかなり昔の時代に、伏線という手段を意識した数少ない作家の一人である。もちろん、その極致が名作「千早城」であることは言うまでもない。もし伏線作品の歴史が概観されたなら、「千早城」のような構造を持つ二重伏線はおそらく他の作家によって試みられたことがない、という事実が明らかになるのではないか。ただし、伏線を意識すると必然的に作品の論理的な構造へと関心が向かうものだが、高木秀次がどれほど作品のロジックに意識的だったかは、わからない部分もある。それは後の作品解説で述べてみたい。

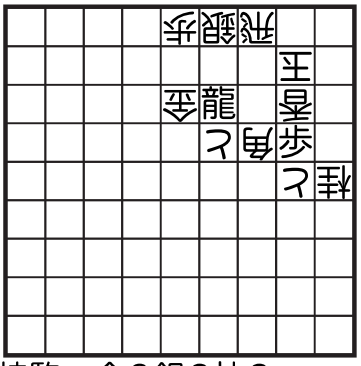
また、高木秀次は発表後50年以上も誰も他に手がける者がいなかった、オリジナルな手筋を開発している。その作品は、後で紹介するように残念ながら不完全だったのだが、悲しいかなそれがオリジナルだという事実は長いあいだほとんど誰にも気づかれていなかった(第2号局が出なかったということじたいがその証拠でもある)。つまり、高木秀次の作品は再評価を待っているのだ。

高木秀次は、長篇作家と中篇作家のちょうど中間に位置しているように見える。手数で言えば、40手台から60手台。これが高木秀次の得意とする領域であり、よく考えてみると、現在の作家で高木秀次の後を継いでそのあたりを開拓している人間は、ほとんど皆無ではないか。高木秀次は、あまり趣向作を作らなかった。従って、手数が100手近くになることはほとんどなかった。主に中篇的なアイデアに、少し長めの収束が付い

ているという作り方をしていた。もし現代風の作り方を覚えて、収束を切り詰めることを知ったら、手数を30手台から50手台にしぼることもできただろう。そのときの高木秀次を見てみたかった、という気がするが、これは世代的な問題なので仕方がない。

いずれにせよ、高木秀次の作品群は、詰将棋がかつて持っていた原石の輝きを思わせるような、アイデアの宝庫である。一人黙ってコツコツと作り続けていたはずの、高木秀次と語り合える。そんな気持ちで、『千早城』という作品集をめくってみよう。

①　　作品集第14番
詰将棋パラダイス　1966.10



持駒　金３銀２桂２

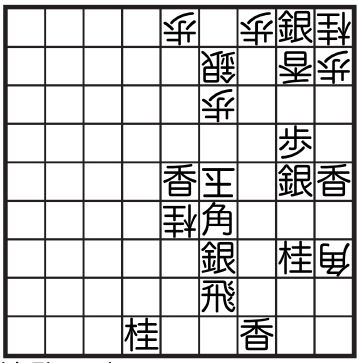
23歩成、同角、33金、同飛、
14桂、同角、13金、同飛、
11銀、同飛、31銀、同飛、
13金、11玉、12香、21玉、
33桂、同飛、11香成、同玉、
41龍、同角、12銀まで23手

まず、軽いものから見ていただこう。

持駒７枚という数に驚かされるが、それを惜しげもなく次から次へと捨て、玉方の飛を31→33→13→11→31と一回転させるところが見どころである。今だったら、チェス・プロブレムの用語を使って、これをルントラウフのテーマと呼んでやりたいところだ。一回転が終わってから、もう一度飛を33へ動かすのがご愛嬌。可愛いではないか。

これをベスト８に入れたのは、候補作がバタバタと不完全で潰れてしまったということもあるが、高木秀次がまずなによりも「捨駒」を基調とする作家であったことを再確認してもらうためである。それと、この玉方駒の連続移動というテーマを、高木秀次が好んで取り上げたということがよくわかる、見本の意味もある。

②　　作品集第19番
詰将棋パラダイス　1964.11



持駒　歩５

36銀上、44玉、45歩、33玉、
23歩成、同玉、14銀、①34玉、
25銀上、45玉、57桂、44玉、
37角、48桂成、45歩、33玉、
23銀成、②同玉、13香成、同玉、
14歩、23玉、24歩、33玉、
15角、39成桂、23歩成、同玉、
33角成、同玉、34歩、23玉、
15桂まで33手

①33玉は25銀上、39角成、24角、同香、34歩、
22玉、23銀成、同玉、35桂、22玉、12香成まで。
②同桂は46角、35桂合、34歩、23玉、13香成、
同玉、14歩、23玉、15桂まで。

黙って作意を追うだけでは、真価がつかみにくい作品。単に「打歩詰打開」と言ってしまえない部分も含まれているので、慎重な吟味が必要だ。

まず、問題図を盤面に並べてみて気がつくのは、角・銀・桂・香をすべて配置している点である。言い換えれば、玉方の合駒として使えるのは、今のところ飛・金のみ。ここを押さえておくことが重要な手がかりになる。

とりあえず、ごく普通に36銀上、44玉、45歩、33玉と進めてみよう。ここで早くも打歩詰である。

この後、47銀と開き王手しても39角成で、35

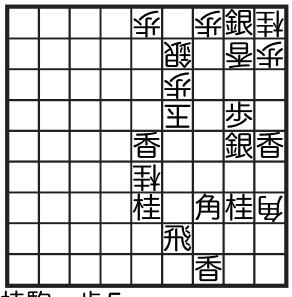
への角の利きは外れたものの、以下23歩成、同玉、35桂、33玉で打歩詰はやはり解消されていない。

また23歩成としても、同玉と取られて、すぐには展望が開けない。

だいたい、45歩と打って69桂を置き去りにしてしまうのは、どうも作意とは思えない。

そういう迷いのもとに、もう一度最初に戻って、36銀、44玉、45銀、同玉、57桂、44玉、37角と進めてみよう（次図）。

（紛れ順　37角までの局面）



持駒　歩5

これで48桂成なら45歩以下、3筋の香＋角のバッテリーを使って、手が続きそうだ。

ところが、上の図で46銀合！という中合がある。以下同飛、55玉となるとまったく詰まない。

もうお気づきだろうか。46銀合とされたのは、その前に45銀と捨てて銀を玉方に渡してしまったからだった。もし銀合さえなければ、46に飛合をされても同飛、55玉、65飛、54玉、56飛で詰むから、中合の受けがないところだったのだ。

つまり、攻め方は銀を捨てずに盤上に残す手段を考えねばならない。そこで、作意らしくない順としていったんはあきらめた36銀上、44玉、45歩と打つ順に戻り、33玉、23歩成、同玉のときに14銀！34玉、25銀上！とするのが、回り道のように見えて実は正解となる。34玉のところで33玉とする変化①がうまい捨駒で詰むのも好印象。

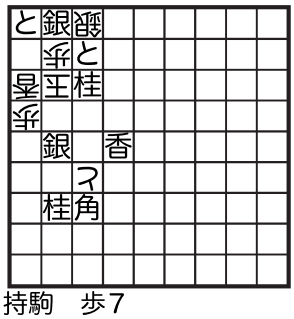
攻め方の駒Xを捨ててしまうと、後にそのXを合駒されて詰まないので、Xを盤上に残しながら攻める順を工夫するというこの手法は、高木秀次が意識していたものらしく、他の作品にも実例を見つけることができる。

以下は、15香を14歩に打ち換えて、空いたスペースへ15角！と出るのが狙いの一手となり、この角を33角成と捨てることで打歩が打開される。途中、変化②で同桂と取られたとき、46角と初形位置へ戻る変化が付いているのがとても味がいい。今風に言えばスイッチバックなのだが、もちろんそんな用語は当時にはなかったものの、これを「味がいい」と作者が意識していたことは容易に想像できるだろう。

この作品、パズル風の作りで成功していると思う。ただ、高木秀次が透徹した論理の作家であったとは必ずしも言い切れないのは、主眼となるはずの37角～15角が、論理的な因果で結ばれていない点だ。つまり、37角じたいは39香の利きを遮断して45歩を打てるようにするための着手であり、15角と出るために指す手ではないというのが論理的な弱みなのだ。だから、この作品を純粋な「打歩詰打開の構想物」と評価していいのか、疑問が残る。むしろ最初の銀を残して攻める構想の方に、わたし個人としては興味を感じてしまう。

なお、高木秀次は右上の打歩詰の形をおそらく元にして、こんな作品も作っている。第19番のような枝葉をすべて刈り込んで、いわば現代風の作りである。参考までに並べてみてほしい。

#1　　作品集第62番
詰将棋パラダイス　1965.1



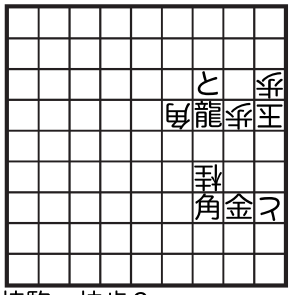
持駒　歩7

92銀生、72玉、81銀生、83玉、
84歩、73玉、83歩成、同玉、
92銀生、72玉、73歩、同玉、
95角、72玉、81銀生、83玉、
75桂、同と、84歩、73玉、
74歩、同と、83歩成、同玉、
92銀生、72玉、73歩、同と、
81銀生、83玉、84歩、同と、
92銀生、72玉、73歩、同玉、
84角、72玉、81銀生、83玉、

93角成、同玉、92と、83玉、
84歩、73玉、74香まで47手

　そして、この第62番を引用したら、さらにそのついでに、看寿賞を受賞した伊藤正の名作も引用せずにはいられない。

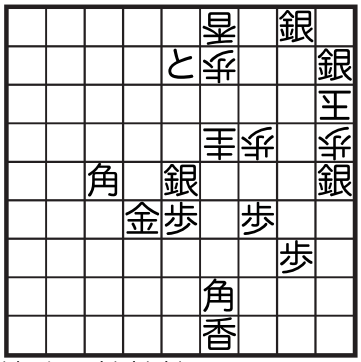
#2　　伊藤　正
詰将棋パラダイス　1983.1



持駒　桂歩6

23龍、25玉、26歩、15玉、
16歩、同と、25歩、同玉、
34龍、14玉、15歩、同と、
23龍、25玉、26歩、同と、
34龍、14玉、15歩、同玉、
16歩、14玉、23龍、25玉、
17桂、同と、34龍、14玉、
15歩まで29手

③　　作品集第28番
詰将棋パラダイス 1965.3

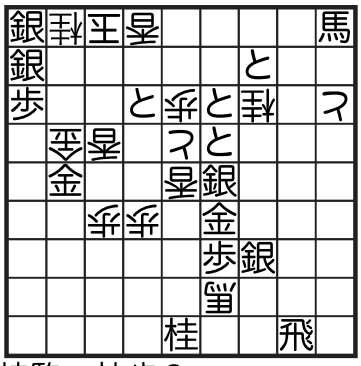


持駒　桂桂桂

25桂、22玉、33桂成、同玉、
44銀、22玉、33銀成、同玉、
25桂、22玉、13桂成、同玉、
57角、22玉、13角成、同玉、
25桂、22玉、33桂成、同玉、
43香成、同歩、25桂、22玉、
13桂成、同玉、31角成、22桂、
23銀成、同玉、41馬、13玉、
23馬、同玉、25香、33玉、
24銀、44玉、55金まで39手

　「古典派の暁将」「難解派の巨匠」というのが高木秀次に冠せられるお決まりの言葉だったが、それだけではないということを証明する作品。
　初手に57角とすると35歩の受けで逃れることさえわかれば、ほとんど考えるところはない。文字どおりの軽趣向で、古典的どころかポップですらある。上田吉一作と言っても通用しそうなほどだ。
　43香成のアクセントも良く、13と33への地点の成り捨てで通してきたリズムが、収束では23地点の成り捨てに変化するのもまた印象的。こんなこともできたのか。

④　　作品集第53番
詰将棋パラダイス 1955.9



持駒　桂歩6

83桂、同金、82銀成、同金、
72歩、同金、同と、同玉、
73歩、①同桂、83金、62玉、
63歩、同玉、54銀、64玉、
65歩、同桂、55金、同玉、
46銀、56玉、58香、同馬、
57歩、②同桂成、45銀上、55玉、
56銀、同成桂、25飛、同桂、
45と、64玉、55馬、同成桂、
65歩、同成桂、53銀不成、63玉、
64歩、同成桂、52銀不成、62玉、
63歩、同成桂、51銀不成、同玉、

42と寄、62玉、52と寄、71玉、
81銀成、同玉、92歩成、71玉、
82とまで57手

①同玉は84金打、62玉、63歩、71玉、72歩、同玉、83銀不成、71玉、62歩成、同玉(同香は72歩、61玉、21飛成以下)、73金、同桂、63歩以下
②同馬は45銀引、同桂、同銀、55玉、54と、45玉、55馬、35玉、36歩、同玉、37歩、35玉、44馬まで。　同桂不成は45銀上、55玉、56銀、同玉、26飛、55玉、45と、64玉、66飛まで。

大駒は3枚使っているものの、全体としては小駒図式のような、細かな味わいで楽しめる作品。

平凡に追うなら、9手目に83金と打つことになる。以下、62玉、63歩、同玉、54銀、64玉、55金、同玉、46銀、56玉まで来ると、さらに続けて57歩、同馬、45銀上、同桂、同銀のときに、65玉で詰まない。

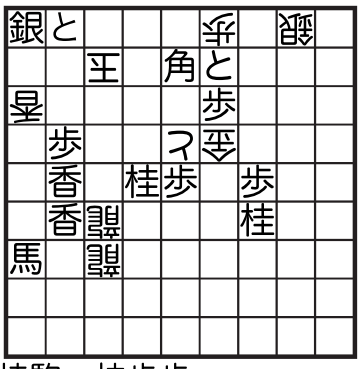
そこで、65地点の穴塞ぎとして、81の桂を65まで呼んでくることになる。9手目73歩に対して、同玉と取る①の変化が、84金と控えて打ち、さらに83銀不成から73金と打った金を捨てるなど、実に感触がいい(62歩成を同香と取ったときに、21飛成とここに活用できるのも好印象)。

次のポイントは、56まで玉を連れてきたときに、いったん58香と捨てておく手。これで馬をずらすと、26飛という手が可能になる。

57歩と打つ瞬間に、解答者には作者の狙いが見えて、思わずニッコリするはず。そう、ここで作った成桂を、63まで引っ張ってこようというのである。よくあるストレートな一直線上を移動させるのではなく、57→55→65→63と一度曲がって縦筋を変えるところにもご注目を。その際に、25飛～55馬と大駒を捨て去るのは、指もしなる快感だろう。そして最後は、還元玉の詰め上がり。

楽しめる作品ではないかと思う。論理を前に押し出すというよりは、全体で「物語」になっているところがいい。つまるところ、詰将棋創作というのは、「お話が書けるか」どうかということなのかもしれない(かつて黒川一郎さんが「詰将棋で詩を書く男」と言われたのを思い出す)。ただ単に詰めているだけの、ほとんどの詰将棋は、それこそお話にならない。

⑤　　作品集第55番
詰将棋パラダイス 1957.5



持駒　桂歩歩

71と、同玉、82銀不成、同玉、
83歩不成、71玉、72歩、同玉、
84桂、71玉、82歩成、同玉、
92桂成、①71玉、81香成、72玉、
82香成、62玉、53馬、同と、
63歩、同と、61角成、同玉、
71成香寄、②同龍、同成香、同龍、
51飛、72玉、71飛成、同玉、
81飛、62玉、52と、同玉、
44桂、43玉、41飛成、33玉、
34金、22玉、21龍、同玉、
32銀、11玉、12歩、同玉、
23金、11玉、21銀成、同玉、
32桂成、11玉、22成桂まで55手

①72玉は83香成、71玉、82成桂、62玉、72成桂、同龍、同成香、同龍、63歩以下。
②62玉は72成香、同龍、同成香、同龍、52飛、71玉、72飛成、同玉、82飛以下。

初手に83歩成と成れば、62玉で打歩詰の形である。74桂、同龍、63歩、同龍と解消することはできても、その先に手がない。

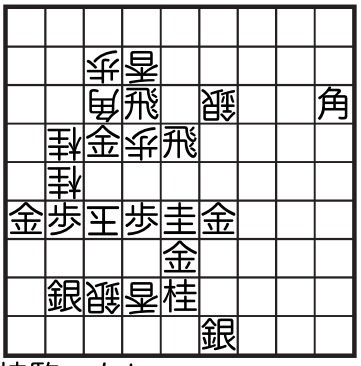
ということで、63での打歩を考慮に入れながら、つねに力の入れ方を加減した手で攻める。ポイントは、82に成駒を置かないこと。それが71と～82銀不成～83歩不成という、なんともソフトな連続手である。とりわけ、83歩不成は、71玉、72歩のときに62玉と逃げられても63歩を打てるようにした手。

さらに72歩で玉を吊り上げてから、84桂と、二枚香の筋をみずから止める筋悪の手が本局の

ハイライトである。ここでいったんフンヅマリになってしまった二枚香が、後で81香成～82香成と開けば、ようやく97馬の筋が通って、53馬で打歩打開が実現する。

細かいデリケートな手の連続で、よくこれだけ続けられたものだと思う。なかなかこういう味を出せる人はいない。世間的に高く評価されている作品ではないが、わたしは好きだ。

⑥　　作品集第63番
詰将棋パラダイス 1966.8



持駒　なし

75金、同玉、65成桂、76玉、
67金、同玉、57飛、同玉、
53飛成、①54歩合、47金、67玉、
57角成、76玉、73飛成、同歩、
67馬、同玉、45角、②56角合、
同角、76玉、75成桂、同玉、
85金、76玉、65角打、同歩、
同角、同香、77歩、67玉、
59桂まで33手

①67玉は56龍、76玉、75成桂、同玉、85金、76玉、65歩まで。
②76玉は75成桂、同玉、85金、76玉、54角、同銀、77歩、67玉、59桂まで。

若島正：53飛成の伏線で出現した54歩を巡って、45角、56角合と虚々実々のかけ引き、遂に65角打でとどめをさす。真に鮮やか！

と書いているのは、言うまでもなく、発表当時に解答者だったわたしである。当時はまだ14歳だった。詰将棋にあれほどまで熱中した日々が懐かしい。

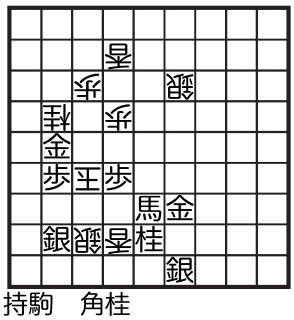
それはともかく、本局は狭い範囲でカラクリ屋敷的な仕掛けを実現させた作品であり、後でも述べるが、なんだか詰将棋というよりはチェス・プロブレムを見ているような作り方だ。高木秀次にチェス・プロブレムを作らせてみたかった、というのは言い過ぎか。

そう思わせるのは、この作品がいくつかのパーツでできていて、そのパーツの組み合わせ方が問題になる、という作り方をしているためである。パーツを並べる順序はいろいろあって、一見するとどう並べてもよさそうだが、実はあるロジックが仕込んであり、順序が一意に定まる。こういう構成方法も、高木秀次の発見ではないかと思える。

問題図で、上から行く道A（75金）と、下から行く道B（67金）が見えている。Aの筋は、75金、同玉、85金、76玉で、73飛成と質駒を入手するのはどのタイミングですればいいのかはわからないが、結局はBの67金をいつかは実行することになる。つまり、A→Bというコース。そしてBの筋は、67金、同玉、57成桂、76玉で、ここでもAの75金を実行するタイミングはわからないが、67成桂、同玉、57飛、同玉、47金、67玉、57角成、76玉まで進めば、結局はAの75金に合流せざるをえない。つまりB→Aのコース。

仮にA→Bを選んだとして、75金、同玉、85金、76玉、73飛成、同歩、67金、同玉、57成桂、76玉、67成桂、同玉、57飛、同玉、47金、67玉、57角成、76玉。この順と、B→Aを選んだとして、67金、同玉、57成桂、76玉、67成桂、同玉、57飛、同玉、47金、67玉、57角成、76玉、75金、同玉、85金、76玉、73飛成、同歩の局面は、当然ながら同じ結果になる。もうここからでは、打開する策がない。

（紛れで共通する逃れの局面）



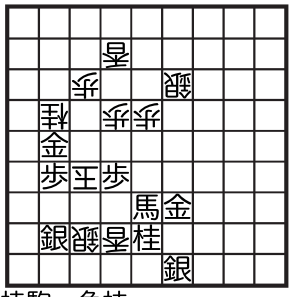
持駒　角桂

何か他に手段はなかったか。そう考えると気が

つくのは、73飛成のタイミングである。ここで角を入手する手があるかぎり、67への捨駒がいつでもできる（同銀成と取れば、87角の詰みが待っている）。ということは、この飛車を利用して、57飛、同玉の瞬間に53飛成が一回利く。これで54に合駒を発生させれば、それを逆用できるのではないか……。

B→Aのコースでやってみよう。67金、同玉、57成桂、76玉、67成桂、同玉、57飛、同玉のときに、53飛成、54歩合を入れてから、47金、47金、67玉、57角成、76玉、75金、同玉、85金、76玉、73飛成、同歩となれば、先ほどの図とは一箇所だけ違って、54歩がある。

（54歩を発生させた形）



持駒　角桂

なるほど、その歩を狙うのか。67馬、同玉、45角！と打って、この歩を入手すれば詰み……と早合点すると、残念でした、となる。実は45角のときに、56桂合！とされると詰まない。

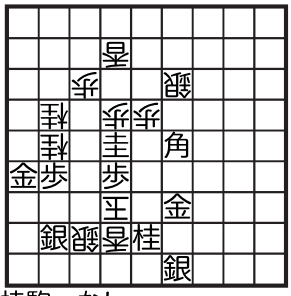
さらに、それを言うなら、もともとこの図は幻で、54歩合の代わりに54桂合をされてもだめなのだ。

ここでようやく、作者の構想が見えてくる。桂合をされたのは、問題図にある成桂を67に捨てたからである。これを捨てずに、盤面に残しておく方法、それが本局のキーになる。もうお気づきだろう。すでに見たいちばん最初の作品（作品集第19番）では、銀合をさせないために、銀を捨てずに盤面に残すのがひそかなテーマだった。本局はその桂版であり、第19番よりもはるかにテーマが前景化されているのである。

桂を盤面に残す方法は、初手から75金、同玉、65成桂！とここに置いておく手だ。これで、53飛成には54歩合が絶対になり、狙った獲物が現れる。

さらに注意すべき点は、73飛成、同角となった局面で、75成桂、同玉、85金、76玉の４手を入れずに、いきなり67馬、同玉、45角を実行すること。

（19手目45角までの局面）



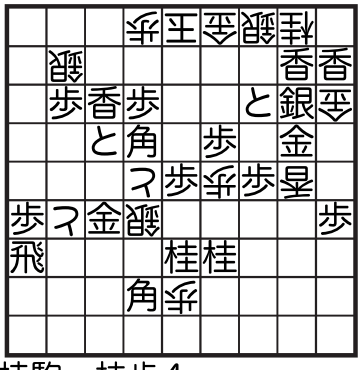
持駒　なし

作り方としてうまいと思うのは、54角と歩を入手するラインを、65の成桂が一時的に遮っているところだ。もし75成桂、同玉、85金、76玉を入れてあったとしたら、ここで56桂合！とされて詰まなくなるのは、すでに見たとおり。これで、パーツの並べ方の順序が一意的に定まったことになる。ここから、56角合！の捨合で最後の抵抗をして、54ではなく65で歩を入手するまとめもおみごと。

唯一気になるのは、紛れ順で54歩合でも54桂合でも詰まないということくらいか。しかし、それは56桂合の逃れを含む構成から見ると、やむをえないことなのかもしれない。

これを見ていると、なんとなく「ルービック・キューブ」と命名したくなってくる。パズル作家としての高木秀次を再認識させてくれる傑作ではないか。

⑦　　作品集第70番
詰将棋パラダイス 1966.4



持駒　桂歩４

43桂、52玉、53角成、同玉、
54歩、①52玉、53歩成、同玉、
86角、②75角合、65桂、③44玉、
34金、54玉、57飛、同銀不成、
44金、同玉、77角、④66角、
34銀成、54玉、55歩、同角、
44成銀、同角、53桂成、同玉、
86角、52玉、53歩、同角、
62歩成、⑤同角、53歩、同角、
同角成、同玉、54歩、同玉、
63角、53玉、54歩、42玉、
41角成、同玉、31桂成、同玉、
21香成、同玉、22歩、12玉、
24桂、同金、13銀、同玉、
24と、同玉、34金、13玉、
23金打、14玉、24金まで65手

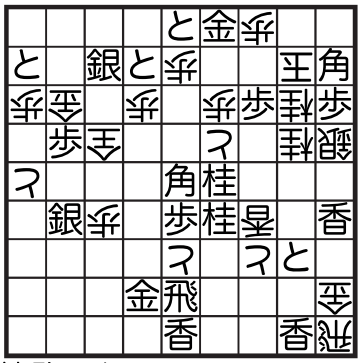
①同玉は65金、53玉、64金、52玉、62歩成、同歩、53歩、61玉、72香成、同玉、82歩成、同玉、73金以下。
②52玉は42と、同銀、53歩、同銀、同角成、同玉、65桂、54玉、57飛、55角、同飛、同銀、53桂成、同玉、54歩、同玉、65角以下。
　75歩合は65桂で
a)52玉は57飛、同銀不成、42と、同金、53歩、41玉、31桂成、同玉、21香成、41玉、52銀以下。
b)54玉は57飛、55角、53桂成、同玉、75角、同銀、55飛、54桂合（54角合は同飛、同玉、65角、53玉、42角、同銀、54歩、52玉、42と、同金、53銀、同金、同歩成、同玉、54歩以下）、64角、同銀、同と、同玉、75金、73玉、84銀、72玉、82歩成、同玉、83歩以下。
③54玉は57飛、同銀不成、55歩、44玉、34金まで。
④66銀成は同角、同角、34金、54玉、53桂成、同玉、64銀、52玉、62歩成以下。
⑤同歩は53角成、同玉、75角、52玉、53歩、61玉、72香成、同玉、82歩成、同玉、83歩、71玉、93角成、61玉、72銀以下。

　ご存知、看寿賞（長篇）受賞作である。たしか、当時解答王だった七条兼三さんが、これを解こうとして、変化紛れの森に眩暈を覚え、面会謝絶で社長室に閉じこもり、ようやく解いたとかいう曰くつきの作品で、その話を七条さんから直接うかがったような記憶がぼんやりとある。そういうわけで、わたしの頭の中には、この作品が「超難解」だという神話ができてしまっていた。
　今あらためて、この作品と対峙してみる。そうすると、過去の幻はどこかに消え去ってしまったような、そんな感慨を抱いてしまうのだ。
　まず、問題図を盤に並べて気がつくのは、使用駒38枚とほとんど全駒使用に近いことだ。玉方は飛しか持っていない。合駒選択の余地があまりないために、難解性は思ったよりも減る。
　変化読みで中心になるのは、86角に対して75角合とするところの、②の変化である。なるほど難しいことはたしかだが、「詰みそうには思えないのに手が続く」ための難しさではなく、「ほとんど詰みそうだが、厳密に読めば逃れがあるかもしれないので、丹念に読まざるをえない」という種類の難しさなので、実はそれほど大変ではない。
　本局の主眼部分は、言うまでもなく、75に合駒で発生した角が、75→66→55→44→53→62→53と一歩ずつステップを踏みながら矩形の軌跡を描く、その視覚的なおもしろさにある。それは手の積み重ねによるものであり、「構想」（あるいは、論理的な因果を持つシークエンス）ではない。発表当時には、邪魔駒63歩の消去を「構想」と呼んだ人が何人かいて、もしかするとそう受け取っている鑑賞者も多いのかもしれないが、少なくともわたしの目にはそれは「構想」とは受け取れない。たしかに、微妙な綾を成立させる一つの道具として63歩は役立っている（左上隅に追ったときに詰むか詰まないか、という形の切り分け）。しかし、だからといって62歩成のタイミングは「構想」と呼ぶほどには当たらない。
　高木秀次の作品群全体から眺めれば、本局は明らかに「玉方駒の連続移動」という系列に属することが見て取れるだろう。たとえばすでに挙げた①（作品集第14番）と④（作品集第53番）がそうだ。
　このテーマの延長線上には、たとえば角合を発生させて、その角を伏線的に連続移動させてから、森田手筋の打歩打開に結びつける、といった表現方法もありそうだ。
　いずれにせよ、長篇向きというよりは中篇向きのテーマであり、現代作家が描けばずいぶん

違った表現になっただろうと思う。おそらく、合駒制限のために全駒使用に近くしたあたりが、この重い表現の原因だったような気がする。

もちろん興味深い作品ではあるものの、個人的にはなるほどさすがに看寿賞受賞作と思えるほどのインパクトを与えてくれない。

⑧作品集第71番「千早城」
詰将棋パラダイス　1963.2

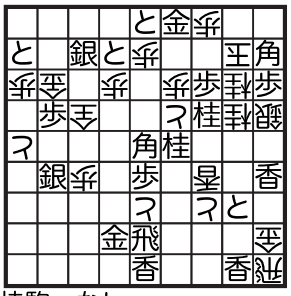

持駒　なし

32歩成、同玉、42金、同玉、
52と引、32玉、33歩、22玉、
34桂、11玉、21角成、同玉、
32歩成、同歩、33桂不成、同歩、
12歩成、同玉、14香、13金、
同香成、同玉、22銀、14玉、
18飛、同飛成、13金合、25玉、
26と、34玉、33銀成、同玉、
34金、同玉、25と、45玉、
46歩、54玉、63銀不成、65玉、
66歩、56玉、57金、55玉、
56金、64玉、74銀成、同金、
65金、同金、同歩、同玉、
74銀、同玉、75金、73玉、
63と、同玉、53香成、73玉、
74歩、72玉、62とまで63手

高木秀次の代表作として、あまりにも名高い「千早城」。ここで初めてこの作品に出会う方のために、これをまったく予備知識なしで解こうとするとどうなるか、くわしく書いてみたいと思う。

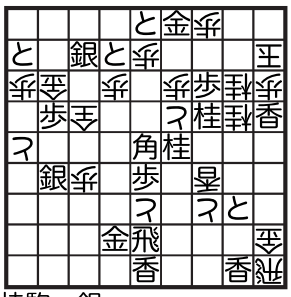
まず、盤面は全駒使用であることを確認してから、初手34桂と指してみる。

(問題図で初手34桂とした局面A)


持駒　なし

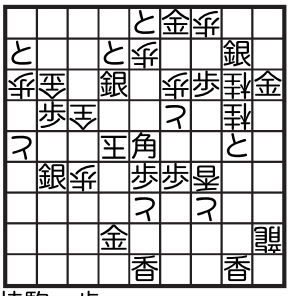
逃げ方は３通り。その３通りとも大切なので、丁寧に検討しておこう。
(1)同と。この手に対しては、32歩成、同玉、21角成、同玉、12歩成、同玉、14香、13歩合、同香成、同玉、22銀、14玉、18飛、同飛成、13金、25玉、26とまで詰み。つまり、将来の逃げ道である34を塞いでしまうわけ。
(2)13玉。これに対しては、14香、同玉、18飛、同飛成、25銀と打つ。もし13玉と下がれば、23角成、同玉、35桂、同と、22桂成、同玉、32歩成でぴったり詰むことを確認しておく。従って25銀は同玉と取ることになり、26と、34玉、25と、45玉、23角成、34桂合、46金、54玉、63銀不成、65玉となった形で、一見打歩詰だが、持駒に桂があるため、77桂、同歩成、66歩、76玉、77金まで。要するに、13玉の変化がすべて詰んだことになる。
(3)11玉。これが問題。21角成、同玉、12歩成、同玉、14香、13歩合と進めるしかなさそう。

(変化順13歩合までの局面B)


持駒　銀

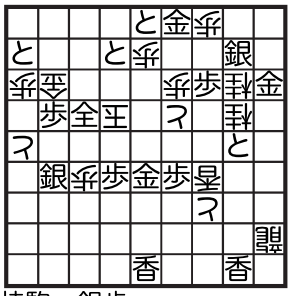
ここから、ほぼ一本道で、同香成、同玉、22銀、14玉、18飛、同飛成、13金、25玉、26と、34玉、25と、45玉、46歩、54玉（56玉は57金、55玉、56金、64玉、63銀成以下）、63銀不成、65玉となった局面が次のC図。

(変化順65玉までの局面C)



持駒　歩

(変化順74銀成までの局面D)



持駒　銀歩

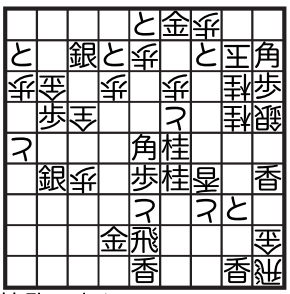
さらに先に進めて、66歩、56玉、57金、55玉、56金、64玉、74銀成(局面D)とする。

応手は2通りあるが、どっちか。同玉だと、65金、84玉、75金、73玉、64銀、62玉、52香成、72玉、73歩、同金、同銀成、同金、74金打、72玉、73歩、71玉、61とまで。こちらの方はぴったり詰む。ところが、同金だと、65銀、73玉、74銀、同玉、65金、84玉、75金、83玉ときわどくかわされて、この形が詰まない。84歩は92玉で、悲しいかな一歩不足。82金は94玉でアウト。

……と、ここまで読んできて、ようやく初手34桂は一歩不足で詰まないことがわかる。しかし、これまでの読み筋が、すべて無駄になったのか、と思ってはいけない。問題は、この手順のどこかで、小さな工夫をすることだ。

34桂に11玉と逃げられてからは、ほぼ一本道に進んだことを考えると、工夫の余地があるのは初手である。そこで、34桂ではなく、32歩成を試してみよう。

(初手32歩成の局面E)

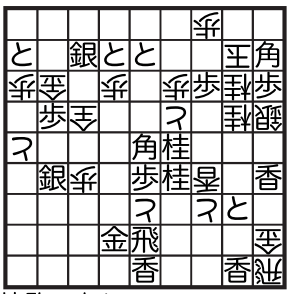


持駒　なし

これを同歩と取ると、34桂、11玉(13玉は、すでに見た(2)の変化で詰む)となったとき、44角と一歩を手に入れる手があるではないか。以下、同歩、21角成、同玉で、22歩と打てば、11玉、12歩成、同玉、14香、13歩合、21銀で詰む。これだ。ということは、32歩成には同玉の一手。

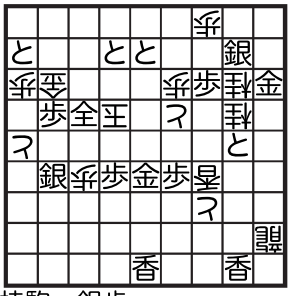
そこで42金、同玉、52と引、32玉、33歩、22玉と進めたのが次の局面。

(8手目22玉までの局面F)



持駒　なし

(その先、74銀成までの局面G)



持駒　銀歩

この局面Fは問題図と似ているが、52にと金がいる。ここから、最初にやってみた34桂以下、もし同じ手順をたどったとしたら、不詰だったはずの左上での形は局面Gのように変わっている。

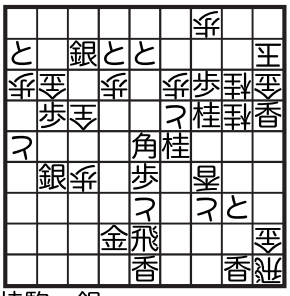
詰まなかったのは、同金の応手だった。しかし、この図だと、同金には65金、同金、同歩、同玉、74銀、同玉、75金、73玉、63と、同玉、53香成、73玉、74歩、72玉、62とまで、ちょうど詰んでいる。

やっと解けたか……と安心してはいけない。実は、この作品にはまだその先があるのだ。いわば、最初の伏線手順を見つけるまでが第1ステージで、それを見つけた解答者だけが、さらにレベルの高い第2ステージに挑戦できるのである。そんなレベルの層を設定した詰将棋なんて、どこにあっただろうか。

元に戻って、局面BとCを見てほしい。局面Bで13歩合として、そこで手に入れた歩を46に打つことになる。しかし、もし歩合ではなく金合(つまり、金先金歩玉方応用)が可能だったら、46金と打っていることになり、そのとき局面Cは打歩詰となって詰まないのだ！　今まで考えてきた手順には、伏線部分を除けばさほどの妙手はなく、これが正解手順のはずがないと疑心暗鬼になる解答者にとっては、この事実に気づくことはさほどの難事ではないかもしれない。

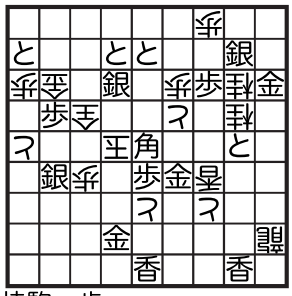
実は、初手から32歩成以下の伏線手順に入ると、42金と捨てた金が玉方に渡るため、14香には13金合！が生じる。その局面と、打歩詰になる局面を掲げる。

(13金合までの局面H)



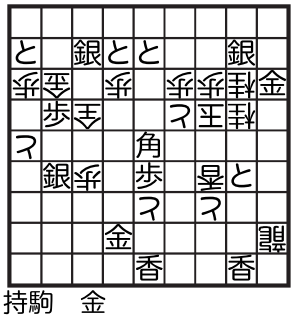
持駒　銀

(65玉までの局面I)



持駒　歩

(13金合までの局面H)



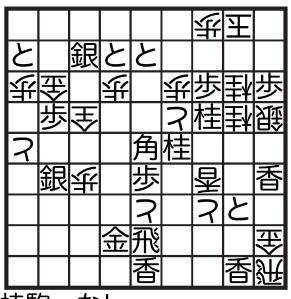
持駒　金

解答者に突きつけられた新たな課題は、この打歩の罠からどうやって逃れるかだ。この局面Iまで来れば、もう脱出する手立てはない。そこで、ふたたびこれまでの手順を点検して、そこに打歩打開の策を構築しておくことを考える。それは言い換えれば、不利合駒で手に入るはずの金を、金先金歩でまた歩に換えてしまうような、道具立てを見つけることである。

こう目的がわかったところで、具体的な手順を発見するのは解答者にとって大変だろう。作意手順を解説しよう。

初形と似たような形に戻った局面Fから、34桂、11玉、21角成、同玉と進んだ次の局面Jが、仕掛けを施す唯一の瞬間である。

(21玉までの局面J)



持駒　なし

ここで12歩成ではなく、いったん32歩成！同歩、33桂不成！同歩と、ここまで歩を吊り上げておくのである(32歩成のときに同玉は、42と、21玉、33桂不成、11玉、12歩成、同玉、14香、13合、21銀以下)。こうしておいてから、12歩成に進む。

この準備工作が活きるのは、13金合をもらってから先、25と、34玉まで進んだ次の局面である。

この瞬間に、33銀成！同玉、34金！同玉として、持駒の金を歩にすりかえておく。いわゆる不利交換の手筋である。

元に戻って、先ほどの21玉までの局面Jで、32歩成で33歩を消去しただけにして進み、34玉まで来た局面で33桂成として金歩不利交換をしようとしても、同歩ではなく45玉と逃げられて、46金と打つはめになり失敗することを確認しておいてほしい。

こうして46歩と打てれば、すでに見た収束の手順がふたたび有効となって、めでたしめでたしの大団円となる。

あまりの複雑さに混乱した読者も多いだろうから、もう一度、本局の構成を作意手順に沿って整理してみる。

①第一伏線(初手32歩成～8手目22玉)
②9手目34桂～12手目21同玉
③第二伏線(13手目32歩成～16手目33同歩)
④17手目12歩成～19手目14香
⑤金先金歩玉方応用(20手目13金合)
⑥21手目同香～30手目34玉
⑦金歩不利交換(31手目33銀成～34手目34同玉)
⑧35手目25と～40手目65玉
⑨打歩(41手目66歩)
⑩42手目56玉～詰め上がりまで

このスキーマにおいて、①の第一伏線は、実はいちばん外枠の、⑩の収束を詰ませるためのものである。そして③の第二伏線は、⑤の金先金歩玉方応用を予見しつつ、⑦の金歩不利交換を用意したものであった。この二重伏線だけでも充分に凄いが、高木秀次の真に独創的なところは、第一伏線を仕掛けたときにだけ、金先金歩が発動

して第二伏線が必要になる、というアイデアを思いついた点にある。言い換えれば、この二重伏線は、ただ単に伏線を二つ張ったということではない。伏線どうしに論理的な関係性が存在するのだ。そのために、この作品は作意手順をそのままで並べて追うと、実に妙な感じがする。つまり、思考の時間が内に折りたたまれているという感覚、時間が直線的に流れていないという感覚を味わうのだ。

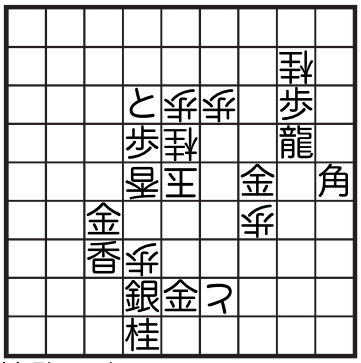
なんとなく難しい言い方をしたような気がするので、もし高木秀次が自作について好きなように語ったとしたら、こんなふうに言うのではないか、という別の言い方をしてみよう。つまり、「千早城」は作者と解答者の知恵比べである。解答者はまず、普通に進めた場合詰まないことを見抜き、それを回避する第一伏線を思いつく。そこまでたどりついた解答者を見て、作者はニッコリ笑う。「なるほど、よく考えたものだな。しかし、そう伏線を張ったら、こちらにはこんな秘手があるんだぞ。さあどうする」そう言いながら、作者は13金合を見せる。ふたたび解答者は考え込む。そして長考の末に、第二伏線に思い至る。「よくやったじゃないか。きみもなかなかのものだな」作者からそう褒められた解答者は、思わず自分もニッコリする……。

おそらく「千早城」は、詰将棋が表現しえた、古今最高の作者と解答者の知恵比べである。それは、ただ単に変化紛れが多すぎて解答者の読みの容量を超えてしまう、という意味での難解作ではない。作者と解答者がお互いの想像力を競おうとする、そういう意味での知恵比べなのだ。

「千早城」が発表当時に正解者ゼロだったことは、もちろん作者にとって名誉だったはずだ。しかし、この作品はけっして孤高の城ではない。むしろ、いつでも新しい解答者の挑戦を歓迎している。『この詰将棋がすごい！』がそうした機会を誰かに提供できたとしたら、いつか高木秀次論を書こうと思っていたわたしとしてはそれにまさる喜びはない。

さて、これでベスト８を解説し終わったわけだが、実は高木秀次の作品群でぜひ紹介したいものには、余詰や不詰で潰れている作品が多い。それに触れないのは忍びないという気がするので、これから不完全作をまとめて並べる。いずれも、完全なら……と残念に思うものばかりだ。

⑨　　作品集第16番
発表誌・発表年月不明（余詰）



持駒　歩４

(作意)
56歩、同玉、57銀、55玉、
＊46銀、同桂、56歩、同玉、
54龍、同歩、57歩、55玉、
33角成、44桂合、56歩、同玉、
34馬、同桂、57金、55玉、
56歩、同桂、66金上、同香、
65金、同玉、57桂、55玉、
45金まで29手

謎の作品。

33角成で44桂の合駒を発生させ、34馬と捨てることによって56歩を打てるようにするのが狙いで、言うまでもなくこれはいわゆる「森田手筋」である。問題は、この作品がはたしていつ作られたのか、ということだ。

森田手筋のオリジナルとなった森田正司作は、1959年の発表であった。高木秀次は1950年頃から作品を発表しているので、もしこの作品が既発表作だとすると、1959年以前であった可能性も十分にある。あるいは、作品集『千早城』を上梓するに当たって、新たに作り足した作品なのかもしれない。その場合には、1993年頃の作品ということになる。『千早城』にはこの作品の発表データはなく、さらにデータベースにはこの作

品は登録されていないので、本当のところはわからない。作者の解説にも、「森田手筋」という言葉は出てこないので、余計に謎は深まるばかりだ。

これがけっして小さな問題ではないのは、もしこの作品が1959年以前の発表作であったなら、「森田手筋」は「高木手筋」と呼ばれていたかもしれない、ということになるからだ。要するに、詰将棋の歴史（というのは大袈裟だが）が変わっていたかもしれないのだ。

ここから先はわたしの推測である。まず、既発表作だとすれば、大きな疑問がある。それは、序盤の＊のところで、46銀ではなく、45金、同玉、46歩、同桂、同銀、同玉、57金、55玉、35龍以下、簡単な早詰があることだ。もし発表されていたら、解答者がこんなに簡単な早詰を見逃すだろうか？　（その意味では、これがもし既発表だったとしても、森田手筋の「第１号局」という栄誉は与えられない。）この他にも、余詰がいろいろあり、早い話が作品としてはボロボロである。

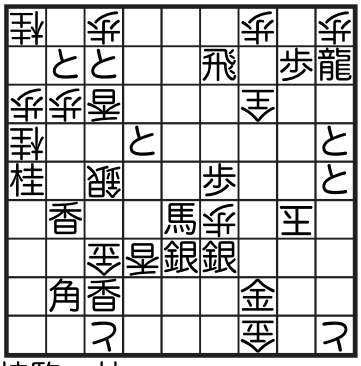
逆に、これが作品集完成のために新たに作られた作品だと仮定することにも、大きな難点がある。それは、作者が解説でこう書いているからだ。「尚、玉方、67歩を省けば、56歩、同玉、54龍、同歩、57歩、55玉、67桂、同香成、56歩、同玉、67銀以下の早詰がある」。この解説はまったくの誤りで、46の地点が空いているため、ここに書かれているような早詰順は成立していない。その代わりに、67歩がなければ、56歩、同玉、54龍、同歩、57銀、55玉、65金、同玉、66香、55玉、67桂までの早詰である。もしこの作品が作ったばかりだとすれば、作者がこのような読み間違いをしているのは説明がつかない。

最も可能性がありそうなのは、この作品がかなり前に作られた未発表作だった、という説だ。それを、作品集のために埃を払って取り出してきた、というわけである。昔の作品なら、たとえ作者でも、この駒が配置してあるのはどういう意味だったか、忘れていることはよくある。

……以上がわたしの読み筋なのだが、はたして真相はいかに？

⑩　　作品集第31番

詰将棋パラダイス　1960.8（不詰）



持駒　桂

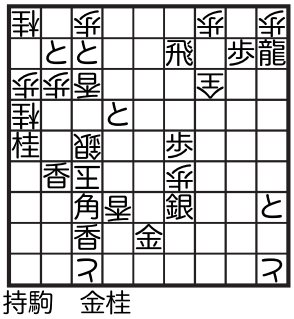
（作意）
16と、同玉、15と、17玉、
16と、18玉、17と、29玉、
23龍、同成銀、39金、同玉、
32飛成、同玉、48銀、同玉、
57馬、同玉、58金、66玉、
77角、76玉、33角成、①78と、
32馬、86玉、87金、②95玉、
96歩、84玉、83と、同桂、
85歩、同玉、41馬、84玉、
74と、同香、51馬、85玉、
97桂まで41手

①87玉は77馬、96玉、87金、95玉、83香成、86桂合、96歩、94玉、67馬以下。
②85玉は41馬、74香、同馬、同香、97桂以下。

銀先銀歩がらみの伏線作。

まず、仕掛けの骨格を説明しよう。序盤、８手目29玉まで進んだところで、そのまま普通に39金、同玉、48銀、同玉、57馬、同玉、58金、66玉、77角、76玉と左へ追ったのが次の図。

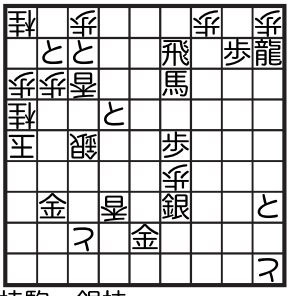
（９手目39金以下、76玉までの局面）



持駒　金桂

ここで角の開き王手のラインに、ちょうど都合良く銀の質駒がある。遠慮なく33角成とご馳走になると、以下78と、43馬、86玉、87金、95玉で次の図。

（問題の局面95玉まで）



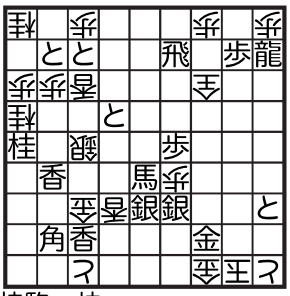
持駒　銀桂

この図で96銀と打つ一手になり、84玉、83と、同桂で打歩詰。さて、どうしたものか、というのがパズルである。

要するに、問題は銀先銀歩だ。そこで、銀の代わりに歩を手に入れる手段を考えることになる。高木秀次は何を考えたか。

8手目29玉の局面に戻ろう。

（8手目29玉の局面）



持駒　桂

この瞬間に、まず23龍！と捨てる。同成銀と取らせてから、39金、同玉の2手をはさんだ後に、さらに32飛成！と歩頭に捨てる。ここに歩を吊り上げておいて、将来に33角成の後で32馬と、一歩入手しようというのである。

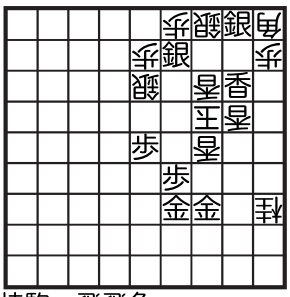
なんとも派手なことを考えたものだ。よくやる、としか言いようがない。

もちろん、作り方としてはかなりの無理作りであり、すでに見た紛れ順では、龍と飛がアクビをしているので、どんな解答者でもこの伏線には気づくだろう。しかし、高木秀次が古典派と目される所以は、あくまでもこの伏線を「龍と飛の大駒二枚ただ捨て」という派手な捨駒で実現したかったところにある。龍と飛を捨てて、銀の代わりに歩を手に入れる。その途方もないパラドックスにすべてがかかっているのだ。

もちろん、これは詰将棋作家のイマジネーションを強烈に刺激するテーマである。現代風の作り方をするなら、伏線をかける捨駒を大駒ではなく無視されそうな小駒にして、紛れ順との差異を目立たないようにするかもしれない。あるいは、飛２枚を捨てる方向で作るなら、たとえば「24龍、同成銀…33飛成、同歩」という順にして、33に成銀ではなく歩を発生させるような手もあるかもしれない（その場合なら、23龍、同成銀とすると後で33飛成のとき同成銀！で逃れ、というのが必須の条件である）。あるいは、「23龍、同成銀…32飛成、34銀合！」という、伏線手段のさらに裏をかく玉方応用を仕込む手もあるかもしれない（高木作では、ほぼ合駒の可能性がないように駒が出尽くしているところに注意）。あるいは、飛１枚だけの仕掛けを考えるなら、「24龍、同銀」で将来のラインを開けて、「11角成」と歩を入手する作り方もできる（その場合は、22龍、同銀だと相変わらず銀しか取れない、という紛れが必須）。

当然ながら、これの裏返しも考えられるので、マニアには有名な山本民雄作を引用しておく。

#3　　山本民雄
詰将棋パラダイス　1987.11

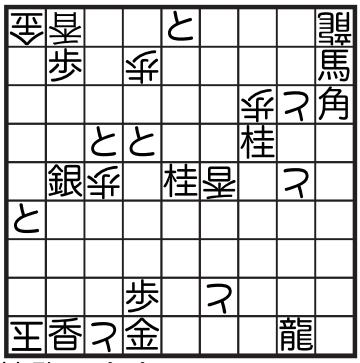


持駒　飛飛角

67角、43玉、53銀成、同歩、
44銀、同玉、42飛！同銀!!
45飛、34玉、42飛不成、25玉、
36金左、同香、34角、同玉、
35銀、25玉、26金、14玉、
12飛不成、23玉、32飛成、14玉、
15歩、13玉、12龍まで27手

残念なことに、この作品は不詰だった。変化(2)のところで、なんと65歩の捨合をして、以下同馬、86玉、87金、85玉、97桂、84玉で以下打歩詰になって詰まない。小沢正広氏の指摘による。たしかに見落としやすい順だ。修正は容易だと思われるだけに、惜しい。

⑪　　作品集第39番
風ぐるま　1956.1(余詰)



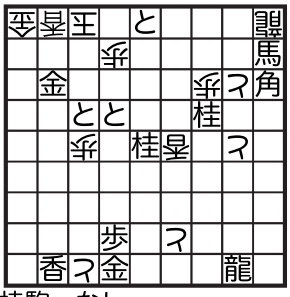
持駒　金金

98金、同玉、21馬、①同龍、
97と、同玉、27龍、47と、
88金、86玉、16龍、46と、
87金、85玉、86金、94玉、
85金、93玉、84金、82玉、
83金、71玉、63桂不成、同歩、
35角成、同と、72金、同玉、
12龍、②22歩合、63と左、71玉、
61と、同龍、72歩、同龍、
21龍、61桂、72と、同玉、
61龍、同玉、53桂、52玉、
42飛、51玉、41飛成、62玉、
61龍まで49手

①76桂は同馬、同歩、97と、同玉、88金…71玉、63桂打以下。
②同龍は63と左、71玉、72歩、同龍、同と、同玉、73飛以下。
71玉は81香成、同玉、83香、71玉、82香成、同金、同龍、同玉、73と右以下。

打歩打開のための伏線物。まず素直に、3手目からいきなり97と、同玉、88金以下上に追って、71玉となったところで次の図。

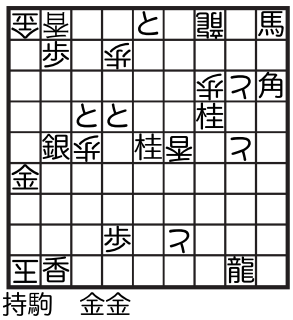
(3手目97と以下、71玉までの局面)



持駒　なし

ここから63桂不成、同歩、72金、同玉、63と左、71玉にて打歩詰の形となる。これが基本的な設定。
攻方の大駒3枚が遊んでいることを考えると、35角成が目につくが、同とと取られて、攻め方の龍に活躍の道がない(23とが進路をふさいでいる)。
ここで、龍を1筋から入る手段に気づくかどうか。97玉の形で27龍、47とをはさみ、さらに86玉の形で16龍!とするのが急所である。同とと取ると、後に63桂不成、同歩のとき35角成で詰むから、この龍は取れない。
しかし、1筋にはまだ12馬と13角が邪魔をしている。そこでふたたびテープを巻き戻して、3手目に21馬!と捨てておく。後に35角成と捨てれば、いよいよ準備完了。72金、同玉の瞬間に、狙いの12龍!がついに実現する。
実はこの作品、風ぐるまに載ったときには次のような図になっていた。

(発表原図)



持駒　金金

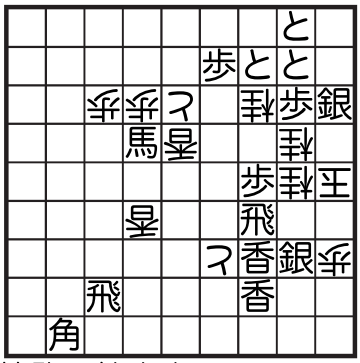
どこがどう違うか、おかわりだろうか。原図では、第一伏線である21馬の捨駒が、将来の12龍の瞬間に21龍の当たりになるよう呼び寄せる意味だった(これを省くと、61とを同玉と取られて詰まない)。ところが、『千早城』掲載図では、21

馬は邪魔駒消去の意味合いに変貌しているのである。

どちらがいいか。無論、原図の方がおもしろい。12龍を取らせる駒を作るという効果が、はるかにパラドキシカルなのである。実際、後でお見せするように、高木秀次はこのテーマを他の形で展開した作品も作っているだけに、なぜ21馬の意味合いにこだわらなかったのか、正直なところわたしには作者の意図がよくわからない。同じ捨駒だからかまわないだろう、とは考えなかったはずなのだが……謎だ。

なお、この原図では５手目より88金、86玉、87金、85玉、86金、94玉、85金、93玉、83と、同玉、75金以下の早詰あり。さらに７手目から88金で上に追って、82玉のとき73と直、71玉、62と、同玉、63桂成、51玉、42桂成以下の余詰もある。この後者の余詰は、修正図でも消えていない。

⑫　　作品集第52番
風ぐるま　1955.8(不詰)



持駒　桂歩歩

(作意)
16銀、14玉、15歩、13玉、
12と、同玉、22歩成、13玉、
12と、同玉、74飛、①56歩、
同角、同香、22と引、13玉、
14歩、同玉、15銀、同玉、
27桂、14玉、16飛、同桂、
46馬、74歩、15歩、13玉、
34歩、46と、23と、同玉、
33歩成、24玉、34と、13玉、
14歩、12玉、23と、同玉、
33香成、14玉、26桂、24玉、
34成香、13玉、14歩、12玉、
23成香、同玉、33香成、24玉、
34成香まで53手詰

①13玉は23角成、同玉、33と、同玉、34歩で
a)44玉は56桂、同香、53馬、同玉、65桂、52玉、56飛以下
b)43玉は33歩成、52玉、43と、同と、44桂、同と、53歩、61玉、31飛成、51歩、52歩成、同玉、41龍、61玉、53桂以下

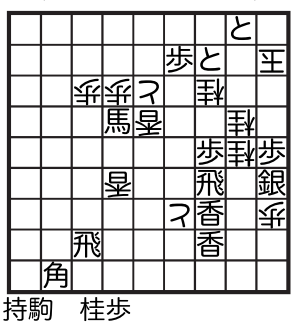
わたしにとって、懐かしい作品である。というのは、この作品に初めて出会ったのが、近代将棋に山田修司さんが連載されていた名稿として名高い、「名局リバイバル」であったからだ。そこに取り上げられていた作品の一つ一つが、まだ詰将棋の世界に入ったばかりのわたしにとって、「図巧」や「無双」の代わりになった。それ以降、近代の詰将棋史を通観するこの「名局リバイバル」に匹敵するようなものは、まだ誰の手によっても書かれていない。詰将棋批評の分野が未だにほとんど手付かずの状態であることは、残念なことと言わなければならない。

それはともかく、「名局リバイバル」を読んでいてわたしの記憶に残ったのは、この高木秀次作が正解者なしという記録を作ったことだった。手数はわずか53手なのに、誰も解けなかったとは。ふーん、解答者が誰も思い至らなかったほど、凄い構想だったのか、と盤に並べずに山田さんの解説を追うだけのわたしは、いたく感心したものだ。そこには多少の勘違いがあったことは、『千早城』を読んだときに初めて気づくことになるのだが……。

それはしばらくおくことにして、本局の構想部分を解説しよう。

最初の急所は、10手目12同玉となった局面である。角＋飛のバッテリーで開き王手ができる形になっている。ここで、飛をどこに動かすか。

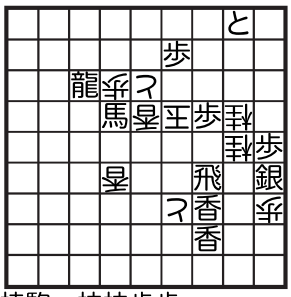
(10手目12同玉まで)



持駒　桂歩

今仮に、ごく普通に73飛成と指してみよう。13玉とかわされると、23角成、同玉、33と、同玉、34歩と進めるより他にはなく、44玉と逃げられたときが問題。

（73飛成以下、44玉までの局面）



持駒　桂桂歩歩

攻め方42歩があるので、4筋に歩は打てない。とすると、56桂と捨てるしかなく、同香と取られて二の矢が続かない。

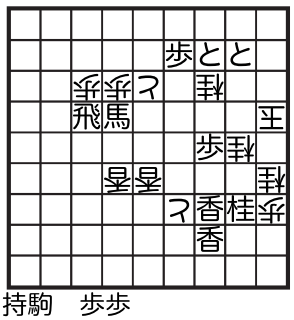
それでは、73飛成の代わりに75飛だったらどうか？　その場合でも、56桂、同香で意外なほど手はなく、55馬、43玉、33歩成、52玉でアウトになる。

そこまで考えると、ようやく11手目に74飛！と移動する手を思いつく。これだと、56桂、同香のときに、53馬！同玉、65桂でこの変化がぴったり詰むのだ。

そこで、玉方も74飛に対して、56歩と受けとめる。今度は、22と引、13玉、23と、同玉、33とで左に引っ張り出そうとしても、12玉で詰まない。56歩ではなく45歩なら、この12玉のときに45角が利くので、33とのときに同玉と取るしかなく、前記と同じような順で詰むという仕掛け（56桂が打てることに注意）。このデリケートな綾が、本局の構成を支える骨子になっている（……のだが、その肝腎のところに見落としがあった。後述）。

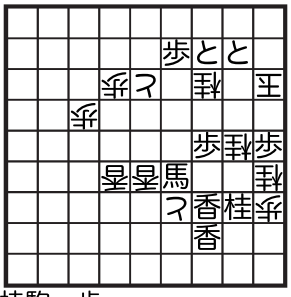
さて第二の問題は、54の香が56に移動したことによって四段目のラインが開き、そこを狙ってさらに16飛の捨駒で24桂を移動させ、飛＋馬のバッテリーが直接14の玉を照準に入れた、24手目の局面だ。

（24手目16同桂までの局面）



持駒　歩歩

（28手目13玉までの局面）



持駒　歩

最初の問題と同じく、ここでもバッテリーの開き方がポイント。正解は46馬！である。ここへ移動した理由は、その直後に、13玉となった局面（右上図）で明らかになる。

今度は、馬＋歩のバッテリーができている。それを利用して34歩！と王手ができる。これが作者の描いた構想で、以下細かい捌きになって詰め上がる。

まとめるとこうだ。

①角＋飛のバッテリーを開いて、移動した飛が新たな飛＋馬のバッテリーを作る。

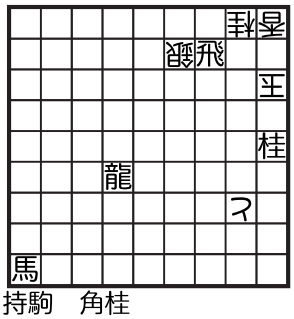
②その飛＋馬のバッテリーを開いて、移動した馬が新たな馬＋歩のバッテリーを作る。

③最後に馬＋歩のバッテリーを開けば、それが収束への鍵になって詰む。

正直なところ、この時代によくこんなことを考えたものだと思う。なんとなく、詰将棋というよりはチェス・プロブレムに出てきそうなテーマ設定ではないか。

高木秀次がおもしろいのは、この玉突き式の構想を表現するのに、三段ロケットにした点だ。これは普通だと、二段ロケットを作るくらいで満足しそうなところ。たとえば最近の作だと、解答選手権で出題された清水透作が思い浮かぶ。ところが、それを三段式に展開するのが、高木秀次らしい徹底ぶりなのだ。

#4　　清水　透
詰将棋解答選手権　2008



持駒　角桂

【#4の正解】
23桂成、同玉、35桂、32玉、
23角、22玉、26龍、31玉、
22角成、同玉、14角成、31玉、
22龍、同玉、23桂成、31玉、
32成桂まで17手

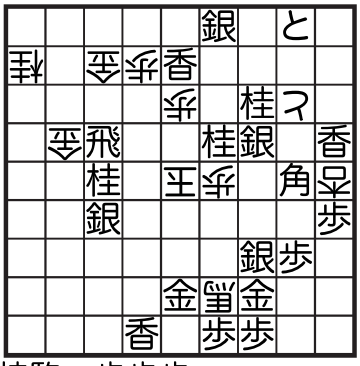
もちろん、この作品の構想物としての欠点を指摘することはたやすい。前のページにまとめた①から③の三段階において、②と③は論理的につながっている（言い換えれば、46馬と移動する唯一の目的は、34歩と突くためである、ということ）。ところが、①と②は論理的につながっていない。つまり、74飛と移動した目的は、変化①を詰ませるためであり、それは飛＋馬のバッテリーを作るためでもなんでもない。後に飛＋馬のバッテリーを利用して王手をかけることができるのは、いわば偶発的な結果であり、74飛の直接的な目的ではないのである。

わたしの目から見れば、この欠陥は大きく映る。もし①と②を論理的につなぐことができたら、それは①から③までを論理的につないだことになり、74飛そのものを全体にかかわる「伏線手」として表現できたはずなのだから。そのあたりにこだわらなかったということは、結局のところ高木秀次は論理の人ではなかったのか、あるいはやはり古典的な人だったのか、ということになってしまうのかもしれないが、あまりきびしいことを言うのは控えたほうがいいのかもしれない。ここは、よくぞ三段ロケットにしたものだ、と感心しているだけのほうがいいのだろう。

いずれにせよ、本局も詰将棋作家のイマジネーションを刺激すること間違いなしの素材である。バッテリーを組む最終目的を、たとえば逆王手防止のための先手玉の移動に求めるとか、いろいろとアイデアが湧いてくる。

ところで、本局は不詰だった。発表当時の正解者ゼロというのが、まったく違った意味合いを帯びてしまったのは残念だ。74飛と王手した肝腎の局面で、45歩合なら前述したように詰むが、56歩合、同角に、作意の同香ではなく、そこで45歩合とされると詰まない（56角が邪魔をして、左へ追い出す変化で56桂が打てない）。これもたしかにうっかりしそうな受けである。指摘者は小沢正広氏。

⑬　　作品集第65番
詰将棋パラダイス　1963.8（余詰）



持駒　歩歩歩

（作意）
56歩、同玉、47金右、55玉、
46金、同歩、56歩、同玉、
57金、同馬、65銀、55玉、
56歩、同馬、64銀、44玉、
53銀不成、35玉、36銀、24玉、
23銀成、同玉、22と、同玉、
21桂成、23玉、34角、同馬、
32銀不成、同玉、34飛、①33歩合、
22成桂、43玉、44銀成、52玉、
53成銀、同玉、44角、52玉、
62香成、同金、同角成、同玉、
63金、61玉、62歩、71玉、
72歩、81玉、84飛、同桂、
71歩成、91玉、92歩、同玉、
83金、91玉、81と、同玉、
72金右、91玉、82金まで63手

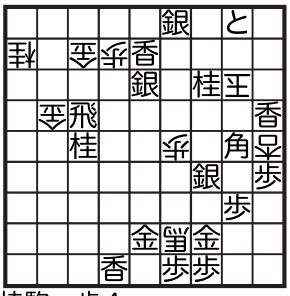
①33銀合は同飛成、同玉、11角、23玉、22角成、14玉、15歩以下。

33飛合は31成桂、43玉、33飛成、同玉、32飛以下。

高木秀次は、しばしばわたしたちを驚かせてくれる。本局も、こんな手順が成立するとはかなり信じられない作品で、初見の人はきっと驚くはず。

まず、普通に攻めてみよう。初手から56歩、同玉、65銀、55玉、54銀、44玉、53銀不成、35玉、36銀、24玉、23銀成、同玉と進める。

（紛れ順　23同玉の局面）



持駒　歩4

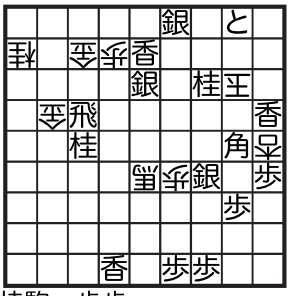
ここまでもってくる手順にはいろいろと細工の仕方があるが、最後は上の図と似たようなことになるはずだ。そして、この図まで来て、この先どうすればいいのか悩むことになる。

34角は24玉で、以下12角成、74金となって詰まない。22と、同玉、21桂成とする手はあるが、23玉であまり事情は変わらない。

筋らしきものはまったく見えない。だとすると、ここへ持ってくる序盤で何か細工しておくのか。そう思っても、作者の構想を見破るには相当の時間がかかるはずだ。

さっぱりわからなかった方は、作意手順を追っていただきたい。まず、47金右から46金と歩を吊り上げてから、57金！と捨てる。いきなり3手目にこの手をやると、55玉と戻られて詰まない。この捨駒で56歩が打てるようになり、馬を56に呼んでからいよいよ64銀以下、前記の手順で右上に誘う。そうすると、次の形になる。

（22手目23同玉までの局面）



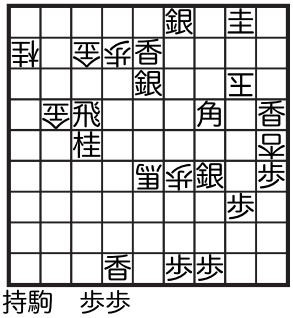
持駒　歩歩

前に掲げた紛れ順の形と比べていただきたい。56馬が34まで利いている。前の形が詰まないのなら、今度の形は余計に詰まない、と速断しそうだ。ところが、これが詰むのである。どうしてか。

普通の考え方なら、馬をわざわざ利かせるということは、打歩詰打開しかない、と思うところだろう。しかし、そうではない。

先ほどの局面から、22と、同玉、21桂成、23玉の4手を入れる。そうしておいてから、34角！

（27手目34角までの局面）



持駒　歩歩

わざわざ馬の利きを作ったところに、角を捨てる。これが鬼手である。

手品のタネは、24玉（あるいは14玉）と逃げられたときの変化にある。このとき、飛＋角のバッテリーを利用して、56角！と馬を取れるのだ。序盤で伏線を仕込んだ狙いは、馬をこの手順で質駒にしておくことにあったのである。

もちろん、34角は同馬と取られてしまうのだが、今度は34地点で馬が質駒になる。それを狙って32銀不成！とすれば、不思議なことに手が続く。その後は後片付けなので、解説は不要だろう。

伏線物の謎解きとしては、かなりの作品だと思う。馬を56に呼ぶのは、べつに34に利かせるためではない（それだと打歩解消しか意味合いが付けられない）。しかし、「まるでわざわざ34に利かせるために馬を呼んだように見える」という、その効果が絶大なのである。質駒を作るという本来の目的だけで、たとえば56に馬ではなく他の駒（桂とか）を呼んでおく、という作り方だったら、これほど解答者にショックを与えることはなかったはずだ。

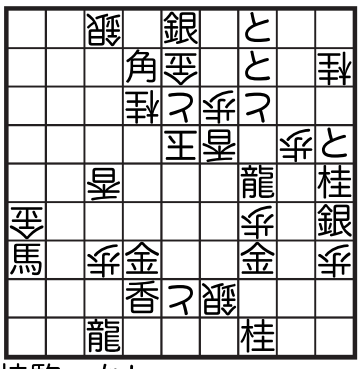
ついでにいうと、狙いの34角を実行する前に、22と、同玉、21桂成、23玉の、一種の邪魔駒消去（33桂が邪魔）をはさんでいるところも、テーマの隠し方としてうまい。これで余計に34角～32銀不成の連続技が見えにくくなっているわけだ。

ちなみに、このテーマは、実はさきほど紹介した⑪（の原図）と基本的に同じである。しかし、そ

れよりははるかにおもしろい。

なお、本図は1963年8月に発表された図の修正図として出ているもののようだが、これでもまだ早詰がある。38手目53同玉となったところで、作意の44角ではなく、33飛成、43金合、42角以下あっけなく詰んでしまう。複雑な筋を読み抜く高木秀次が、こういう簡単なところを読み落とすというのは、どうも信じられないような気もするが、むしろ人間的な話なのかもしれない。

⑭　　作品集第66番
風ぐるま　1955.9（余詰）



持駒　なし

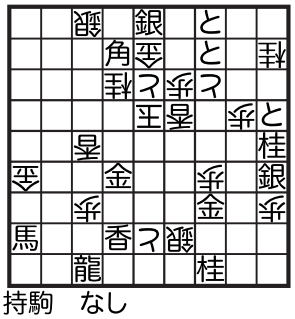
（作意）
65龍、同玉、66金、54玉、
98馬、87金、同馬、45玉、
54馬、同玉、53角成、同玉、
54金、同玉、65金、45玉、
46歩、34玉、33と、同玉、
23桂成、34玉、35歩、同玉、
47桂、34玉、24と、同桂、
同成桂、同玉、29龍、33玉、
34歩、同玉、25銀、23玉、
24銀、14玉、15銀、同玉、
26金、14玉、25金、13玉、
24金、22玉、21と、32玉、
33金、41玉、42金、同金、
同銀成、同玉、22龍、32銀、
54桂、51玉、52金、同玉、
32龍、61玉、72銀、同銀、
62龍まで65手

【以下の文章は、わたしのブログ（http://blog.zaq.ne.jp/propara/）に「『ルービック・キューブ』を解く」と題して掲載した論考をダイジェストしたものである。要するに、自分の作品がどうして生まれたかを語っている文章で、この高木秀次論の中に収めるのにはふさわしくないかもしれないが、高木秀次からインスピレーションを得て詰将棋が生まれる、その実例としてお読みいただきたい。】

65龍、同玉、66金、54玉と進むのが軽い序奏である。54玉のところ、74玉と逃げられそうだが、96馬と金を取れば詰む。

そこで98馬と合駒をたずねたのが、問題の局面である。

（98馬までの局面）



持駒　なし

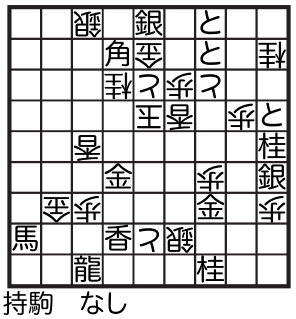
普通に87歩と合駒すれば、同馬、同金、65金、46歩、34玉、33と、同玉、23桂成、34玉、35歩、同玉、47桂と進み、以下詰むようになっている。

45玉と逃げても、89馬、78歩成、同馬、同歩成、46歩で事情はほとんど変わらない。

そこで、玉方の次の受けが新手だ。

87金!!!

（87金までの局面）



持駒　なし

気が狂ったかと思えるような移動捨合である。

この奇手の意図はこうだ。すなわち、同馬、45玉のときに、持駒が歩ではなく金なら、46金打、34玉以下前記の手順に進んだとき、35歩が打

歩詰になって打てないという仕掛けである。すなわち、金先金歩玉方応用だ。

仕掛けのポイントは、98馬を87馬に引き寄せれば、後に89馬で合駒稼ぎをされることがない点。

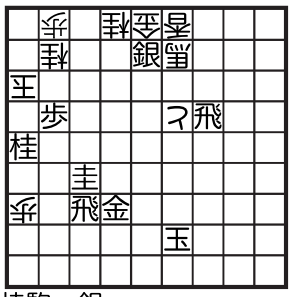
以下は、もらった金を歩に不利交換してから、収束に向かう。おわかりだろうが、この金先金歩玉方応用から金歩不利交換という流れは、「千早城」にも見られる。注釈を加えれば、54金のところで54歩と打つと、64玉とかわされても詰まないので、54金が純粋な意味合いでの金先金歩と言えないところが大きな弱点。まあしかし、それはここでの議論には関係がない。

高木秀次といえば「千早城」があまりにも有名すぎて、この作品は陰に隠れているのが残念だ。というのも、この作品を引用したり、言及している文章に、ほとんどお目にかかったことがないからだ。少ない例外である、湯村光造氏の打歩詰研究論考にしたところで、移動合をからめたのが新手であると評価しながらも、なんとなく分類しにくそうな記述に終わっている。

それはやむをえないことなのかもしれない。つまり、この作品を「金先金歩玉方応用」で先にくくってしまうと、そのオリジナリティが見えにくくなる。そうではなくて、まず「移動捨合」というくくりをすれば、この作品がいかにオリジナルかが見えてくる。なにしろ、この種の移動捨合としては本局が第１号局であり、今までに類例はわずか１局しかないのだから。

この作品をまず「移動捨合」の観点でとらえることがなぜ必要なのか。それは、この主題が移動捨合でしか表現できないものだからである。（もうお気づきかもしれないが、2008年度のチャンピオン戦に出題して、正解者が一人もいなかった第10番は、やはりこれに似た「移動合でしか表現できない」新手筋をテーマにしていた。こういう、ある手筋や条件あるいはフェアリー駒にとって何がspecificなのか、という問題は、わたしが最も興味を持つものである。）

#5　　若島　正
詰将棋解答選手権　2008



持駒　銀

33飛成、43と、同龍、53角合、
83歩成、94玉、84と、同玉、
87飛、95玉、85飛、94玉、
54龍、64角、95銀、93玉、
63龍、73角、同龍、同桂、
84銀、92玉、95飛、94桂打、
83角、91玉、94飛、同桂、
92歩、82玉、74桂、71玉、
61銀成、同金、同角成、同玉、
62金まで37手

言葉を換えれば、この主眼手87金は、単なる捨合では作れない。いま仮に、問題図の96金を盤面からはずして、玉方の持駒に加えたとしよう。そうすると、98馬のとき87金と捨合しても、89馬のときに78金とこちらで合駒しても、まったく変わらないので、87金が成立しなくなる。

移動捨合の87金は、その瞬間にだけ金先金歩玉方応用になっているのではない。実は、87金を取らずに65金、45玉、89馬と進めたときにも、78金の金先金歩玉方応用を見越した手になっているのである。

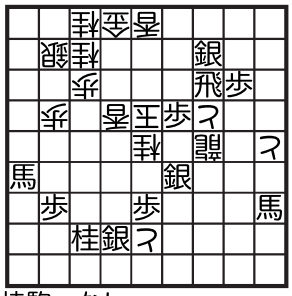
この移動捨合と打歩詰誘致の組み合わせは、わたしが知っているかぎり、この１局しか作例がない。先ほど述べた唯一の類例とは、実は意味付けが打歩詰誘致ではなく、別のものになっていて、その点では第１号局と呼んでもかまわないほどのオリジナリティを持っている（そんな別の意味付けがあるのか？　と思われる方は、しばらく考えてみてほしい。実例は後ほど紹介する）。

さて、高木秀次作にほとんど作例がないことを知っていたわたしは、ここから新しい作品を作ろうと考えた。

それでやってみたかったのは、移動捨合するテーマの駒である金を、飛に換えることだった。もともと、金でこの主題をやるためにはまず金を４枚配置しなければならない。わたしは金という駒が嫌いな性格なので、金を４枚置くことじたいにまず抵抗があった。それなら、２枚ですむ飛にした方が楽ではないか。それに、飛を移動捨合する方が派手である。

理屈としてはできることはわかっていても、いざそれを盤上でとりあえず成立させようと思うと意外と難しいことがあったりする。この作品はそのケースで、次のような図に到達するまで１週間はかかったはずだ。

#6　　若島　正
詰将棋解答選手権　2009(version)



持駒　なし

18馬、36龍！43銀不成、65玉、
29馬、47龍！同馬、同桂成、
35飛、45角合、同飛、同と、
54銀不成、同香、92角、83飛合、
同角成、同桂、67飛、66歩合、
同飛、75玉、65飛、76玉、
73飛成、同銀、77歩、65玉、
66歩、75玉、76歩、同玉、
86馬まで33手

序奏はなく、いきなりテーマの移動捨合から始まる。

完成図「ルービック・キューブ」を思い出していただければおわかりのように、左辺は飛先飛歩の典型的な装置になっている。ということで、玉方は歩ではなく、どこまでも飛を押し売りすることになる。これが36龍！の意味である。仕掛けは高木秀次とまったく同じものを使っていることに注意。

この龍の移動中合を同馬と取り、以下65玉、47馬、同桂成、35飛、45角合、同飛、同と、92角、83飛合、同角成、同桂、67飛、66歩合……というふうに進んでしまうと、最後に54の地点が空いていて詰まない。

そこで、攻方は伏線的な手段で、54を前もって埋めておくことになる。それが、３手目に43銀不成を利かせ、さらに13手目にその銀を54銀不成と捨てる理由だ。

その瞬間は、銀を54に捨てて、しかも香で取らせる、唯一のタイミングである。つまり、持駒に角があるときなら、同玉には32角で詰む。それ以外のときには、すべて同玉と取られてしまうので失敗するわけだ。

これで仮のヴァージョンを得られたわけだが、ごらんになっていただければわかるとおり、最初から「54の地点をいかに埋めるか？」がパズルとなるような作り方をしていた。それはどうしてかと言えば、この18馬、36龍と始まる移動捨合の仕掛けがまずあったので、その構図では玉の動くところが54-65 だったためである。

もっとも、54を埋めることは必ずしも作り方として絶対ではない。たとえば、このヴァージョンで、68銀の配置を金に換えてやればいい。そうすると、65飛に対して76玉とかわす手がなくなり、65飛には同玉の一手になるので、54を埋めるという問題は消えてしまうのである。要するに、作品を簡単なメカニズムにしてしまう作り方はいくらでもあった。

しかし、詰将棋創作から経験的に会得している、一つの真実がある。それは、やさしい道と難しい道があったら、必ず難しい道を選んでみるべし、という真実だ。もうこれは頭がそう反応するようになってしまっているので、かってに跳ぶバーの高さを引き上げてしまう。つまり、１メートルしか跳べないとブレーキをかければ、実際に１メートルしか跳べない（あるいは、それより低いところしか跳べない）。ところが、ブレーキをかけるのではなく、頭が暴走するのにまかせれば、知らないあいだにバーの高さはどんどん上がっていく。そして、経験上、いくら難しいテーマであろうが、すべて実現可能であることはわかっている。気がついたら、５メートルくらい跳んでいて、その高さから見下ろすと、自分でもどうして跳べたのかがかわらない。それが詰将棋を作るということの不思議さである。

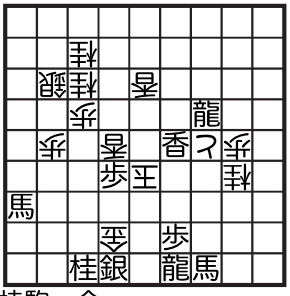
だから、銀を金に換えれば簡単にできるとわかってはいても、あくまで54の地点をどうやって埋めるかというアイデアに固執したのである。

さて、この仮のヴァージョンは、とにかくどんなことがあってもひとまず構想を実現させよう、という線で作ったものなので、いろいろと不満な点があった。

余詰防止の駒がかなり多いこと、47同桂成が限定ではないこと、などが挙げられるが、54の埋め方そのものにも不満があった。タイミングが限定できたのは良かったが、銀捨ての仕掛けがなんとなく人工的な感じがしたのだ。それをもっと自然にできないか。特に、右から角を打つ筋で、飛合を出すことができれば最高なんだが……。

そんなことを夢見ているうちに、「ルービック・キューブ」へと発展していく道が開けていった。気がつくと、最初のテーマであったはずの、龍による移動捨合はどこかに消えて、その代わりに飛先飛歩玉方応用と飛歩不利交換が3度ずつという作品に化けていた。

#7　若島　正「ルービック・キューブ」
詰将棋解答選手権　2009



持駒　金

59龍、同金、29馬、38飛合、
同馬、同桂成、16飛、26角合、
同飛、同歩、47金、66玉、
93角、84飛合、同角成、同桂、
36飛、46角合、同飛、同と、
44角、55飛合、同角、同香、
68飛、67歩合、同飛、76玉、
66飛、77玉、74龍、同銀、
78歩、66玉、67歩、76玉、
77歩、同玉、87馬　まで39手

今でも、高木秀次のテーマを引き継いで、それを飛でやってみた仮のヴァージョンを葬ったことには、多少の心残りがある。これはこれで一局だったし、もったいないようにも思えるからだ。しかし、その代わりに「ルービック・キューブ」を発表できたことで、よしとしなければならない。

「ルービック・キューブ」と題した作品を眺めているうちに、本当にその図面がルービック・キューブの側面に見えてくるとしたら、作者としてはこれほど嬉しいことはない。詰将棋はパズル——これがわたしの、この作品を通した主張なのだから。

（後日談その1）

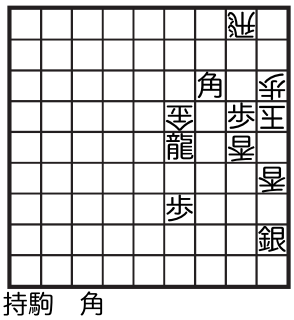
すでにほのめかしたとおり、この移動捨合は、打歩関係以外にも意味付けを求めることができる。そのことをあるとき発見して、我ながら興奮した。これは新手筋ではないのか！と。

移動合の中に、「回収のための移動合」とでも呼ぶべき珍手筋がある。これも作例はわずか（たぶん一桁？）しかないはずだ。つまり、「移動合を取って、いったん持駒となった駒が、ふたたび受方に渡ることによって、今度は合駒として打つことが可能になる」という手筋のことである。

これを例の移動捨合に応用するのは、原理的に可能である。

と思って、試作図を作って小林敏樹さんに見せたら、小林さんは次の作品を教えてくれた。

#8　原亜津夫
詰将棋パラダイス　1998.5



持駒　角

32角、23飛！同角成、15玉、
14馬、同玉、15飛、同玉、
23歩成、26玉、46龍、36飛合、
44角成、15玉、33馬、同飛、
16龍、同玉、17金、15玉、
16香まで21手

23飛の移動捨合が、後で回収して、36飛の合駒を見越した新手。33角+24歩で開き王手ができるというよく知られたメカニズムを利用すれば、この筋がすっきり実現できると睨んだところに、作者のセンスの良さがうかがえる。高木秀次によるメカニズムに匹敵する発見である。仕上げもおみごととしか言いようがなく、看寿賞も当然と思える大傑作。

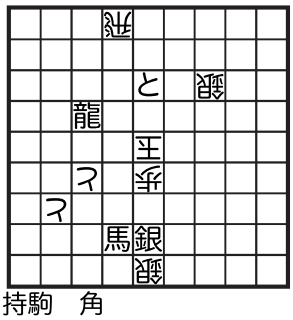
それにしても、わたしはこの作品を見ていたはずなのに、どうして完全に忘れていたのだろうか。不思議だ……。

……というわけで、新手の夢ははかなくも消え去った。ああ。

（後日談その2）

とはいえ、やはりヴァージョンを葬ったのは心残りなので、スピンオフとして、まったく別の形に仕上げた短篇を作った。それが次の図である。

#9　　若島　正
詰将棋解答選手権　2009



持駒　角

28角、37桂合、同角、66玉、
67銀、同と、55角、同玉、
75龍、65飛、47桂、44玉、
64龍、同飛、35馬まで15手

もうおわかりだろうが、高木秀次のメカニズムを借りて、「7段目には桂合ができるが8段目にはできない」という意味付けの桂中合を表現してみたもの。これも作例はきわめて少ないはずだ。

（後日談その3）

こうして、いくつかの作品を生み出す、そのインスピレーションの源となってくれた、高木秀次の作品には、なんとしたことか余詰があった。柿木将棋の指摘による。

作意9手目54馬と捨てるところで、56金、同玉、65馬、45玉、46金打、34玉、33と、同玉、23桂成、34玉、56馬、45香打、24成桂、同桂、35金、同玉、47桂として、同香なら26金、同玉、29龍、16玉、34馬で詰み。

どうやら、この移動中合の新手第1号局の栄誉を逃がしてしまったようだ。他人事ながら、悔しい思いがする。もしかすると、高木秀次は詰将棋史において、つねにunsung　heroの位置にとどまる運命なのかもしれない。

第4部

研究論考
スタッフ座談会

超短編における中合対策の研究

風みどり

本稿は超短編についての論考であるから登場する作品は殆どが一桁手数の作品である。そこで、作意はすべて末尾にまとめておくので、初見の作品は是非解いてくださることを読者諸賢に期待する。参考作品として中編作品も登場するが、その場合は作意手順も同時に紹介することにする。作品自体の鑑賞はやはり末尾にまとめて置くことにする。

1　遠打と無駄合概念

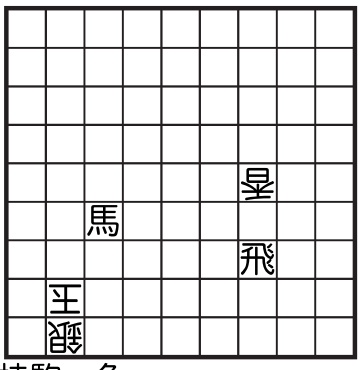
詰将棋の数々の華々しい妙手の中で、初心者も熟練者もたった1手でうならせる妙手、それは遠打であろう。「盤上この一手」という快感を遠打は味わわせてくれる。看寿が数々の遠打の原理を開発した所以であろう。

この遠打の醍醐味は中編作品においてもっとも香しいと思われるが、世の短編作家たちはこの遠打を短編で表現してしまおうと苦闘する。

しかし、短編ひいては超短編において遠打を表現することは難しい。それは手数の壁があるからである。変化は作意より短いか、もしくは同手数駒余りである必要がある。

図1　　風みどり

未発表



持駒　角

作意の収束は13角、69玉、68角成までであるが、24歩、35歩、46歩、57歩と合駒されたら変化長手数で不完全作となってしまう。

このような短編を救済するためかどうかは知らないが、現在のルールではこれらの合駒は「無駄合」なので合駒しない順を作意として認めている。

だが注意してほしい。あくまで「認められている」にすぎないのだ。本来、現代詰将棋は「受方最長攻方最短」が大原則。例外として無駄合という方便を使い、駒余りの詰上がりを避けているわけだ。馬鋸作品においても無駄合概念は大きく拡張されて適用されている。

本当は合駒した方が手数は延びるが、駒が余るだけで醜いので、駒余らずで詰上がりにする順を作意にする。これは妙手論と本質的に変わらない。

図1に登場する13角は成角(馬)を作るという目的がすでに半分成就している。そこで中合は無駄合概念で片づくのだが、もし超短編で14角や59香、98飛といった手を表現しようとしたら実現は困難だ。途中での合駒が無駄合では片づかず、有効合になる可能性が高いからだ。

2　エンジンをつける中合対策

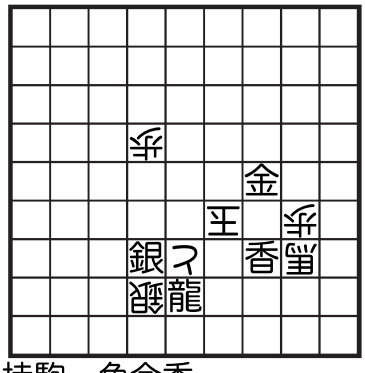
無駄合概念は妙手論に片足をつっこんでいる。しかも、どっぷりと。ただし、誤解なきように。妙手論が悪いというわけではない。この点については稿を別にして論じることにしよう。

変化処理に汲々となる超短編において、中合の変化をまとめて処理し、しかも誰もが自然に「これは合駒しても無駄だ」と感じられる形になるうまい方法がある。

それがエンジンをつける中合対策である。

図2　　風みどり

詰将棋パラダイス　1981.7



持駒　角金香

この作品の場合、中心部分は最終3手。であるから変化処理は1手で詰み、しかも駒余りにならなくてはいけない。

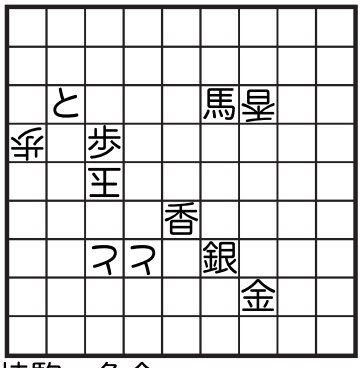
これが超短編の変化処理のキビシサだ。

ご覧のように6手目48歩合は同龍で詰。いや詰とみなしてくれと言う主張である。ここでさらに47合は無駄合だと認めてくれるだろう。だってこの龍には香のエンジンがついているから。

飛車や香の遠打のそばに龍を配置する。角の遠打のそばに馬を配置するこの原理は一桁詰将棋において重宝する手法だ。

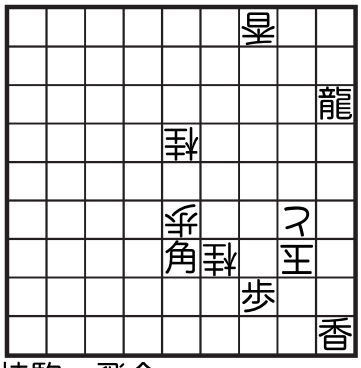
この中合対策を利用した例を2作紹介しよう。

図3　　小林敏樹
詰将棋パラダイス　1987.6



持駒　角金

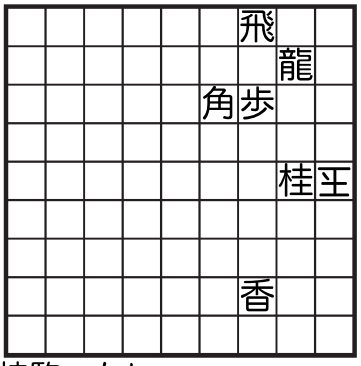
図4　　小林敏樹
詰将棋パラダイス　1989.9



持駒　飛金

なお、小林敏樹によると、このタイプの中合対策を超短編に取り込んだのは次作が初めてではないかとのこと。作品自体も素晴らしいので紹介しておこう。

図5　　山本民雄
詰将棋パラダイス　1967.10



持駒　なし

2手目に13歩合を同龍右だと、26玉で桂馬が動かせず、不詰。同龍左でエンジンがつく。

さて、これらは合駒の無駄度(?)が非常に高いので、解答者は変化処理に疑問を持つことはないだろう。しかし、無駄合概念を利用している事実に変わりはない。

それでは無駄合概念を使わずに超短編において遠打を表現することは不可能なのであろうか。

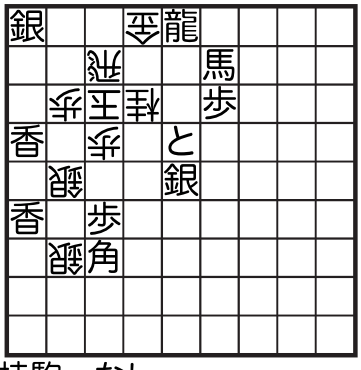
否である。

3　無駄合概念を使わない中合対策

この節は歴史読物風味で書いてみたい。

物語のはじめは三代伊藤宗看である。

図6　　伊藤宗看
将棋無双第29番　享保19年



持駒　なし

82銀不成、同玉、92香成、73玉、
64銀、84玉、73銀不成、同玉、
62龍、84玉、73龍、同玉、

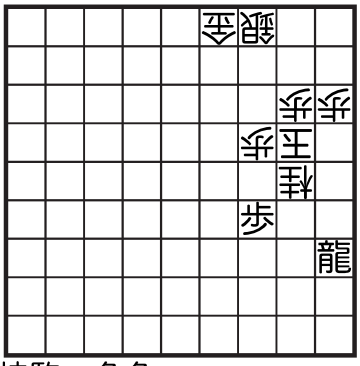
64と、84玉、51馬、同金、
95角、94玉、51角成、96銀引成、
93金まで21手

15手目、51馬の局面に注目されたし。合駒はすべて95角からその合駒を食べられるので無効。

中合を王手した駒で取ると手数がかかる。別の駒で取ってしまえば合駒の種類、位置に関わらず変化処理できる可能性が拓けるわけだ。

この部分に短編の素材を嗅ぎとったのが、北原義治である。

図7　北原義治
近代将棋　1964.9

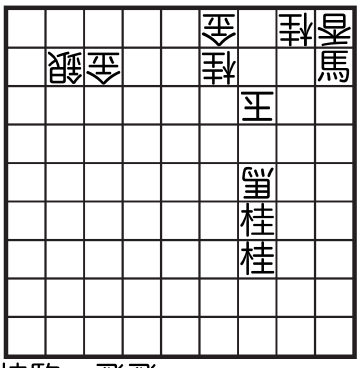


持駒　角角

2手目合駒は15角からその合駒を抜いて詰。角を打つ位置の違いで入手できる駒が違うというアイデアでしゃれた7手詰にまとめた。

この作品を見て、もっと豪快に大きく展開できると気づいたのが浦壁和彦だ。

図8　浦壁和彦
詰将棋パラダイス　1977.8

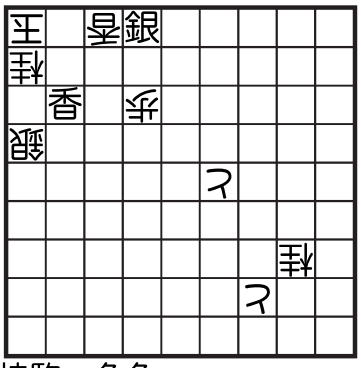


持駒　飛飛

この作品を苦吟して詰めあげたのが、詰将棋を始めて間もない頃の筆者だった。

なんて凄い遠打の実現方法だと感動し、すぐにパクって角で表現した。つまり北原作に逆戻りしたわけだが、当時は北原作を知らなかったのだから仕方がない。

図9　風みどり
未発表



持駒　角角

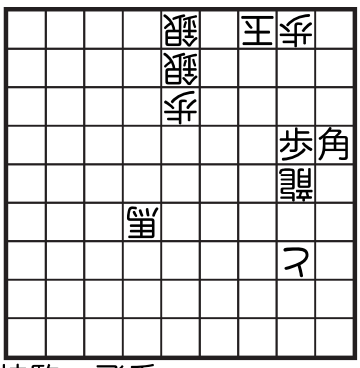
さて、この原理を利用するには最短でも7手かかる。2手目合駒した変化の処理が5手かかるからだ。

しかし作意手順の残り5手は自由ではないかと気づいたのが小林敏樹だった。

つまり、北原、浦壁、風作はすべて質駒を食べている。なにもこの駒を食べる必要はないと気づいたのだ。

筆者の家でこの図9を見て、家に帰ったその晩に、小林敏樹は7手詰を一つ作った。かくして、私が古今東西の7手詰ベストテンに推す次の作品が誕生した。

図10　小林敏樹
詰将棋パラダイス　1985.7

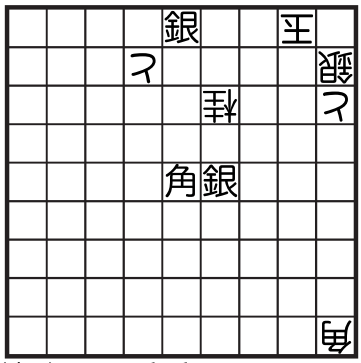


持駒　飛香

これは宗看→北原→浦壁→風→小林と具体的な進化（途中、一度退化するあたりも本当に進化のようだ）が辿れた希有な例であるかと思う。

しかも、これで終わりではないのだ。この作品はまたさらに、次の作品を生みだした。

図11　　原田清実
詰将棋パラダイス　1999.5



持駒　飛香香

2手目、同Xと取らせる必然性もないと原田清実は気づいたのである。その結果、仕掛けとなる飛車も角も捨て去ることができるということに。

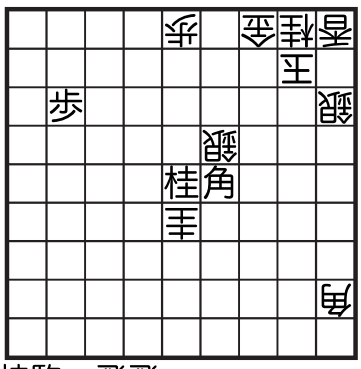
以上でこのささやかな歴史物語は終わる。宗看→北原以外はすべてウラがとれていることを書き添えておこう。

4　参考作品

前節で紹介した作品はこの原理を用いた初めての作品というわけではない。

古いものでは中編だが次の作品がある。

図12　　岡田秋葭
詰将棋月報　1943.5



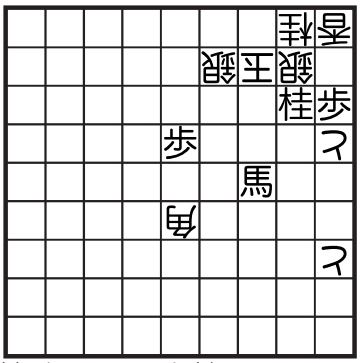
持駒　飛飛

27飛、同角成、23飛、12玉、
27飛成、45銀、23角、22玉、
45角成、24角合、23銀、33玉、
36龍、35桂合、34馬、42玉、
45龍、53玉、44龍、62玉、
64龍、72玉、45馬、83玉、
56馬、82玉、84龍、71玉、
73龍、72飛、63桂不成、81玉、
92馬、同玉、72龍、82金、
94飛、93銀、84桂、91玉、
93飛成、同金、82銀まで43手

遠打といえば山田修司。

山田修司にもこの原理を用いた作品がある。こちらも中編である。

図13　　山田修司
詰将棋パラダイス　1967.2



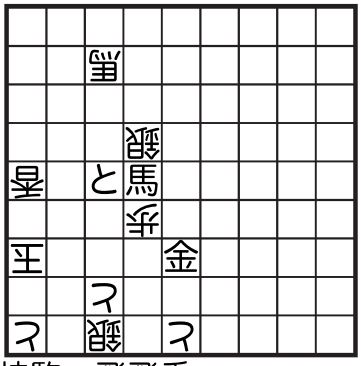
持駒　飛飛金桂

43金、23玉、15桂、同と、
29飛、同角成、24飛、13玉、
29飛、12玉、22飛成、同玉、
23銀、同玉、41角、22玉、
32角成、12玉、34馬、13玉、
23馬引まで21手

また短編でも次の姉妹作は小林作より早い発表だ。

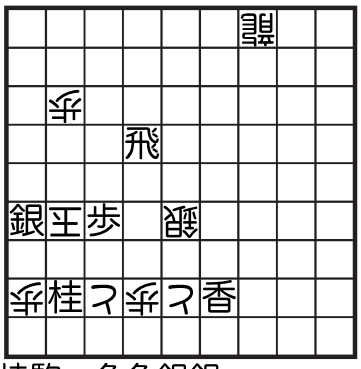
なお作者の山葉桂は、いわずもがなだが、添川公司の変名である。

図14　　山葉　桂
詰将棋パラダイス　1980.12



持駒　飛飛香

図15　　山葉　桂
詰将棋パラダイス　1981.6



持駒　角角銀銀

5　作意と鑑賞

#1
77馬、79玉、39飛、同香成、
13角、69玉、68角成まで7手

　可成地帯に放つ限定打13角。超短編においては残念ながら単発ではテーマとはなりえないだろう。23角、もしくは12角の限定が必要だ。24角も面白い。11角は実現困難で作品も少ない。

#2
56金、同と、55角、同と、
49香、同馬、36金まで7手

　香の捨駒の3手詰が素材。さっぱり味の収束なので、序盤は変化で龍を活用し、脂っこい駒を捨てる必要がある。手順前後が銀合で逃れてくれたのは幸運だった。

#3
31角、85玉、86金、74玉、
65馬、同玉、75角成まで7手

　初手がなぜ42や53では駄目で、31でなければいけないか。このカラクリが本作の狙い。2手目66玉の変化が鍵になっている。初手42角は66玉、33馬、57玉で逃れ。初手53角は66玉、33馬、44歩合で逃れ。31角ならば66玉、33馬、57玉、13角成で詰み。作意は左上辺で角1枚捨てて収束。作意と変化の展開する場所が斜めに分かれてしまっているが、この狙いを7手詰で表現するためには致し方無いところ。

#4
37金、同と、21飛、38玉、
29飛成、同玉、18龍まで7手

　打った駒の最長距離移動が狙い。21飛車から29飛成がテーマだ。3手目26飛と直に打つと38玉で逃れる。23飛だと36玉で逃れる。31香を質にしつつ可成地帯に打つ必要があるので21飛に限定されるわけだ。
　対になるテーマは11角打から99角成だが、小林作にすでにある。ただし、そちらは難解作になってしまっているので、是非ともすっきりと作りなおしてほしいと思っている。99角から11角成や29香から21香成は超短編ではみたことがない。諸賢の挑戦に期待する。

#5
11飛成、26玉、13桂不成、17玉、
21桂成まで5手

　合駒が効きそうで効かないぼんやりした飛車成から、桂馬の二段跳び。わずか7枚の駒でみごとな作品だ。
　作者の山本民雄は論理的な中編、必然的に難解作になる、が有名だ。ところが本作のように超短編はすっきりとした配置でセンスある手順を見せてくれる。付け加えるものも引くべきものもない、みごとな仕上げ感覚を持った理想的な短編作家でもあるのだ。

#6
　64と、84玉、51馬、同金、95角という筋を実現するために3つの鍵を順番にはずさなければならない本格的な作品。まずは最終手のために91銀を92成香にすり替える。次に変化に備えて55銀を消去する。64と、62玉、53馬、51玉に33角成を担保しておくわけだ。最後に51馬を実現するために51龍を消去する。逃げる玉に龍が縋りつく豪快な捨駒が実現した。これらをわずか21手に詰め込んであり奇跡的な傑作だ。

#7
51角、同金、15角、14玉、
51角成、17桂成、15金まで7手

　初手は角を打つしかないが、15角からノキ王手すれば龍を抜かれる。そこで質駒を用意するのが初手の役割と判明する。42角では同銀なので、金を指名するには51から打つしかないという仕組み。本作のみは本人に確認していないが、無双29番との関連性は明らかであろう。

#8
93飛、同銀、23飛、34玉、
93飛成、12香、23銀まで7手

　北原作を解いた後なら、作意はすぐに見えただろう。23飛から明き王手をした後に必要な駒は斜め後ろに利く銀なのである。5間（6マスと言うべきか）離れた93飛は迫力十分。詰パラを読み始めて間もない頃の筆者にとっては衝撃の一手だった。

#9
19角、同桂成、82角、81玉、
19角成、83銀、93桂まで7手

　さっそく飛車を角に換えて7間離れた最遠打を組み立てた。図面は散逸したので本図は記憶を頼りに復刻したものだが。いずれにしても紛れが決定的に不足している。

#10
39香、同馬、33飛、22玉、
13飛成、同玉、23角成まで7手

　香をどこに打っても取られる運命。それなら守備に最も効いている66馬に取らせてしまおう。かくして39香の最遠打が出現する。同馬。そして何事もなかったかのようにきれいな5手詰に連結する。作意を並べてみて2手目がココセのように感じられる。なぜ、こんな手順が成立するの？超常現象が目の前で起きた時の興奮だ。この作品を生み出した原動力は、浦壁作から「質駒」の呪縛を解きほどいた発想だ。文章にしてしまえば大したことのない発想と感じられるかもしれない。しかし、その発想ができるか否かが一流作家との分かれ道なのである。

#11
28香、31玉、32飛、同玉、
33角成、同玉、34香まで7手

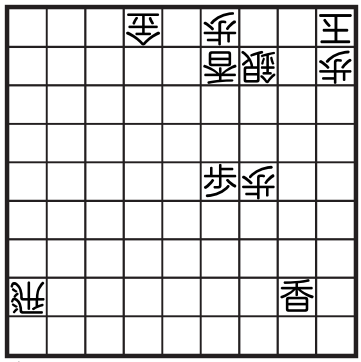
　27香だと例えば24歩合とされて、22飛車から24飛成とした瞬間に55角成と抜かれる。せっかくエンジンをつけたが、馬が守りに効いて22龍といけなくなってしまうのである。そこで角道を塞ぐ28香の限定打が成立する。初手の限定打を取らなくてもいいのではないか。小林作の発想と同様に、言われてみれば当然のこの発想が原田清実の非凡なる所である。持駒の飛車のみならず、要の角まで捨て去ることができるとは感服する他はない。半期賞受賞作。
　構図からみると図12岡田作の超短編化と理解できるが、作者の言葉で小林作からの発想と明記してある。

＜原田氏受賞の言葉＞
　半期賞ありがとうございます。
　この作品は小林敏樹さんの作品を見ていたときに思いついたものです。
　「玉方の駒の利きを避けていくと最遠打になる」という仕掛けではなく、純粋に「ここから打たねばならない」という遠打を目指しました。
　見るからに28香と打ってくださいという顔をしていますが、むしろそうなってよかったと思っています。
　更に角版にアレンジしたものが３月号のヤン詰の作品です。安易な創作方法ですねぇ…。
　それはともかく、いつの日にか「詰将棋を作ってみよう」と思わせる作品を作ってみたいもので

す。

3月号のヤン詰の作品が気になる。探してみた。

図16　　原田清実
詰将棋パラダイス　1999.3



持駒　角角

88角、44香、22角、21玉、
44角引成、31玉、53馬、42歩、
22角成、41玉、32馬、同玉、
33銀、同玉、34香、同玉、
44馬まで17手

#12
原田作と同じ仕組みだ。もちろん発表はこちらが無双の次に古い。質駒にした角を奪ってから延々と細かい攻防が続くのが当時の流行であったのだろう。

#13
妙手の初手に対し、23玉が正しい応手らしいとわかる。15桂、同と、とした局面ですでに最遠打の舞台が整っている。実戦形の捌き主体の作品を思わせる初形、ごくありふれた日常的な世界から、妙手一発で非日常の世界に引きずり込む。この仕上げが抜群に巧い。収束はもう自然に出来上がっていて、さらに手を加える余地はなかったのであろう。

#14
98香、88玉、81飛、同馬、
83飛、77玉、86飛成、同玉、
76馬まで9手

3手目86飛では87歩合とされて逃れ。83飛、同馬とさせてこの角を空き王手で食べることもできるが、角を手にしても役に立たない。81飛、同馬と最遠打で移動させ、83飛以下の5手詰につなげる。導入の2手を省けば、小林作とまったく同じ構造を持っていることがわかるだろう。これが詰パラでのデビュー作。栴檀は双葉より芳しとはこのような時に使う言葉だろう。

#15
77銀、同玉、11角、同龍、
33角、86玉、84飛、同歩、
77銀、同と、42角成まで11手

姉妹作。対称作というべきだろうか。氏は本稿で紹介した作品群は見ておらず、独自の発想で創作した。最近は煙か大作しか発表していないが、そしてもちろんそちらも楽しみなのだが、このような短編もまた見せてほしいものである。

#16
逃げ道をあける44香と移動捨合で応じる。易しい収束ながら、何故このように綺麗に自然に収束できるのか。感心するばかりである。作者は「詰将棋はできてしまうもの」と語るが、その言葉に説得力を持たせてしまうが如き仕上げの美しさだ。

6　おわりに

本稿はweb「風みどりの玉手箱」(http://kazemidori.oheya.to/wp/)に書いた「超短編における中合対策」という連載をもとにまとめ直したものである。

web上に文章を書くと大勢の方々からコメントを頂き、こちらが勉強することばかりである。是非、もとのエントリーもご覧になっていただきたい。ここでは紹介できなかった作品もあり、作者本人からのコメントもあり、未整理だが、リアルタイムで新しい知見に出会う面白さを感じていただけると思う。

特にuraさん、利波さん、不透明人間さん、山葉さん、toshikiさんに特別な感謝を捧げます。

この詰将棋がすごい！
発刊記念スタッフ座談会

（2010.3.23　新宿にて）

出席者：小泉潔、高坂研、小林敏樹、角建逸、
橋本哲、原亜津夫、山田嘉則、若島正（50音順）

（小泉さん登場）
若島：おお、ちょうどぴったり！
橋本：ちょうど小泉さんに何か聞こうと思っていたところ…、違うか（笑）。
若島：何か先に注文してください。
小泉：はい、注文、注文。
小林：何がいいですか？
小泉：みんなハイカラなものですね。
小林：あ、酒はないから。
小泉：酒はないのね（笑）。
若島：ここはないです（笑）。一応２時間終わったら、酒になりますが。
（注文終了）

若島：えーと、ではそろそろ始めますかね。
　最初前置きというか、前口上みたいなものをこちらからお話してから、あとは適当にみなさんにしゃべってもらうということで…。つまり、どうしてこういう雑誌というか本をこしらえたかという、その経緯を話そうと思います。
　元々の企画は、たしか解答選手権の前だったか後だったか、スタッフで飲んでいたときに、わたしのアイデアとして、詰将棋の評論の本を出したいなという話をしたんですね。それで大きな賛同を得て（笑）。飲んでいるときだから盛り上がって、あたかも簡単にできるかのような錯覚を起こしたんですけど（笑）。
　そのときの原案はというと、20人にそれぞれ５局ずつ好きな詰将棋を選んでもらって、徹底的に語り倒してもらおうという案。選んだのが重なったら調整するとか、それから図巧１番を選ぶようなフツーの人は最初からスタッフに入れないとかね（笑）。それで20人に誰を選ぶかという話をしてたかなあ。だけど、お酒を飲みながらの話なんで、実現の可能性が少ないとか、時間がかかりそうだとか、現実的に考えるとね（笑）。20人を選ぶのも大変ですけど、その20人にどれくらい原稿を書いてもらうか、想定するのも難しいし、実現は困難という感じがしてたんですね。
　それとは別に、巨椋鴻之介さんのお宅にお邪魔して、作品集『禁じられた遊び』出版のお祝いをしたことがあります。この際、じっくりと巨椋さんのお話を聞いておきたいという思いがあって。あとからたとえば「詰将棋評論」という本を出すとしても、巨椋さんにはぜひ書いてほしかった。いい作品を作る人とそれについて何か書ける人というのは別なんですが、巨椋さんは両方ですから。そういうことを考えているうちに、巨椋インタビューをやって、それをこの本をつくるきっかけにしようというアイデアが浮かんだわけです。
　だから今回の特集が「巨椋鴻之介インタビュー」で、巨椋さんの好きな８局というのが入るんですが、それと橋本さんに「巨椋鴻之介ベスト８」を選んでもらっているのが、そもそもの出発点なんですね。だけど、それだけでは本ができないので、片方で「年間ベスト詰将棋」のページを、ジャッジを決めてというか、書く人を決めて作る。それから特集モノというか企画モノとして、「巨椋鴻之介インタビュー」以外にも「森田拓也インタビュー」をフィーチャーする。そんな感じでおおまかな構想はできたんです。

橋本：（若島さんと）飲んでいて、巨椋さんのところに行ってインタビューしようかという話になったんですよね。
若島：そうそう。
橋本：すぐにでもやりますかということになって。酔っ払っていたけど、次の日でもそのことだけはよく覚えていて（笑）。
若島：橋本さんから、次の日メールをもらいました。
橋本：本当にやるなら、すぐに連絡を取ってと思って。そのくらいの勢いだったですね。
若島：橋本さんにそう言われて、こちらも何か考えて態勢を作らないといけないなあと。それで大体こういうぼんやりとした企画をこしらえて、もう気合いで本を作っちゃいましょう、と立ち上げてしまったわけです。ですから、メインの企画は「巨椋鴻之介インタビュー」なんですよ。今回の表紙に、巨椋さんの写真をドーンを載せるのは、この姿をしっかりと瞼に焼き付けておこうという、そういうつもりです（笑）。

とは言ってもですね、いやまさかこんなに早く原稿が集まるとは実は思ってなかったんで、驚いているんだけど（笑）。内容も充実していると思うので、今から悩んでいるのは、次はどうしたものかと（一同爆笑）。こんなことをしてしまったら、来年はどうすればいいかというのが問題なので、それは後でご相談したいと思います（笑）。2009年版って書いてるので、もう前提として2010年版も出しますという感じですから。

山田：巨椋さんのインタビューみたいなのを毎年やるのは大変ですよね。

若島：いや、必ずやります。

山田：そこはやっていくんですね。

若島：目玉企画はそこなんですよ。森田拓也さんが久しぶりに現れて、それでちゃんと「北斗」と「長城」を修正して、まあ新作はまだできないみたいなんですけど、とにかく修正図を載せることができた。これも自信がある今回の目玉です。

次回には、名古屋に出かけていって、酒井克彦さんと中田章道さんにインタビューできればと計画しています。先日、たまたま中田さんに会ったのでこの話をしたら、ああいいですよ、若島さん、カラオケ好きですか、って（一同爆笑）。話は全然違って、カラオケに行くという話になってしまった（笑）。

小林：3月に将棋連盟から作品集が出ますよね。非常に楽しみにしてるんですよ。

若島：ぜひこういうところで取り上げて、中田さんの評価をわれわれの手でも確立しておきたい。そういう意味もあります。

（角が若島に『中田章道短編詰将棋代表作』の刷り見本を渡す。）

若島：これはいい感じですね。

角：和綴じをイメージしたデザインになっています。手数は7手から15手。作品も粒揃いで、最近の市販の詰将棋の本では一番良い出来ではないかと思っています。

若島：でしょうね。

小林：塚田賞級がごろごろっていう感じでしょうか。

若島：でまあ、話が戻りますが、なんでこんなことをやるのかというきっかけは、巨椋さんの作品集が出ても、別に詰パラに書評が書かれるわけでもないから、何か反応がなくて、どこでどう評価されてるのかわからないということがあります。

チェスプロブレムでは、大体解答の発表欄がちょっとしかなくて、その代わり後でジャッジをするときに、選評ですごく詳しく書いたりとか、あるいは論考記事で、あるテーマの作品群をずっと年代順に追って並べたりとか、ある作家の代表作品群を詳しく紹介したりとか、そういうところで、鑑賞というか批評をやっているんですよ。

それに対して、詰将棋はそういう部分があまりにもない。結果発表がほとんどすべてという感じ。今回小泉さんが大学院担当になったから、すごく期待しているんですけど（笑）。今の結果発表の記事って、解答者の評はたくさん並んでいるんだけれども、作品のここが面白いところだとか、そのへんに突っ込んで触れた解説が少ないんじゃないですか。だったら、詰将棋について語っている人たちはどうかというと、吉村達也の連載みたいな実体のないものになるので（笑）。あれでは困るんですよね、こちらとしては。ということで、詰将棋について具体的に語りたいなあというのがあって、こんなことをやろうかと。

7月発行というのは、ちょうど看寿賞の発表と時期的には重なるんですけど、要するに全詰連の全国大会で売ったりするのが一番良いからというのが理由なんです。別に看寿賞と張り合おうとかいう気は全然ない（笑）。看寿賞はある程度民主的な投票によって決まるけれども、こちらは民主的なスタイルは一切取らない。こちらがぜひこの人に書いてもらいたいと思った方に書いてもらうというか選んでもらうということをする。

それでスタッフに企画をいろいろと出してもらいました、さらに小泉さんからは、テーマ論の形で書いてもらいましたが、こういうのが実はもっと欲しいんです。もっとこんな論考があると面白いんと思うんですね。

詰将棋でいいところは、生みっぱなしというか、一つ作ったらもう次行こうみたいな感じで、生みっぱなしでいいんで。それが楽なところがいいなあというか。人間の子供を作っても後が大変なんだけれども、詰将棋は生みっぱなしでいい（笑）。だけどその代わり、忘れられるのも早くて、どこかで誰かが何か物を言わないと、誰が何を作っていたということすらわからなくなっちゃうところもある。

今回集まった原稿を読んでて思ったのは、こん

なのがあったんだという、すごく面白いネタで作っていた人がいたんだなあと、初めて気がついたことが何度かありましたね。そういう発見がたくさんある本になっているはずです。だから、これからもできるだけいろんな人に書いてもらって、いろんな独特な視線を入れられたらなあと思います。

これが一応前口上です。これからご自由にしゃべっていただいてかまいません。

角：想定していたものより、ものすごく手厚くなったということですよね。
若島：ええ、信じられない本になってしまったというのが正直な感想で、よくこんなことをやっちゃったなあというか。実を言うと嬉しいことでもあるんですけど。

意図的にこちらも原稿をもらったらすぐにゲラにして、まだ原稿を書いてない人にプレッシャーを与える作戦を取りました（笑）。最初に入った原稿が、橋本さんの巨椋鴻之介ベストで、あれが良かったですね。いきなりスタンダードができあがってしまったわけですから。これじゃもう、いいかげんなことを書けないな、と誰でも思ってしまう。
角：これは作家側から見た詰将棋年鑑ぽい感じですよね。
若島：完全にそうですよ。
角：2009とある以上、もう次を期待してしまうわけですけど。
若島：まあ、わからないですけどね。こうやっていると、そのうちに作業がルーティーンになる可能性があります。解答選手権も実はある程度ルーティーンになってるところがあって。ルーティーンを変えようとしたら、スタイルを変えていかないと、製作者側としては面白くない。それはまったく詰将棋を作るときも同じですよね。何か新しいことを考えないと、退屈してしまう。解答選手権の場合は、去年から全国展開をして、もう少し面白くしようというか、あるいはもっと広げようというか、そういうことをやったんですけど。まあそれはそれなりに成功したかなと。これも正直言って何か義務でやっているわけではないんで。早い話が、止めたくなったったらいつでもすぐ止めるという態勢ではいるんですよ（笑）。

「プロブレム・パラダイス」は、実はある程度義務なので、どんなことがあっても石にかじりついても「プロブレム・パラダイス」だけは出しますけども。「この詰」はまったく義務ではないので、たとえば5冊くらい出してから止めるっていう手筋を使ってもいいかもしれない（一同爆笑）。いや、正直な話、それくらいの感じでやらないと、しんどいですよ、やっぱり。
山田：1年おきとかでも別にいいんじゃないですか。
若島：あ、まったくかまわない。次は「2010–2011年版」みたいな具合に、2年で1冊出すとか。
橋本：確かにちょっと休みが入らないとつらいですね（笑）。
若島：ちょっとつらい（笑）。これだけ最初からすごい高いレベルに設定してしまっているから大変なので、これを続けるのはすごい負担になる。次からどうすんの、というのが大きな問題ですね。こちらとしては、書きたいことはいろいろあるから、書こうと思ったら書けるんですけども。でも何か気合が入らないと、なかなかできないから。

実際書いていただいて、どうでしたか？　今回2009年度のベストの方は、今日来ていただいた原さんと山田さんにやっていただいたんですが。原さん、先程聞いたんですが、作品数がやはり半端ではないですよね、短篇って当然ながら。
原：そうですね。
若島：よくしかしやりましたね（笑）。
原：うーん、最近詰将棋への興味が薄れているので、苦痛でしたね（一同爆笑）。数もかなりありましたね。
小林：それでいきなり原稿をお任せしますと言われてもね。
原：いや、でも最近パラも読んでないので、いい機会にはなりました。ただ、選ぶとなると、いろいろ批判がありそうなので怖いです。
若島：これは本当に個人が選んだヤツなので、客観的な評価とか一切抜きで、自分の面白かったものだけ並べればいいんですよ。そういう意味では、わりと気楽に決めっちゃってもかまわないんです。たとえば、ネットで発表された作品を使うかどうかも、個人の判断だし。見てない人は見てないので。だけど、原さんは課題コンクールの作品を入れてくれましたね。個人的には大変良かったです（笑）。

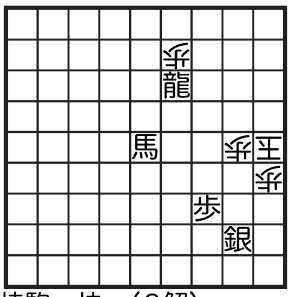
原：あれは発表扱いになるのどうか、わからないかったんですが。
若島：まあ発表扱いになるんじゃないかな。
山田：岩田さんは他に発表するつもりはないと書いておられたから。最終発表でいいんじゃないですか。そもそも他に発表しにくい作品ですから（笑）。すごく良かったですよね。
橋本：発表扱いとか扱いでないとかいうのが、私にはよくわからなくて。人目に触れたら発表じゃないのって（笑）。なんだか雑誌に載ったの載らないのって。
若島：ただまあ、看寿賞とか何か賞を出すときに、問題になるという話なんでしょ。われわれにはどちらでもかまわないんで、面白いものがあったら、それを拾えばいい。
山田：フェアリーで一つ困ったことがあったんですけど、浦壁さんの2万7千何手詰というのが実はブログに手順が出ていて、それをどうしようかって（笑）。発表扱いにするかどうか悩みました。結局はずしたんですけど。
小林：あまりご本人に発表扱いとしてという意志は感じられなかったと思いますけどね（笑）。
若島：山田さんはフェアリーを何局くらい見たんですか。
山田：フェアリーは200くらい。推理将棋を100近くですかね。フェアリーは詰パラが100くらいでウェブ上のが100くらいです。で、普通に選ぶと橋本孝治さんのばっかりになってしまうので（笑）。バランスを考えて、同じようなネタがかぶらないようにしてるんですけど。
小林：フェアリーは数も多いし、いろんなルールもいっぱいあるんで大変ですよね。
山田：手順を分かりやすく、というのを第一にしました。解説の言葉があまり浮かんでこなかった、という事情もあるんですけど。
若島：やはり途中図とかの図面がたくさんほしいよね。詰パラでも、ばか詰の長いヤツだと、手順は載っていても、普通の人ではパッと見てわからない。だから今回みたいなのは、途中図を多めに入れてもらわないと。そうすれば見てるだけでもわかるからね。
山田：並べなくてもね。千早城も今回それでようやくわかりましたから（笑）。
若島：でしょう（笑）。一応みんな金先金歩だというのは知っているんだけれども、何がどうなっているのかということはわかっていないという人がかなり多いんじゃないかな。僕もようやくわかったよ、今回自分の頭で考えてみて（笑）。やっぱりあれくらい図面を入れないとわからない。過去類例ってないんじゃないかな、二重伏線が入れ子になっているというのは。そういうかたちで再評価をすることに意味があるんじゃないかな。

ぼくが今回原稿を読んでいて感心したのはいくつかあって。小林さんに書いてもらった小川宏のベストは、割とリアルタイムで解いているんですけど、解いてなかったものもある。初手26銀から18角と引く作品（→p.104）、あれ面白いなあと思いました。

あと問題は、伊藤さんが言っていたんですけど、長編は今現在詰パラしか発表場所がないわけでしょ。ネットで近藤さんが出したりとかしてるのは入っているんですけど、全体としては詰パラしかないので、大学院とデパートだけで、すごく長篇が手薄らしい。伊藤さんの話では、4局選ぶのが大変だということです。2009年度に関してはね。
橋本：ふーん。
山田：対象作品数が少ないんですよね。
若島：元々少ない。
山田：50とかないんですよね。
若島：全然ない。だって、大学院だけで1年間で20作。今は投稿とか多いんですか？。
小泉：いや、まだ始まったばかりですけど。2月は結構来たんですけど、ほとんど潰れていました。今月（3月）なんかは2作しか来なくて。1つは岡村さんのデパートからの転送だから、実質1作で（笑）。
若島：田島秀男の「キューブ」が不詰で取り消しになっているのが痛かったか。
角：すぐ修正図が出るという噂があったんですけど、出ませんでしたね。
若島：短篇、中篇は、それなりに数もあるから、選ぶのはそんなに難しいことじゃないとは思うんですけど。
小林：あまり絞り込まない方がやりやすいかもしれませんね。
若島：適当に思いついたのを選んでいけば。
小林：数を絞るとなると大変ですし。
原：8作くらいまではそんなに悩まずに決めたんですけど、残りの4作に結構迷いました。その日

の気分で選ぶ作品が変わる、みたいに。
若島：そりゃ、そうだよね。ところでこっそり聞くけど、原くんは短篇ベストの中で、一番好きなのはどれ？
原：好きというか、一番出来が良いのは市島さんのですかね。看寿賞っぽいですよね、一番。
若島：看寿賞っぽいというのがあるんだね（笑）。おもろいな。
原：高坂さんの（課題コンクールの）２解のヤツも良かったんですけど。

高坂　研
第２回詰将棋課題コンクール　2009



持駒　桂　（2解）

13龍、14飛合、27桂、26玉、
44馬、同飛、15龍まで７手
33馬、24角合、27桂、26玉、
46龍、同角、15馬まで７手

高坂：いや、あれは（笑）。
橋本：例題で使ったヤツ？　例題じゃもったいないなあって思うよね。
若島：今回やってみて思ったのは、選ぶのが大変だということ。たとえば次、2010年から2011年までとなると、すごい数を見なくてはいけないことになるんですよ。短篇なんかすごい数があるわけでしょう。原さんがやりたくなければ、やらなくてもいいんですが（笑）。ぼくの提案は、今年書いた人に次の執筆者を決める権利を与えると。それでまた自分がやりたければ、やっていい。つまり、誰も引き受けなかったら、その人が続けるしかない（一同爆笑）。
山田：ババ抜きみたいな（笑）。
小林：プロパラの担当もそんな方式でしたよね。後任を自分で見つけてくれば、降りていいという。
角：虎の穴だ。
橋本：困ったもんだ（笑）。
若島：それから、選ぶときに２年間分で短篇12局というと、絞り込みすぎみたいな感じがある。そうは言っても、20局とかだと書くのが大変じゃないですか。そこで、たとえば12局についてはわりと詳しい解説を書いて、あと８局はHonorable Mention（佳作）として並べて、短評みたいな感じで触れてもいいかなと。そうしたらもっとたくさんの作品を出せるかもしれない。
橋本：現実に書かないといけないですからね。
若島：次に、こういう人にインタビューしたらいいんじゃないかっていうご意見があれば、いろいろアイデアを言っていただければ。
小林：原さん、酒井克彦さんに面識はあるんですか？
原：何回かは。最近はお会いしてないんですが。
若島：たぶん酒井さんみたいなタイプの作家だと、わりとコンスタントに、発表の期間が延びてはいても、ブランクはあっても、ずっと作ってるんではないかと思うんですね。
　酒井克彦さんと中田章道さんと来て、思い出したんだけど、この前、詰パラに植田尚宏さんの写真が出てたよね、すごいなあと思って（笑）。あれ見たらお元気そうでびっくりしたね。
角：初めて見ましたね。
若島：山田さん、左真樹っていう案はどうなの？
山田：ぼくの知ってる連絡先は30年前のなんですが、さすがにそれは使えなかったです。何とか連絡を取りたいと思ってるんですが。
若島：やはり話を聞いておきたい作家の一人だよね。
山田：彼に会ったことがある、という人を知らないんですよ。まったく謎の人物。
小林：あと候補で上がっていたのが大橋健司さんですよね。大橋さんのインタビューをやるんだったら、次に復活した後にやりたいですね。
若島：復活した後って、今復活してるんじゃないの、違うの？
小泉：まだしてないです。昔、あと何年ですると言ってたけど、もう過ぎちゃったなあ。
小林：２回目の冬眠に入っていて、65歳くらいで復活するかもと言ってました。だから、もうそろそろではないかと思うのですが。
若島：森田拓也みたいに完全に寝てた人を揺り起して、修正図を出してもらったというのもある

から、逆に休眠中でもかまわないんですよ。大体１号について２人くらいのインタビューがあればいいかなと。では、次回は酒井克彦、中田章道という線で行きましょうか。なにしろ、カラオケに来いとも言われているから（笑）。
角：酒井さんは作品集は出されないんですかね。
若島：まだないよね。
小林：将棋世界の付録だけですよね。
若島：そうか、あの付録があったんだ。
小林：前聞いたら、あれ出したんでもう、みたいなことを言われたんで。
若島：えっ、そうなの。欲がない人なんだな。
小泉：コカコーラかなんかの人で、パラから真っ赤な短編集を出して、今度中篇集も出しますって書いていた人、誰でしたっけ。出なかったけど。
小林：山中龍雄さんでしょ。確かに書いてあったよね。
若島：新宿ゴールデン街の将棋酒場に、山中龍雄さんの詰将棋が貼ってあるんですよ。あの独特の字体で書いた図面が。客として来たらしいんだよね（笑）。
山田：山中さんて、30年くらいは発表してないでしょ。ぼくが詰パラ会員になってから、ほとんど記憶がないですよ。
若島：パラでは同人作家だったね。
角：なぜ短篇集からなのか、当時から疑問に思ってました。中長篇の人なのに。
若島：他に取り上げるべき作家がいたら、言っていただければ。
小林：一つには赤羽守さんですね。
若島：はいはい。
小林：高坂さんの企画で「ライバルを語る」に赤羽・小林が出る、というのがあったんですが、その企画はボツにして、赤羽さんのインタビューという形式の方がいいんじゃないですかねえ。短篇、中篇、長篇といろいろ発表されていて、一度お話は聞いてみたいと思うんですよね。
若島：あと、企画モノでいくと、今回小泉さんの論考があったんですごくありがたかったんですが。こういうのを将来的にもっと増やしたいなあと。
山田：誰に書いてもらいたいかですよね。
若島：そうそう、問題はね。小泉さんのはすごく良かったんで、この線で続編をぜひ。この線で書ける人は誰がいるんだろうか。
山田：橋本孝治さん。いろんな事を書きたがっているような気がします。もっともっと読んでみたい。
角：彼は今回長篇ベストについては執筆を断られたんですけど、それはこの本がどういうコンセプトなのかがわからないからということだったんです。見極めてからということなので。「この詰」が出れば、次は協力してもらえると思います。
若島：もちろんそれでいいです。
角：山田さんがおっしゃられたとおり、彼は書くのは苦じゃないタイプですし、書く材料も持っていますし、なにより彼独特の視点がありますから。
若島：いいね。他には誰がいるだろうか。金子清志さんなんかはテーマをいろいろ持っているはずなので、書けそうだと思うんだけれども。
小泉：ウィキペディアに書いてますからね。
角：他に書けそうな人として、そういう場があればということになりますが、阿部健治さん。解答者あるいは解説者からの目線で。たとえば「敢えて谷口均の難解作を擁護す」とか（笑）。
若島：なんだ、それ（笑）。
橋本：突っ込みどころ満載で（笑）。
小林：今さら書くかどうかわからないけど、「岡村孝雄が裸玉を語る」とか。
若島：高坂くん、誰か書けそうな人思いつく？　こういうテーマを持っているとか。
高坂：テーマはわかりませんけど、近藤真一さんはどうですか。最近また復活して、活躍されてますし。長篇について。
小林：いろいろ言いたいことは持っているでしょうね。
山田：（高坂さんに対し）自分自身はないの？　あるでしょ？。
高坂：いやいや、推理将棋で良ければ（笑）。
若島：別に論考として、フェアリーで推理将棋をコミにして書いてもいいんですよ。橋本孝治さんもそうですけど。論考なら、普通の詰将棋じゃなくてフェアリーでも全然かまわない。
山田：全部まぜこぜで書いてくれると一番面白いんだけれど（笑）。
角：（橋本孝治さんの場合）その確率が高いんじゃないですか（笑）。
橋本：彼にはそういう区別はないんだろうね。
高坂：読んで面白いと思う人がいればいいんですが。

山田：自分が面白いと思うところだけ読めばいい（笑）。両方読めばさらに楽しめるみたいな。
若島：今回の本のコンセプトは完全にマニア向けなので、初心者が読んでどうかというのとか、完全に度外視してるんですけれども。そうは言っても、一応詰将棋作品集みたいな顔をするつもりなので、連盟でも置いてもらう予定でいるんですが。解答選手権の年鑑とか、過去にそれなりの販売実績がありますので。
角：相当売れますよ、これは。
若島：文章の部分は多いんだけれども、採り上げている作品をとりあえず４作ずつ作品集のような形で、前に出しちゃって、解きたい人はこれを解いてくださいという感じにします。で短篇から入るから、最初の部分だけだったら、まあとりあえず短篇なら解いてみようかなっていう人もいると思うので。小川宏ベストとか超短いのもあるから、何とかそのあたりでマニア以外の層にもとっかかりがあるかと。でもねええ、後ろの方見たら、フェアリーがあってルール説明があって、何なんだって（一同爆笑）。そういう問題はあるんだよね、一般の人から見たら（笑）。一体マドラシって何ですって、言われるんじゃないですか（笑）。
山田：それでわかると思っているのがすでに違うと。マニアだよと。
若島：すでに間違ってます（笑）。
山田：でも巨椋さんのインタビューだけでも十分価値がありますから、まあ値段設定がどうなるかというのはありますけど。あれはすごいですよ。
若島：これぐらいのページ数だと2000円に設定しておかないと、出版サイドとしてはつらい感じです。
山田：解答選手権の2009はなんぼくらい出たんですか？
若島：どちらも300部ずつ刷ってるんですよ。2004-2008は現在残りが20〜30冊くらいほとんど売れ切れかけ。うちでは初めてなんですよ、売り切れそうなのは。山田康平の『うるてぃめいと』が300刷って、まだ100くらい残っている。上田さんの『極光II』はたぶん50以上は確実に残っています。まあフェアリーだから仕方ないんだけれども。しかしね、上田さんの本買わないマニアって、想像できないんですが。たとえ理解できなくても、買う一手でしょ。年鑑の2009も健闘していて、残りは50くらい。
角：「この詰」が出れば、これに引っ張られて、過去の本もまた出ますよね。
若島：もちろんね。連盟で「2004-2008」を買った人から電話がかかってきて、この続刊予定というのはいつ出ますかってね（笑）。全く知らない人からですよ。そういう問い合わせが直接にあって。「この詰」と年鑑の次のが一番早く出ますよって話はしたんですが。
　それからこれはみなさんにお願いしたいんですが、現在のところスタッフに謝礼というものは一切ないんです。いいですか（一同爆笑）。
小林：最初から期待していませんから（笑）。
若島：まあ誰も期待してないのかな。
小泉：本が１冊もらえるのは期待していたんですが。
若島：報酬は現物支給なんで。
　予定としてはこういうことなのです。2011年にチェスプロブレムの世界大会を９月に神戸でやる準備をしていて、現在この実現の可能性は90％以上あるんです。そういうことになっちゃって、間違いなくやりますから。それにかかる費用が現在の試算では400万くらいなんですね。400万を参加者が全部負担すれば、ゼロにもなるんです。たとえば200人くらい参加するとしたら、参加費を1人２万円徴収すれば、とりあえずそれでかまわない。だけどそうは言っても、受付のときに２万いただくのはちょっとどうかなと思うんで、それをできるだけ小さい額にしたいんです。というのは日本て物価が高いと思われているから、ある程度ホテル代も抑えて、そういう参加費を安くしてと思っているので。そのためには資金がいるんですよね。今現在考えているいくつかの案も、一つは年鑑の売り上げをある程度もらうということで、現在年鑑の売り上げはあまり大したことはないんだけれども黒字にはなったんで。それで、できれば「この詰」の売り上げはそちらに充当したいんです。全然ありがたくないという人もいると思うんだけれども（笑）。というのが一応私の原案なんですけど。売れそうかなあ、300部くらい。
角：私は売れると思います。選手権のヤツより、こっちの方がもっと一般の人も読めますから。
山田：全国大会に来る人は大体買うでしょ。そこで100いくらはまず出る。
若島：一発目なので、どれくらい出るかわからな

いというのがあるんですけど。つまり詰将棋関係者だったら、これを読まないと生きていけないみたいな、そういう本にしてしまおうということなんだよね。仮に1部2000円として、300部売れたとしたら単純計算で60万。それを世界大会に回せると、まあそんな感じなんです。部数を多めに刷ってもかまわないですけど。
角：森田（銀杏）さんの「めいと」は基本500で、塚田流特集みたいに売れるんじゃないかというときが800くらい刷ってと聞きました。
若島：結構すごいなあ。
角：で、在庫を抱えて大変だったと奥様がおっしゃってました。売れるまでがどうしても時間がかかるので。
山田：それは売り切ったんですか。
角：全部ではないです。在庫がない号もありますけど。
若島：やっぱり500くらいが限度かなぁ。あまり部数は値段に影響なくて、ページ数が多くなると製作費が高くなるんで。まあ、気合で500くらい刷ってもいいんだけどね。
角：朝毎読とか新聞のコラムに載せてもらえれば、ある程度の部数は行けると思います。
若島：それに連盟に置いてもらえるから、そこそこ売れるかな。じゃまあ気張って500刷るかな。
小林：これは郵便で申し込むんですよね。直接若島さんのところに。これで結構ハードルが高くなるんですよね。
角：郵送はめんどくささがあるからね。
小林：もちろん連盟にあれば、いいんですけど。
　昔、野口ブックスってあったじゃないですか。あれも私必ず連盟に行って買ってましたから。あとは全国大会みたいなところで販売するんですかね。
若島：これは何かすごいんだということを皆さん口コミでつぶやいていただいて（一同爆笑）。今のうちから、すごいよ、すごいよって言っておかないと。
小林：言わなくても、これはすごいですよ。タイトルだけ見てもすごいですから。
若島：表紙見て、巨椋さんの顔がドーンと載っていたりすると、これは避けるわけにはいかないぞと。
角：これはすでに幻の棋書的なイメージがありますからね。買わなきゃダメでしょ。
小泉：1号で消えそう？（笑）。
小林：だったら限定部数で少ない方が（笑）。
橋本：逆に煽ると。
若島：早く買わないとなくなってしまう。それいいかもしれないね。
　しかし、さすがにこんなに原稿が集まると嬉しいよなっていうか、すごいよね。やっぱりないもんね、今まで。
角：こんなに充実した内容の本はないですよ。
若島：詰将棋の本というと、ふつう切り口が個人作品集しかないでしょう。『探検隊』とか、いくつかそういう本があるにしても、だいたい書店で売ったりするのは個人作品集しかないから。
角：内容もそうですし、いろんな方が執筆されているから、いろんな見方で詰将棋を見てるというのがいいです。
若島：それが面白いよね。みんな作家の立場からモノを言っているけど、ただ一人解答者代表として出ていただいた、秋元さんのページだけは雰囲気が違うのがいいなああ。まあやっぱり、全体としてテンションが高すぎるという感じなんで、一息緩めたテンションがあっていいという（笑）。
山田：緩めのキャラの人って誰かなあ。
角：昔だと松島節さんみたいにね。「絶妙のアプローチと言えよう」みたいな評があって。それだけでほっこりするみたいな。
小泉：まつしま・たかしって読むんだ。知らなかったな。
小林：懐かしいですね。
若島：懐かしい名前やなあ。ホメ上手の典型みたいな。

若島：小泉さんみたいに何かテーマで書ける人というのは、こちらから探して依頼しないといけないでしょうね。テーマって話になると、やはり短篇、中篇ということになるのかなあ。
小林：長篇でも書こうと思えば…。橋本孝治さんの超長篇の論考は格調高かったですね。
角：評論じゃなくても、評論するための材料として、リストみたいなものではダメですか。
若島：いや、いいですね。それっていいわ。こういうテーマで集めたとかね。
角：昔自分が作った関係で、七種合全作品リストならあるんですけど。それをズラッと並べたりとか。

若島：大変いいですね。小林さん、詰将棋データベースでどういうテーマで検索できるんですか？作品にタグは何も付いていないの？
小林：えーと、小泉さんが詳しいですよね。
小泉：何も付いていないです。ワクだけは用意してあるみたいですが。
若島：ないんだ。
小泉：大体タグ自体も、図巧１番にしたって、遠打の繰り返しってタグを付ける人もいれば、打ち歩詰めってタグを付ける人もいるし、タグの上では自由じゃないですか。だから難しいと思うんですね。岡本さんが一番技術があると思います。
若島：小泉さん、今回このテーマで書いたときに、何でこれってできたんですか？　って変だけど、作品を抽出できたのは、もともとタグとか付けていたんですか？。
小泉：あ、これですか。これはほとんど私の力じゃなくて、ネットに書いてあったコメントで、たくさん知恵が集まってくるっていう。こんなヤツもあるよって。あ、そういえばあったなあいうのがありますよね。
若島：なるほど。
山田：でも、そういうことでやれているというか、やっている人って、小泉さん以外にはおられるのかなと。
小泉：うーん、市島啓樹（＝冬眠蛙）さん。あとたくぼんさんのところも。フェアリーの話が多いので、あまり読んでないんですけど。
小林：あるテーマで連載して、作品を挙げていって、コメントを求めれば、いろいろな書き込みが集まりますからね。
角：そこの掲示板が書きやすいかどうかというのもあるんじゃないですか。コメントが集まるところは、面白いからまたみんなが寄って来るんだろうし。
山田：今風のやり方ですね。
若島：そうねえ。確かにデータベースの検索が効けば楽なんだけれども、今のところはタグが何も付いていないと、個人のデータということになる。
小林：たとえば七種合とかは、手順で検索するとか。
小泉：私とかは手順で検索して探しますよね。
若島：手順のところに合駒って書いてあるの？
角：書いてないです。
小泉：なかったと思いますねえ。
若島：そうすると、自分でこれだと思ったヤツにタグを付けて、データに残すしかないんですんね。
角：七種合みたいにまだ見つけやすいのはいいですけど、それ以外の手筋とかだと大変ですよね。
小泉：そうそう。たとえば打診中合で、角合の第１号はどれかなあなんていうたら、えらい大変なんですよね。だから「一番星」が復活するいうて、そこが早く復活してくれないかなあと、楽しみにしてるんだけれども。なかなかそこが復活してくれない。
若島：結構大切なことなので。今回書いたヤツでは高木秀次のにしたって、他に類例がないんじゃないかってぼくの意見なんですけど、そうは言っても何も調べてないからなあ、これ。本当にそうだったかなんてわからないから、適当に書いているんだけれど。
小林：データベースに頼ることができないんですかね。
若島：それで検索はできないでしょ。条件的なものじゃないと、なかなか検索っていうか、自分でこれがあって、これがあってって。よっぽどこまめにデータを残さないと、普通はしないよね、そんなことってね。あとでだけど検索するっていうのは大変だなあ。
山田：誰かそんなことをやっている人はいないんですかね。服部（敦）さんとかがそうだったんでしょうか。
若島：作る人じゃないと、あまりないんじゃないかね。あるいは湯村（光造）さんみたいな、ああいうタイプだったら、また話は別なんだけれど。
橋本：チェスとかだと、打歩みたいなテリトリーで、そういうの集めて記事にしちゃっている人っているじゃないですか。あれは明らかに集めてますよね。ある程度持っていて、どこに何があるか頭の中に入っているという世界ですよね。
小林：まさに研究してますよね。
若島：完全にね。
橋本：詰将棋にはそういう素地が今ないから。だから残ってない。データベースに求めても、表面に見えないところにあるじゃないですか、論理のところに。
若島：そう、そういうことなんですよ。

橋本：それは検索できないですよね。
小泉：まあ、小林の頭の中とか。
橋本：だからそういうことですよ（笑）。ある程度まとまって過去のヤツを解いていて、主要なヤツはこうだと押さえている人がやっぱり書くということにしないと。それがないと最初の塊ができませんもんね。全部１号局を押さえているかどうかという以前に、そういう塊が必要なんだろうなっていう感じがしますよ。
若島：こういうのを書くと、必然的に過去の作品の再評価みたいなことを同時にやっているからね。たとえば、高木秀次のあれが１号局じゃないかとか、まあたぶん普通の人は知らないかもしれないけれども、やっぱりそういう再評価っていう意味もあるんで。だからそのへんデータベースってなかなか拾えないので、とりあえず作業として、やらないと仕方がない。
橋本：（データベースは）参考にするけど決定打にはたぶんならない。
若島：ならないね。本当に個人の全作品検索という使い方しかないんだね。あれはあれで、ものすごく助かるんですけれども。今回、次の予定として、たとえば山本民雄を書きたいなあと思っているんですけど、そうすると一番楽しみなのはとりあえず全作品を見ることができるということなんで。だから書くというのは別にして、全作品を見るというのはやっぱり面白いよ。
山田：ちなみにデータベースとかではなくて、詰パラとか近代将棋とか、たとえばそれを研究したいと思って、バックナンバーを見たいと思ったらどうすればいいんですか。それがどっかにあって、参照できるようになっていれば、話はだいぶ違うと思うんですけどね。
若島：将来的には、そこの部分をＰＤＦに残すとか。過去のバックナンバーをＰＤＦで検索できるようにしといてもらえるとありがたい。
小林：そのプロジェクトの話題が出たことがありましたね。コストとか手間とかがかかるということで進まなかった。
角：学生の頃（28年前）、近将編集部にバイトに行ったことがあるんですけど、そのときですら、編集部にバックナンバーが全部はない状態でしたから。だからどこ行けば絶対にあるというのは、たぶん個人で所蔵されている方しかないと思うんですね。。
若島：近将って、昭和20年代？
角：25年創刊です。
若島：25年か。25年から50年くらいは続いていたんだね。
小泉：高坂さんとこにないの？
高坂：いやいや、そんな古いヤツはないです。
角：私は個人的に北原義治さんに譲ってもらいました、近将創刊号から。で判型が変わるところまでは全部持っていると思うんですけど、Ｂ５判になってからは全部あるかどうかちょっと自信がないんですが。
若島：プロジェクトって、誰かが個人でやるものではなくて、基本的には全詰連とかがやっておいた方がいいことかもしれない。
山田：スキャンしてね。
角：困るのはアカシア書店だけでしょうね。
若島：データベースで検索できるように、というか閲覧できるようにしといた方がいいかなというのは。
角：浦壁（和彦）さんの萬葉集みたいな形でもいいから、何か残れば。
小林：図面だけでもね。今は図面だけあれば何とかなりますからね。
若島：たとえばの話、「プロブレム・パラダイス」ってぼくが作っているんだけれども、あれは全部ＰＤＦファイルなんです。別にスキャンしなくても、元々の作りがそうなっているんで。そういうのはやっぱり考えていた方がいいよねって、別に我々の仕事ではないんだけれども（笑）。
山田：そういうふうにアクセスできるようになっていると、全然違いますよね。
若島：過去の作品を見てて、これってこのときどうなったんだろうと。たとえば、そのとき何が書いてあったかなあと、ちょっと気になるというのはやっぱりあるんでね。わかんないよ。だって発表のときに、自分がこうじゃないかなと思うことに、何もそのへんについて触れられてなかったら、永遠にそのままで終わる可能性があるからね。
角：近将もパラも不完全のときに、すごく扱いが小さいときがあるじゃないですか。その作品が何だったか、ちっともわかんなくて。
若島：そうそう、余詰がありましたってね（笑）。
角：不詰のときなんか特に。不詰によりなんとかだけで。作者の意図も何もわからない。

小林：実はすごいことをやっていたとか。
角：もしかしたらね。
若島：昔のヤツは特にそうじゃない。やっぱり不完全が多いから。今回やって思ったのは、ＯＴ松田がそうなんですよ。不完全率が相当高いから、伊藤さんに選んでもらったのが、余詰だらけで（笑）。結局ぼろぼろと数が少なくなっちゃう。で、別に余詰があっても、書いていいですって伊藤さんには言ったんだけれども。参考図扱いということでね。

高坂：一つあるんですけど。近将のたとえばバックナンバーで、何かやったとして著作権とかはどうなんですか。大丈夫なんですかね。
若島：わかんない。わかんないというか、決まってないというか。
高坂：この中にも、近将の作品とかも入ってるんですよね。
若島：入ってます。まあ、いいんじゃないの。まず、著作権があるとしたら、近将とかではなくて、作者にあった方がいいんだよね。作者がＯＫしたんだったら、いいっていう。もちろん、今回何もＯＫを取っているわけではないんで。で、わたしどもの予定としましては、巻末のところに索引を作って、そのインデックスをプロパラのページとかにアップして、こういう作家の作品を今回紹介していますと公開する。ついては、こういう方々に１部ずつ贈呈するのが筋なんだけれども、住所を探したりするのがしんどいからやらない。その代わりリクエストがあったら、載っているから１部欲しいと言ってきてもらえれば、そのときに進呈しますと、そういう形にしようかと思っています。
角：それが一番ですよね。
小泉：「工学母艦」みたいな感じ（笑い）。
一同：懐かしい。
若島：あれ持ってるだけでマニア度が高いでしょうね（笑）。
小林：収録作家には１冊進呈しますというのは、１冊買うともう一つくれるという意味だったらしいですよ。
小泉：あ、そうなんだ。
小林：自動的には送られて来ない。
若島：ぼくも持ってないよ。
小泉：でもさ、原さんのは名前出してベストを選んじゃっているから、なんで俺の作品を選ばないんだって、怪文書がこれから来年あたりいっぱい来るかもね。
橋本：そういう意味じゃ、何で来年の特集に俺のインタビューがないんだって（一同爆笑）。
若島：それは十分あり得る（笑）。つまりここに載るのがステータスですから。そういうことになるように。
角：いつでも空いているけど、みたいな。
若島：それでは、収録作家には１部進呈ということにしておきましょう。
角：『探検隊』のときも同じだったんですけど、結局住所もわからない方が大勢いらっしゃるし、亡くなっている方もいましたし、（住所とか）わかる方には全部差し上げたんですけど。全然連絡は来ないと思うんですよ、ほとんどの方からは。むしろ連絡あってほしいくらいなんですけど。全国大会とかでお会いすることがあれば、お渡しするということでいいんじゃないでしょうか。
若島：個人的には、差し上げるというよりは、自分の作品が載っているから、買ってくださいねっていう。１冊はあげるけど、１冊は買ってねっていう、それぐらいの気分ではあるんだけれどね。
橋本：なんか確実にホメてありますからね。
若島：そう、こんだけホメているんだから（笑）。
角：ここに載ることが名誉なことですからね。私のが載ってないっていう人がいるとね。
橋本：それが一番困る。

高坂：作品データについてですが、賞をどうするか。看寿賞とかを書かないのかどうか。
若島：つまりデータとして、そこの詰将棋の図面のところに、詰パラ何年とか書いてあるところに、半期賞とか入れておくかどうかということでしょう。詰将棋を引用するときはこうしてほしいというガイドラインを浦野さんと作って、そのときには一応入れることが望ましいということだったと思うんですけれども。でそうなんですけれども、我々的には入れないでおこうかなと思っていて。それは気にしないと。逆に言うと、賞を取らなかった作品というような企画もあり得るんでね。つまり受賞は逃しましたっていう作品を集めるわけ。これは企画としていいんじゃないかな。
　今柴田さんがパラで、過去の作品紹介で、いくつかの雑誌をやっているでしょ。あれってやっぱ

り受賞作しかやってないんじゃないかな。受賞作は検索がしやすいから（笑）。受賞作以外のを探そうとすると結構大変なんだよね。
角：っていうか、そっちを知りたいんですよね、むしろ。
若島：伊藤正も同じことを言ってたよ、やりたいって。いろんな形があると思うけど、僕の原案は、看寿賞受賞とか、半期賞、実は何が半期賞かなんて全く知らないんで、自分の半期賞もどうかなっていう記憶なんで（笑）。入れない方がいいんじゃないかなと。楽なんですけどね、その方が。文章の中で書いてある分については、それを省略しろとは言いませんけど。
高坂：それを気にする人もいると思うんですよね。たとえば谷口均さんのように、これが半期賞なんだぞって意識をしている人はいるかなと。
若島：これが微妙でね。プロブレムだったら、全部引用するときは必ず賞のデータを付けるんでしょう。
橋本：どうかなって思いますけどね。だって、賞が客観的なものかどうかだって相当疑わしいし、発表されてない賞だってあるし、全然同列じゃないんですよ、あれは。私個人はあまり好きじゃないです。
高坂：方針としてカットするんだったら、全然異存はないです。
若島：これって要するに調べるのが面倒くさいというのもあって。
小泉：もれなくやろうとしたら大変ですよ。校閲部が必要なくらい。
若島：だと思いますね、恐らく。
小林：コンクール１位とかね。
小泉：そうそう。打歩詰大賞とかさ（笑）。
橋本：なんか、すごく面倒くさいというのはわかったわ。
小林：Ａ級順位戦３位とか、どうですか（笑）。
角：微妙みたいなヤツね。
小林：だからカットするのが賢明じゃないかと。
若島：なるほど。ちょうど時間となりましたので、ではまあ、無事にとりあえず終了したということにしましょうか。

作家別作品index

数字は作品が引用されている頁を表す。カッコ内は作意手順が載っている頁。カッコ付きの数字がないものは、図面の直後に作意手順が示されている。

同じ作品が２箇所で引用されている場合は、/で示した。

*が付いているものは、不完全作を表す。

石本　仰　7(19)
市島啓樹　5(14), 88(96), 88(96), 88(97), 88(97)
伊藤宗看　139
伊藤　正　48(79), 116
上田吉一　45(62), 98
浦壁和彦　140(143)
雲海　11(38)
岩田俊二　6(17)
岡田秋葭　141
岡村孝雄　9(27)
小川悦男　44(59)
小川　宏　91(104), 91(104), 91(105), 91(105), 92(105), 92(106), 92(107), 92(107)
奥薗幸雄　48(80)
巨椋鴻之介　46(64), 46(65), 46(66), 46(67), 47(68), 47(69), 47(70), 47(71), 58(59)
OT松田　93(107), 93(108), 93(108), 93(109), *109, *110, *111, *111
改発　徹　90(102)
楓　香住　5(15)
風みどり　138(142), 138(142), 140(143)
金子清志　6(17), 10(36)
神無太郎　10(37)
神無七郎　11(39), 11(40)
北原義治　140(143)
黒川一郎　48(83)
高坂　研　89(99), 89(99), 89(100), 89(101), 149
古作物　44(59)
小林敏樹　139(142), 139(142), 140(143)
駒場和男　44(60), 48(84)
近藤真一　9(28), 9(31)
酒井博久　8(20)
清水　透　129
則内誠一郎　6(16)
角　寿雄　5(15)
芹田　修　8(21)
添川公司　45(61)
高木秀次　94(114), 94(114), 94(116), 94(116), 95(117), 95(118), 95(119), 95(121), 115, *124, *125, *127, *128, *130, *132
高谷仲達　5(16)
たくぼん　11(38)
竹村孔明　5(16)
谷口　均　6(16)
塚田正夫　90(103)
中村雅哉　7(18), 10(37)
橋本　哲　45(61)
服部秋生　44(60)
原亜津夫　98/135
原田清実　141(143), 144
廣瀬崇幹　4(14), 7(19)
深和敬斗　90(102)
増田智彬　10(36)
三角　淳　7(18)
森田拓也　50(85), 50(85), 72(78), 73(78), 74(78), 76(78), 77(78)
安江久男　4(22)
安武翔太　4(13)
山田修司　45(62), 57(59), 141
山田　淳　4(13)
山田嘉則　90(103)
山中龍雄　73(78)
山葉　桂　142(144), 142(144)
山本民雄　126, 139(142)
吉田京平　9(34)
若島　正　4(13)/136, 8(23)/135, 133, 134